

# 東九州自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

- 14 -

福岡県京都郡みやこ町有久・国作所在遺跡の調査

京ヶ辻遺跡1・3区  
国作三角遺跡

2014

九州歴史資料館



1 京ヶ辻遺跡1区合成写真（上空から）



2 京ヶ辻遺跡3区合成写真（上空から）



1 京ヶ辻遺跡3区出土 瀬戸内型石庖丁



2 京ヶ辻遺跡1区出土 須恵質広口長頸壺

## 序

福岡県では、西日本高速道路株式会社の委託を受けて、平成19年度から、東九州自動車道に伴う埋蔵文化財の発掘調査を実施しています。本報告書は、平成22年度から23年度にかけて行った、京都郡みやこ町に所在する京ヶ辻遺跡（1・3区）と国作三角遺跡の調査の記録です。

京ヶ辻遺跡と国作三角遺跡は祓川左岸の微高地から低地にかけて所在する弥生時代から中世にかけての集落遺跡です。特に京ヶ辻遺跡では、竪穴住居跡や溝、谷などから初期須恵器がまとまって発見され、京築地域のみならず須恵器研究の良好な資料を得ることができました。

本報告書が教育、学術研究とともに、文化財愛護思想の普及・定着の一助となれば幸いです。

なお、発掘調査・報告書の作成にいたる間には、関係諸機関や地元をはじめ多くの方々にご協力・ご助言をいただきました。ここに、深く感謝いたします。

平成26年3月31日

九州歴史資料館

館長 荒巻 俊彦

## 例 言

1. 本書は、東九州自動車道建設に伴って発掘調査を実施した、福岡県京都郡みやこ町豊津大字有久に所在する京ヶ辻遺跡（1・3区）と同町大字国作に所在する国作三角遺跡の記録である。遺跡名称はみやこ町教育委員会によって登録された周知の埋蔵文化財包蔵地「京ヶ辻遺跡」「国作三角遺跡」を使用した。東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告の第14集にあたる。
2. 発掘調査は西日本高速道路株式会社の委託を受けて、平成22年度までは福岡県教育庁総務部文化財保護課が実施し、平成23年度以降の発掘調査・整理報告は同社の委託を受けて、九州歴史資料館が実施した。
3. 京ヶ辻遺跡と国作三角遺跡は東九州自動車道福岡工事事務所管内の第35・36地点にあたる。
4. 本書に掲載した遺構写真の撮影は、海出淳平・宮田剛が行い、遺物写真は文化財調査室北岡伸一が行なった。土器に見られる種子丘墳の実体顕微鏡写真は文化財調査室保存管理班小林啓が行なった。空中写真の撮影は熊本航空株式会社・東亜航空技術株式会社に委託し、ラジコンヘリコプターによる撮影を行なった。
5. 本書に掲載した遺構図の作成は海出・宮田と発掘作業員が行い、遺物実測図は海出と宮田と整理指導員、整理補助員が作成した。
6. 出土遺物の整理作業は九州歴史資料館において、城門義廣の指導の下に実施した。
7. 出土遺物及び図面・写真等の記録類は、九州歴史資料館において保管した。
8. 本書に使用した第2・3図は、国土交通省国土地理院発行の1/25,000「行橋 豊前本庄 筑島 椎田」1/50,000地形図「行橋 田川 筑島 中津」を改変したものである。本書で使用した座標は日本測地系九州東（Ⅱ）系により、方位は座標北である。また、磁北の場合には明記した。
9. 京ヶ辻遺跡の調査が進むにつれ旧地形が判明し、1・2区は同一丘陵、北側の3区は別の低地部分であった。地形に合わせて区分けしている結果であった。区分け順はあえて変更を行わないとした。そのため、1・2区の遺構番号は連続し、3区は別に遺構番号を付けている。この3地区は南東側の1・2区を海出が、北西側の3区を宮田が調査をそれぞれ担当した。
10. 本書のⅠ、はじめには坂本真一、Ⅱ、位置と環境は大庭孝夫と海出、Ⅲ、京ヶ辻遺跡1区は海出、Ⅳ、京ヶ辻遺跡3区は文化財調査室秦憲二の協力により宮田、Ⅴ、国作三角遺跡は坂本が執筆した。編集は坂本が行なった。

# 目次

I. はじめに	1
1 調査に至る経緯	1
2 調査・整理の組織	2
II. 位置と環境	6
1 地理的環境	6
2 歴史的環境	6
III. 京ヶ辻遺跡1区	13
1 遺跡の概要	13
2 竪穴住居跡	13
3 掘立柱建物跡	25
4 土坑	41
5 溝状遺構・不明遺構	53
6 その他の遺構と遺物	65
7 まとめ	76
IV. 京ヶ辻遺跡3区	79
1 遺跡の概要	79
2 竪穴住居跡	82
3 掘立柱建物跡	85
4 土坑・焼土坑	85
5 炉跡	94
6 溝	97
7 ビット	119
8 その他の遺構と遺物	120
9 特殊遺物	123
10 まとめ	133
V. 国作三角遺跡	135
1 遺跡の概要	135
2 土坑	137
3 溝	137
4 トレンチ	137
5 遺構検出出土土器	139
6 まとめ	140

## 図版目次

- 図版 1 1 調査区遠景 (南東から) 2 調査1区全景 (上空から)
- 図版 2 1 1号竪穴住居跡 (南西から) 2 2号竪穴住居跡 (北西から)  
3 3号竪穴住居跡 (北西から)
- 図版 3 1 4号竪穴住居跡 (南西から) 2 5号竪穴住居跡 (南西から)  
3 6号竪穴住居跡 (西から)
- 図版 4 1 7号竪穴住居跡 (南東から) 2 8号竪穴住居跡 (南西から)  
3 9号竪穴住居跡 (北西から)
- 図版 5 1 9号竪穴住居跡完掘状況 (北西から) 2 9号竪穴住居跡遺物出土状況 (北西から)  
3 9号竪穴住居跡1号小型炉 (東から)
- 図版 6 1 9号竪穴住居跡2~6号小型炉 (東から) 2 10号竪穴住居跡 (西から)  
3 11号竪穴住居跡 (北から)
- 図版 7 1 1号掘立柱建物跡 (南東から) 2 2号掘立柱建物跡 (南東から)  
3 3号掘立柱建物跡 (南東から)
- 図版 8 1 4号掘立柱建物跡 (南東から) 2 5号掘立柱建物跡 (北東から)  
3 6号掘立柱建物跡 (南東から)
- 図版 9 1 7号掘立柱建物跡 (南東から) 2 8号掘立柱建物跡 (北西から)  
3 9号掘立柱建物跡 (南東から)
- 図版 10 1 10号掘立柱建物跡 (南東から) 2 11号掘立柱建物跡 (南東から)  
3 12号掘立柱建物跡 (南東から)
- 図版 11 1 13号掘立柱建物跡 (南西から) 2 13号掘立柱建物跡目隠し堀 (西から)  
3 14号掘立柱建物跡 (南東から)
- 図版 12 1 15号掘立柱建物跡 (南東から) 2 16号掘立柱建物跡 (南東から)  
3 17号掘立柱建物跡 (南東から)
- 図版 13 1 18号掘立柱建物跡 (南東から) 2 20号掘立柱建物跡 (南西から)  
3 2号掘立P-11 (左:西から)・5号掘立P-1 (右:西から)
- 図版 14 1 1号土坑 (西から) 2 2号土坑 (南東から) 3 3号土坑 (東から)
- 図版 15 1 4号土坑 (南東から) 2 5号土坑 (南東から) 3 6号土坑 (南から)
- 図版 16 1 7号土坑土層断面 (南東から) 2 7号土坑 (南東から) 3 8号土坑 (西から)
- 図版 17 1 9号土坑 (東から) 2 10号土坑 (西から) 3 11号土坑 (南東から)
- 図版 18 1 12号土坑 (南東から) 2 13号土坑 (南東から) 3 14号土坑 (南西から)
- 図版 19 1 15号土坑基本土層 (南東から) 2 16号土坑 (東から)  
3 17号土坑 (南から)
- 図版 20 1 18号土坑 (南東から) 2 18号土坑遺物出土状況 (西から)  
3 1号円形周溝状遺構 (南から)
- 図版 21 1 6号溝状遺構遺物出土状況 (北から) 2 10号溝状遺構土層断面 (南西から)  
3 14号溝状遺構遺物出土状況 (東から) 4 14号溝状遺構土層断面 (南西から)

- 図版22 1 19号溝状遺構土層断面(南西から) 2 30号溝状遺構 A-A'土層断面(東から)  
3 30号溝状遺構 B-B'土層断面(東から) 4 1号不明遺構遺物出土状況(北東から)
- 図版23 1 1号畦畔全景(南東から) 2 1号畦畔土層断面(南東から)  
3 2号畦畔全景(南東から) 4 2号畦畔土層断面(南から)
- 図版24 1 縄文グリット全景1(西から) 2 縄文グリット全景2(南から)  
3 調査1区北側全景(北から)
- 図版25 出土土器1 図版26 出土土器2 図版27 出土土器3 図版28 出土土器4
- 図版29 出土土器5 図版30 縄文土器・石器1 図版31 石器2 図版32 石器3
- 図版33 石製品 図版34 土製品・鉄製品
- 図版35 1 京ヶ辻遺跡3区調査地遠景(東から) 2 京ヶ辻遺跡3区調査地遠景(西から)  
3 京ヶ辻遺跡3区B~D区空撮合成(真上から:上が北)
- 図版36 1 B区全景(真上から:上が北) 2 C区全景(真上から:上が北)  
3 D区全景(ほぼ真上から:上が西)
- 図版37 1 E区全景(真上から:上が北) 2 B区5a号溝北側土層(南から)  
3 B区14号溝西側土層(東から)
- 図版38 1 C区東壁土層北側1 2 C区東壁土層北側2 3 C区東壁土層中央付近
- 図版39 1 C区東壁土層南側 2 A区1号竪穴住居跡完掘(東から)  
3 A区1号竪穴住居跡石蹴129出土状況(南から)
- 図版40 1 B区1号掘立柱建物跡(東から) 2 B区3号土坑土層(南西から)  
3 B区3号土坑完掘(南西から)
- 図版41 1 B区4号土坑土層(東から) 2 E区6号土坑検出(北から)  
3 E区6号土坑ほぼ完掘(北から)
- 図版42 1 C区10号土坑遺物出土上層(北東から)  
2 C区10号土坑遺物出土下層(北東から) 3 E区12号土坑土層(南から)
- 図版43 1 B区1号焼土坑検出(南西から) 2 B区2号焼土坑検出(南から)  
3 B区3号焼土坑検出(南西から)
- 図版44 1 B区3号焼土坑遺物出土(南から) 2 E区4号焼土坑検出(東から)  
3 D区1号炉跡検出(南から)
- 図版45 1 D区1号炉跡土層(南から) 2 E区1号鍛冶炉4層(南から)  
3 E区1号鍛冶炉5層(南から)
- 図版46 1 E区1号鍛冶炉土層1(南から) 2 E区1号鍛冶炉6層(南から)  
3 E区1号鍛冶炉土層2(南から) 4 E区1号鍛冶炉7層(南から)
- 図版47 1 E区2号鍛冶炉検出(東から) 2 E区2号鍛冶炉完掘(東から)  
3 A区2号溝(南東から) 4 A区2号溝土層1(北から)
- 図版48 1 A区2号溝土層2(北から) 2 A区4号溝土層(北東から)  
3 B区5a号溝南壁土層(北から) 4 B区5a号溝北側遺物出土(西から)
- 図版49 1 B区5a号溝北側遺物出土(西から) 2 B区5a号溝南側(西から)  
3 E区5c号溝70他遺物出土(北から)

- 図版50 1 B区6b・5bc号溝(北から) 2 B区6a号溝遺物出土(南から)
- 図版51 1 B区6a号溝北壁土層(南から) 2 B区6a号溝中央付近遺物出土(東から)  
3 E区6b号溝土層(南から)
- 図版52 1 B区7・8号溝(西から) 2 B区8号溝68出土状況  
3 B区8号溝72出土状況
- 図版53 1 B区9号溝土層(西から) 2 B区14号溝東壁土層(西から)  
3 E区37号溝(北から) 4 E区38号溝東側鉄滓出土(北西から)
- 図版54 1 D区ピット16土器出土(南東から) 2 D区ピット18(西から)  
3 E区5bc・6b号溝間硬化面(南東から)  
4 E区5bc・6b号溝間硬化面土層(南東から)
- 図版55 出土土器1 図版56 出土土器2 図版57 出土土器3・土製品・石器1
- 図版58 石器2 図版59 石器3 図版60 鉄滓・鞆羽口
- 図版61 1 国作三角遺跡全景(東から) 2 国作三角遺跡北半分(東から)  
3 国作三角遺跡南半分(東から)
- 図版62 1 1号土坑(東から) 2 2号土坑(東から) 3 1号溝(西から)
- 図版63 1 2号溝(東から) 2 北側土層(東から) 3 トレンチ1(南西から)
- 図版64 1 トレンチ3(北東から) 2 トレンチ4(北西から) 3 出土土器

## 挿図目次

第1図 京都郡みやこ町の位置図	1
第2図 東九州自動車道調査地点図(1/100,000)	4
第3図 周辺遺跡分布地図(1/25,000)	7
第4図 居屋敷遺跡関係図(1/400、1/80、1/10、1/6)	9
第5図 京ヶ辻遺跡・国作三角遺跡区割り図(1/2,000)	11
第6図 1・2号竪穴住居跡実測図(1/60)	15
第7図 1号竪穴住居跡出土土器実測図1(1/3、1/4)	16
第8図 1号竪穴住居跡出土土器実測図2(1/3)	17
第9図 3・4号竪穴住居跡実測図(1/60)	18
第10図 5～8号竪穴住居跡実測図(1/60)	20
第11図 各竪穴住居跡出土土器実測図(1/3)	21
第12図 9号竪穴住居跡実測図(1/60)	22
第13図 9号竪穴住居跡出土土器実測図1(1/3)	23
第14図 9号竪穴住居跡出土土器実測図2(1/3)	24
第15図 9号竪穴住居跡付設炉、10・11号竪穴住居跡実測図(1/60、1/30)	26
第16図 1・2号掘立柱建物跡実測図(1/60)	27
第17図 3・4号掘立柱建物跡実測図(1/60)	29

第18図	5・6号掘立柱建物跡実測図(1/60) .....	31
第19図	7・8号掘立柱建物跡実測図(1/60) .....	32
第20図	9・10号掘立柱建物跡実測図(1/60) .....	33
第21図	11・12号掘立柱建物跡実測図(1/60) .....	35
第22図	13・14号掘立柱建物跡実測図(1/60) .....	36
第23図	15・16号掘立柱建物跡実測図(1/60) .....	37
第24図	17・18号掘立柱建物跡実測図(1/60) .....	39
第25図	各掘立柱建物跡出土土器実測図(1/3) .....	40
第26図	20号掘立柱建物跡実測図(1/60) .....	40
第27図	1・2号土坑実測図(1/30) .....	42
第28図	1号土坑出土土器実測図1(1/3、11~13のみ1/4) .....	43
第29図	1号土坑出土土器実測図2(22・23は1/3、24・25は1/4) .....	44
第30図	3~7号土坑実測図(1/30) .....	46
第31図	各土坑出土土器実測図1(1/3、1/4) .....	47
第32図	8~12号土坑実測図(1/30) .....	49
第33図	各土坑出土土器実測図2(1/3) .....	50
第34図	13~17号土坑実測図(1/30) .....	51
第35図	18号土坑、1号円形周溝状遺構実測図(1/40) .....	52
第36図	18号土坑出土土器実測図(1/3) .....	54
第37図	6・14号溝状遺構遺物出土状況、10・14・19号溝状遺構土層断面実測図(1/20) .....	57
第38図	各溝状遺構出土土器実測図1(1/3、9のみ1/4) .....	59
第39図	30号溝状遺構掘削痕跡・土層図、1号不明遺構遺物出土状況実測図(1/40、1/20) .....	61
第40図	各溝状遺構出土土器実測図2(1/3) .....	63
第41図	1号不明遺構出土土器実測図(1/3) .....	64
第42図	水田遺構出土土器実測図(1/3) .....	65
第43図	水田遺構実測図(1/150、1/60) .....	66
第44図	縄文グリッド実測図(1/100) .....	67
第45図	縄文・弥生包含層、ピット、その他遺構出土土器実測図(1/3) .....	68
第46図	弥生時代後期包含層、北西調査壁土層実測図(1/60、1/30) .....	69
第47図	石器1実測図(1・2は2/3、その他は1/2) .....	71
第48図	石器2・石製品1実測図(1/2) .....	72
第49図	石製品2実測図(30は1/3、その他は1/2) .....	73
第50図	石製品3・土製品・金属製品実測図(32は1/3、その他は1/2) .....	75
第51図	京ヶ辻遺跡3区主要遺構配置図(1/750) .....	79
第52図	基本土層図(1/40、1/50) .....	81
第53図	1号竪穴住居跡および1号掘立柱建物跡実測図(1/60) .....	83
第54図	1号竪穴住居跡出土土器実測図(1/3) .....	84
第55図	土坑実測図1(1/30、1/60) .....	87

第56図	土坑実測図2 (1/30、1/60).....	90
第57図	土坑出土土器実測図 (1/3) .....	91
第58図	焼土坑実測図 (1/30、1/60).....	93
第59図	焼土坑・1号鍛冶炉出土土器実測図 (1/3) .....	95
第60図	1号炉跡、1・2号鍛冶炉実測図 (1/30、1/60).....	97
第61図	溝土層断面図1 (1/60) .....	99
第62図	1～3号溝出土土器実測図 (1/3) .....	101
第63図	5号溝実測図 (1/20、1/60).....	103
第64図	6号溝実測図 (1/20、1/60).....	105
第65図	4～6号溝出土土器実測図 (1/3) .....	106
第66図	8・14号溝実測図 (1/60、1/120、1/180).....	109
第67図	8号溝出土土器実測図 (1/3) .....	110
第68図	溝土層断面図2 (1/60) .....	117
第69図	12～42号溝出土土器実測図 (1/3) .....	118
第70図	P1・P5・P16・P18実測図 (1/30) .....	119
第71図	硬化面実測図 (1/60) .....	120
第72図	ピットおよびその他出土土器実測図 (1/3) .....	122
第73図	土製品実測図 (1/2、2/3).....	124
第74図	石器実測図1 (2/3) .....	126
第75図	石器実測図2 (2/3) .....	128
第76図	石器実測図3 (1/2) .....	130
第77図	石器実測図4 (2/3) .....	131
第78図	石器実測図5 (1/3) .....	132
第79図	鉄滓実測図 (1/2) .....	133
第80図	国作三角遺跡 (みやこ町) の詳細位置図 (1/2000) .....	135
第81図	国作三角遺跡全体図・土層実測図 (1/200、1/100).....	136
第82図	土坑・溝・トレンチ土層実測図 (1/60、1/30).....	138
第83図	出土土器実測図 (1/3) .....	139
付図1	京ヶ辻遺跡1区全体図 (1/300)	
付図2	京ヶ辻遺跡3区全体図 (1/300)	

## 表目次

表1	東九州自動車道関係発掘調査地点一覧.....	5
表2	京ヶ辻遺跡1区出土石器一覧.....	74

# I はじめに

## 1 調査に至る経緯

東九州自動車道は、福岡県北九州市を起点とし、大分市、延岡市、宮崎市を經由し鹿児島市に至る基幹道路として計画された、延長約436kmの高速自動車道である。

東九州自動車道の整備計画策定からの文化財調査にかかる経緯については、先行する報告書に詳しく記載されているために本書では割愛することとし、以下、本書で報告する各遺跡についての個別的な調査に至る経緯を記述したい。

京ヶ辻遺跡は東九州自動車道建設に伴い、京都府みやこ町大字有久の田地区分の約20,000㎡が対象であった。工事対象地は、周辺の埋蔵文化財包蔵地である「京ヶ辻遺跡」を一部含んでいた。教育庁総務部文化財保護課は、西日本高速道路株式会社九州支社福岡工事事務所と協議をし、平成21年6月17・18日に確認調査を行った。その結果、対象地内で埋蔵文化財が発見されたので、平成21年9月28日から発掘調査を開始した。

調査は用地取得の関係で全面掘削ができないため、工事の進捗状況にあわせて行なうこととなった。対象面積が広いため、北側から水田区画にあわせて3・1・2区と分けて調査を行なった。

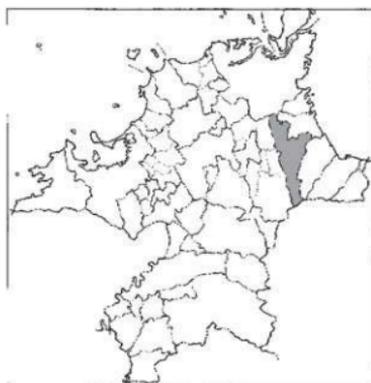
平成21年度の調査は1区中央部のみが調査可能であり、南側半分約2,000㎡を同年9月28日からバックホーによる表土剥ぎを開始した。10月14日からは発掘作業員を投入し、人力掘削を開始した。調査地は沖積地であり遺構検出が難しく、また古墳時代中期の大溝、水田遺構の掘削にも時間を取られた為、平成22年3月8日に調査を終了した。

平成22年度の調査は4月6日からバックホーによる反転作業を行った後、北側半分の表土剥ぎを開始した。同月13日には作業員を投入して調査を進めた。北側では竪穴住居群、縄文時代の包含層を掘り下げ、同時に用地取得が進んだ1区南側へ移動した。南側の調査では大溝の続きを検出した。この間に2区南側の用地交渉が進んだため、2区の表土剥ぎを行ないながら1区の調査を終わらせ、平成23年3月1日に調査を終了した（2区の調査内容については来年度報告予定）。

3区は、工事との関係上、平成22年度に北側の道路沿いの部分の調査をA区（1次）として実施が行なった。翌23年度に残りの部分を（B～E区）として宮田が担当した。

23年度は、工事との関係や排土置き場の関係から、北東側の逆L字状の部分B区とし残りを順番にC～E調査区として設定した。B区は5月6日に表土剥ぎを始め、7月27日に空撮を行い、8月1日に調査を終了した。その後B区の埋め戻し及びC区の表土剥ぎを行い、C区は8月10日から調査を再開し、9月9日に作業員による掘削を終了した。D区は9月13日から掘削を始め、10月13日にC区と併せて空撮を行い、終了した。C・D区の埋め戻し及びE区の表土剥ぎを行い、E区は10月14日から掘削を始め、11月17日に空撮を行い、25日に終了した。

国作三角遺跡は、京都府みやこ町国作に所在し、主要地方道（県道）椎田勝山線と高速道路が交



第1図 京都府みやこ町の位置図

差する場所に位置する。調査地のすぐ南側はみやこ町教育委員会による国作八反田遺跡の発掘調査で、遺構の存在が確認されていた。教育庁総務部文化財保護課（調査当時）は、西日本高速道路株式会社九州支社福岡工事事務所と協議を行い、平成22年5月10日から6月9日の約1ヶ月間に渡って発掘調査を実施した。

## 2 調査・整理の組織

平成21年～23年度（発掘調査）、25年度（整理報告）に関わる関係者は次の通りである。なお、県の組織改革により、平成23年度以降は埋蔵文化財調査業務全般が九州歴史資料館へと移管されている。

### 西日本高速道路株式会社九州支社

	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成25年度
支社長	久保晶紀	久保晶紀（～9.30） 本間清輔（10.1～）	本間清輔	本間清輔
福岡工事事務所長	福田美文	福田美文	中園明広	源谷秋義
副所長（技術担当）	高尾英治（～9.30） 岩尾 泉（8.1～）	岩尾 泉（～9.30） 入江壮太（8.1～）	入江壮太 今井栄蔵（～9.30） 井 秀和（10.1～）	松繁浩二 井 秀和
副所長（事務担当）	原野安博（10.1～）	原野安博	原野安博	甲斐島武司 （用地課長兼務）
総務課長	白川雄二（～9.30） 江口政秋（10.1～）	江口政秋	江口政秋	馬場孝人
用地課長	桑原和之	桑原和之	桑原和之	甲斐島武司
工務課長	大久保良和（～9.30） 石塚 純（10.1～）	石塚 純	石塚 純（9.30～） 堅山哲仁（10.1～）	田中康一郎
みやこ築上工事長	山根良知（～9.30） 大久保良和（10.1～）	大久保良和	大久保良和	大原和章

### 福岡県教育委員会

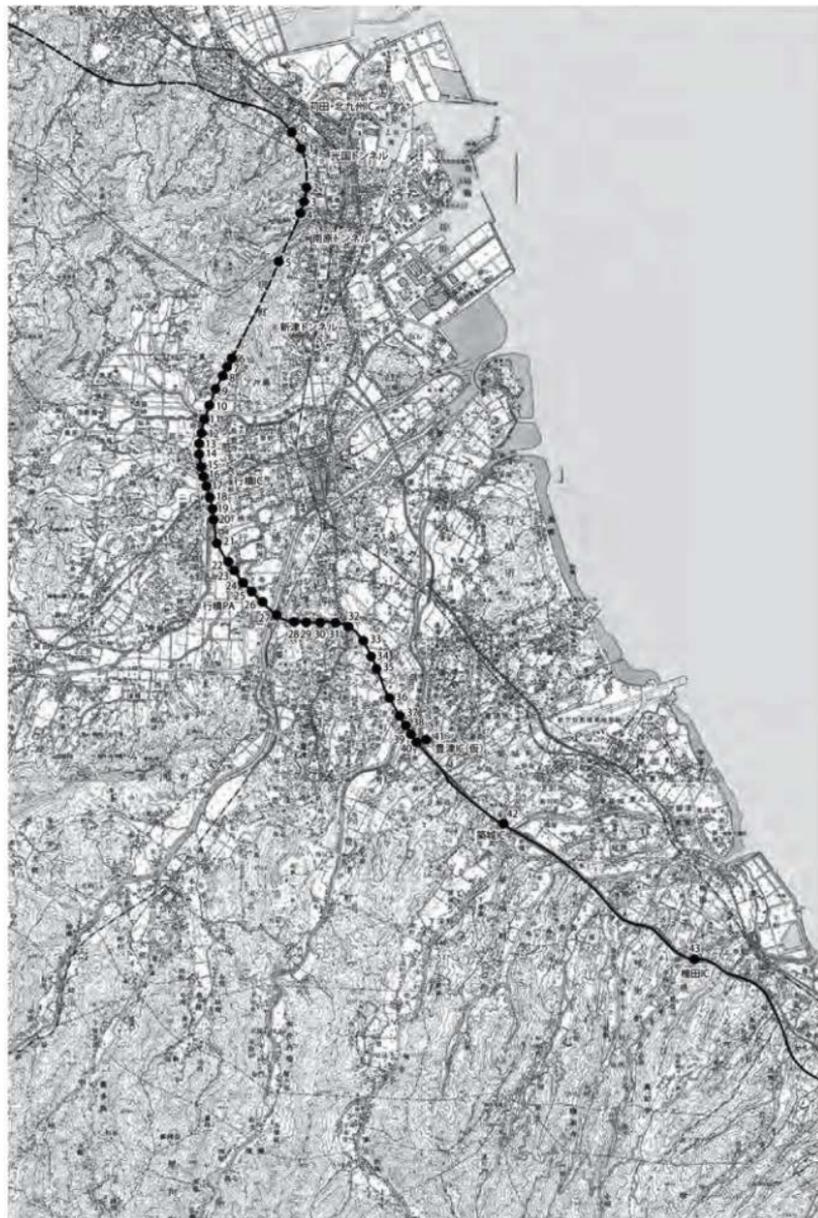
#### 総括

教育長	森山良一	杉光 誠	杉光 誠	杉光 誠
教育次長	亀岡 靖	荒巻俊彦	荒巻俊彦	城戸秀明
総務部長	荒巻俊彦	今田義雄	今田義雄	西牟田龍治
文化財保護課長	平川昌弘	平川昌弘	伊崎俊秋	伊崎俊秋
副課長	伊崎俊秋	伊崎俊秋		

参事	小池史哲	小池史哲
課長補佐	日高公德	日高公德
調査第一係長	吉村靖徳	吉村靖徳
参事補佐兼調査第二係長	飛野博文	飛野博文
<b>庶務</b>		
管理係長	富永育夫	富永育夫
主事	仲野洋輔	仲野洋輔
<b>調査担当</b>		
臨時職員	海出淳平 (調査)	海出淳平 (調査)

	平成21年度	平成22年度	平成23年度	平成25年度
<b>九州歴史資料館</b>				
<b>総括</b>				
館長			西谷 正	荒巻俊彦
副館長			南里正美	篠田隆行
参事 (文化財調査室長と兼務)				飛野博文
総務室長 (企画主幹)			圓城寺紀子	圓城寺紀子
文化財調査室長 (企画主幹)			飛野博文	
文化財調査室長補佐 (企画主幹)				吉村靖徳
文化財班長 (技術主査)			小川泰樹	小川泰樹
<b>庶務</b>				
総務班長			塩塚孝憲	長野良博
事務主査			熊谷泰容	青木三保 南里成子
主任主事			近藤一崇	
主事			谷川賢治	三好洗一
<b>調査・整理報告</b>				
主任技師				坂本真一(編集) 城門義廣(整理)
臨時職員			宮田 剛 (調査担当) 海出淳平 (調査担当)	宮田 剛 (報告)

なお、発掘調査では、地元の区長、発掘作業員、みやこ町教育委員会の関係者など、多くの方から御協力を賜った。特に、行橋市教育委員会の伊藤昌広氏、築上町教育委員会の高尾栄一氏、豊前市教育委員会の棚田昭仁氏には多くのご教示を頂いた。ここに記して感謝いたします。



第2図 東九州自動車道調査地点図 (1/100,000)

表1 東九州自動車道関係発掘調査地点一覧

地点	工 事 件 名	遺跡名	所在地	対象面積 (㎡)	試掘年度	調査面積 (㎡)	調査年度	報告年度	既刊報告 書番号	備 考
0	周田IC	兩窪遺跡群	京都府周田町大字両窪		H12-13	4000	H13-14	H15	1集	
1	福岡		京都府周田町大字両窪	1700	H22					遺跡なし
2	福岡		京都府周田町大字提	4500	H21					
3	福岡	馬場遺跡群	京都府周田町大字提・馬場	13100	H16-20-21	1200		H24	4集	
4	福岡	馬場遺跡群	京都府周田町大字馬場・南原	35300	H18-19	3900	H19-20	H24	4集	
5	福岡		京都府周田町大字集	32100	H21-22					遺跡なし
6	福岡		京都府周田町大字下片島	30600	H18-20-21					
7	福岡		京都府周田町大字下片島	10700	H18					遺跡なし
8	福岡	岩屋古墳群	京都府周田町大字上片島	24200	H20-22	5000	H19	H24	5集	
9	福岡	岩屋古墳群	京都府周田町大字上片島	29600	H20-22		H19	H24	5集	
10	福岡		京都府周田町大字上片島	21500	H20					遺跡なし
11	福岡	上片島遺跡	京都府周田町大字岡崎・上片島	18200	H20	8440	H21-23	H24	5集	
12	福岡	上片島遺跡	京都府周田町大字上片島	7500	H20	6180	H21	H24	5集	
13	福岡		行橋市延永	12200	H19					遺跡なし
14	福岡		行橋市延永	17500	H19					遺跡なし
15	福岡	延永ヤヨミ園遺跡	行橋市延永・吉国	24810	H22	24810	H19-23	H23-	2-9-11集	
16	福岡		行橋市吉国	4400	H20					遺跡なし
17	福岡		行橋市吉国	5100	H19					遺跡なし
18	福岡		行橋市吉国・下検地	82500	H18-19					遺跡なし
19	福岡		行橋市下検地	12710	H22					遺跡なし
20	福岡		行橋市上検地・下検地	20650	H22					遺跡なし
21	福岡		行橋市上検地・中川・大野井	19190	H22					遺跡なし
22	福岡		行橋市大野井・宝山	4820	H20-22					遺跡なし
23	福岡		行橋市宝山	10050	H20					遺跡なし
24	福岡	宝山小出遺跡	行橋市宝山	16100	H20	6360	H21-22		12集	
25	福岡	宝山墓ノ木遺跡	行橋市宝山・流末	46620	H20-21	31550	H22-		12集	
26	福岡	流末溝田遺跡	行橋市流末	14710	H20-21	2900	H22		12集	
27	福岡		行橋市流末	840						
28	福岡	矢留堂ノ前遺跡	行橋市矢留	18990	H20	12750	H21-23			
29	福岡		行橋市矢留・南泉	7000	H20-22					
30	福岡	福原長者原遺跡 福原吉原遺跡	行橋市南泉	18774	H19-22	16574	H22-		13集	
31	福岡	福原吉原遺跡	行橋市南泉	10950	H21	3300	H21		13集	
32	福岡	竹並大車遺跡 竹並ヒメコ塚古墳	行橋市南泉	13888	H21-22	13888				H22行橋市による調査
33	福岡	竹並大内田遺跡	行橋市南泉	17636	H20-21	4560	H21	H24	6集	
34	福岡	鬼熊遺跡	行橋市南泉	15013	H20	15013	H21			H21行橋市による調査
35	福岡	草場尚名遺跡 因作三角遺跡	行橋市南泉・京都郡みやこ町因作	42940	H20-22	3420	H22-23	H24	6-14集 (本冊)	
36	福岡	八反田遺跡 京ヶ江遺跡	京都郡みやこ町因作・田中・有久	29491	H20-22	29491	H21-23		14集 (本冊)	H21八反田遺跡は みやこ町による調査
37	福岡		京都郡みやこ町有久	1110	H21					遺跡なし
38	福岡	哲見川ノ上遺跡	京都郡みやこ町哲見	1132	H21	1132	H22		10集	
39	福岡	哲見中間遺跡 哲見大塚古墳	京都郡みやこ町哲見	8218	H21-22	5918	H21-23			H22哲見中間遺跡は みやこ町による調査
40	福岡	カワラケ田遺跡 下原七反田遺跡 ハッ草遺跡	京都郡みやこ町哲見・下原	45510	H19-21	22763	H20-22	H23-	3-10集	
41	福岡	カワラケ田遺跡	京都郡みやこ町哲見	5080	H21	3580	H21-22		10集	
42	福岡	安武深田遺跡	築上郡築上町安武	26000	H21-22	26000	H22			一部築上町による調査
43	福岡		築上郡築上町小原	24359	H21					

## II 位置と環境

### 1 地理的環境

本遺跡が所在する福岡県京都郡みやこ町は、人口22,000人弱、福岡県の北東部、京都地域の中央部に位置する。当町は、東は行橋市と築上郡築上町、西は田川郡添田町・赤村・香春町、南は大分県中津市、北は北九州市小倉南区と接し、総面積は151.28km<sup>2</sup>を測り、県下の町としては最大面積を誇る。また本町は、平成18（2006）年3月20日に京都郡勝山町、豊津町、犀川町の3町が「平成の大合併」により誕生し、町内には国指定史跡である豊前国分寺跡、綾塚古墳、橋塚古墳、御所ヶ谷神龍石、県指定史跡である豊前国府跡をはじめとした多くの文化財が残り、歴史を生かしたまちづくりを展開している。

本遺跡は、周防灘に注ぐ祓川によって形成された標高26m前後の扇状地上に位置する。祓川は英彦山・犬ヶ岳山塊を源流とし、そこから南北にはほぼ直線的に流れ下っているため、河川勾配も急である。そのため、粗粒な火山岩である安山岩の砂や平均5cm程度の円礫を多量に行橋盆地内に堆積させ、扇状地を形成している。本遺跡はこの扇状地上の沖積微高地に位置し、調査区内にも河川の氾濫による堆積が認められる。ちなみに本遺跡が所在するみやこ町有久地区の集落は、文政11年（1829年）の大洪水によって、祓川寄りの字菰田にあった集落が流されたため、現在の位置に移ったと言われていることも本遺跡の消長を考える上でも興味深い（海出・大庭）。

### 2 歴史的環境

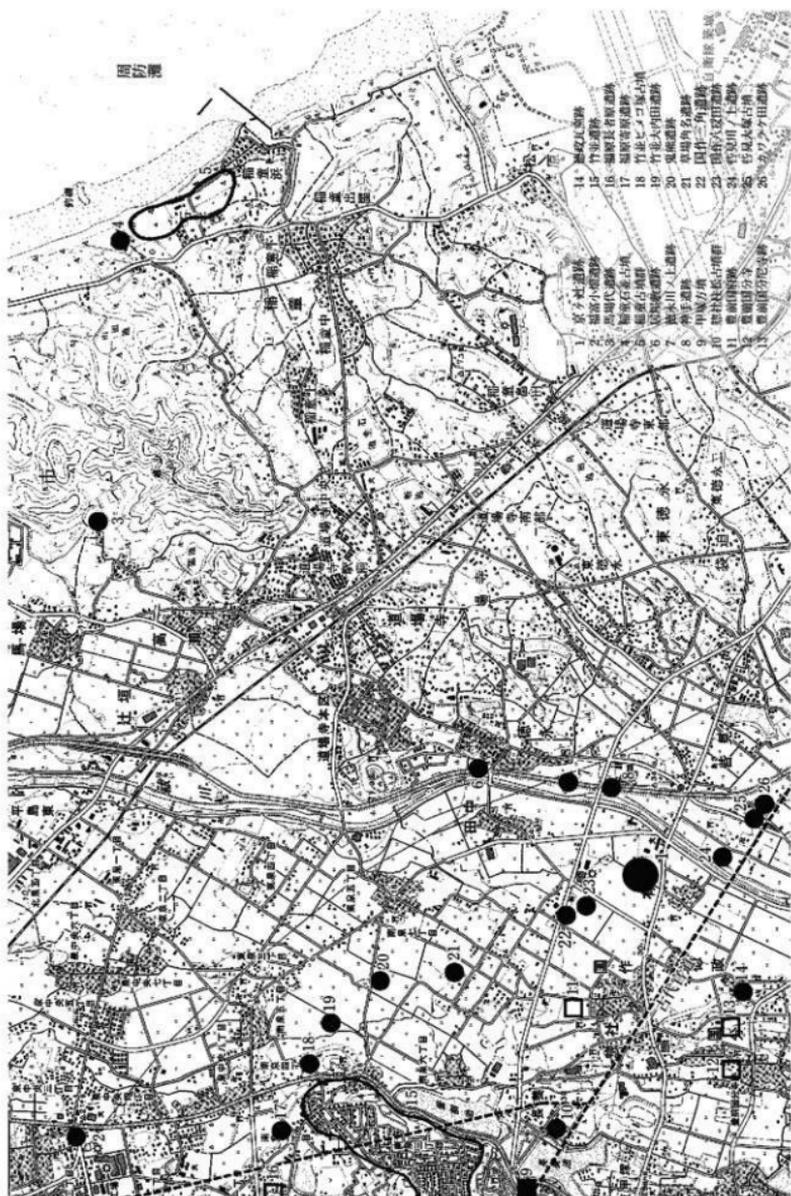
#### a. 豊津地区の歴史的環境（第3図）

ここでは、本遺跡が所在する旧豊津町域のみやこ町豊津地区についての歴史的環境を見ていきたい。なお、本遺跡周辺の歴史的環境については、本遺跡の祓川を挟んだ対岸に位置するみやこ町カワラケ田遺跡2次調査の調査報告書（坂本真一・藤島志考2012『東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告（3）カワラケ田遺跡2次調査Ⅰ』九州歴史資料館）に詳述されているため、そちらもあわせてご参照いただきたい。

本地区の旧石器時代の遺跡は、徳永川ノ上遺跡・長養池遺跡・鋤先遺跡でナイフ形石器が出土をしているが、明確な遺構は検出されていない。

縄文時代の遺跡は、早期・前期・中期の遺跡は少ないが、徳永川ノ上遺跡・鋤先遺跡などの祓川右岸の河岸段丘上で狩猟活動の痕跡と考えられる落とし穴状遺構が多数発見されている。後期になると周防灘沿岸では遺跡数が増大する。祓川左岸の低段丘上に位置する節丸西遺跡では、縄文時代後期中頃～晩期初頭の堅穴住居跡2棟が調査され、多くの遺物が出土している。

弥生時代前期の集落は、貯蔵穴群・堅穴住居跡が確認された羽熊遺跡や環濠内で貯蔵穴が検出された神手遺跡がある。弥生時代中期では、豊前国府総社地区で集落跡が発見されている。弥生時代後期終末～古墳時代初頭では、徳永川ノ上遺跡で後漢鏡を含む複数の鏡を副葬する墳丘墓10基以上が確認され、地域有力集団の墳墓であったと考えられる。この時期の集落遺跡は、行橋市鬼熊遺跡がこれまで確認されているほか、本遺跡や国作八反田遺跡（平成22年度にみやこ町教育委員会調査）などの沖積微高地で小規模な集落が発見されている。



第3图 周边道路分布图 (1/25,000)

古墳時代前期・中期の集落遺跡は、これまで豊津地区では明確に確認されていなかったが、本遺跡ではじめて発見された。この時期の墳墓は、県道椎田・勝山線近くの長養池の丘陵に存在していた総社柱松古墳群がある。この古墳群は、円墳2基を中心として前方後円墳1基を含め計3基で構成されていたが、前方後円墳以外は1967年頃に宅地造成により消滅した。円墳2基の内、1号墳は周溝幅約30m前後で、主体部である赤彩を施した大型箱式石棺から、仿製鏡2面、刀剣や獻手刀子など計10振、針2本などが出土し、他に玉類が存在していたようである。また本遺跡と強い関係が予想される居屋敷遺跡1号窯跡については後述する。

古墳時代後期的大型円墳である県指定史跡の彦徳甲塚古墳は、二重の周溝を巡らせた直径5.6mの円墳である。近接する甲塚方墳は辺長4.6×3.6m、高さ9.5mで三段築成、周溝・周堤を含めた墓域は長さ7.2m×6.3mに達する。その他1,000基を越す横穴墓が検出された竹並遺跡や八景山山麓古墳群が本地区の後期群集墳の代表的なものである。

奈良時代になると、上坂廃寺・豊前国分寺が建立され、9世紀には総社地区で豊前国府が成立する。12世紀前葉まで長さ30mを超える脇殿を造営しているが、12世紀中葉以降には方形大溝で区画された私的居館の存在が推定されている。また近年の東九州自動車道の発掘調査において、行橋市福原長者原遺跡で8世紀前半の大規模官衙遺構が発見されており、前期国府としての位置づけが指摘されていることは注目される。

平安時代では天慶4年(941年)、藤原純友は大宰府を攻撃して占領する。その5月、官軍が九州に到着し、純友は大宰府を焼き捨て、博多湾で激戦の末に純友軍は大敗する。その際、純友の追捕使の大蔵春実は大いに奮戦した。その大蔵春実の子孫は寛弘3年(1019年)の「刀伊の入寇」の際にも勲功をあげ、筑前・筑後国に根付く。保元元年(1156年)、宇佐宮造営に強力な軍事警察力をもつ豪族が任命される拒捍使として大宰府より派遣され、豊前地域でも大蔵一族の出自、板井氏の活動が指摘されている(海出)。

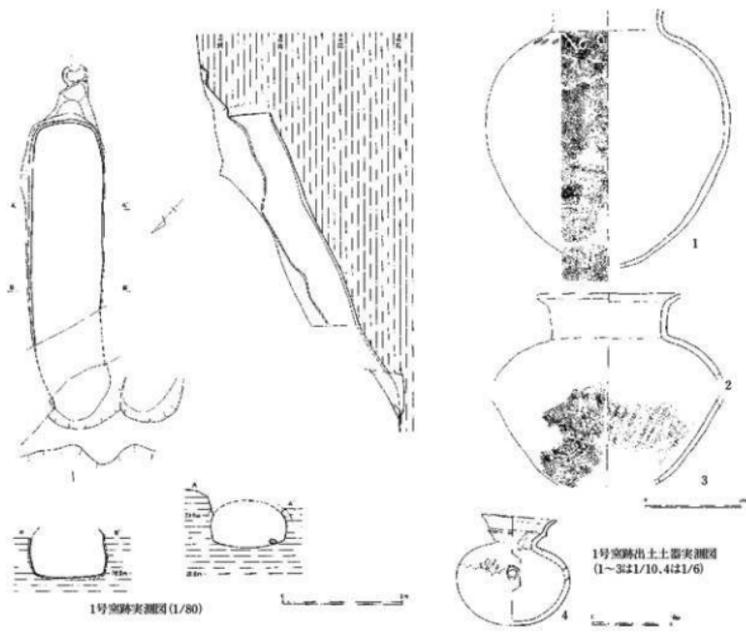
#### b. 居屋敷遺跡初期須恵器窯跡と本遺跡について(第4図)

來年度刊行予定の「京ヶ辻遺跡Ⅱ」での報告が主となるが、本遺跡では、オンドル状遺構を持つ堅穴住居群や谷・溝から多く出土した初期須恵器など、多くの朝鮮半島系の遺構・遺物が発見されている。この初期須恵器は、その形態・胎土から初期須恵器窯の居屋敷遺跡1号窯跡で生産されたと想定される。これらの遺構・遺物の詳細な検討は「京ヶ辻遺跡Ⅱ」で行われる予定であるが、その検討材料として、ここでは居屋敷遺跡1号窯跡の調査成果を振り返ることとしたい。

居屋敷遺跡は、京都都みやこ町大字徳永宇居屋敷(調査当時は豊津町)に位置し、弥生時代の墓地、古墳時代後期の横穴墓群、そして後述する初期須恵器窯が発見された遺跡である。調査区内で1基のみ検出された1号窯跡は、丘陵最上部の標高28~29mに位置し、主軸はN-45°-Wを測る。窯の平面形は焚口1m、焼成部幅1.2m、残存長6mという初期須恵器窯特有の小規模な極めて直線的な平面形態である。灰原は後の造成で削平されたと思われ、調査では検出されていない。また煙出口は焼成部から段をもたせて接続する、つまり煙突形を呈するという初現期の須恵器窯の特色を備え、焼成部の土層観察から少なくとも3回の操業が想定されている。このように、初期須恵器窯の特徴を備えた窯形態から、当窯は直接渡来した工人によって営まれた窯であると先学によって位置づけられている(植野2004・2006)。



居屋敷遺跡構配置図(1/400)



1号陶器断面図(1/80)

1号窯跡出土土器断面図  
(1-321/10, 421/6)

第4図 居屋敷遺跡関係図(1/400、1/80、1/10、1/6)

出土遺物から見ると、灰原を削平されていることから出土遺物は少なく、少量の甕が主体（第4図1～3）であるが、特徴的なものとして体部は球状、口縁部はラッパ状に大きく開く形態を持つ完形の甕（第4図4）1点が出土した。これらの土器から、当窯の時期は5世紀前半、TG232～TK73型式のものと考えられている。また考古地磁気法による年代測定によって、5世紀前半という窯採業年代が示されている。調査区で検出された窯は1基のみで、その後の採業を示す出土遺物は発見されなかったことから、当窯における須恵器生産は単発的で閉塞されてまもなく終息したと想定される。

本遺跡でも居屋敷遺跡出土甕と胎土・形態が酷似する甕が複数出土していることなどから本遺跡は当窯跡の須恵器工人集落と想定される。

山田邦和氏は須恵器工人集落の条件として、堅穴住居跡から焼け歪んだ須恵器・生焼須恵器・窯壁片などの窯跡特有の遺物や原材料となる粘土塊が出土すること、短期間しか使用されていない工房の場合は、カマドの使用頻度が少ない、住居床面がきわめて柔らかいなどを定義している（山田1998）。また山田氏は須恵器工人の住居・工房・窯の関係について、大きく3種類に類型化する。A型（「職住近接型」）として窯近くに工房を兼ねた住居を設ける、B型（「通動型」）として窯の近くに工房は持つが主たる住居は離れたところにある、C型（「単身赴任型」）として工人がはるか離れた場所に本貫地を持ち、作業の一定期間だけ工房に泊まり込む場合と分類する。この分類によると、本遺跡のこれまでの調査成果では、B型「通動型」になると予想される。

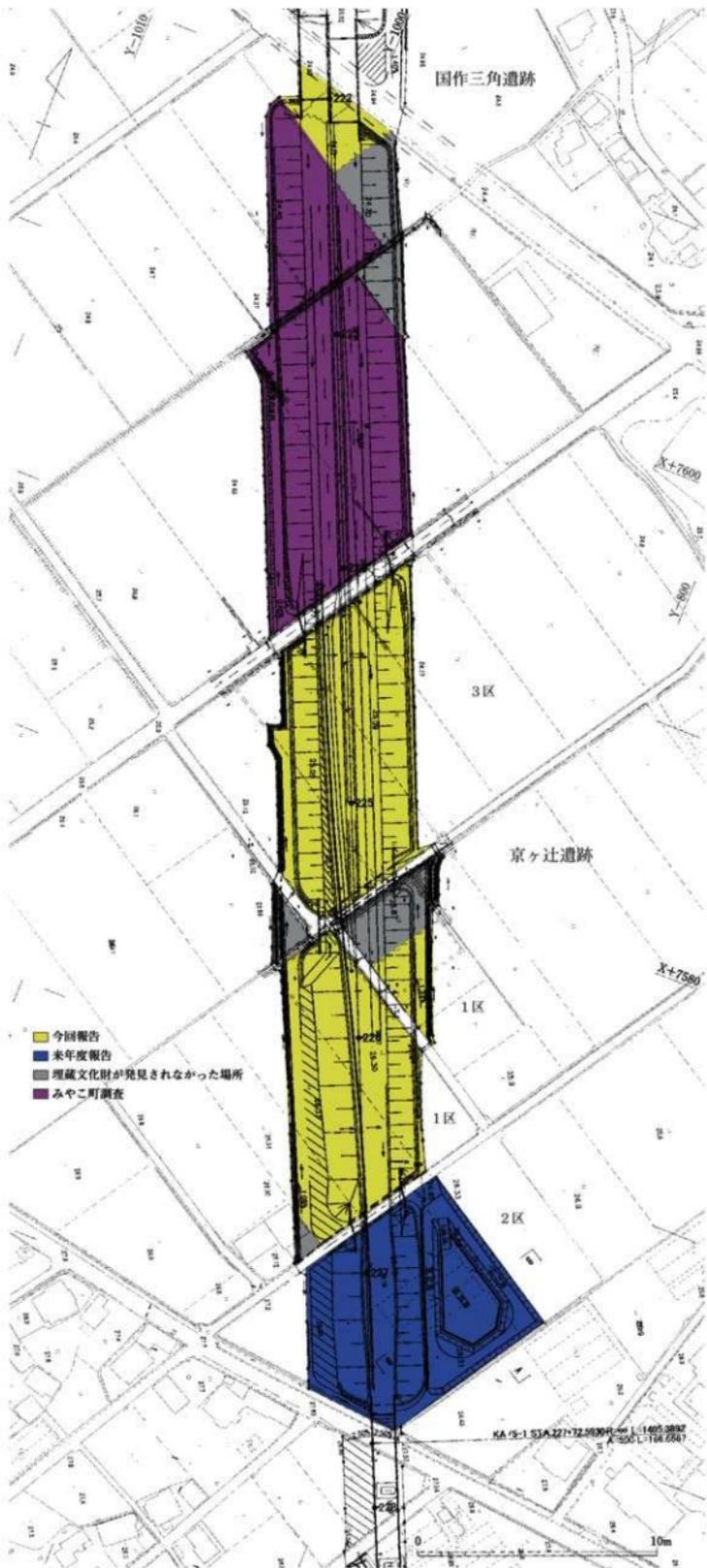
ちなみに、陶邑窯跡群の場合は生産地と生活地の分離するB型が主体になるが、大庭寺遺跡の場合はA型と想定されている。山田氏はこれらの差異は時期的なものではなく、生産規模に起因すると指摘しており、居屋敷遺跡のような小規模な生産が想定される遺跡では、A型・B型の場合がみられるようである。またこの須恵器工人は中央及び限定された豪族の下に成立し、有力層の傘下になる専門的な職業集団としての扱いが指摘されている。

以上のような視点から、今後本遺跡の在り方・位置づけを検討していきたい。

#### 【主要引用・参考文献】

- 栗焼憲児 1983 「京築地方の旧石器について」『とよ7号 豊前国府・国分寺調査研究会報』
- 酒井仁夫・高橋章 1984 「豊前地方の8世紀代の軒瓦について」『九州考古学』第59号 九州考古学会
- 小川武志 1988 「豊前宇都宮興亡史」 海鳥社
- 植野浩三 1988 「初期須恵器窯の解釈をめぐる」『文化財学報』第6集 奈良大学文学部文化財学科
- 則松弘明 1996 「鎮西宇都宮氏の歴史」 翠峰堂
- 副島邦弘編 1996 「居屋敷遺跡」『一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告』第6集 福岡県教育委員会
- 山田邦和 1998 「須恵器生産の研究」 学生社
- 『福岡県の地名（日本歴史地名大系41）』 2004 平凡社
- 行橋市史編集委員会 2004 『行橋市史 上巻 自然・地理・原始・古代』 行橋市
- 植野浩三 2004 「渡来人と手工業生産の展開」『文化財学報』第22集 奈良大学文学部文化財学科
- 行橋市史編集委員会 2006 『行橋市史 資料編 原始・古代』 行橋市
- 植野浩三 2006 「日韓古代窯跡調査の動向」『総合研究所所報』11号 奈良大学総合研究所

# 京ヶ辻遺跡1区



第5図 京ヶ辻遺跡・国作三角遺跡 区割り図 (1/2,000)

### Ⅲ 京ヶ辻遺跡 1 区

#### 1 遺跡の概要

1区は、北側を農道に中央部と南側を農業用水パイプによって分割された状況であった。まず平成21・22年度に、中央部を調査し、続いて1区南側、2区の一部調査を行った。その後、1区北側の調査という順序で行なった。

遺跡の層序は、現代の水田の耕作土・床土（昭和60年代の圃場整備土）の下位に17世紀代の高取系・上野系の掘鉢を含む、近世の水田が2枚存在していた。近世に大規模な耕地改造が行なわれたようで1～3区まで遺跡一帯の遺構面はかなり削平されていた。

京ヶ辻遺跡を含め畷川西岸の地山は沖積地であり、河川堆積物の砂質土が基盤となる。部分的には黄色～灰色を基調にした砂・砂質土・礫原などが広がり、遺構の埋土は地山に酷似しており、そのため遺構検出・掘削作業に手間を費やすこととなった。

検出した遺構は多時期にわたり、1区では縄文時代、弥生時代、古墳時代、平安時代の竪穴住居跡11軒、掘立柱建物跡21棟、その他多数の土坑や南北へ伸びる溝状遺構などを検出した。

特に古墳時代中期の遺構は、南東側に隣接する2区へ広がっていた。

なお、京ヶ辻遺跡Ⅰ（2014）では1区と3区を、京ヶ辻遺跡Ⅱ（2015）では2区の古墳時代中期の遺構と、2区と連続する1区の古墳時代の遺構をあわせて報告する予定である。

#### 2 竪穴住居跡

検出した住居跡のほとんどは1区中央部の北側寄りに集中した。7・8・10号竪穴住居跡をつなぐラインから北側の地山は、縄文時代後期の茶褐色粘質土の包含層が広がっており、地山がしっかりと安定しているこの部分を選地したのであろう。また別に南側で1軒が単独で検出された。全体的に残存状況は優れないが、これは近世の水田開墾の際に大きく削平されたためであり、その状況は土層でも確認できた。

##### 1号竪穴住居跡（図版2、第6図）

竪穴住居跡が集中する南側に位置し、29号溝状遺構を切る。軟弱な砂質土を基本とする小礫が多い部分に掘り込まれていた。主軸方向は北東方向を向き、長軸4.5m、短軸3.9mの長方形プランである。北側では幅約1m、南側では幅約0.9mのベッド状遺構を付設し、中央の炉は約0.75×0.65mを測り、炉内にペースト化した炭が薄く堆積していた。柱穴はP1を検出したが、対応する柱穴は床面を掘削しすぎたため消失してしまった。南西壁面には入り口の一部と思われる長さ1.4m、幅0.1mの段が作られていた。屋内土坑は北東側に付設され、幅約0.75m、深さ0.2mを測る。住居内の炉周辺や住居北側に廃棄された土器が多く出土し、時期は弥生時代後期後半～終末期に属する。

### 出土土器 (図版 25、第7、8図)

1～19は弥生土器である。1は複合口縁壺の口縁部片で、垂直気味に立ち上がる。復元口径18cm。2も複合口縁壺の口縁部片で、白肌色を呈する。3は小型の壺片で、口縁は直に伸びる。4は頸部と胴部に刻目の突帯を付した大型の壺で、復元口径は38.6cmを測る。胴部下位片がなく、接しなかった。5は壺底部で、内外面ともナデ成形である。6はやや扁球を呈する壺胴部で、最大胴径21cmを測る。底部中央は1cm程度と尖る。内外面とも刷毛目調整である。7は口縁から胴にかけての甕で、口縁はやや厚く内彎する。口径19.6cmを測る。8はやや底部が狭い甕で、口縁は直に外方へ伸びる。調整は全体的に粗いがしっかりとおり、外面底部付近に浅く縦方向の楕円状刺突文を施している。口径18.6cm、推定器高27cmを測る。9も外方へ伸びる口縁をもち、やや胴が広がる甕である。8と同じく調整は粗いがしっかりと残り、外面底部付近はナデ調整である。復元口径は18.8cm、推定器高28.6cmを測る。10は口縁から肩にかけての破片で、口縁端部はやや丸みを帯びる。復元口径13.2cmを測る。11は頸部から底部まで残存する甕で、色調は内外面共に橙色である。外面は縦方向、内面は横方向の刷毛目を施し、底部付近には外面から径3cmの円孔を施す。最大胴径24.4cm。12は頸部から胴部までの甕片で、焼成が良く調整がしっかりと残る。13は小型の甕で、胴から底部までが残存する。復元胴部径17.3cm。14は手握ねで成形した鉢で、復元口径は12.8cm、器高6.5cmを測る。15は外方へ開く鉢で、内外面とも強いナデ調整である。口径16.0cm、器高11.6cmを測る。16は高杯片で口縁は屈折部より彎曲して伸びる。17も同様で、淡い赤肌色である。18は高杯脚部で脚径16.8cmを測る。19は脚筒部から広がる高杯脚部片で、径1cm程度の孔を設ける。

### 2号堅穴住居跡 (図版2、第6図)

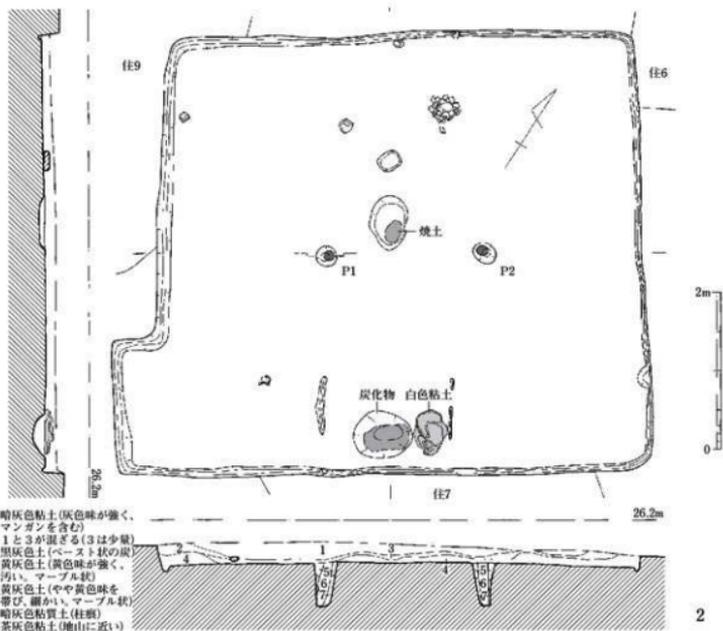
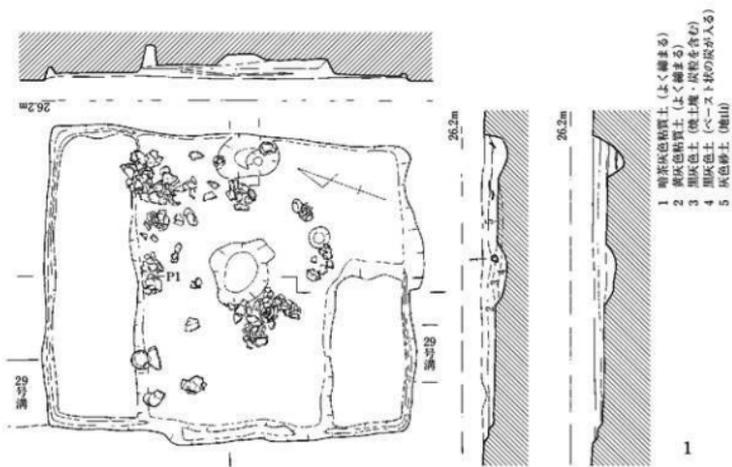
1号堅穴住居跡の北側に位置し、6・7・9号堅穴住居跡と29・30号溝状遺構を切る住居跡の中では一番新しい住居である。主軸方向は北西を向き約5.2×6.0mのほぼ正方形プラン、南側コーナーに1.7×0.5mの張り出し部分を設けている。ベッド状遺構は付設されず、壁溝が全周する。南東側に幅約0.7m、深さ約0.1mの屋内土坑を挟むように、長さ約0.8mの小溝を掘り込む。屋内土坑内には炭化物が張り付いて検出された。この屋内土坑と小溝の間には0.45×0.6m、高さ0.1mの白色粘土塊を置いていた。炉は楕円形プランで、P1・2がこれを挟む。炉の北西0.4m先に台石が出土している。時期は出土土器から古墳時代初頭頃に属する。

### 出土土器 (図版 25・26、第11図)

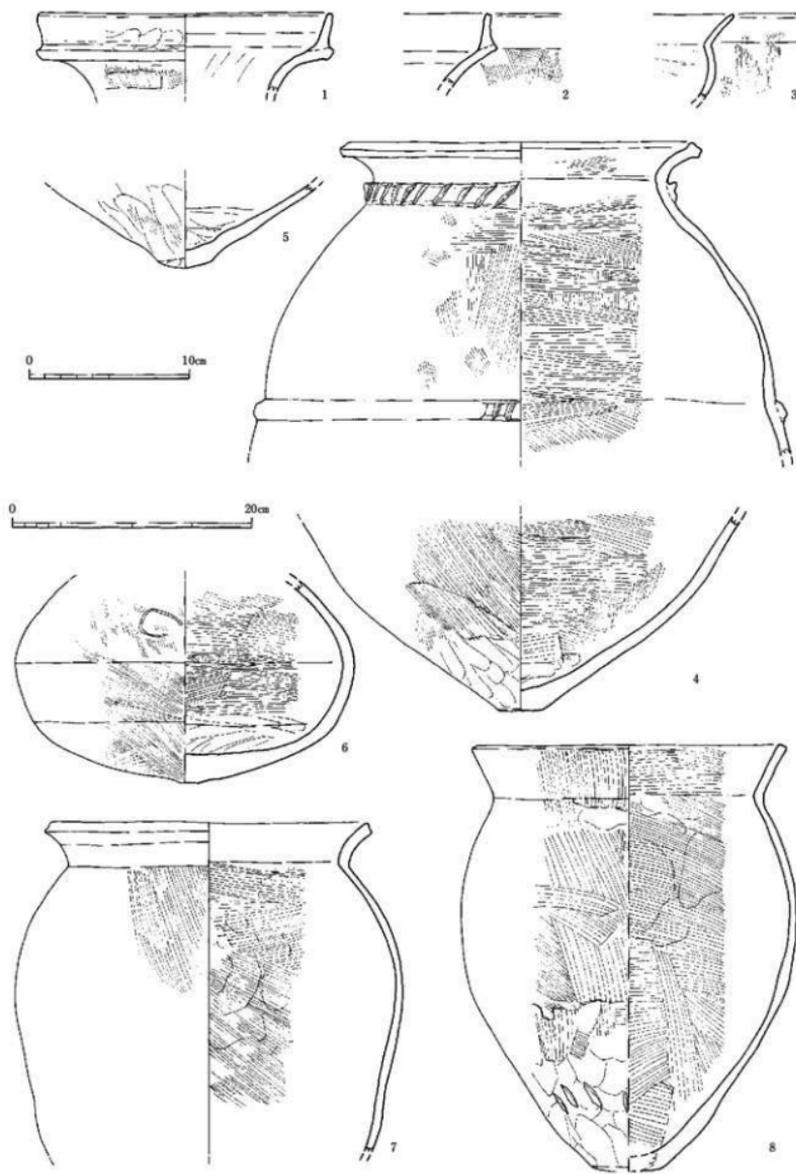
1～6は土師器である。1～4は小型丸底壺である。1の口縁は短く伸びる。復元口径9.8cm、器高8.1cmを測る。2は胴部が丸みをもつもので、口縁は外方へ直に伸びている。口径9.3cm、器高9.6cm。3も同様であるが口縁はやや内彎する。口径9.1cm、器高9.1cmを測る。4は一回り以上小型であるが、丸底壺か。口縁は1cm以下と短い。口径4.6cm、器高4.9cmを測る。1～4ともに内外面ともナデ調整である。5は口縁から肩にかけての甕片で、口縁は外側に開く。復元口径15.0cm。6は肩から胴にかけての甕片で、外面の調整は細かい刷毛目を行なう。

### 3号堅穴住居跡 (図版2、第9図)

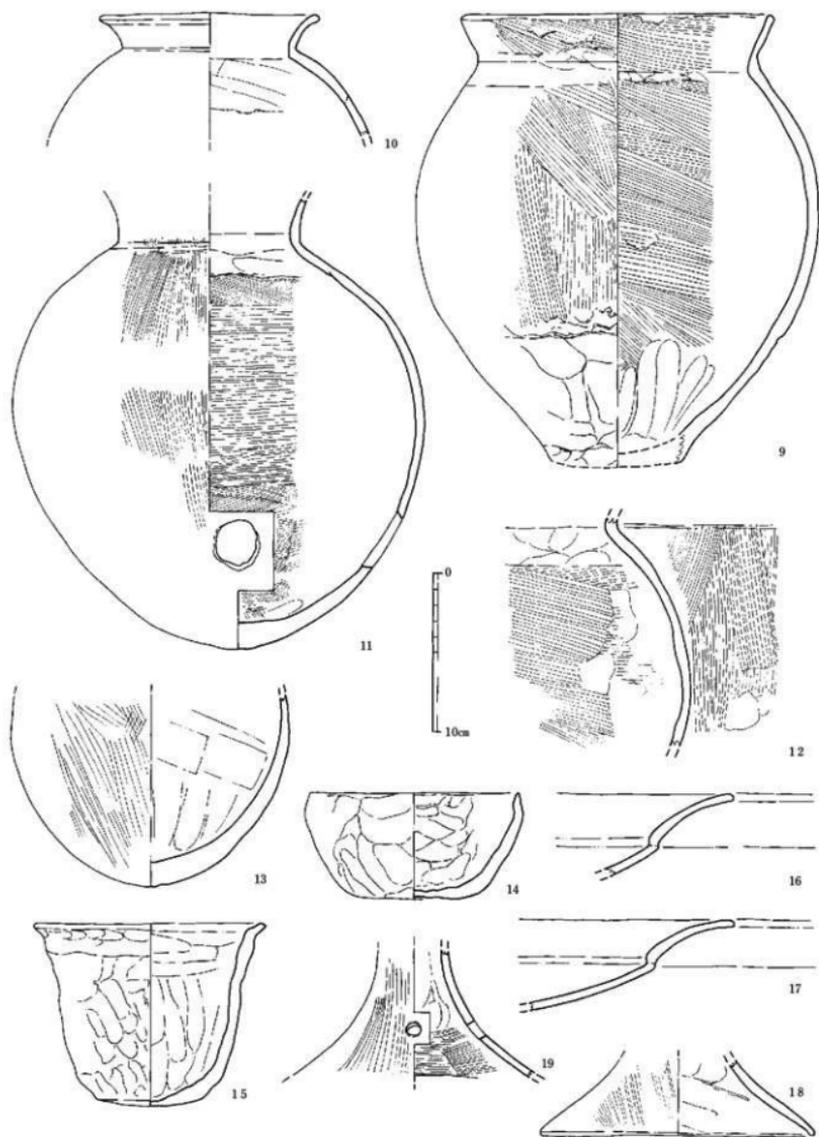
2号堅穴住居跡の3m程西側で検出した住居跡で、9号堅穴住居跡、29号溝状遺構を切る。主



第6図 1・2号竪穴住居跡実測図(1/60)



第7图 1号竖穴住居跡出土土器実測図1 (1/3、1/4)



第8图 1号竖穴住居跡出土土器実測図2 (1/3)

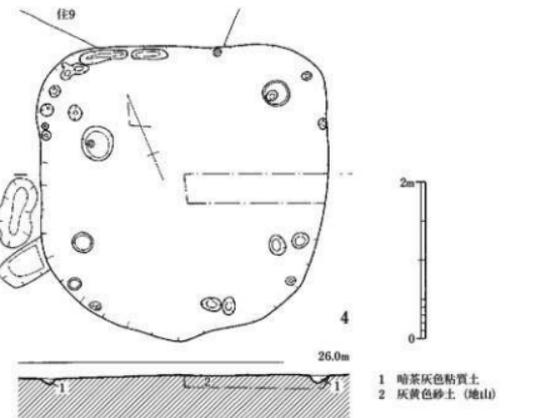
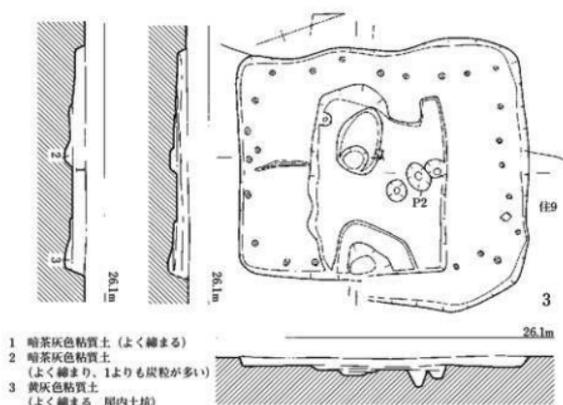
軸は北西方向を向き、 $3.6 \times 3.0$  mの小型の長方形プランで、幅約0.9 mの「コ」字形のベッド状遺構を設けている。壁溝は掘削されておらず、ベッド状遺構の壁側寄りに、径0.05 m程度の小ピットが多数並ぶ。中央の炉は西側に寄り、東側の屋内土坑は半円形状で浅い。主柱穴と呼べるものはP2のみで、床面からは約0.2 mの深さである。時期は弥生時代後期後半～終末期に属する。

#### 出土土器（第11図）

7～9は弥生土器である。7は甕の底部片で、内面は粗いナア。底径8.0 cmを測る。8は短く彎曲する口縁をもつ高杯片で、外面口縁部に等間隔に短い縦方向の暗文を施す。杯部にかけては彎曲気味である。9は器台の脚先から筒部までの破片で、端部はやや肥厚する。内外面には刷毛目とナア調整が残る。底径12.0 cmを測る。

#### 4号堅穴住居跡（図版3、第9図）

9号堅穴住居跡を切り、その南側で検出した住居跡である。 $3.7 \times 3.6$  mのほぼ正方形プランで南側が丸みを帯びる。検出時、周壁溝ははっきりとしていたが、その内部の埋土が不明瞭であったので一段下げたが、掘りすぎてしまった。主柱穴は検出されず、壁溝のみの残存していた住居跡と考えられる。周壁溝の深さは約0.1 mで、若干の遺物が出土した。時期は弥生時代後期か。



第9図 3・4号堅穴住居跡実測図（1/60）

#### 出土土器（第11図）

10～12は弥生土器である。10は甕の口縁部片で「く」の字形に強く屈折する。頸部に強いナデの痕跡がある。11は甕の口縁部片で、頸部から胴部にかけては垂直に伸びる。色調は白肌色。12は平底の甕底部片である。復元底径7.2cmを測る。

#### 5号竪穴住居跡（図版3、第10図）

3号竪穴住居跡から北側の調査区際で、一辺幅5.5m、0.5～0.9m、深さ約0.1mを検出した方形の竪穴住居跡である。東側の壁はビットに切られているが、西側のコーナーははっきりと検出できた。なお壁溝は検出されなかった。埋土は暗茶灰色粘質土である。図示できる遺物は出土していないが、周辺の住居跡と同様の埋土から弥生時代後期後半～終末頃のものと思われる。

#### 6号竪穴住居跡（図版3、第10図）

調査区の北端で検出し、2号竪穴住居跡に切れ、30号溝状遺構を切る。残存長4.7×2.8mの方形プランで、調査区際で深さ約0.1mの屋内土坑を検出している。中央部分の柱穴は平安時代のものでこの住居跡とは無関係であり、住居跡の支柱穴は検出されていない。埋土は暗茶灰色粘質土である。時期は弥生時代後期後半～終末と思われる。

#### 出土遺物（第11図）

13は高杯口縁部の破片で、内彎して外側に伸びる。焼成は悪く、明橙色である。

#### 7号竪穴住居跡（図版4、第10図）

2号竪穴住居跡に北側を切られて、幅約3.6m、1.5～2.4m分を検出した。東側と西側に幅0.6～0.8mの浅いベッド状遺構を検出している。住居跡は約0.1mの深さで、柱穴は検出できなかった。埋土は暗茶灰色粘質土である。

#### 出土土器（第11図）

14は甕の口縁部片で、端部にかけて肥厚する。15は甕の底部片で、底部は丸味を帯びている。ともに弥生土器片である。

#### 8号竪穴住居跡（図版4、第10図）

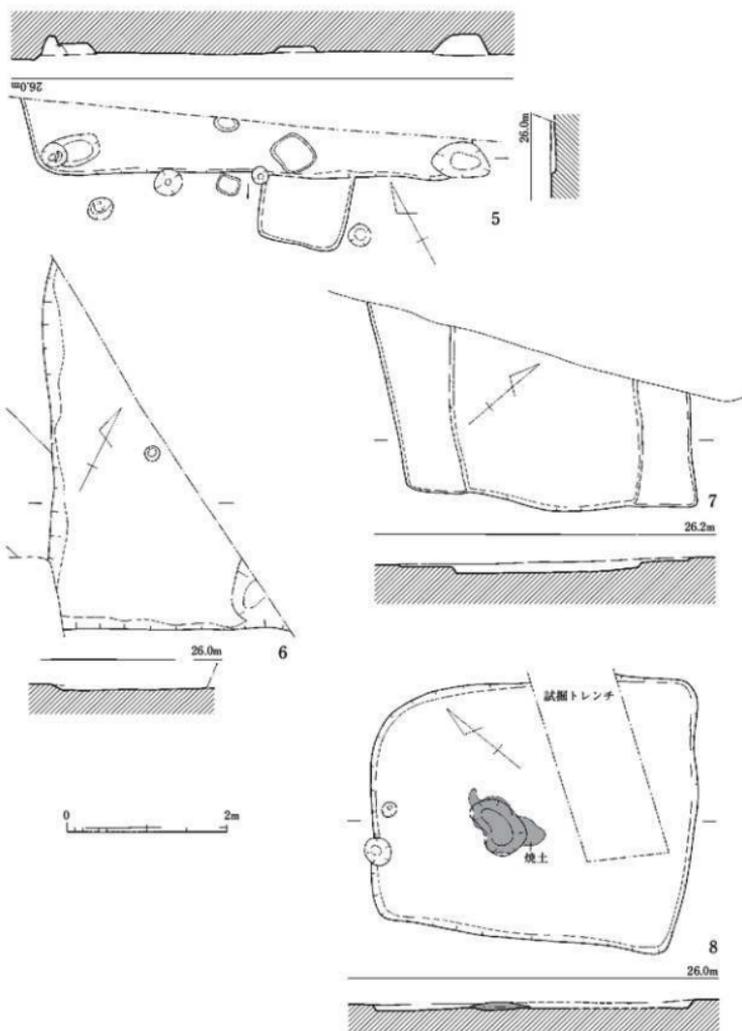
3号竪穴住居跡から5mほど北西で検出した約4.0×3.2m、深さ約0.1mの北側が丸みを帯びる長方形プランの竪穴住居跡である。表土除去時点で中央炉の焼土が剥き出しの状態で検出した。埋土は暗茶灰色粘質土であったが、周辺には縄文時代後期の茶褐色粘土が広がっていて、区別がつかず若干掘りすぎている。中央炉は約0.8×0.4mで浅い楕円形プランに焼土が広がっていた。なお柱穴は検出されていない。埋土から弥生時代後期後半～終末にかけてと思われる。

#### 出土土器（第11図）

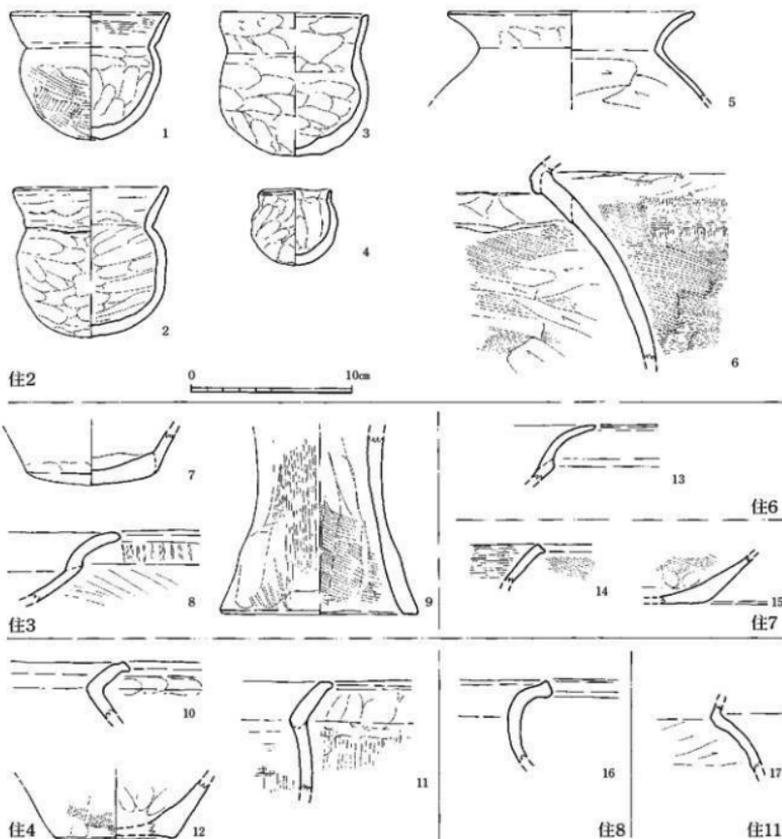
16は壺の口縁部片で、口縁端部は跳ね上げている。色調は乳白色で、内外面ともナデ調整である。

#### 9号竪穴住居跡（図版4～6、第12・15図）

2号竪穴住居跡の西側に隣接して検出し、2・3・4号竪穴住居跡に切れ、29号溝を切る。



第10図 5～8号竪穴住居跡実測図 (1/60)



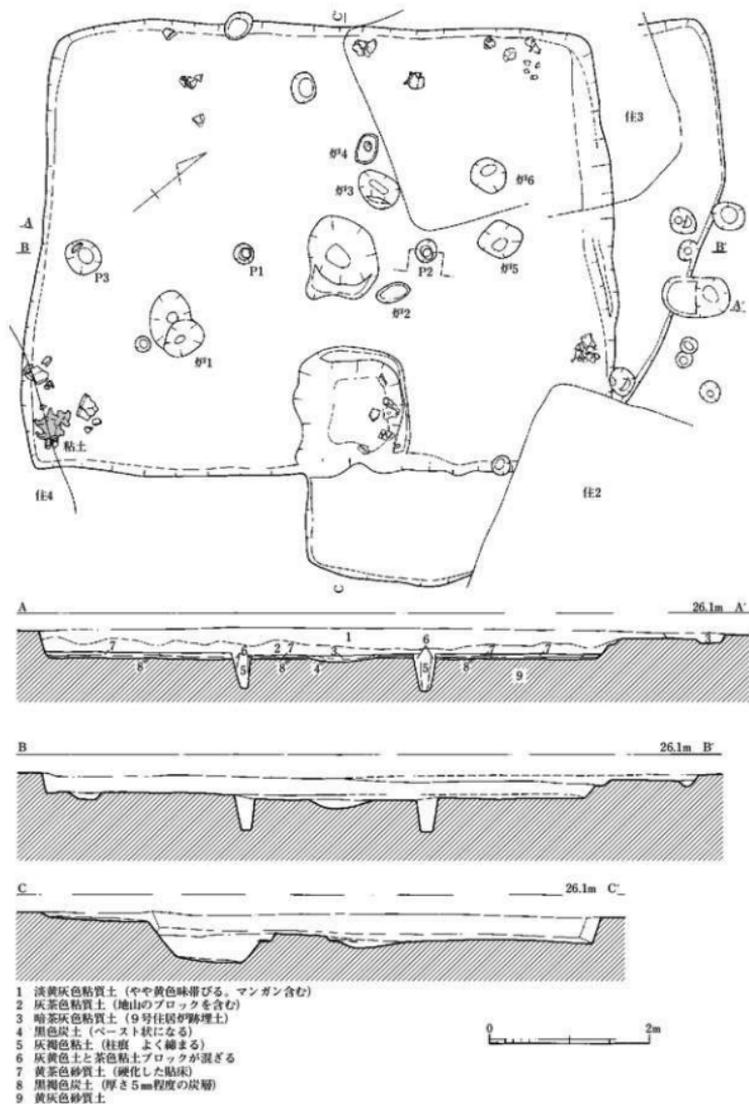
第11図 各堅穴住居跡出土土器実測図(1/3)

住居跡の中では一番古い。約7.0×5.7m、深さ約0.25mの長方形プランに、北東側に幅約1.5m、南東側に幅約1.5m、深さ約0.1mの「L」字に張り出すベッド状遺構が取り付く。中央炉は1.0×0.85mで、東側の屋内土坑は1.6×1.4mの規模で隅丸形状を呈する。中央炉を挟む直径約0.25mのP-1、P-2の主柱穴、砥石が出土したP-3、その他に6基の付設炉を検出する。

付設炉は、1号炉で残存長約0.7m検出した。2～4号炉は中央炉周辺で検出した。2・4号炉は長軸約0.4mの楕円形プラン、3号炉は長軸約0.55mの卵型のプランである。その北側で約0.5mの不整形円形プランの5・6号炉を検出した。6基の小型炉は硬化した焼土と炭が充填していたが、鉄片などは検出していない。しかし住居南側で、炉壁の一部?と羽口片が廃棄されており、鍛冶に関係する可能性が高い。時期は弥生時代後期中～後半頃と思われる。

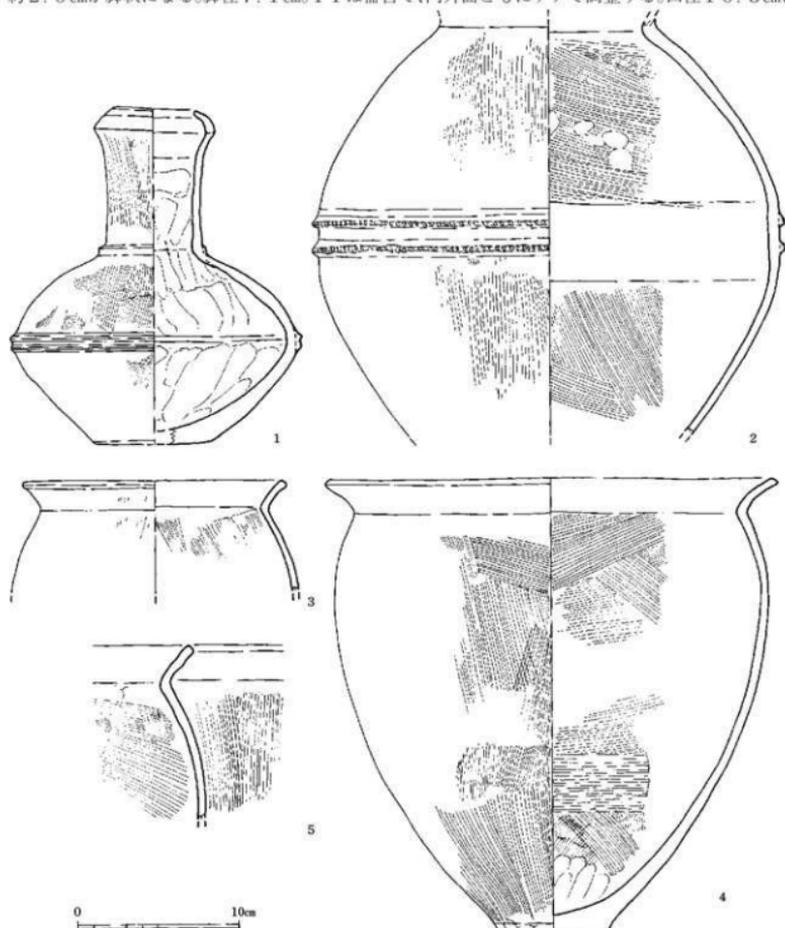
出土土器 (図版26、第13・14図)

1は袋状口縁をもつ長頸壺で、胴部はやや扁球を呈する。底部は厚くほぼ平底である。頸部と胴部に突帯を施す。口径4.9cm、器高21.3cmを測る。2は中型の壺の頸部から胴部下半にかけて



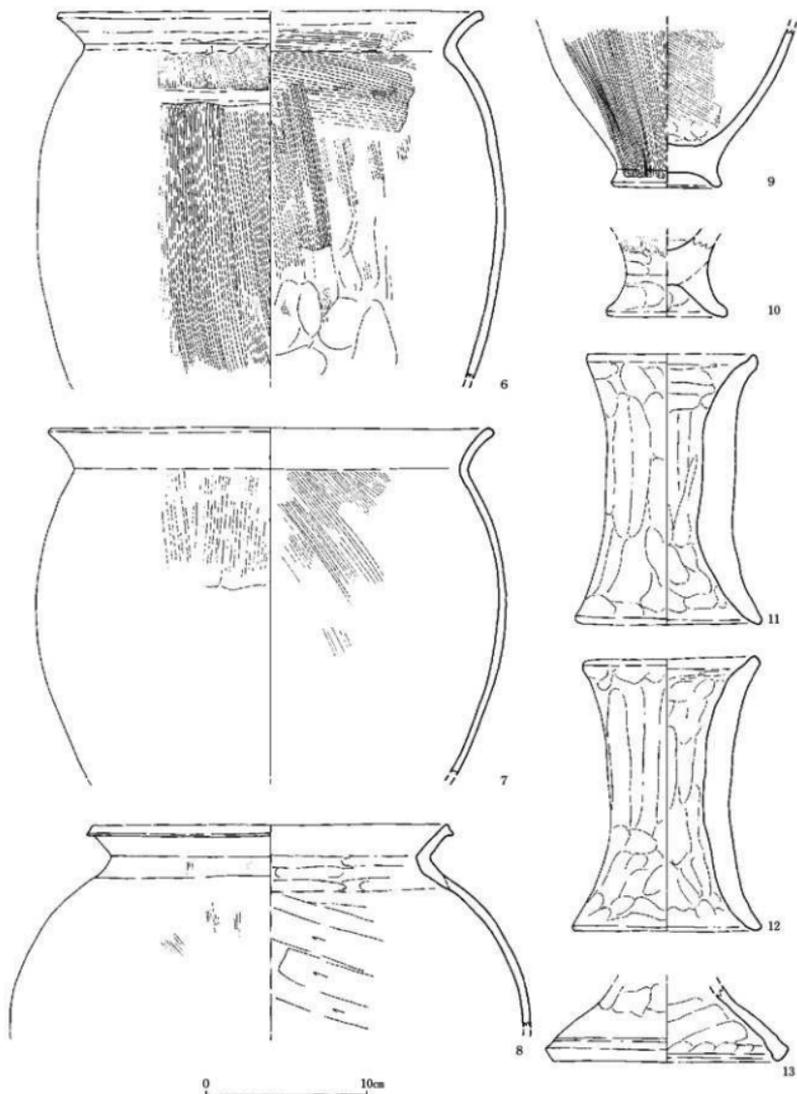
第12図 9号竪穴住居跡実測図 (1/60)

の破片で、胴回りに粗雑な刻目を施す突帯を巡らす。最大胴径28.6cmで、色調は内外面は茶肌色～淡赤褐色である。3は小型甕で、復元口径15.8cmを測る。4は中型甕で、口縁部は外側に開き、肩から胴部はやや膨らみ、底部は平底である。復元口径27.4cm、器高28.8cmを測る。5は直線的に延びる口縁をもつ。調整は明瞭な刷毛目調整である。6は口縁部がやや内彎する胴が伸び気味の甕で、復元口径26.1cm、色調は肌色～茶色である。7は口縁から胴部下半にかけての甕片で、口縁部は僅かに内彎し、胴部下半は窄まり気味である。復元口径27.0cmを測る。8は口縁端部が尖る甕片で、復元口径22.0cmを測る。調整は不鮮明だが、外面に刷毛目、内面にはナデとケズリを施す。9は上げ底の甕底部片で、底径6.6cmを測る。10も上げ底の甕底部で、約2.0cmが脚状になる。脚径7.1cm。11は器台で、内外面ともにナデで調整する。口径10.3cm、



第13図 9号竈穴住居跡出土土器実測図1 (1/3)

器高7.4cmを測る。12も器台で、法量ともに11に似る。口径10.3cm、器高17.0cmで淡赤肌色である。13は器台としているが高杯の脚部の可能性もある。調整は粗いナデで、復元口径13.9cmを測る。



第14図 9号竪穴住居跡出土土器実測図2 (1/3)

#### 10号竪穴住居跡（図版6、第15図）

8号竪穴住居跡の西で検出した住居跡である。大部分が後世の水田により削平されており、検出した遺構は中央炉と柱穴であった。中央炉は幅約0.55mの円形プランで、暗茶灰色粘質土と黒灰色土が堆積していた。それを挟むP1、P2は直径約0.25m、深さ約0.1～0.15mを測る。図示できる遺物は出土していないが、弥生時代後期後半～末頃と思われる。

#### 11号竪穴住居跡（図版6、第15図）

調査区南側で単独で検出した住居跡で、12世紀の17・18・20号掘立柱建物跡に切られていた。3.4・3.5号溝、1号不明遺構を切っていたが、それらの遺構の埋土（淡白灰色粘砂土）であったため住居跡と判断するまで時間がかかり、全体的に削り過ぎている。4.4×4.25mの方形プランで北側と南東側に壁溝を検出している。P1～3を検出し、4本柱であろうと考えていたが、南西側の柱穴は検出できなかった。時期は少なくとも古墳時代中期以降のものである。

竈部分の埋土は12世紀の遺構埋土と酷似していたため右袖を掘削してしまった。しかし、ベルトを残していたため、幸い左袖は全容を知れる。灰黄色土と若干の炭が1.1×1.0mの範囲で広がり、中央部はやや沈み、ペースト状の焼土が入る。左袖は約0.75m検出し、灰褐色粗砂土で構築されていた。

#### 出土土器（第11図）

17は土師器甕の肩部片で、内面は斜め方向のケズリを行なう。外面は淡橙色である。

### 3 掘立柱建物跡

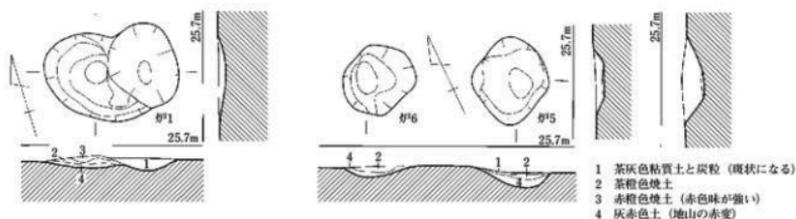
掘立柱建物は1区全体に分布している。平安時代後期（12世紀前半～中頃）の建物群は調査区の一町四方に配置されていて、複数グループが存在したとみられる。それらの一つ一つが主屋の複数棟と小型の副屋で構成されているようである。平安時代の掘立柱建物の他には、弥生時代後期の15号掘立柱建物跡、調査区南側に古墳時代の総柱建物の19・21号掘立柱建物跡を2棟検出している。この2棟については次年度に報告予定である。

#### 1号掘立柱建物跡（図版7、第16図）

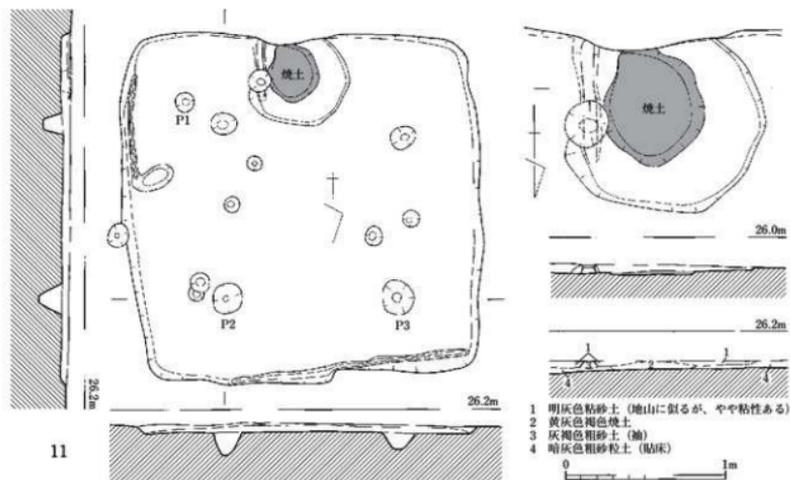
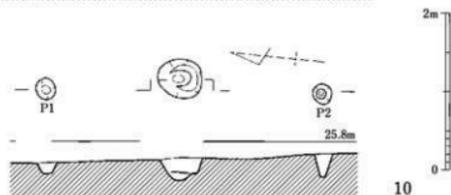
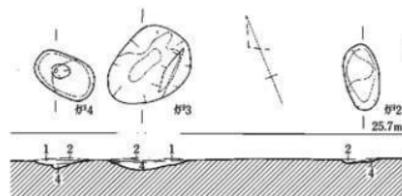
調査区中央寄りに単独で検出した2×3間の側柱建物で、2mほど南東に2号土坑がある。北西-南東を向き、床面積は約24.5㎡である。梁行3.7m、柱間1.75～1.9mで桁行6.8m、柱間1.8～2.5mで中央の柱間が広くなる。柱穴はどれも径約0.25mの円・楕円形を呈し、深さ約0.15mであるが、梁行中央の柱穴は互いに径約0.2～0.5mで浅く小型である。四隅の柱穴を基準にして建築したためであろう。柱痕はどれも約5cmで図示はしていない。出土遺物はなく、埋土は青灰褐色粘質土である。

#### 2号掘立柱建物跡（図版7・13、第16図）

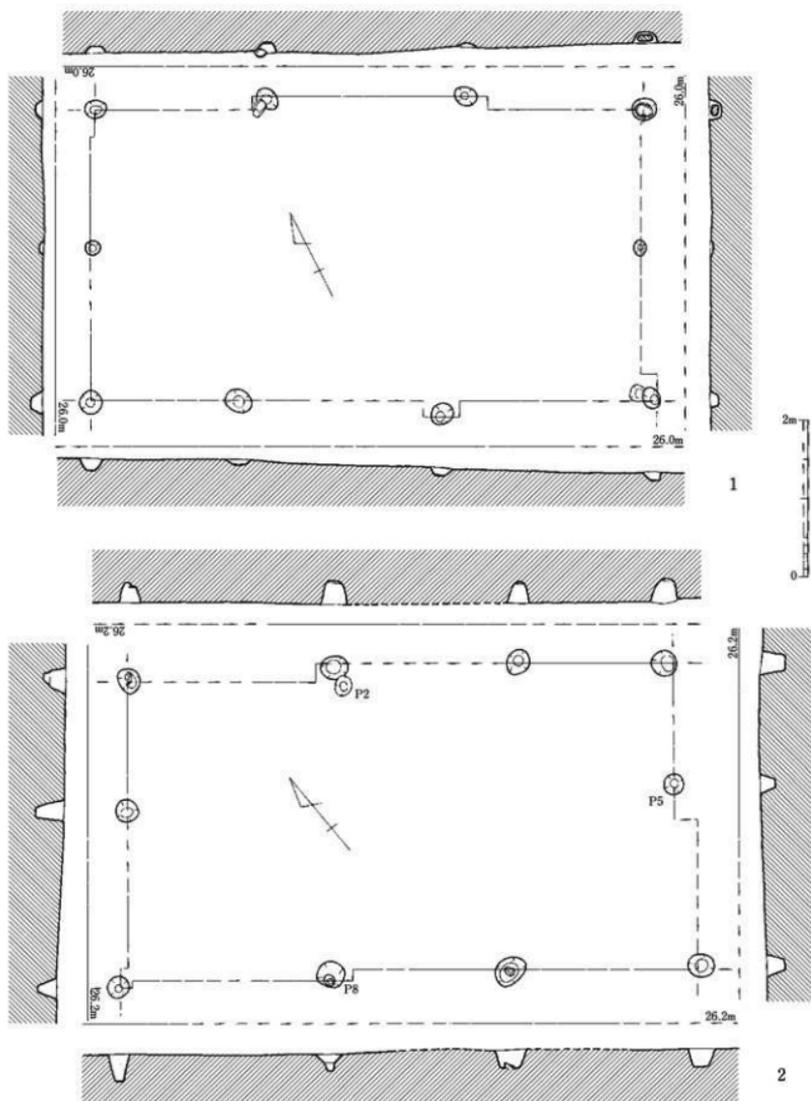
調査区内中央で検出した10号溝状遺構を切る2×3間の側柱建物で、北西-南東方向を向く。



付設が1~6



第15図 9号堅穴住居跡付設炉、10・11号堅穴住居跡実測図 (1/60、1/30)



第16图 1·2号掘立柱建物跡実測图(1/60)

床面積は約26㎡で、梁行3.8～3.9m、柱間1.5～2.3mで東側に傾く。桁行は6.7～7.2m、柱間1.8～2.5mで互いに西側が広がる。柱穴は径約0.3m、深さは約0.3mの円形・不整形円形が占め、柱痕はどれも約5cmで図示はしていない。埋土はどれも青灰褐色粘質土である。遺物はP2・5・8から出土している。

#### 出土土器 (図版26、第25図)

1はP5出土の土師器皿である。外面底部は回転糸切り、板状圧痕が残る。口径15.0cm、器高3.5cm。2は土師器小皿で口径8.1cm、器高1.0cmを測る。3・4はP8出土である。3は瓦器椀で高台径6.2cm。4は瓦質鍋の口縁部片でやや反り上がる。外面は煤が付着する。5は陶磁器であるが、畳付の形状と時期的なことから褐釉壺であろう。復元底部径は7.2cmで、焼成は硬質で、地は明灰色であるが降灰で灰黄色となる。P2出土である。

#### 3号掘立柱建物跡 (図版7、第17図)

調査区西側で単独で検出した小型の2×3間の側柱建物で、13号溝状遺構を切る。これも北西-南東方向を向き、床面積は約18.7㎡、梁行約3.5mで柱間約1.8mを測り、桁行約5.4m、柱間1.6～1.9mである。柱穴は円・楕円形で、大きいもので径約0.25m、深さ約0.2mである。13号溝の検出時に一段下げたため、南西側の中央は柱穴が小さくなってしまっている。柱痕はこれも約5cm程度で図示はしていない。なお、北側コーナーは礫原が広がり、柱穴を検出できなかった。埋土は青灰褐色粘質土で、出土遺物はない。

#### 4号掘立柱建物跡 (図版8、第17図)

調査区東側で検出した2×3間の側柱建物で、23号溝状遺構を切る。床面積は約25.5㎡、北東-南西方向を向く。梁行約4.0m、柱間約2.0mを測り、桁行約6.3～6.4m、柱間2.0mで均整がとれている。柱穴は円・不整形円形で、径約0.3m、深さ約0.45mである。同じく柱痕は約5cmで図示はしていない。埋土は青灰褐色粘質土で、P4・7から遺物が出土している。

#### 出土土器 (第25図)

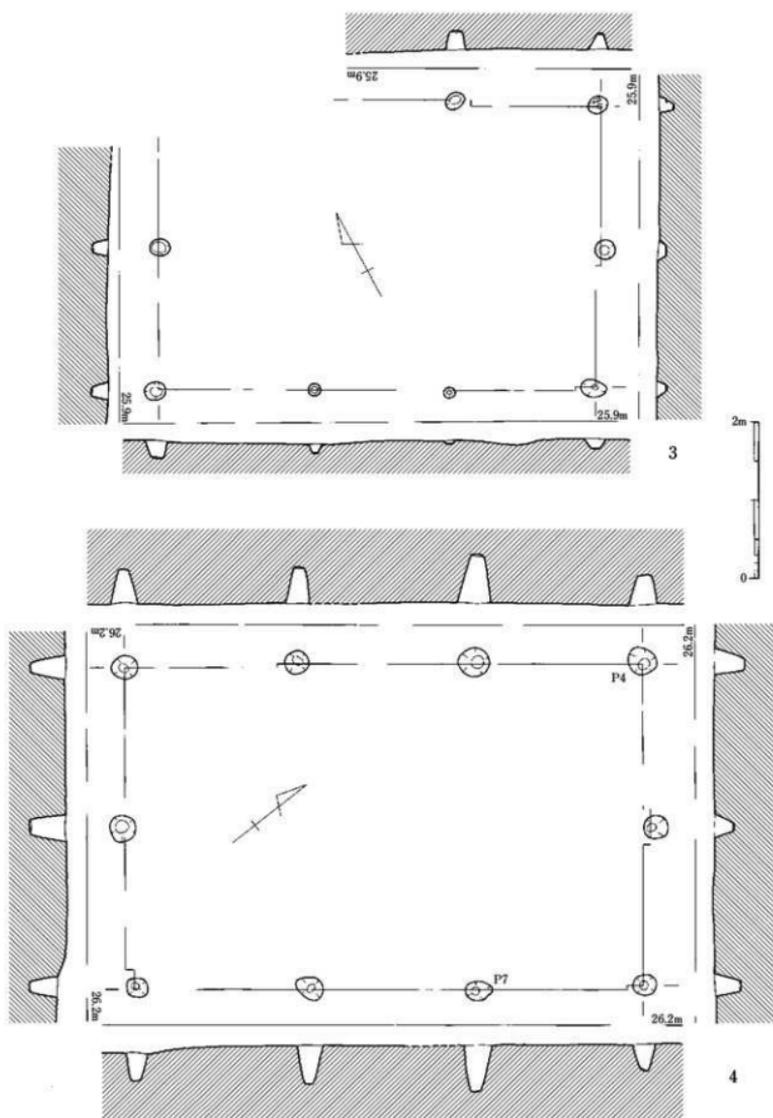
6はP4からの出土で、瓦器椀である。外面には指腹痕が良く残る。高台径6.4cm。7はP7出土の白磁椀である。内面底部の見込みの軸を環状に粗く掻き取っている。口縁部はややシャープに伸びる。復元口径16.2cm、器高6.9cmを測る。

#### 5号掘立柱建物跡 (図版8・13、第18図)

2号掘立柱建物跡の東側に近接して検出した2×3間の側柱建物で、18号溝状遺構を切る。床面積は約27.8㎡、北東-南西方向を向く。梁行約3.6m、柱間約1.8～1.9mを測り、桁行約7.3m、柱間2.2～2.5mと桁行が梁行の2倍近く長い。北東側は礫原であったが、柱穴はしっかりしていた。柱穴は円・不整形円形で、大きいもので径約0.3m、深さ約0.25mである。柱痕は約5cmで図示はしていない。埋土は青灰褐色粘質土で、遺物はP1・7で出土している。

#### 出土土器 (第25図)

8はP7出土の土師器皿である。9・10はP1出土で、9はやや高台が高めの瓦器椀である。高台径6.4cm。10は白磁椀で玉縁はやや肉厚である。復元口径15.0cmを測る。



第17图 3·4号矗立柱建物跡实测图 (1/60)

#### 6号掘立柱建物跡（図版8、第18図）

調査区東側で検出した小型の2×3間の側柱建物で、7号掘立柱建物跡に隣接する。北西-南東方向を向く。床面積は19.7㎡で、梁行約3.7～3.8m、柱間約1.5～2.2mと幅があり、中央の柱穴は北寄りである。桁行は約4.9～5.1m、柱間1.4～1.8mで、中央が広い構造である。柱穴は円・楕円形で、大きいもので径約0.2m、深いもので約0.3mであるが、南東側は遺構面を削りすぎているため浅くなる。柱痕は約5cm以下で図示はしていない。埋土は青灰褐色粘質土で、遺物はP1から出土したが、図化できなかつた。

#### 7号掘立柱建物跡（図版9、第19図）

調査区東側で検出した2×3間の側柱建物で、6・8号掘立柱建物跡に隣接する。北西-南東方向を向く。床面積は約23㎡で、梁行約3.6～4.0m、柱間約1.9mであるが北側の柱間だけ2.2mと広がっている。桁行は約6.25～6.7m、柱間2.1mで、北側コーナーが広がるため斜行する。柱穴は円・楕円形で、大きいもので径約0.25～0.3m、深いもので約0.25mであるが、南東側は遺構面を削りすぎているため浅くなる。柱痕は約5cm以下で図示はしていない。埋土は青灰褐色粘質土で、P7・8より出土遺物がある。

#### 出土土器（第25図）

11は土師器皿片で色調は明肌色である。12は瓦器椀で、内面はやや粗いミガキ、外面はミガキを施す。高台径6.8cm。13はP8出土で、やや肉厚な瓦器椀である。高台径5.0cmを測る。14は玉緑の白磁椀で軸は薄い。11・12・14はP7出土である。

#### 8号掘立柱建物跡（図版9、第19図）

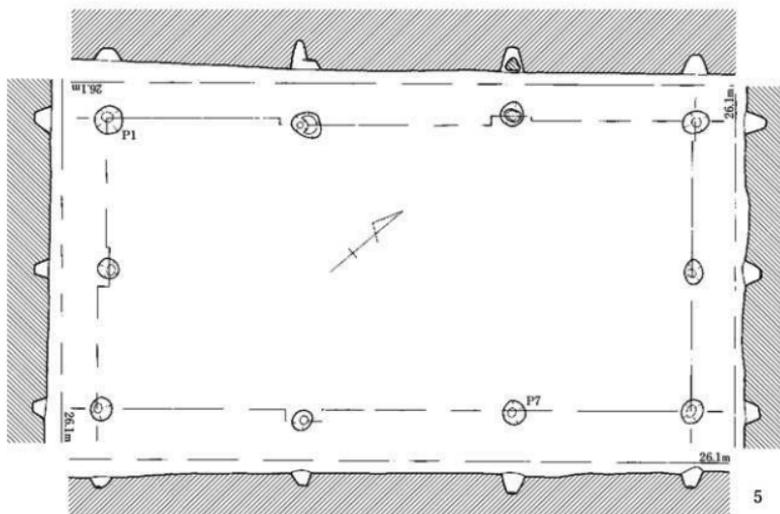
調査区東側で検出した2×3間の側柱建物で、7号掘立柱建物跡に隣接して、同じ北西-南東方向を向く。東側が調査区外に延びるが、復元すると床面積はおよそ27.7㎡程度か。梁行約4.2m、柱間約2.0～2.1mで、桁行は約6.5m、柱間1.9～2.6mで、中央が広がる。柱穴は円・楕円形で、大きいもので径約0.25m、深いもので約0.15mであるが、同じく調査区南東側は遺構面を削りすぎているため全体的に浅くなる。柱痕は約5cm以下で図示はしていない。埋土は青灰褐色粘質土で、P1～3より出土遺物があるが図化に堪えない。

#### 9号掘立柱建物跡（図版9、第20図）

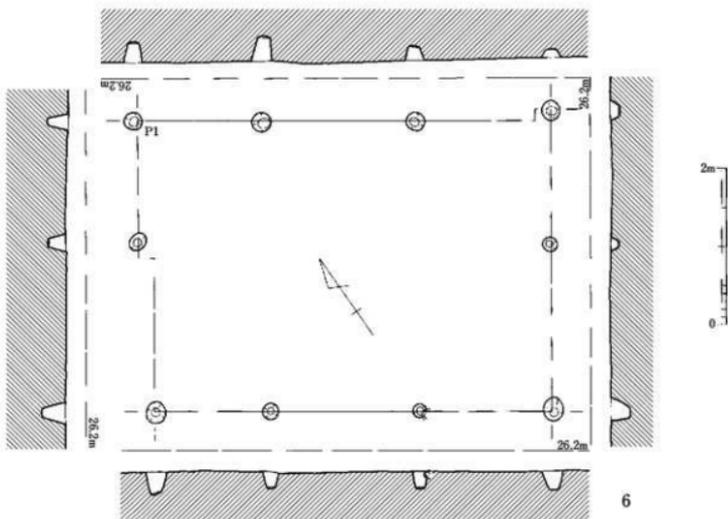
2号掘立柱建物跡の5m北側で検出し、10号溝状遺構を切る。北西-南東方向を向く。規模は北西梁と、桁行に相当すると考えられる同時期の柱穴を2つ検出したのみで、掘立柱建物としては不安がある。梁行3.8m、柱間2.0mで桁行の柱間は2.2m程度である。柱穴は径約0.2m、深さは約0.3mの円形で、柱痕はどれも約5cmで図示はしていない。埋土はどれも青灰褐色粘質土である。なお、隣接する10号掘立柱建物跡の付随施設の可能性がある。遺物は出土していない。

#### 10号掘立柱建物跡（図版10、第20図）

9号掘立柱建物跡に隣接する2×3間の側柱建物で、北西-南東方向を向く。床面積は約23㎡、梁行約3.5～3.7m、柱間約1.7～1.8m、桁行は約6.2m、柱間約2.0mで、北桁行は中



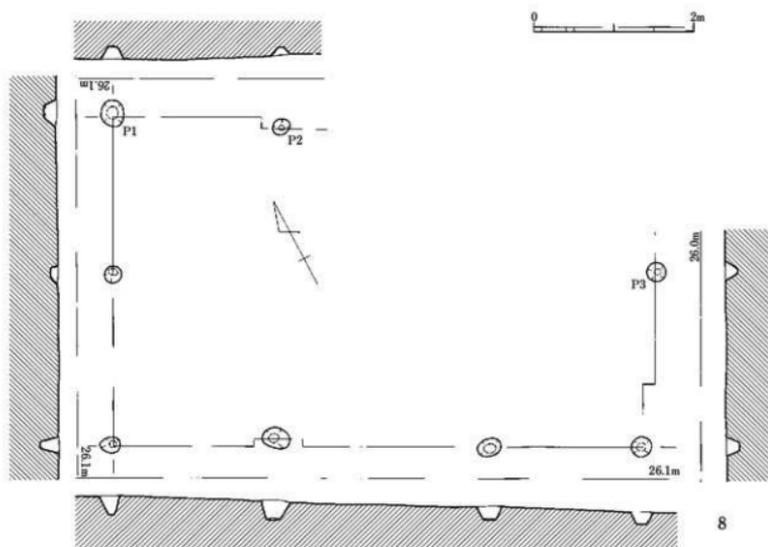
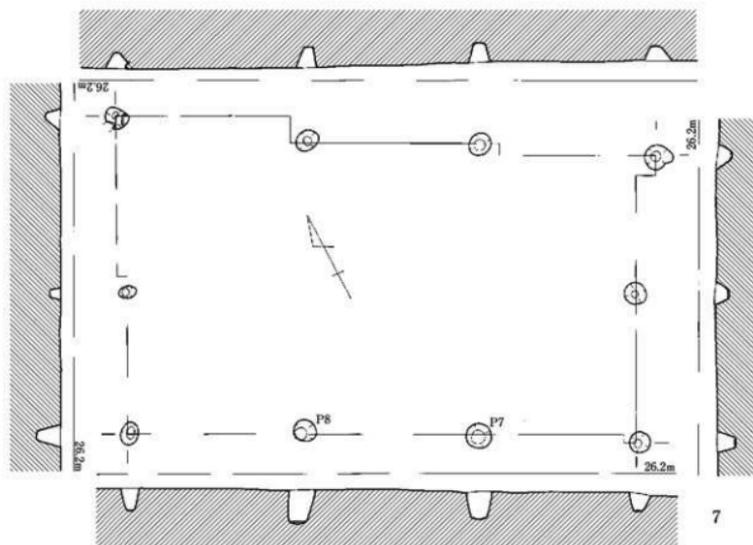
5



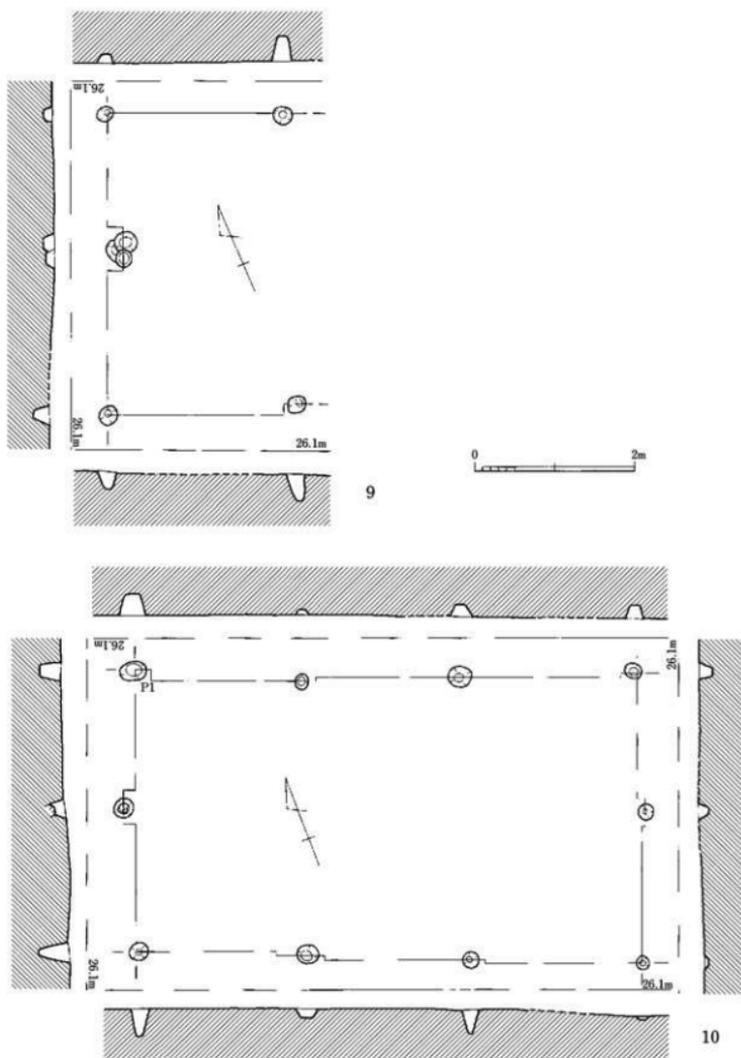
6

第18図 5・6号掘立柱建物跡実測図(1/60)

央へ斜行する。柱穴は円・楕円形で、大きいもので径約0.25m、深いもので約0.35mである。南東コーナーの柱穴だけが非常に浅い。柱痕は約5cm未満で図示はしていない。埋土はどれも青灰褐色粘質土で、P1より出土遺物があるが図化に基えない。



第19图 7·8号掘立柱建物跡实测图(1/60)



第20图 9·10号掘立柱建物跡实测图(1/60)

#### 11号掘立柱建物跡 (図版10、第21図)

12号掘立柱建物跡と重複するもので、先後関係は不明である。北西-南東方向を向く。規模は2×3間で、床面積は30.7㎡、梁行約4.1m、柱間約2.0mで西梁はやや広がる。桁行は約7.4m、柱間約2.4~2.5mを測る。この11号掘立柱建物跡、次の12・13号掘立柱建物跡は、調査区北西側の弥生時代後期・末の遺物包含層の上面で検出した。そのため柱穴の残りがよい。

柱穴は径約0.2~0.25m、深さは約0.45mの円形が占め、柱痕はどれも約5cmで図示はしていない。埋土はどれも青灰褐色粘質土である。P1から出土遺物があるが、図化に基えない。

#### 12号掘立柱建物跡 (図版10、第21図)

11号掘立柱建物跡と重複する2×3間の側柱建物で、西面に目隠し扉を付設している。11号掘立柱建物跡との先後関係は不明である。北西-南東方向を向き、床面積は22.3㎡で、梁行約3.4m、柱間約1.7m、桁行は約6.2m、柱間約2.1~2.3mを測る。

柱穴は径約0.2m、深さは約0.45mの円形が占め、柱痕はどれも約5cmで図示はしていない。埋土はどれも青灰褐色粘質土である。P1より図化に基えない土師小皿片が出土した。

#### 13号掘立柱建物跡 (図版11、第22図)

2×2間の側柱建物で南側に2間分の目隠し扉を付設している。11・12号掘立柱建物跡の北西側に位置し、軸をあわせて検出している。北東-南西方向を向き、床面積は約17㎡と小さい。梁行約3.5m、柱間約1.6~1.8mを測り、桁行約4.8~4.9m、柱間2.4mを測る。柱穴は円・不整円形で、大きいもので径約0.2m、深さ約0.45mである。同じく柱痕は約5cm以下で図示はしていない。埋土は青灰褐色粘質土で、遺物はP1から出土している。

#### 出土土器 (第25図)

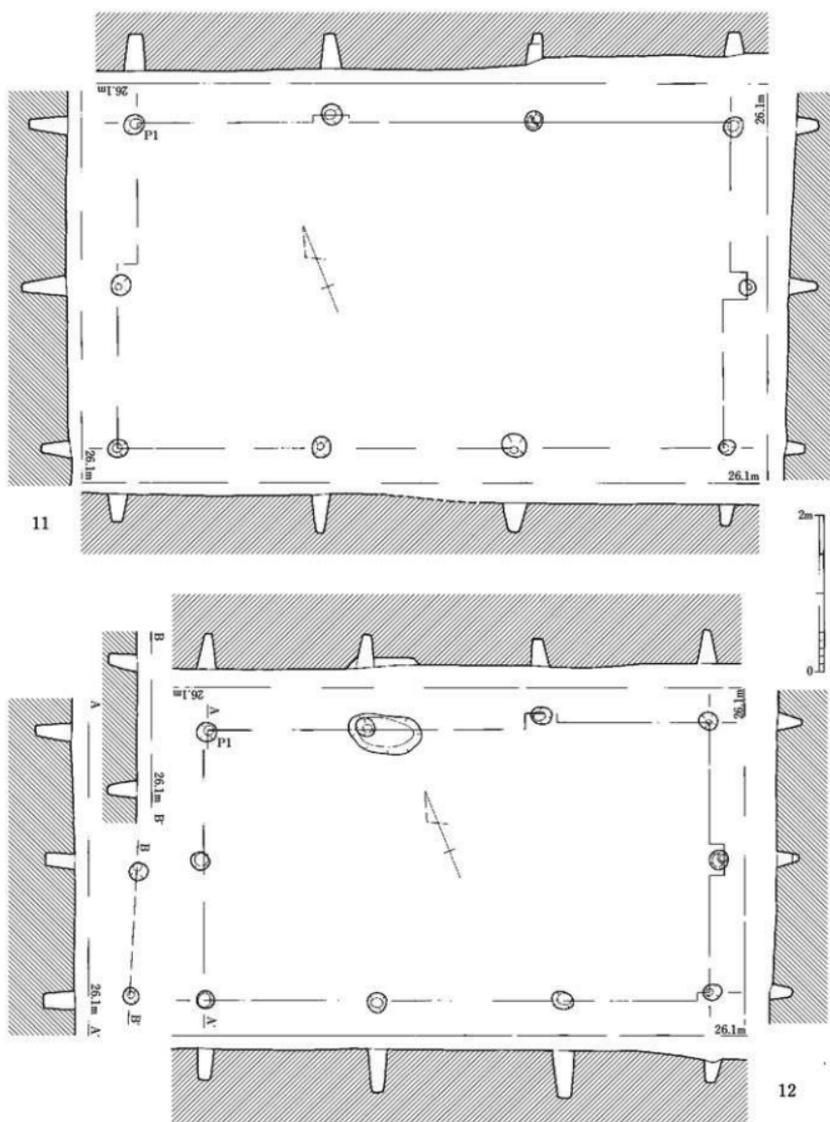
15は高台が低い瓦器碗。やや肉厚な作りで、高台径は6.6cmを測る。

#### 14号掘立柱建物跡 (図版11、第22図)

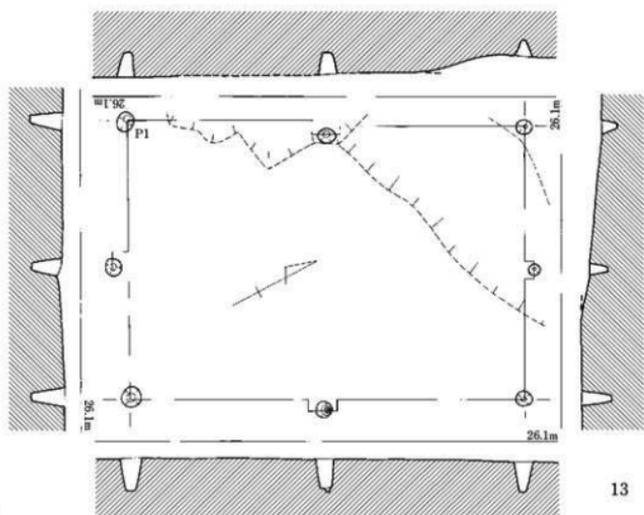
4・11号掘立柱建物跡間の礫原で検出した2×3間の側柱建物である。北西-南東方向を向き、床面積は約31㎡、梁行約3.9~4.3m、柱間約1.9~2.1mで北西梁は広い。桁行は約7.6m、柱間約2.4~2.6mを測る。柱穴は礫原のため不整円形が占め、径約0.2~0.25m、深さは約0.2mを測る。柱痕はどれも約5cmで図示はしていない。埋土は青灰褐色粘質土である。柱穴からの出土遺物は無い。

#### 15号掘立柱建物跡 (図版12、第23図)

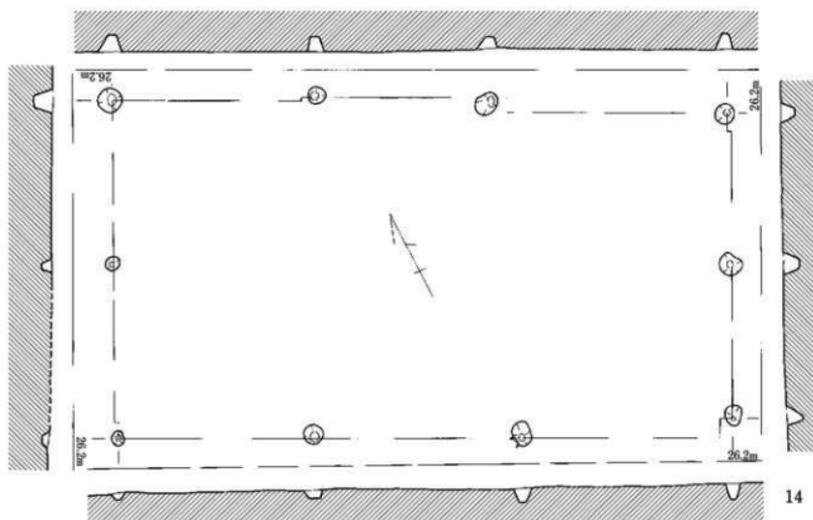
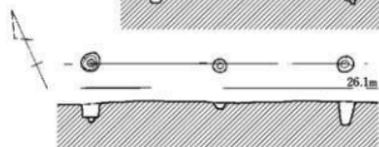
1号竪穴住居跡の南側で検出した2×3間の側柱建物である。北西-南東方向を向き、梁行約2.7m、柱間約1.3mで、互いの中央柱穴は0.4mほど内側に設置され、北西梁は斜行する。桁行は約4.5~4.7m、柱間約1.3~1.8mを測る。柱穴は径約0.25mの円形・不整円形で、礫原に近い南西桁は深さ約0.1~0.2mで礫原が底面になるため浅くなる。梁行の中央柱穴は径約0.35~0.4m、深さ約0.1~0.15mで不正楕円形を呈す。埋土は暗茶灰色粘質土で、遺物はP1~3で出土しているが図化に基えない。



第21图 11·12号掘立柱建物跡实测图 (1/60)

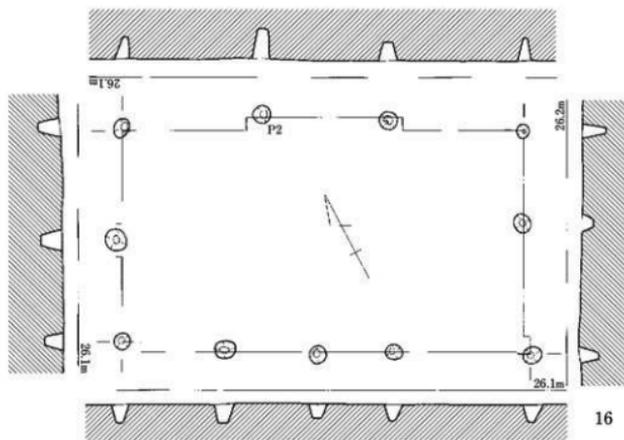
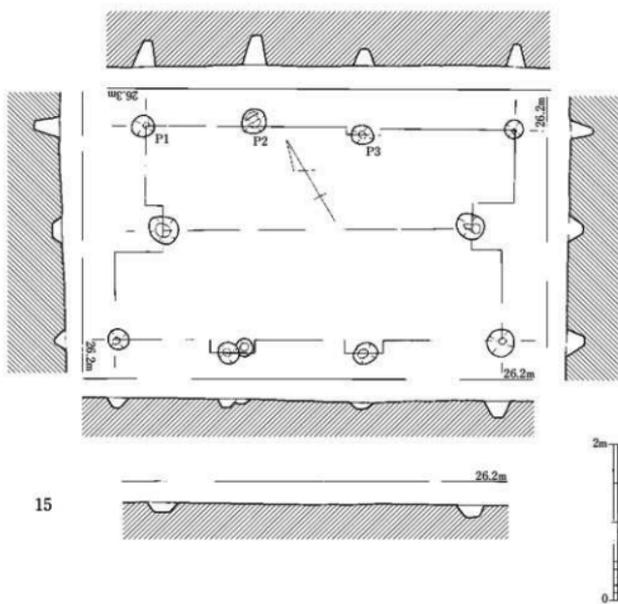


13



14

第22图 13·14号掘立柱建物跡实测图 (1/60)



第23图 15·16号掘立柱建物跡实测图(1/60)

#### 16号掘立柱建物跡（図版12、第23図）

調査区南側の17・18号掘立柱建物跡から西に一棟分れて単独で検出した小型の側柱建物で、13号溝状遺構を切る。北西-南東方向を向く。規模は基本2×3間構造であるが、南西梁は4間分の柱穴を検出している。床面積は約14㎡で、梁行約2.7～2.8m、北西の柱間約1.5～1.7m、南西の柱間約0.9～1.7m、桁行約5m前後、柱間1.3～1.4mを測る。コーナーの柱穴以外は1間にバラつきが大きい。柱穴は円・楕円形で、径約0.2～0.25m、深さ約0.25～0.3mである。柱痕はこれも約5cm以下で図示はしていない。埋土は青灰褐色粘質土で、遺物はP2から出土している。

#### 出土土器（第25図）

16は土師器小皿で薄手の作りである。復元口径8.6cm、器高1.2cmを測る。

#### 17号掘立柱建物跡（図版12、第24図）

18・20号掘立柱建物跡と近接して検出した2×3間の側柱建物で、北西-南東方向を向く。床面積は約19㎡で梁行約3.2m前後、柱間約1.6mで北西梁はやや斜行する。桁行は約5.6～5.8m、柱間1.8～2.0mと割と均整がとれている。柱穴は円・楕円形で、大きいもので径約0.2～0.3m、深いもので約0.25mであるが、北西梁の中央柱穴は非常に小型で浅く、径0.15m、深さ約0.05mである。柱痕は約5cm以下で図示はしていない。埋土は青灰褐色粘質土で、P1より出土遺物があるが、図化に堪えない。

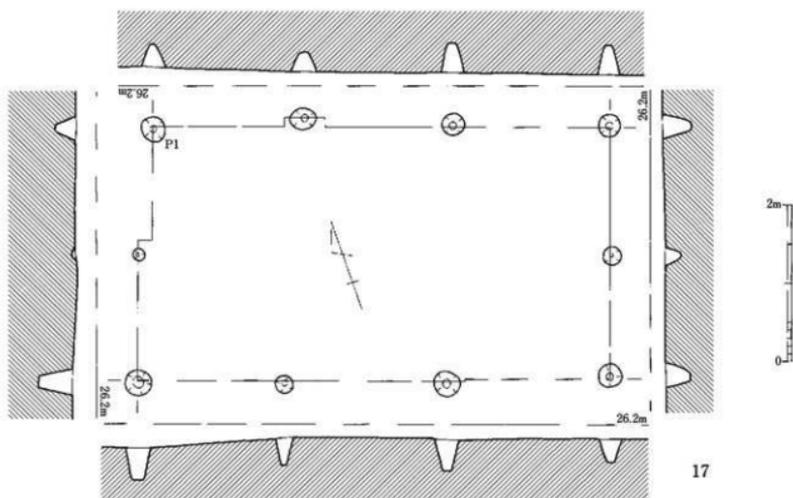
#### 18号掘立柱建物跡（図版13、第24図）

17号掘立柱建物跡の北側に近接して検出した2×3間の側柱建物で、北桁行と西梁行には「L」字に目隠し塀を付設する。北西-南東方向を向き、本体の規模は床面積約23㎡、梁行約3.8m、柱間約1.9～2.1m、桁行は約6.2m、柱間1.9mを測る。目隠し塀は西面で1間1.2～1.7m、長さ約4.2mの3間分を検出、北面では1間1.5～2.2m、長さ6.8mの4間分を検出している。柱穴は、本体柱穴を軸に交互に配置している。本体・目隠し塀の柱穴は円・楕円形が主で、径約0.2～0.25m、深いもので約0.3m、柱痕の径約5cm以下であった。埋土は青灰褐色粘質土で、P1～6より出土遺物があるが、図化に堪えない。

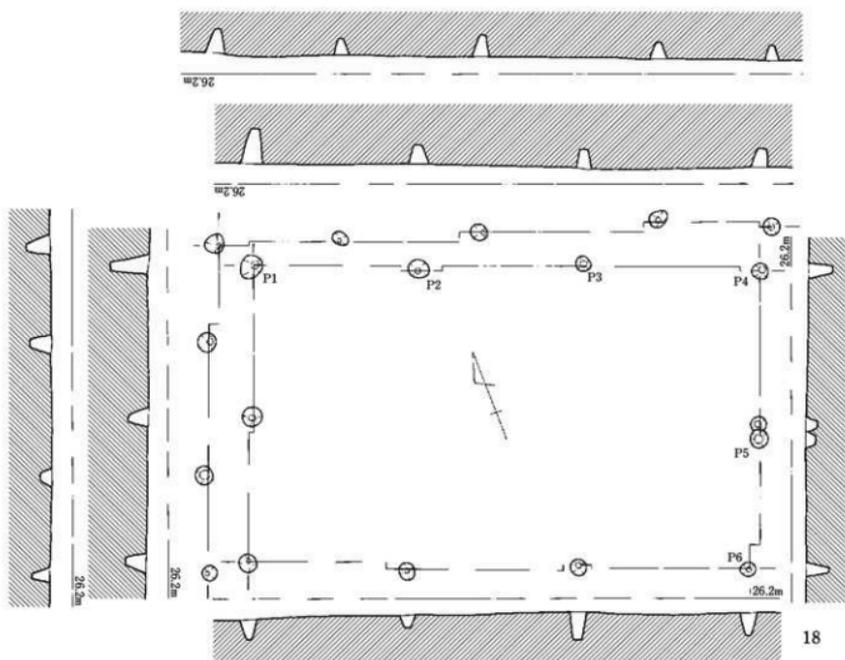
#### 20号掘立柱建物跡（図版13、第26図）

17・18号掘立柱建物跡の東側に近接して検出した2×3間の側柱建物で、面をあわせて建つ。床面積は約21㎡で梁行約3.7～3.8m、不等間隔で1.5又は2.2mである。南西梁は中央の柱穴は検出されなかった。桁行は約5.6m、柱間1.8～2.0mである。南東桁行の中央の柱穴は別時期である。柱穴は円・楕円形で、大きいもので径約0.2m、深さ約0.1～0.3mとバラつきがある。埋土は青灰褐色粘質土で、P1より出土遺物があるが図化に堪えない。

なお、建物内の北東側に三角形に配置する3つの柱穴を検出しているが、この建物と因果関係ははっきりしないがここで報告する。柱穴は径約0.2mの円形で、深さ約0.2～0.3mで、埋土は青灰褐色粘質土である。

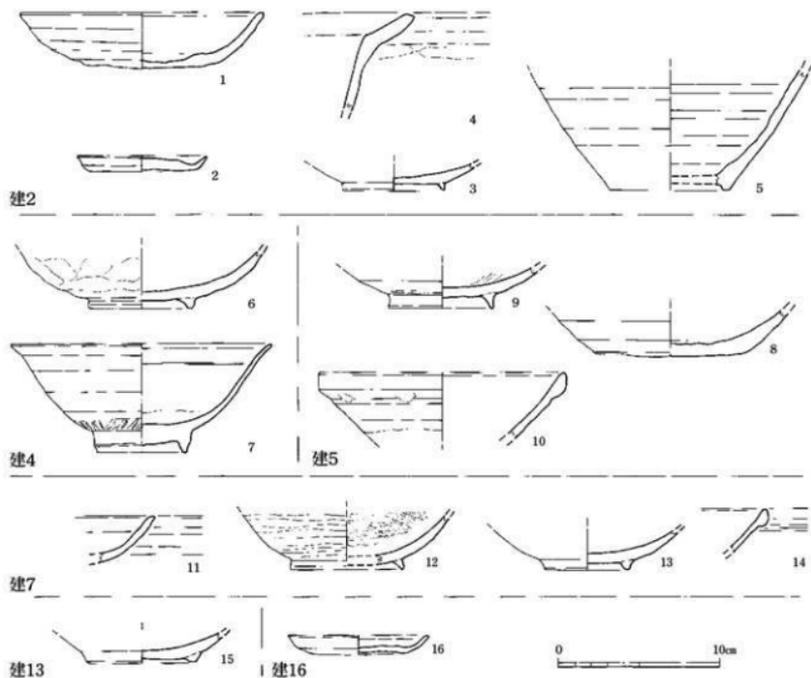


17

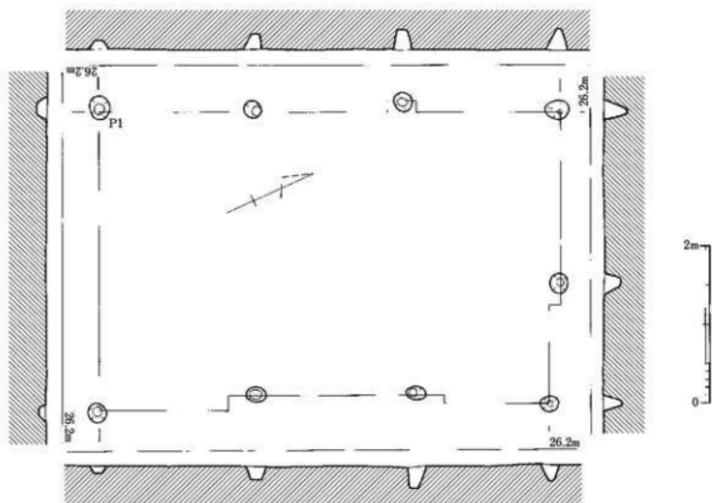


18

第24图 17·18号掘立柱建物跡实测图 (1/60)



第25图 各掘立柱建物跡出土土器実測図(1/3)



第26图 20号掘立柱建物跡实测图(1/60)

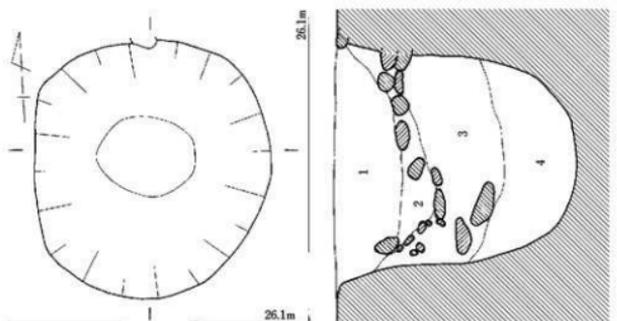
## 4 土坑

### 1号土坑(図版14、第27図)

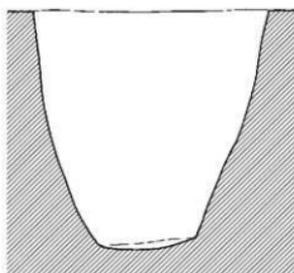
調査区のはほぼ中央に位置し、9号溝状遺構を切る。平面プランは1.6×1.5mのはほぼ円形を呈する。断面形は砲弾状で深さは約1.5m掘り込まれ、礫層に達している。湧水は無かったが、恐らくは素掘りの井戸であろう。堆積状況は1・2層では灰褐色粘質土、その下層に人頭大の礫が暗灰色粘土と混ざり、特に4層では人頭大の礫が占め、灰色砂土がその間に混ざる。土器は土層1~4で多く出土し、須恵質の広口長頸壺や甕、白磁片や瓦器、土師器などがある。同一個体と考えられる土器が2~4層間にまんべんなく入り込み、3・4層では円礫に張り付くように出土している。特に礫が多く占める2~4層ではレンズ状に堆積するが、自然堆積と考えるには礫が詰まりすぎ、破損土器の廃棄と共に埋めたと考えるのが妥当であろう。時期は平安時代後期(12世紀前半~中頃)に所属する。

### 出土土器(図版26・27、第28・29図)

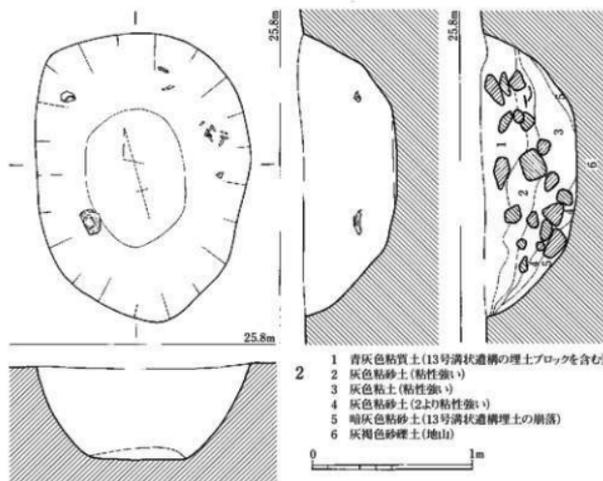
1は端部に丸みをもつ土師器小皿で、復元口径8.3cm、器高1.3cmを測る。2も土師器小皿で復元口径8.6cm、器高1.3cm。3は胴部からやや立ち上がる口縁の土師器小皿で、底部は焼成後に穿孔する。復元口径9.6cm、器高1.9cmを測る。4は土師器皿片で、3と同様に焼成後に穿孔する。5は土師器碗片で口縁端部を外方へ屈折する。復元口径7.8cm、色調は茶肌色である。6は須恵質鉢の口縁部片で、口縁端部は跳ね上げる。7は底から口縁の一部まで復元できる須恵質片口鉢である。焼成は良く、底部は回転糸切りの痕跡が明瞭に残る。器高11.5cm、復元口径27.6cmを測る。8は瓦器碗で、底面に内面より穿孔する。方形の高台径は5.5cmを測る。9はやや肉厚な瓦器碗である。内外面ともにヘラミガキを施すが、外面は密に施す。シャープな高台内側の底面には線刻をする。復元口径16.4cm、器高6.4cmを測る。10も肉厚な瓦器碗で、内外面ともに横方向のヘラミガキを施す。復元口径15.3cm、器高5.1cmを測る。11は口縁から胴部上半まで残存する土師質鍋で、復元口径44.5cmを測る。内外面はナデで成形され、色調は淡赤褐色である。12は1号土坑近くのP9から出土した破片と接合した土師質鍋で、胴部下半まで復元できる。内外面ともにナデ調整し、外面に煤が付着している。復元口径43.8cmを測る。13はやや小ぶりの土師質羽釜である。口縁端部には傾斜がもたれ、内外面ともにナデ調整する。胴部下半は被熱により剥落している。口径24.9cm。14~17は玉緑の白磁碗片である。復元口径15.6、16.0、16.2、16.4cmを測る。18は嘴状に尖る口縁端部をもつ白磁碗で、復元口径15.6cm、青緑白の釉である。19は外面に櫛目文を廻らせた白磁碗で、口縁は外方へ短く伸びる。釉は乳白色で口径16.0cm、器高7.3cmを測る。20は白磁碗片で、復元口径は13.8cmと小さく、浅い。内面には櫛目文が見受けられる。21は白磁皿の底部片で、底径3.6cmを測る。22は須恵質の広口長頸壺で、全体の7割程度残存する。土坑内ではバラバラになった状態で出土している。口縁端部はつまみ上げ、肩から胴に屈折する位置に一条の突帯を廻らす。内外面は緩い回転横ナデの後に、さらにナデを施す。底部は平底で回転糸切りである。復元口径19.7cm、器高30.6cm、底径10.4cmで、近隣の築上町(旧築城町)丸山経塚から法量も良く似た外容器が知られる。23は須恵質の小型甕で、2号掘立柱建物跡のP1から出土した破片と接合している。内外面ともに暗青灰色で、復元最大胴径22.8cmを測る。24は須恵質の中型甕で、



- 1 灰褐色粘質土 (準大の礫・炭粉を含む)
- 2 灰褐色粘質土 (1と同じだが、鉄分を含む)
- 3 暗灰色粘土+人頭大の礫 (土器片が礫間に絡む)
- 4 灰色砂土+人頭大の礫 (礫間に砂土が入る)



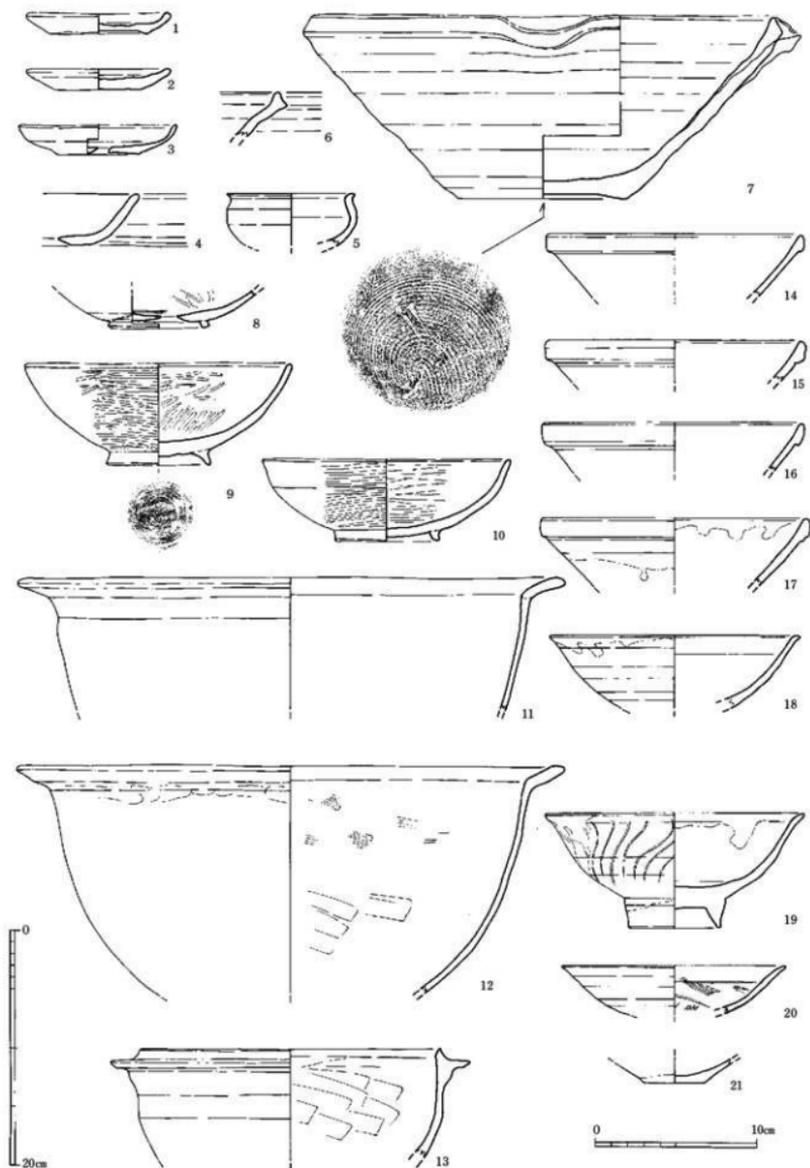
1



- 1 青灰色粘質土 (13号溝状遺構の埋土ブロックを含む)
- 2 灰色粘砂土 (粘性強い)
- 3 灰色粘土 (粘性強い)
- 4 灰色粘砂土 (2より粘性強い)
- 5 暗灰色粘砂土 (13号溝状遺構埋土の崩落)
- 6 灰褐色砂礫土 (地山)

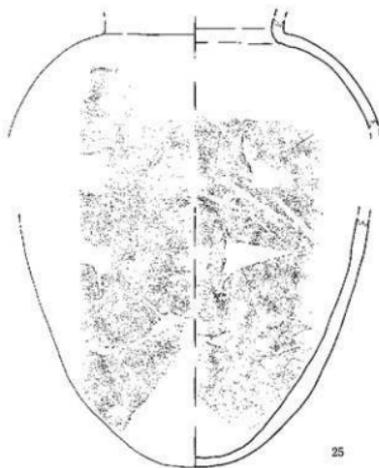
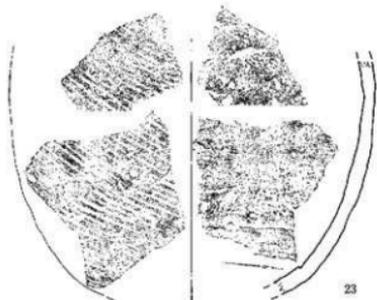
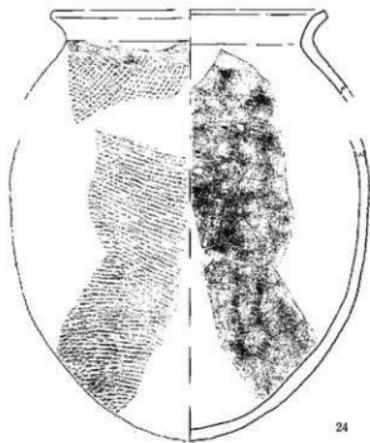
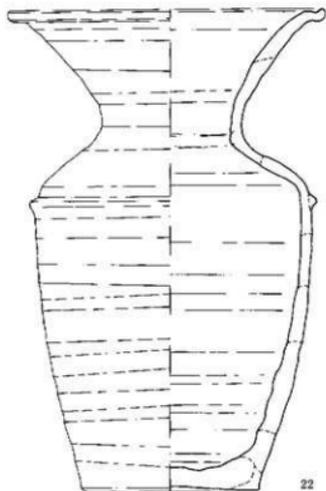
0 1m

第27図 1・2号土坑実測図 (1/30)



第28図 1号土坑出土土器実測図1 (1/3、11~13のみ1/4)

肩と胴部は接合しない。口縁は胴部に比べ、短く広く開いて、復元口径は22.5cm、底部は丸底である。外面は彫りが深い明瞭な平行タタキ目で、内面は接合痕をナデ消している。25は頸部から胴、底部までの接合しない須恵質の中型甕で、口縁部は残存しない。形状は肩が張り、底部へ向かい窄まる。頸部径15.2cmを測る。



第29図 1号土坑出土土器実測図2 (22・23は1/3、24・25は1/4)

## 2号土坑（図版14、第27図）

1号掘立柱建物跡の南東で検出した1.8×1.3mの楕円形プランで、13号溝状遺構を切る。断面は底部に向かってゆるい半弧状を描く。深さは約0.6mである。埋土は灰色粘砂土に拳大から人頭大の円礫が混ざる。遺構中の東側で底面より約0.2m浮いた状態で土鏝がまともに出土している。時期は平安時代後期（12世紀前半～中頃）に所属する。

## 出土土器（図版27、第31図）

1は土師器皿で底部から口縁にかけてやや内彎する。口径15.2cm、器高3.7cmを測る。2は焼成が甘い瓦器碗で、底部から口縁にかけて内彎し、口縁端部は短く外反する。高台は潰れた方形を呈す。復元口径15.8cm、器高6.0cm、明肌色である。3は瓦器碗片で、口縁に向かって直線的に伸びる。4は瓦器碗の底部片で高台径7.6cmを測る。

## 3号土坑（図版14、第30図）

4号掘立柱建物跡の南で検出した約0.9×0.6mの楕円形プランで、埋土は青灰色粘質土の単層である。深さは約0.15mである。遺物は出土していないが、埋土から平安時代後期（12世紀前半～中頃）に所属すると思われる。

## 4号土坑（図版15、第30図）

14・19号溝に挟まれ、5号掘立柱建物跡の南東で検出したやや楕円形のプランの土坑である。長軸1m、短軸0.8mを測る。これも砲弾状を呈し、深さ約1.2mで円礫が露出する。なお、炭が多量に入り込む3～5層からは炭化米を検出している。時期は平安時代後期（12世紀前半～中頃）に所属する。

## 出土土器（図版27、第31図）

5は底部径が小さい土師器小皿で、口縁部にかけてやや内彎するように立ち上がる。復元口径8.6cm、器高1.6cmを測る。6～9は瓦器碗片である。6はやや肉厚で、胴部中程で僅かに屈折する。内面は僅かに横方向のヘラミガキが残る。復元口径16.1cm、器高6.2cm。7も肉厚で、高台の部分剥がれる。胴部下位は回転ヘラケズリを施す。口径16.0cm。8は口縁がやや厚く、出土時には内面に炭化物が付着していた。口径16.4cmを測る。9は底部片で、内面にはヘラミガキを施す。10～12は土師質鍋片である。10は口縁部下位に指腹痕が見受けられる。外面には煤が付着する。11の口縁はやや反り上がる形状である。内面は横方向の細かい刷毛目を施す。復元口径46.0cmを測る。12の口縁部はやや肉厚で、内面に板ナデ状の痕跡がある。13は玉緑の白磁碗片で濁白色の釉である。復元口径16.0cmを測る。14は白磁碗の底部片で、高台径は6.8cmを測る。

## 5号土坑（図版15、第30図）

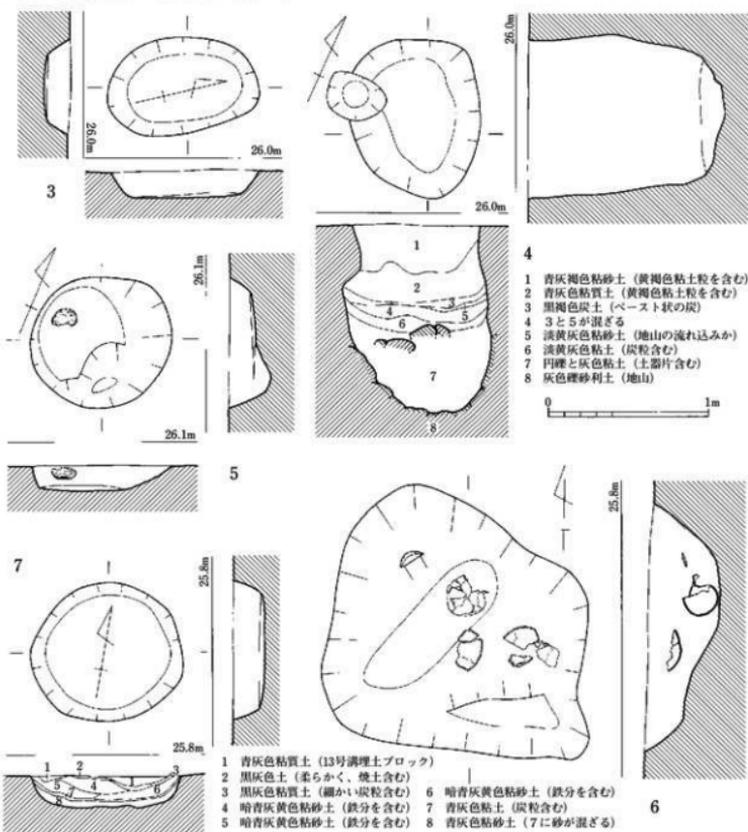
4号土坑と同様に、5号掘立柱建物跡の南東で検出した。径約0.9mの円形プランで、深さ0.15m、一段深いところで0.25mである。埋土は青灰色粘質土の単層で、床面から約0.1m浮いた状態で碗が出土している。時期は平安時代後期（12世紀前半～中頃）に所属する。

出土土器 (図版 27、第 31 図)

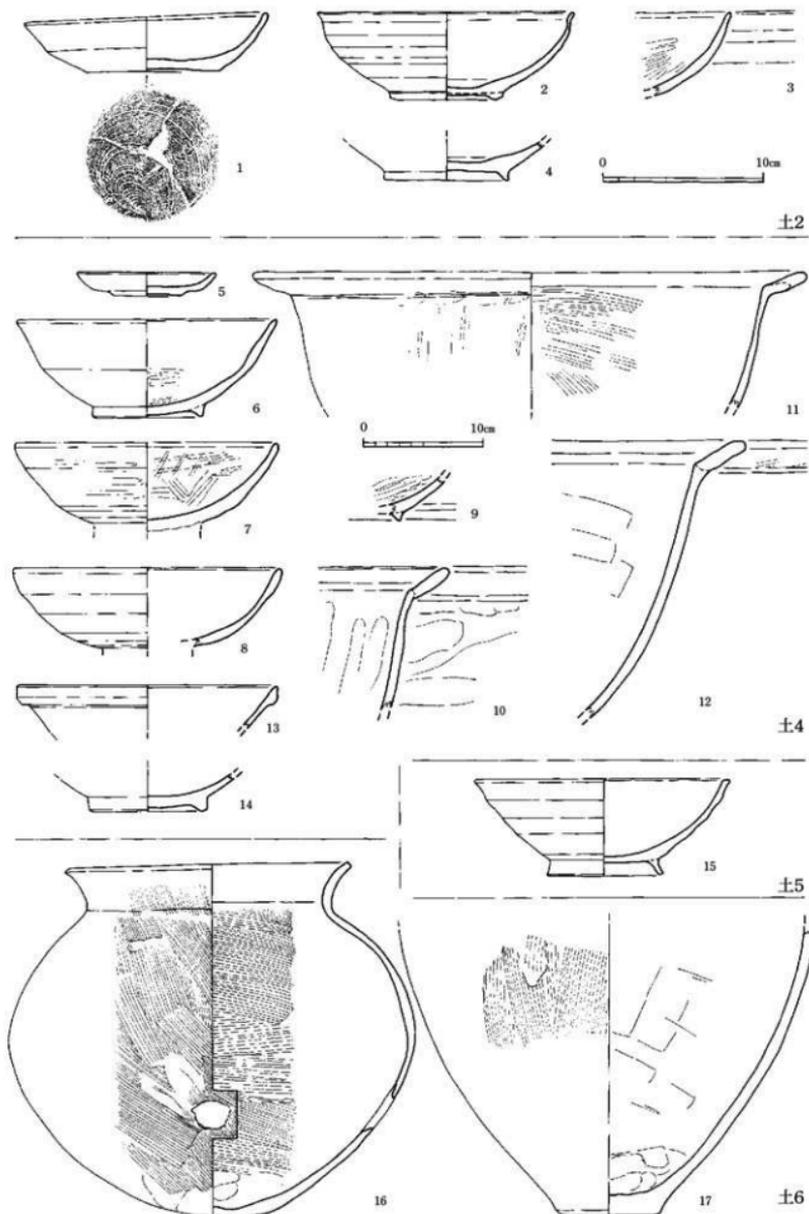
15 は土師器碗で、他の同時期の遺構出土のものよりやや古手に属するものである。高台から口縁までは僅かに内彎するとはいえ、直線的に延び、高台も約 1cm と高い。口径 15.6cm、器高 6.1cm、色調は赤肌色～茶肌色である。

6号土坑 (図版 15、第30図)

調査区南東で検出した、長軸 1.6m、短軸 1.5m の不整形プランの土坑である。深さは 0.45m 程度で、底面から倒れた状態の完形の甕が出土している。その他は流れ込みである。本来、この甕は口縁を上にしたと思われ、また甕胴部に穿孔していることも含めると祭祀土坑と考えられる。埋土は灰色粘土である。9号竪穴住居跡、1号円形周溝状遺構、1号不明遺構と同じ、弥生時代後期中～後半頃に属する。



第 30 図 3～7号土坑実測図 (1/30)



第31图 各土坑出土土器实测图1 (1/3、1/4)

#### 出土土器 (図版27、第31図)

16は土坑中央で出土した壺で、胴部は丸みを帯びる形状である。内外面に丁寧なハケ目を施し、胴部下部には径約2cmの外面からの穿孔がある。口径17.2cm、器高22.5cm、外面の胴部下部は被熱し、煤が付着している。17は浮いた状態で出土した壺の胴～底部片で、底径6.4cmを測る。内外面ともに茶肌色の色調である。

#### 7号土坑 (図版16、第30図)

1号掘立柱建物跡の南で検出し、13号溝を切り込む。径0.9m前後のはほぼ正円形プランの土坑である。深さは0.2m程度で、二層に渡る炭の堆積がある。表土剥ぎで削りすぎていて、本来はもっと深いものと思われる。図示に基える遺物は無いが、埋土の色調から平安時代後期(12世紀前半～中頃)に所属するか。

#### 8号土坑 (図版16、第32図)

7号掘立柱建物跡の北で検出した土坑で、14・19号溝を切る。約1.8mの不整形プランで、深さ0.35mの掘り鉢状を呈する。底面付近から土師器皿と土師器椀がやや浮いた状態で出土している。時期は平安時代後期(12世紀前半～中頃)に所属すると思われる。

#### 出土土器 (図版27、第33図)

1は土師器皿で、底部はやや肉厚である。口径15.7cm、器高4.1cmを測る。2は瓦器椀で、断面三角形の高台をもち、内面に横方向のヘラミガキを施す。復元口径16.0cm、器高4.9cm。3も瓦器椀であるが、口縁部と胴部が接合しない。復元高台径は6.8cmを測る。

#### 9号土坑 (図版17、第32図)

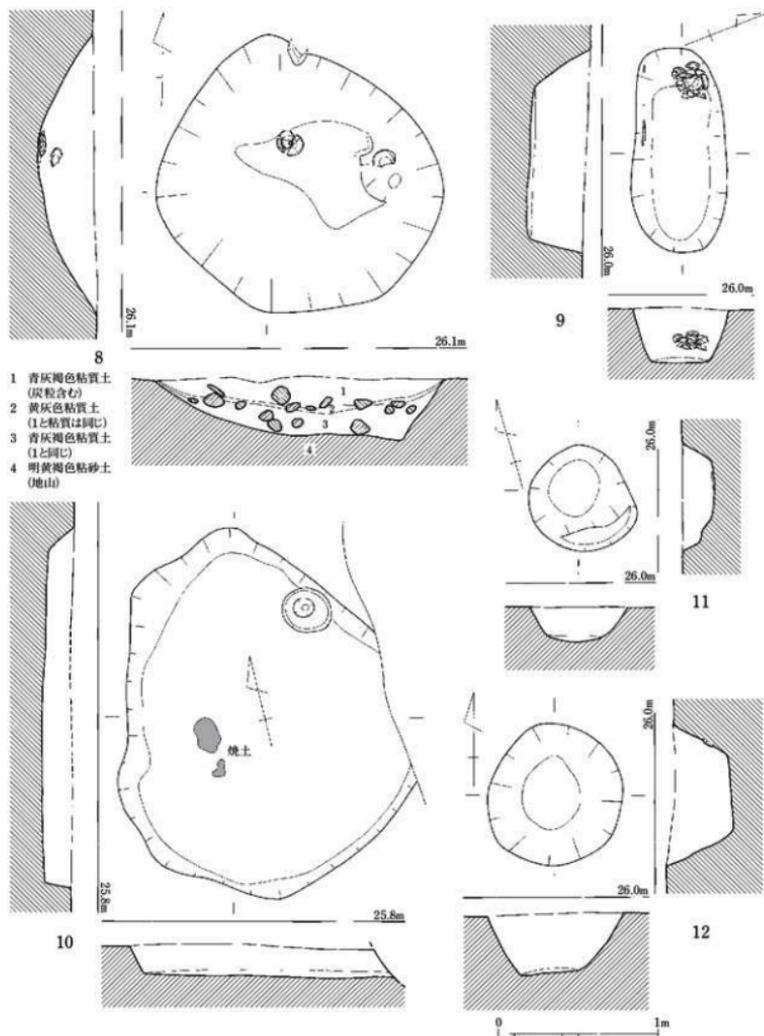
1号掘立柱建物跡から南西で検出した楕円形プランの土坑墓である。周囲が埋土の色調に似た砂質土であったため、5cm程掘りすぎた結果、遺物などが浮いてしまっている。床面は長軸1.3m、幅0.6mで、深さ0.35mで、南壁寄りに刀子、西壁に土師器皿と土師器椀が副葬され、南壁で直線的に木片を確認できたことから、木棺に埋葬されたことが判る。時期は平安時代後期(12世紀前半～中頃)に所属すると思われる。

#### 出土土器 (図版27、第33図)

4は土師器小皿で底部は厚く、口縁は短い。口径8.3cm、器高1.6cmを測る。5も土師器小皿で薄手の作りである。口径8.5cm、器高1.5cmを測る。6は焼成が甘い瓦器椀で、非常に薄手の作りで、底部は沈み込んでいる。口径16.2cm、器高4.7cm。

#### 10号土坑 (図版17、第32図)

10号掘立柱建物跡から北東調査区寄りで検出した不正形プランの土坑である。長軸2.1m、短軸1.5mを測り、深さ0.2m程である。31号溝状遺構に切られ、埋土は暗茶褐色粘土であるので、縄文時代のものであると思われるが、遺物は出土していない。



第32図 8～12号土坑実測図 (1/30)

11号土坑 (図版17、第32図)

11号掘立柱建物跡との切りあい関係は不明だが、南東辺と重なって検出している。径0.65m前後の円形プランの小型土坑で、深さは約0.2mを測る。埋土は青灰褐色粘質土の単層で、図示に絶える遺物は出土していない。埋土の色調から、時期は平安時代後期(12世紀前半～中頃)に所属すると思われる。

12号土坑 (図版18、第32図)

11・14号掘立柱建物跡の中間で検出した土坑である。0.85m前後、深さ0.4mの円形プランを呈する。11号土坑と同じく、埋土は青灰褐色粘質土の単層で、図示に堪える遺物は出土していない。埋土の色調から、時期は平安時代後期(12世紀前半～中頃)に所属すると思われる。

13号土坑 (図版18、第34図)

調査区北西で検出した不正形プランの土坑で、長軸1.6m、幅0.8m、深さ0.4mを測る。埋土に軟化した焼土が混ざり、黒色である。縄文時代の包含層に切り込むので、それ以後であることは確実であるが、時期は判然としない。図示に堪える遺物は無い。

14号土坑 (図版18、第34図)

調査区の西側で検出した不正形プランの土坑で、長軸1.45m、短軸1.25m、深さ0.3mを測る。断面は掘り鉢状で、埋土は灰色粘質土、その下位に灰色の砂利が堆積していた。図示に堪える遺物は無い。埋土から時期は平安時代後期(12世紀前半～中頃)に所属すると思われる。

15号土坑 (図版19、第34図)

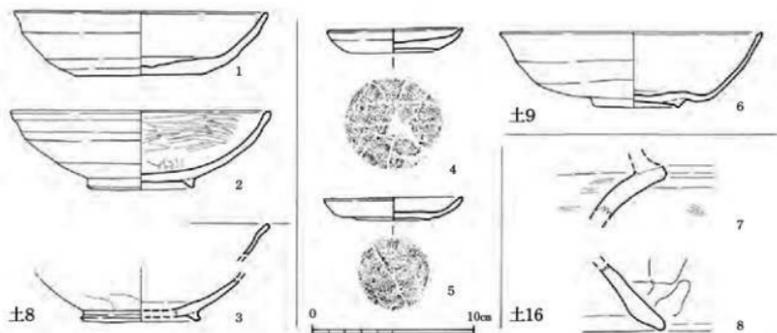
14号土坑の北西、自然流路の南西で検出した土坑である。調査区境にかかるため全体は知れないが、長軸1.35m、深さ0.2mを測る。埋土は灰色粘質土の単層である。図示に堪える遺物の出土は無い。埋土から時期は平安時代後期(12世紀前半～中頃)に所属すると思われる。

16号土坑 (図版19、第34図)

1号円形周溝の南縁で検出した土坑で、それを切る。西側が膨らみ楕円形プランで長軸1.7m、幅0.8m、深さ0.25mを測る。埋土は暗茶灰色粘質土である。時期は弥生時代後期後半～終末期に属する。

出土土器 (第33図)

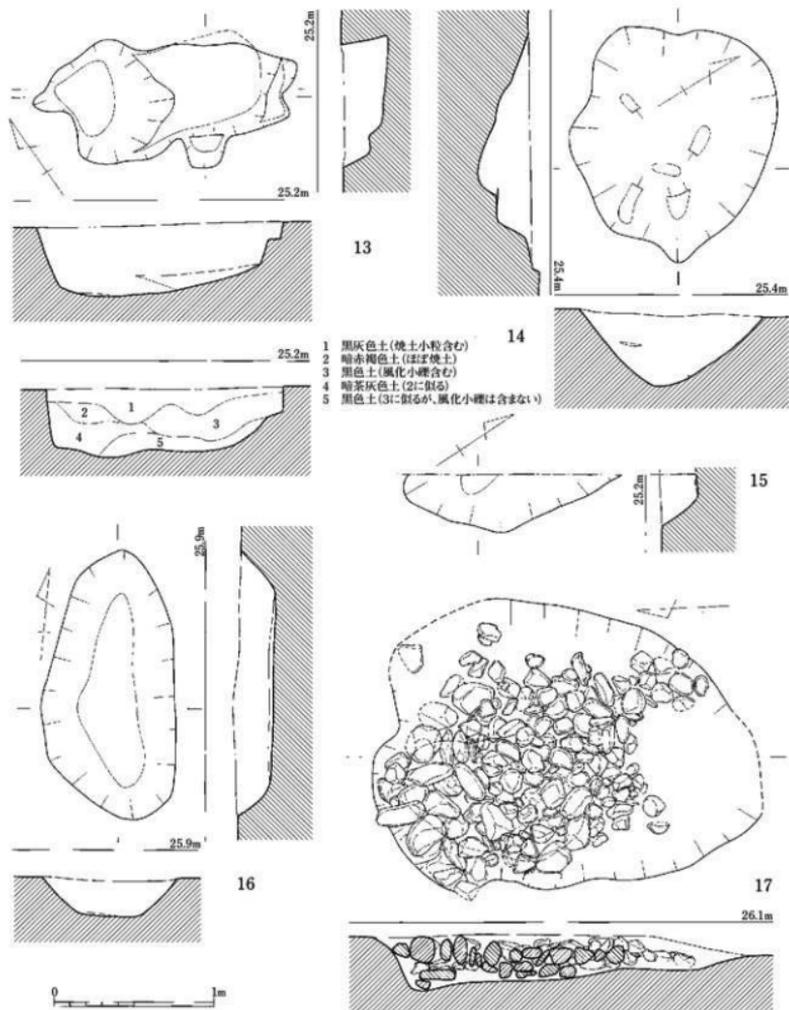
7は複合口縁壺の口縁部片で、灰茶色の色調である。8は器台の脚端か。色調は白肌色である。



第33図 各土坑出土土器実測図2 (1/3)

17号土坑 (図版19、第34図)

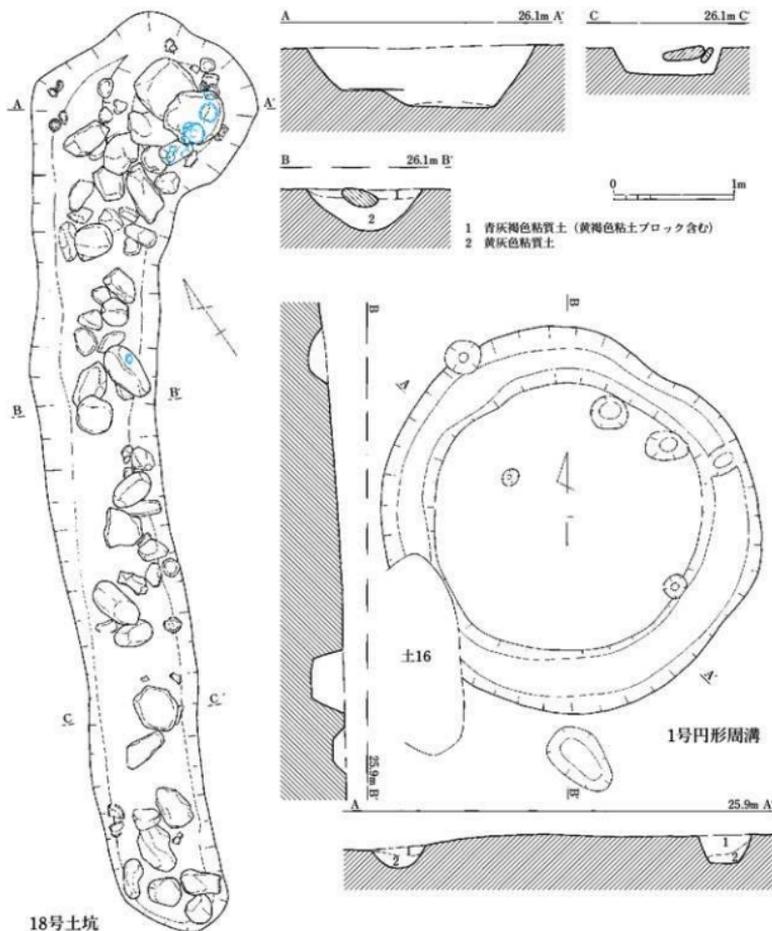
南側調査区の東で検出した不正形の土坑で、検出当初から円礫が頭を覗かせていた。南側は削り過ぎたため正確には分からないが、長軸2.4m、短軸1.8m、深さは0.3m前後を測る。埋土は灰色粘質土で、円礫が無作為に捨てられていた。恐らくは石捨て穴か。出土遺物は無く、埋土から平安時代後期と思われる。



第34図 13～17号土坑実測図 (1/30)

18号土坑 (図版20、第35図)

南側調査区の16号掘立柱建物跡の北で検出した長さ7.8m、幅0.5m前後、北東部はさらに幅0.8~0.9mとなる溝状の土坑である。埋土の上層と下層の間に礫や土器、砥石などが入り込み、北西の深い所にも土器が多く混入していた。北東端は0.5m程度の深さで底面に達し、水は湧き出していない。形状を見る限り井戸で、南西側はそれに付属する溝とするべきかもしれない。遺物に古相のものも含むが、時期は概ね平安時代後期(12世紀前半~中頃)に所属すると思われる。



第35図 18号土坑・1号円形周溝状遺構実測図 (1/40)

#### 出土土器 (図版27・28、第36図)

1～8は土師器小皿である。口径および復元口径8.2～8.6cm、器高1.0～1.4cmを測る。外面底部の調整は回転糸切りである。9～14は土師器皿である。9は底部から口縁に直線的に伸びる。外面底部は回転糸切りが明瞭で、板状圧痕も残る。復元口径14.2cm、器高2.8cm。10は全体的に歪んでいるが、外面底部の回転糸切りが明瞭で、9と同様の作りである。口径14.7cm、器高3.2cm。11は底部と胴部の境に段が付き、口縁が直線的にやや立ち上がる。復元口径15.4cm、器高3.5cmを測る。12も同様で口径15.7cm、器高3.4cmを測る。13は口縁部がやや肥厚する土師器皿で復元口径16.2cm、器高3.3cm。14も皿片で焼成が甘く赤肌色である。15はやや古相の土師器の高台付皿である。杯部は短く伸び、高台は1.5cmと高い。口径15.6cm、器高4.7cmで、明肌色の色調である。16は須恵質の甕底部片で、外面に太い平行タタキを施す。焼成は硬質で色調は明灰色である。17は瓦器碗片で、焼成は甘い。18はフォルムの良い瓦器碗である。杯部は深く、内面は横方向のヘラミガキを施す。高台は断面三角形で、底部は静止糸切りである。口径15.4cm、器高5.5cm、内面は黒褐色だが、外面は茶肌～橙赤色の色調である。19は肉厚な瓦器碗底部片で杯部下位はヘラケズリを施す。高台径5.9cmを測る。20は瓦器碗の底部片で、高台はやや高い。高台径6.4cmを測る。21と22は玉緑の白磁碗で端部は肥厚する。復元口径15.8cm、16.0cmを測る。23は小さな玉緑を有する白磁碗で、薄い釉は黄白色に発色する。24は無文の白磁皿で、やや外彎し、内面に一条の沈線状の段を有す。復元口径9.6cm、器高2.3cmを測る。

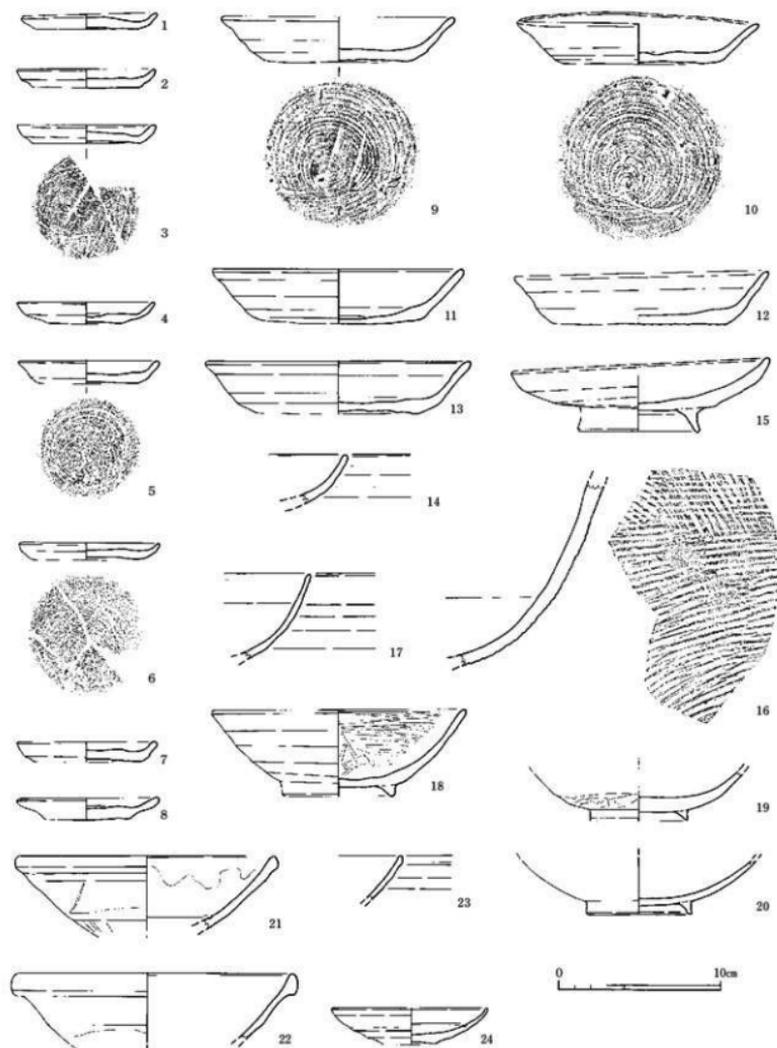
#### 1号円形周溝状遺構 (図版20、第35図)

13号掘立柱建物跡と16号土坑に切られて検出する。北側は近世の水田により削平されるが、約3.2mのはほぼ正円形を呈する。11～13号掘立柱建物跡の間で16号土坑の埋土と同じ包含層が広がっていて、それを掘り下げて検出した遺構である。遺構検出時には中央部分に高まりも無く、円形の溝のみであったことは確かである。なお、9号堅穴住居跡、6号土坑、30号溝状遺構と埋土は同じである。図示に堪える遺物の出土は無いが、埋土から弥生時代後期中～後半頃に属すると思われる。

## 5 溝状遺構・不明遺構

溝状遺構は調査区内で多数検出し、時期も様々である。溝状遺構の地山が砂地であるため凹地に溜まったものである可能性もあるが、それも溝状遺構に含めている。また、表土剥ぎの段階で遺構面を削りすぎたり、反転調査による誤認などで一連の遺構が分断して調査するものが多くなった。このため現地では、溝状遺構それぞれに遺構番号を付し、その調査段階のままの遺構番号で整理作業を行ない報告する。不明遺構も溝状遺構として調査したため、ここに含めて報告する。

なお、12・13・32・34号溝は2区と関係があると思われるため、平成26年度に報告予定である。



第36図 18号土坑出土土器実測図(1/3)

#### 1号溝状遺構

調査区のほぼ中央に位置し、北西から南東方向に延びて、2号掘立柱建物跡の前で南方向へ緩やかに曲がる。17・18号溝状遺構と同一の埋土(暗灰色粘土)であることから、一連の溝状遺構の可能性が有る。長さ16.2m、幅0.2~0.4m、深さは0.05m前後で残りは悪い。埋土

は暗灰色粘土である。図示に基える遺物の出土は無い。

#### 2号溝状遺構

北東から南西へ伸びる溝で、3号溝状遺構と並走するが、1号畦畔あたりで3号溝状遺構に切られる。長さ14.2m、幅0.25m、深さ0.07mを測る。

#### 出土土器（第38図）

1は弥生土器の甕口縁部片で、内面は縦方向のハケ目を施す。時期は弥生時代後期頃か。

#### 3号溝状遺構

2号溝状遺構と同様で、長さ15.2m、幅0.25～0.5m、深さ0.05mを測る。図示に基える遺物の出土は無い。

#### 4号溝状遺構

3号溝状遺構に切られ、5号溝状遺構を屈曲して重複するように切る。北西から南東、北東方向へ伸びる。残存する長さ12.5m、幅0.3～1.3m、深さ0.07mを測る。図示に基える遺物の出土は無い。

#### 5号溝状遺構

4号溝状遺構に切られ、8号溝状遺構と並走して南から東へ緩やかに曲がり、6号溝状遺構と本来は一連の溝である。長さ約22m、幅1～2m、深さ0.09m前後を測る。時期は弥生時代後期後半か。

#### 出土土器（第38図）

2～5は弥生土器である。2は壺の口縁部に竹管で等間隔に文様を施す。3は甕の口縁部で、端部にかけてやや肥厚する。4は甕の頸部から肩にかけての破片で、焼成前に穿孔している。5は器台で、脚先が欠損している。復元口径9.8cmで、色調は白肌色～濁肌色である。

#### 6号溝状遺構（図版21、第37図）

5号溝状遺構の先端、長さ8.5mを検出し、埋土は共に5号溝状遺構と同様である。遺構面を削り過ぎたため7号溝状遺構との前後関係は不明である。5号溝状遺構側に流れ込んだ土器がまともって出土している。幅0.5～1.8m、深さ0.03～0.25mを測る。時期は弥生時代後期後半～末頃と思われる。

#### 出土土器（図版28、第38図）

6～9は弥生土器である。6は甕の口縁部から肩にかけての破片で、肩は胴部に向かい直線的に伸びる。復元口径21.0cm、色調は赤茶褐色である。7も甕で胴部中程までの破片である。胴部は直線的である。調整は比較的密に刷毛目を施す。口径18.2cm。8はややレンズ状となった甕の底部片である。内面は底の中心に向かい薄くなる。底径6.0cmを測る。9は大型の壺の胴部と底部の破片で、接合はできなかった。胴部下半には断面三角形の突帯を付している。底部は僅かにレンズ状となる。胴径47.2cm、底径9.2cmを測る。

#### 7号溝状遺構

8号溝状遺構を切つて北東から南西へ延びる溝で、南側で屈曲する。削り過ぎたため一部途切れるが、長さ2.1m、幅0.2～0.3m、深さ0.05m以下を検出している。図示に基える遺物の出土は無い。

#### 8号溝状遺構

6・7号溝状遺構に切られ、5・6号溝状遺構と並走し緩やかに曲がる溝である。長さ3.1m、最大幅6m、深さは0.15m以下を測る。

#### 出土土器（第38図）

10は弥生土器壺の口縁部片で、色調は白肌色である。11は弥生土器壺の底部で、内外面にナデ痕が残る。

#### 9号溝状遺構

1号土坑に切られ、10号溝状遺構を切る。北西から南東へ直線的に延びる浅い溝である。長さ13.6m、幅0.7～1m、深さ0.1m以下を測る。

#### 出土土器（第38図）

12は頸部を急に屈折させる甕片で、弥生時代後期頃である。13は白磁碗の口縁部片で、釉は薄い緑白色に発色する。

#### 10・28号溝状遺構（図版21、第37図）

調査区のほぼ中央を北東から南西へ弓形に延びる溝で、検出当初は一段掘りの溝と思ひ遺物を上げたが、中央部分はさらに一段低くなり、二段掘りであった。反転後の調査で続きを削り過ぎてしまい、28号溝状遺構と別番号を付してしまった。よって、10・28号溝状遺構は一連の溝として報告する。長さ5.7m、幅1.6～4m（片溝0.3～1.5m）、深さ0.2～0.4mを測る。

#### 出土土器（第38図）

14は須恵器杯片で口縁は短く内傾する。時期は古墳時代後期後半である。

#### 11・14号溝状遺構（図版21、第37図）

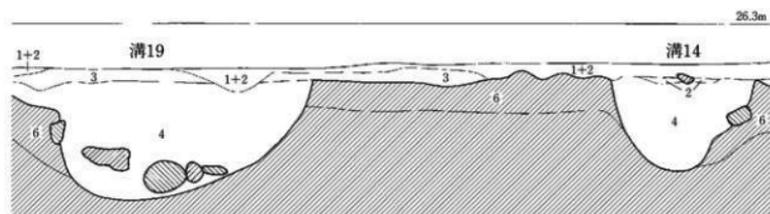
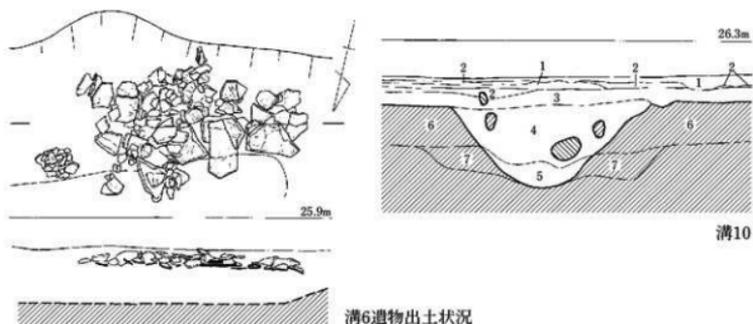
10号溝状遺構とはほぼ並走する溝で、北東から南西へ延びている。一部の遺構面を削りすぎたが、14号溝状遺構と一連の溝である。一部は5・8号土坑に切られ、5号土坑付近で土師器甕、須恵器甕の小片が出土している。なお19号溝状遺構とも並走する。長さ5.75m、幅0.3～1.1m、深さ0.1～0.25mを測る。出土した土師器甕は長胴で内面に横方向の刷毛目を施していることから、時期は古墳時代後期（6世紀中～後半）頃と思われる。

#### 15号溝状遺構

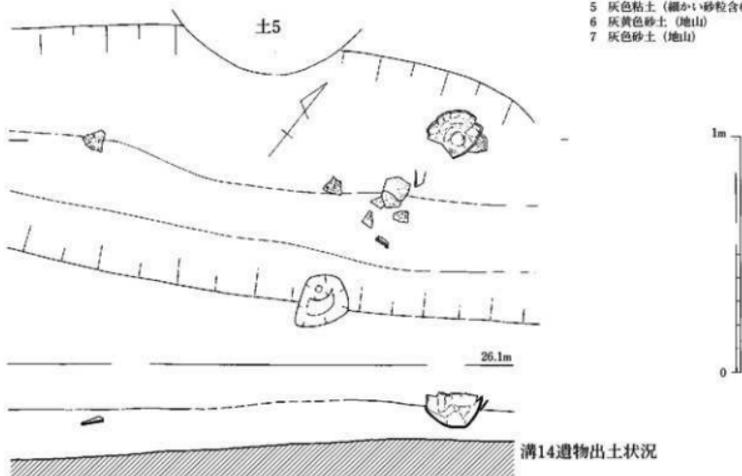
13号溝状遺構に切られて検出した浅い溝で、北東から南西へ延びる。長さ5.5m、幅0.25～1.2m、深さ0.1m以下を測る。図示に基える遺物の出土は無い。

16号溝状遺構

15号溝状遺構と似る浅い溝である。北西から南東へ延び、13号溝状遺構に切られている。長さ6m、幅0.9~1.6m、深0.05m以下を測る。



- 1 青灰色粘質土
- 2 黄灰色粘質土
- 3 黄褐色粘質土
- 4 暗灰色粘土 (マンガン含む)
- 5 灰色粘土 (細かい砂粒含む)
- 6 灰黄色砂土 (地山)
- 7 灰色砂土 (地山)



第37図 6・14号溝状遺構遺物出土状況、10・14・19号溝状遺構土層断面実測図 (1/20)

#### 出土土器（第38図）

15は頸部から緩く外反する土師器甕の口縁部片か。赤肌～濁肌色の色調である。

#### 17・18号溝状遺構（付図1）

1号溝で報告した通りである。南側で接する11号溝状遺構との切り合い関係は不明である。長さ約14m、幅0.1～0.55m、深さ0.15m以下を測る。

#### 出土土器（図版28、第38図）

16は須恵器の杯蓋で全体的に丸味をもち、復元口径10.8cm、器高3.6cmと小さい。

#### 19・20号溝状遺構（図版22、第37図）

14号溝状遺構と並走する溝で同様に沿いながら延びる。9号土坑に切られ、12号溝状遺構を切る。11号溝状遺構に接続しているが、切り合い関係は不明である。北側の一部は10号溝状遺構と接するが浅く消滅していた。20号溝状遺構とも一連の可能性がある。長さ39.5m、幅0.4～2m、深さ0.25～0.3mを測る。

#### 出土土器（図版28、第40図）

17は縄文晩期頃の浅鉢の口縁部片である。内外面ともに暗茶褐色で、補修孔が空けられる。縄文包含層からの混入品か。18は壺の口縁部片で、明肌色の色調である。19はやや寸胴な器台であるが、杵形のように突起は付かない。器高は10.0cm、上部径は7.4cm、下部径8.4cm。上部には人差し指程度の大きさの孔が深さ3cm程開けられる。

#### 21号溝状遺構

8号溝状遺構の南で検出した浅く短い溝で、南西から北東方向へ延びる。長さ8.4m、幅0.8～1.5m、深さは0.1m以下を測る。図示に基える遺物の出土は無い。

#### 22号溝状遺構

21号溝状遺構に隣接して検出した短く屈折する溝である。長さ6.5m、幅0.5～1.2m、深さ0.1m以下を測る。5・6・8・21・22号溝状遺構は南から東に緩やかにカーブする他、断面形状などから、溝というより地形の浅い窪みの可能性が高い。

#### 出土土器（第40図）

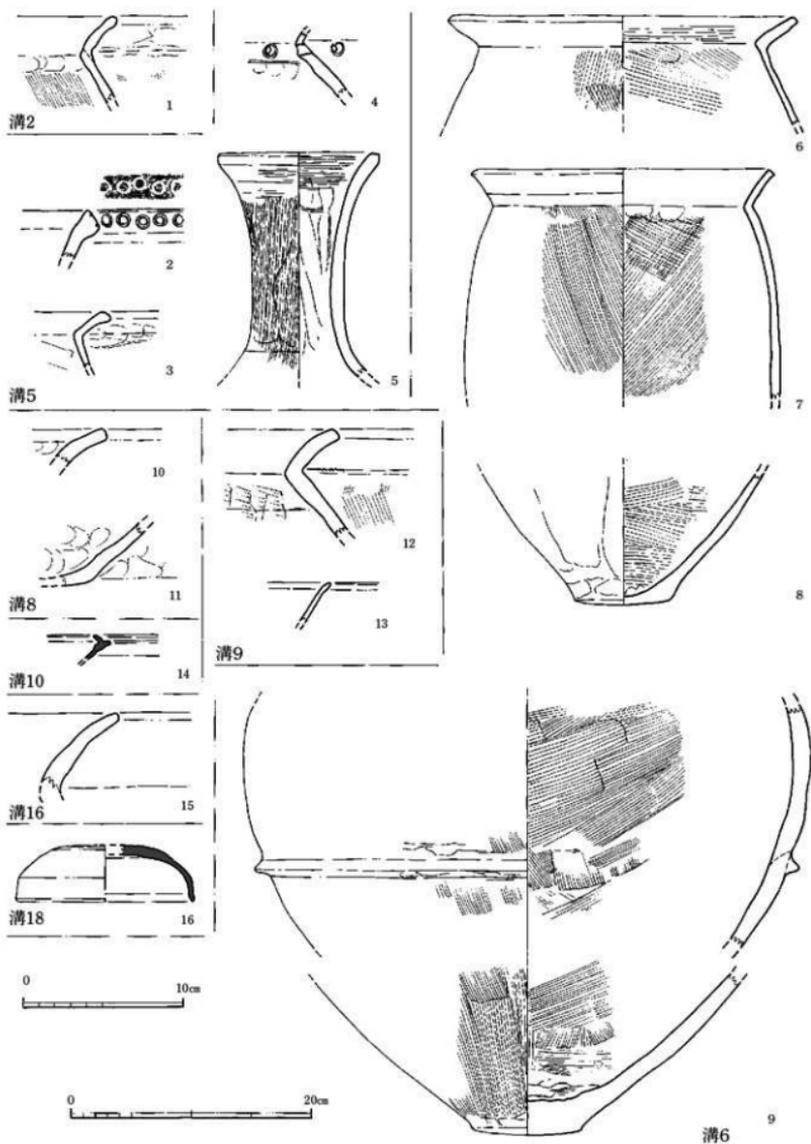
20は底部にかけて窄まる小振りな甕である。底部は欠損する。復元口径17.8cmを測る。

#### 23号溝状遺構

西側の水田遺構を切り、北東方向に延びて4号掘立柱建物跡付近で東へ屈曲している。1号溝状遺構、4号掘立柱建物跡に切られ、1号畦畔を切っている。長さ約30m、幅0.3～0.9m、深さ0.1m以下を測る。

#### 出土土器（第40図）

21は小型の甕で頸部は緩く屈折する。復元口径17.2cm。22は小型の鉢でミニチュア土器に近い個体である。丁寧な作りをしており、口径は7.9cm、器高5.3cmを測る。



第38図 各溝状遺構出土土器実測図1 (1/3、9のみ1/4)

#### 24号溝状遺構

2号畦畔に伴うもので、東側は表土剥ぎで削り過ぎたため残存する長さは短い。長さ6.7m、幅0.2～0.3m、深さ0.1m以下を測る。図示に基える遺物の出土は無い。

#### 25号溝状遺構

1号畦畔に伴うもので、西側は調査区、東側は2号溝状遺構に切られるところで消えてしまっている。長さ9.2m、幅0.15～0.2m、深さ0.1m以下を測る。図示に基える遺物の出土は無い。

#### 26号溝状遺構

調査区北東で検出した北東から南へ延びる溝である。31号溝を切り、27号溝に切られている。南側は礫層に当たり、未検出である。長さ13m、幅1～1.8m、深さ18～27cmを測る。図示に基える遺物の出土は無い。

#### 27号溝状遺構

19号溝状遺構に切られ、26号溝状遺構を切る。一部から北西へ短く延びる溝が付設する。長さ9.1m、幅0.8～1m、深さ0.16～0.3mを測る。小溝の長さは3m、幅0.4～0.65、深さ0.1m以下を測る。図示に基える遺物の出土は無い。

#### 29号溝状遺構

調査区の北側の住居跡群に切られる南東から北西へ延びる溝で9号掘立柱建物跡付近で消滅していた。長さ18.3m、幅0.5mで30号溝状遺構に接する部分では2.8m、深さ0.1～0.2mを測る。非常に軟弱な白色砂が埋土であった。図示に耐える遺物の出土は無い。

#### 30号溝状遺構（図版22、第39図）

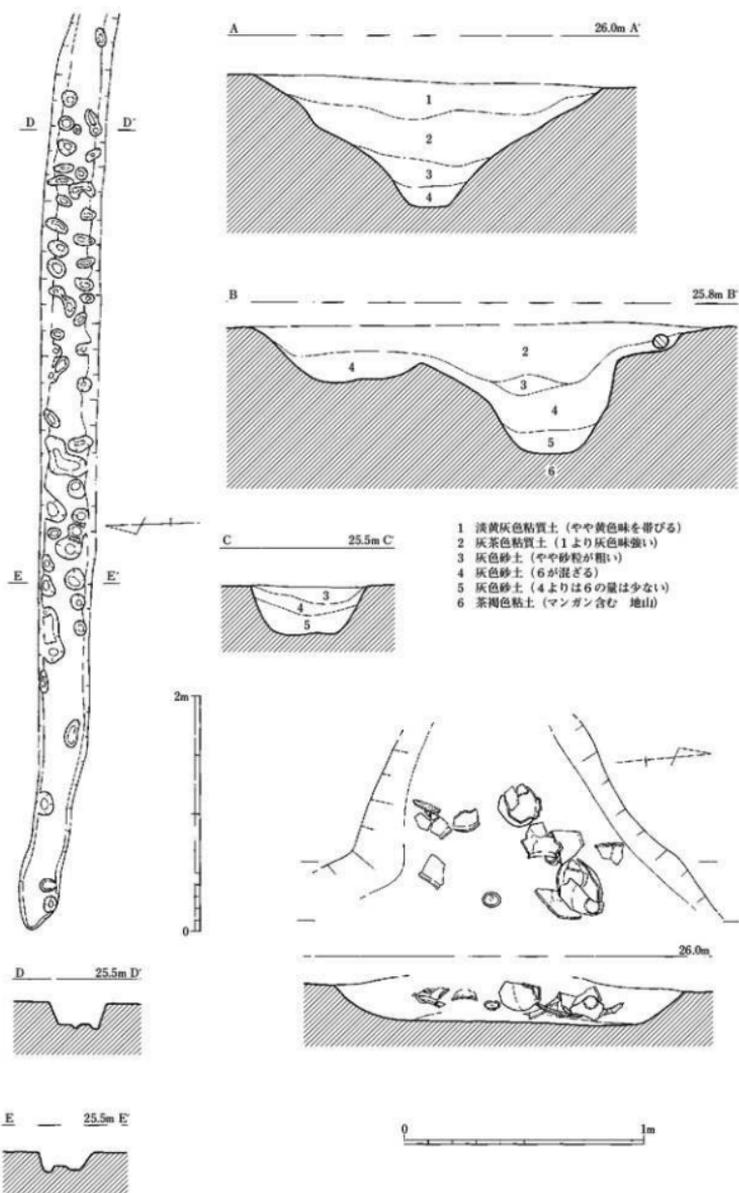
調査区北側を北西から東へ延びる断面V字の溝である。2・6号竪穴住居跡に切られて、9号竪穴住居跡の埋土と同様であった。10号竪穴住居跡付近では近世水田に削平され、1号流路に向かって浅く残存するが、西側の一部の底面で掘削痕を9m程検出している。この掘削痕には土層最下層の砂利と砂が入り込んでいた。環壕とは判断できなかったが、尾根を横断する空壕とみている。長さ50.8m、幅は残りの良いところで1.8m、深さは0.55m、悪いところでは幅0.5m、深さ0.05mを測る。

#### 出土土器（第40図）

23は胴部が広がる甕で、口縁部は短く反る。内外面は白肌色の色調を呈し、調整は刷毛目を施す。復元口径27.0cmを測る。24は跳ね上げ口縁の甍片で、頸部下に一条の突帯を付し、内外面に丹塗りを施す。25は高杯の脚先か。端部は断面方形を呈する。

#### 31号溝状遺構

調査区北東隅で検出した溝で、10号土坑を切っている。北から南へ延び、東に屈折している。長さ7.5m、幅1.1～1.3m、深さ0.15mを測る。図示に基える遺物の出土は無い。



第39図 30号溝状遺構掘削痕跡・土層図、1号不明遺構遺物出土状況実測図 (1/40、1/20)

### 33号溝状遺構

南側調査区の32号溝状遺構と17号土坑に挟まれて検出する。長さ15.3m、幅0.25～0.3m、深さ0.1m以下を測る。図示に基える遺物の出土は無い。

### 35号溝状遺構

南側調査区を南西から北西へ延びる溝で、11号竪穴住居跡、17・18号掘立柱建物跡に切られる。長さ17m、幅0.8～1.8m、深さ0.35～0.45mを測る。

出土土器（図版29、第40図）

26～28は弥生土器である。26は頭部に断面台形の突帯を付す壺で、口縁部は外方へやや突き出す。復元口径20.0cm。27も頭部に突帯を付す壺で、器壁はやや厚い造りで、口縁部内面は密にハケ目を施す。復元口径28.8cm、焼成は良く外面は橙褐色、内面は赤肌～白肌色の色調である。28は二重口縁壺の口縁部片である。外面と内面口縁部付近には丹塗りである。

### 40号溝状遺構

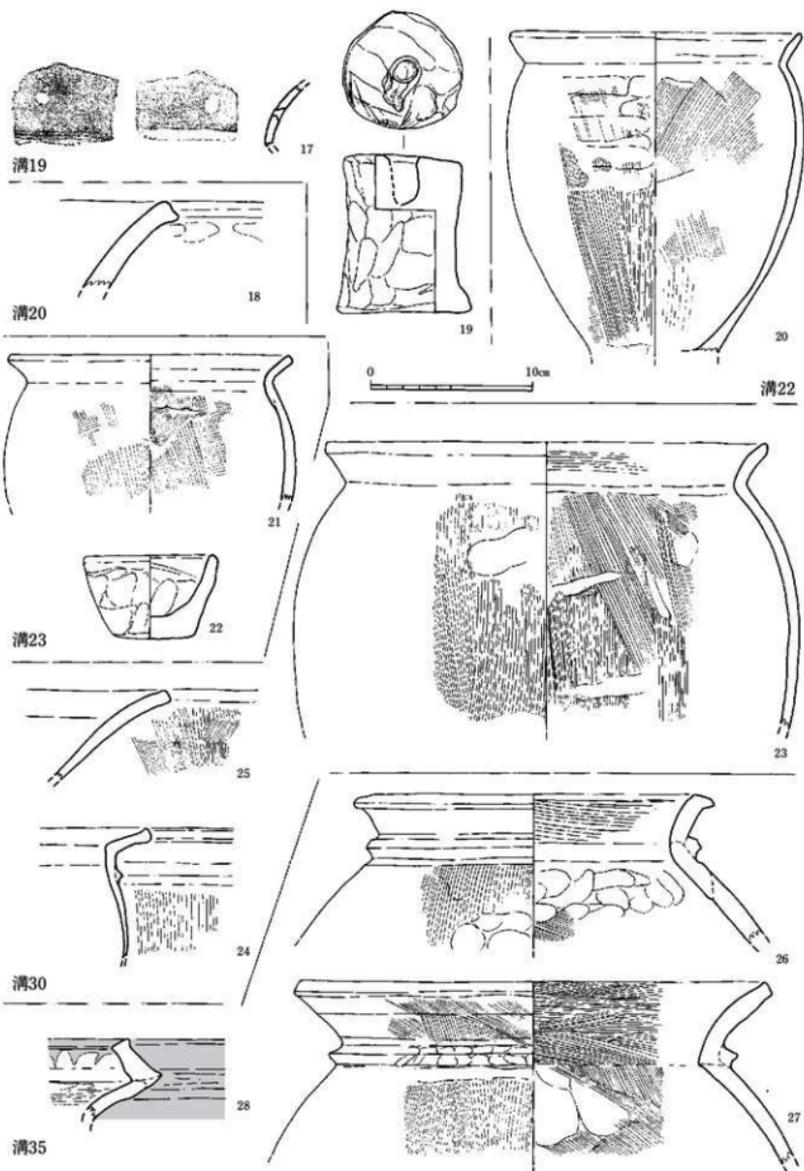
北側調査区で北西から南東へ延びる浅い溝で、時期的には新しい溝である。長さ22.8m、幅1.2～3.7m、深さ0.15m以下で、灰色の砂利が硬化して堆積している。出土遺物は流れ込みのみで、これに伴う本来の遺物は出土していない。図示に基える遺物の出土は無い。

1号不明遺構（図版22、第39図）

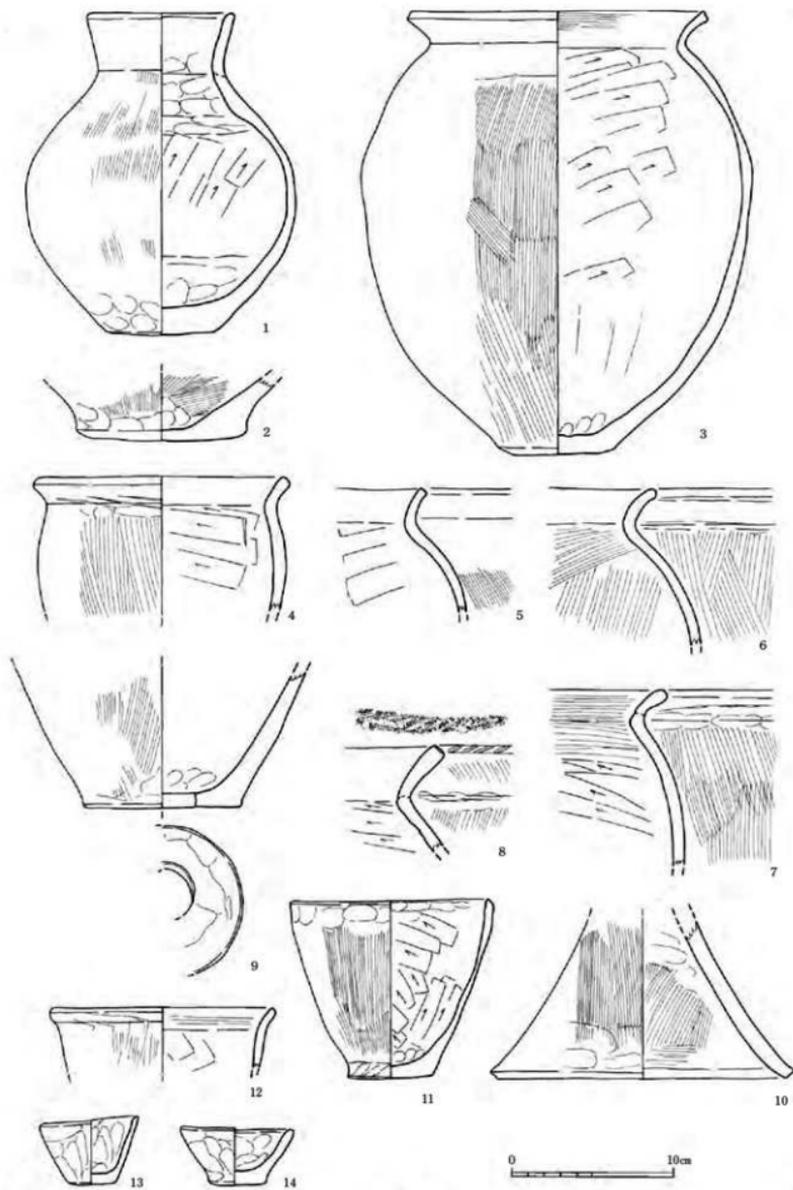
34号溝状遺構に沿うように検出した遺構で、浅く11号竪穴住居跡の方へ広がる。当初は浅い溝と考えていたが、近隣は34・35号溝状遺構、11号竪穴住居跡、17・19・20号掘立柱建物跡に切られて不整形なプランとなり、全体像は窺い難い。埋土は9号竪穴住居跡や6号土坑と似ておりこの時期のものと思われる。出土遺物は弥生時代後期で、遺構の壁が一部突出する部分でまとまって出土遺物しており、祭祀的な意味があるのかもしれない。

出土土器（図版29、第41図）

1は鈍重な作りの直口壺である。口縁は短く直行し、底部は僅かにレンズ状を呈す。復元口径8.8cm。器高20.4cm。2は壺の底部で僅かにレンズ状を呈す。底径10.6cm。3は底部が僅かにレンズ状を呈す甕で、口縁部は端部に向かい肉厚になる。復元口径18.2cm、器高28.0cm、赤褐色の色調である。4は小甕の上部で、調整は粗い。復元口径15.2cm。5は頭部が緩く外反する甕片で、調整は粗い刷毛目である。6も頭部が緩く外反する甕片で、内面調整は粗い。7も甕片で、内外面に刷毛目やケズリを施す。8は口唇部に浅い刻目を施す甕である。9は甕底部であるが、焼成後に穿孔する。復元底径9.2cm。10は高杯の脚先で復元脚径18.0cmを測る。11は小型の鉢で、胴はやや長く、粗い調整を施す。口径12.2cm、器高11.4cm。12は鉢の口縁部片で復元口径13.6cm。13は鉢形のミニチュア土器で、口径6.0cm、器高4.3cm。14も鉢形のミニチュア土器で、口径6.9cm、器高3.7cmを測る。



第40图 各沟状遗構出土土器実測図2 (1/3)



第41图 1号不明遺構出土土器実測図(1/3)

## 6 その他の遺構と遺物

### 水田遺構 (図版23、第43図)

調査区西側で2本の畦畔とその間の耕作土を検出している。範囲は25×22.5mで、南西側は調査区境にかかり、東側は近世水田に削平されて失われている。畦畔は黄色味が強い灰色砂土で構築されており、共に北西から南東方向へ向い、南側に24・25号溝を伴っている。1号畦畔は長さ13m、幅0.6～0.7mを測り、2号畦畔は長さ19.2m、幅0.4～0.5mを測る。畦畔間は11.4～13.5m離れ、その間は暗褐色粘質土、その下層は黄灰色粘質土である。4号掘立柱建物跡、3号土坑、2・3・4・23号溝状遺構に切られており、これらよりは古いことは確かである。また出土遺物は弥生時代と古墳時代のものに限られているためこの時期以内のものと考えられる。

### 出土土器 (第42図)

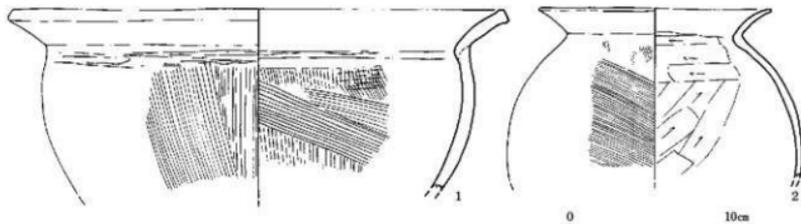
1は弥生時代後期の鉢で胴部は底部に向かい窄まる。復元口径30.6cm、色調は白肌色である。2は古式土師器の甕で口縁はやや内彎する。内面はヘラケズリで、外面は細かい刷毛目が残るが、焼成が甘いため摩滅気味である。復元口径14.3cmを測る。

### 縄文時代包含層と遺物 (図版24、第44図)

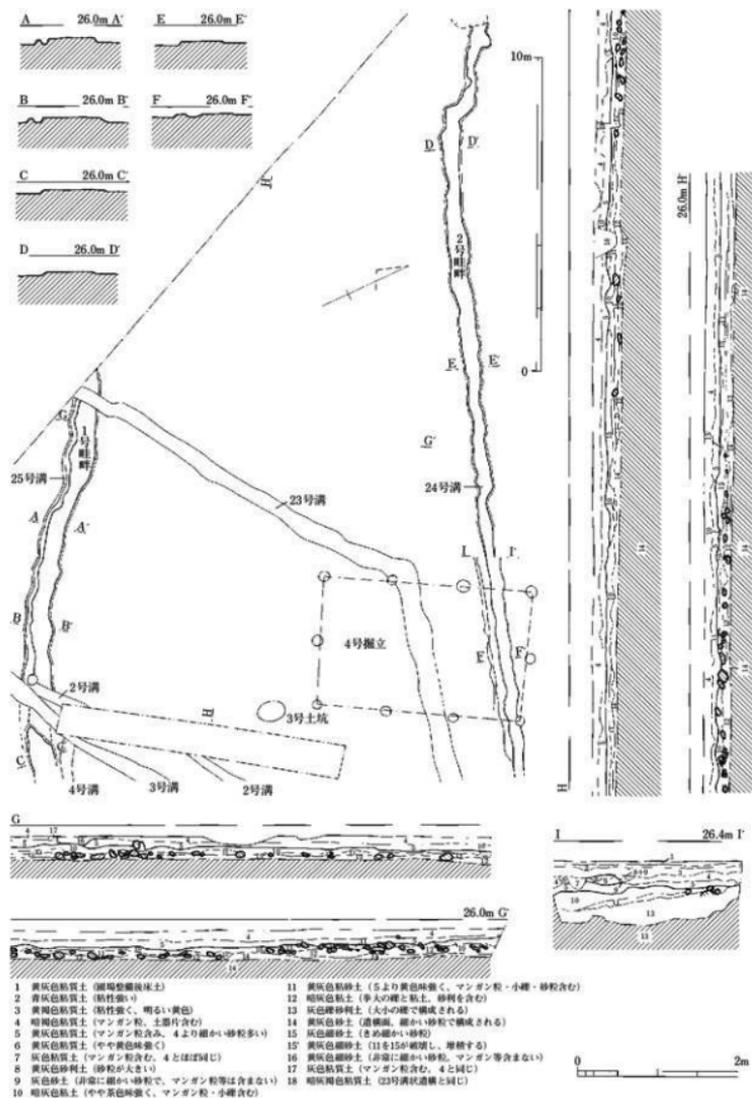
調査区北側付近の地山は他の遺構と違い、暗茶褐色粘土であった。東側の10号土坑辺りから2号堅穴住居跡、10号堅穴住居跡、13号土坑付近の北側に広がっている。住居跡の埋土中や表採で縄文土器、石器を含む包含層が存在していることが判明し、上層の調査終了後に遺物の検出状況に応じて、5m四方のグリッドを設定して掘削を行った。地山まで深いところでは0.6m程度となる。グリッド調査の結果、暗茶褐色粘土は、落ち際に堆積した包含層で人為的な遺構は確認できなかった。そのためグリッドで調査しているが遺物は包含層出土として一括する。時期は概ね、縄文時代後期後半から晩期初頭頃のものである。

### 出土土器 (図版30、第45図)

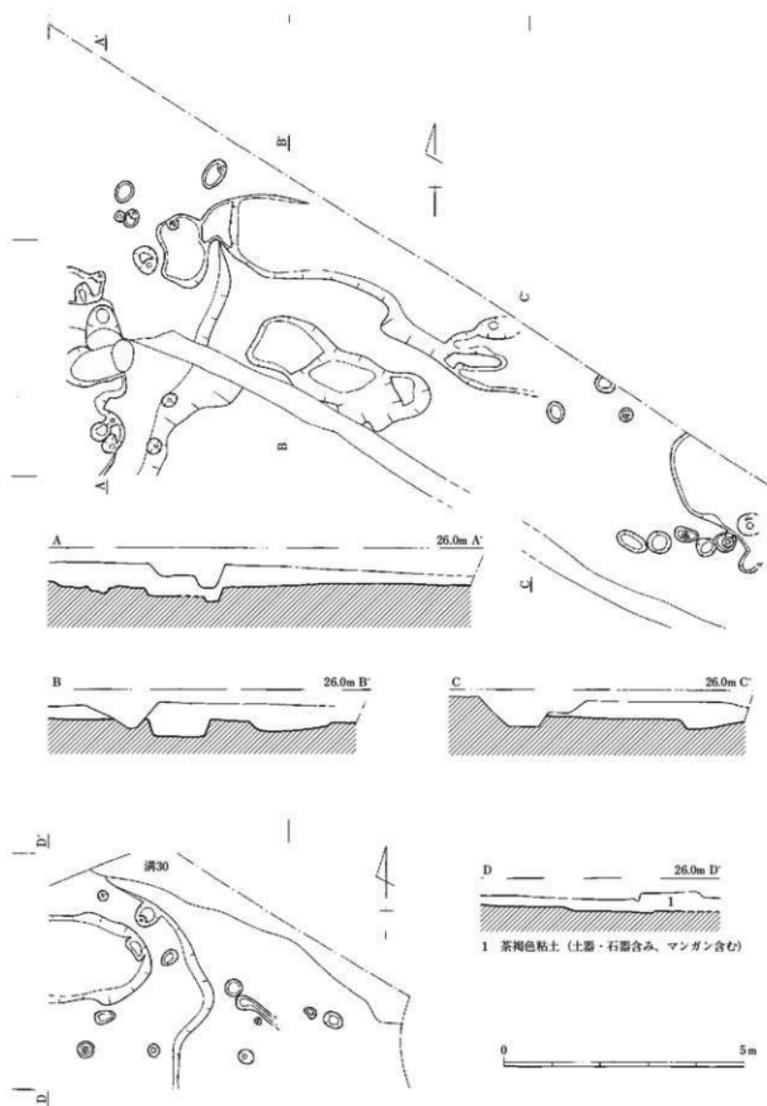
1は鐘崎式新段階頃の深鉢口縁部片である。外面と口唇に沈線が認められる。内面は二枚貝条痕が残る。2は外面に斜方向の浅い沈線・その先に丸の窪みを施すもので、北久根山式並行期頃のものであろう。3は深鉢の胴部片で、外面沈線で破損している。内面は粗い二枚貝条痕が残る。4は精製の浅鉢口縁部片で、緩く外彎し、内外面はミガキを施す。5は口唇部に向かい、やや立ち上が



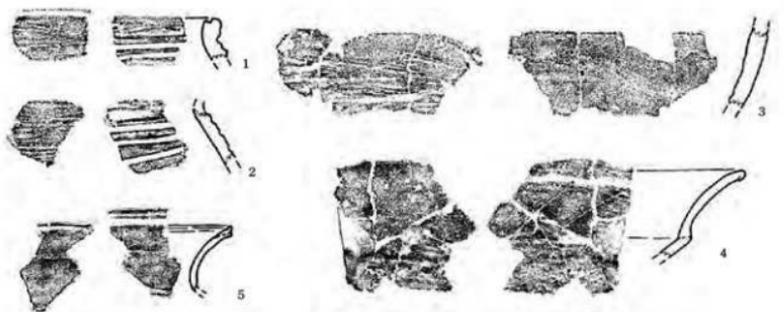
第42図 水田遺構出土土器実測図 (1/3)



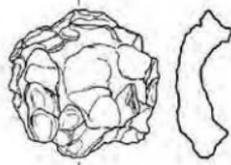
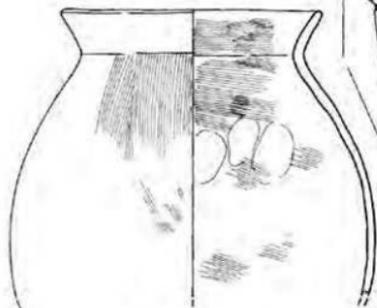
第43図 水田遺構実測図 (1/150、1/60)



第44図 縄文グリッド実測図 (1/100)

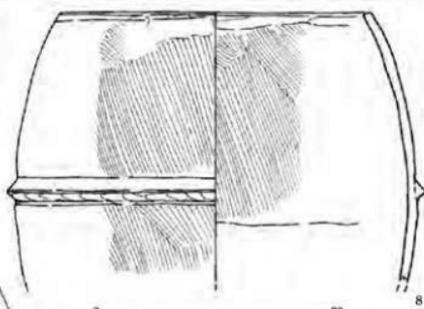


縄文包含層



- 9 : P-73
- 10 : P-82
- 11 : P-93
- 12 : P-102

1号流路

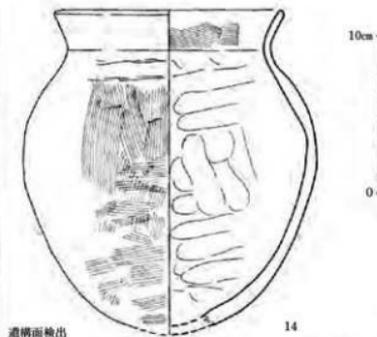


弥生包含層

0 20cm



13



10cm

0

遺構面検出

第45図 縄文・弥生包含層、ピット、その他遺構出土土器実測図(1/3)



第46図 弥生時代後期包含層、北西調査壁土層実測図(1/60、1/30)

る形状で、内外面にミガキを施す。4・5は黒川期のものであろう。6は粗製の浅鉢で、外罅し口縁端部を丸め込む。7は緩く外罅する口縁に浅い突帯を施す。6・7は概ね黒川式～山ノ寺式のものであろう。

#### 弥生時代後期包含層と遺物(第46図)

11～13号掘立柱建物跡までおよそ $8 \times 15$ mの範囲、深さ0.25m以下で北東へ向かってやや傾斜する部分に堆積していた。2層に分かれており、上層は弥生時代後期末頃の暗茶灰色粘質土が約0.1m、下層は弥生時代後期の淡黄灰色粘質土が0.15mの厚さで堆積していた。遺物には小片が殆どだが、一部に大型品もあるので報告する。

#### 出土土器(図版29、第45図)

8は弥生時代後期の樽型形状の土器である。本来は壺として製作していたと思われるが、途中で変更したのか歪な口縁部を作っている。胴部には一条の突帯を巡らし、内外面は粗い刷毛目を施す。復元口径25.8cm、最大突帯径34.7cmを測る。

#### ピット・遺構検出の出土遺物

ピットおよび遺構検出時に出土した土器の中からいくつかを報告する。

#### 出土土器(図版30、第45図)

9はP73出土で古墳時代前期の器台である。受け部は欠損している。焼成は良く、脚径は10.6cmを測る。10はP8出土の瓦器椀である。全体に摩滅が進んでいる。復元口径16.1cm、器高5.3cmを測る。11はP93出土で、古墳時代後期の土器器甕である。胴部はやや長胴になりかけている。口径15.2cmを測る。12はP102出土した手捏ね状の土製品か。外面に指痕がしっかりと残っており、形状も意図的でないことから、粘土の余りを捏ねて焼成したのか。全長9.4cm。13は外面に斜方向の沈線を施す、縄文深鉢片。縄文包含層近辺の検出時に出土している。14は土師器の小型甕で古墳時代中期のものか。外面は刷毛目で、内面にはナデを施す。復元口径13.8cm、推定器高約20.5cmを測る。

## 1号流路

調査区北西隅で半分程度検出した遺構で、地形にあわせて緩やかに落ち込み元々は1区と3区の境にある谷であったと思われる。内部には灰色細砂土・砂利が堆積し、遺構上面は近世水田に蓋をされた状態であった。出土遺物には青磁片などが出土している。長さ15.5m分を検出し、幅は4.5m、深さ0.4mを測る。

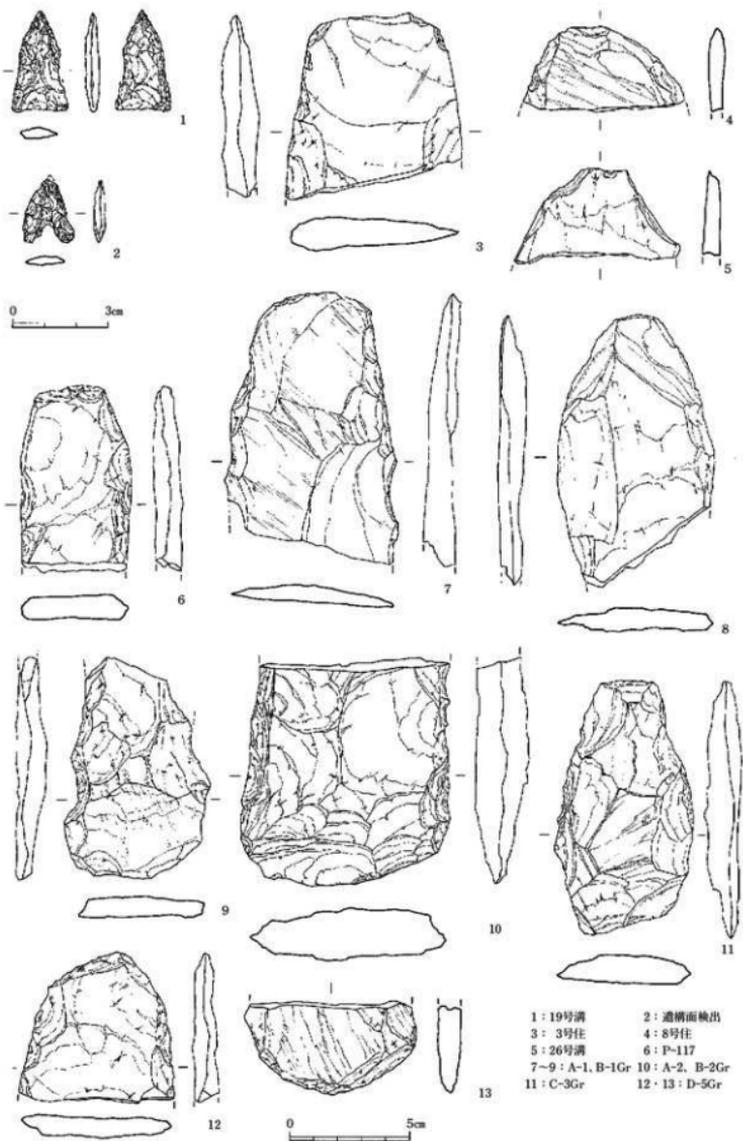
### 出土土器（第45図）

15は口縁部を外面に丸め込む粗鉢の深鉢で、近隣の縄文包含層から流れ込んだものと思われる。色調は橙褐色で、内外面は巻貝条痕が良く残る。

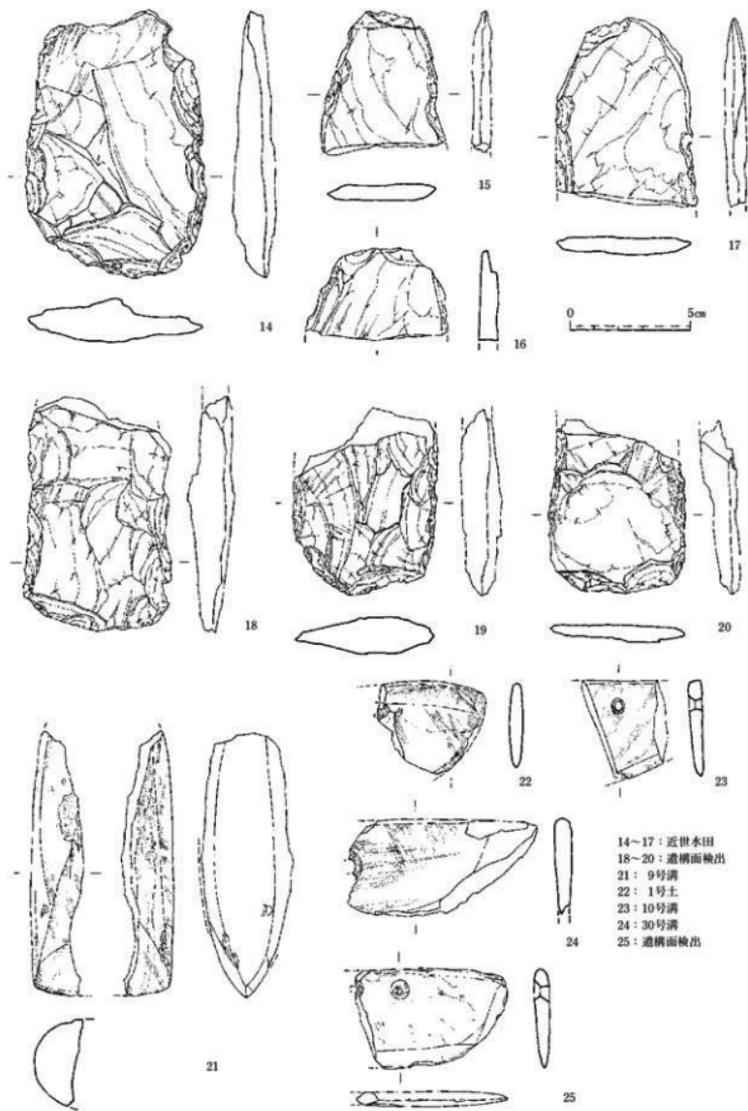
### 各遺構出土土器・石製品・土製品・金属製品（図版30～34、第47～50図）

1は19号溝状遺構から出土したサヌカイト製の打製石鏃で、身部の途中で屈折して先端へ伸びる。2は遺構面から出土した姫島産黒蠟石の石鏃で、やや歪な形状を呈する。3は3号竪穴住居跡で出土した緑泥片岩製の打製石斧である。刃部は欠損する。4は8号竪穴住居跡から出土した緑泥片岩製の打製石斧の基部である。5は26号溝状遺構から出土した緑泥片岩製の打製石斧の基部である。6はP117から出土した緑泥片岩製の打製石斧の基部側で、刃部は欠損する。7～13は縄文包含層出土で、全て緑泥片岩製の打製石斧である。7と8は刃部を欠損する。9と10は基部が欠損する。10は非常に分厚いが良質なもので調整もよく行なわれる。11は完形品で、基部は細身に調整され、刃部は使用によりやや潰れる。12は基部の破片である。13は刃部片である。14～17は近世水田土に混入した緑泥片岩製の打製石斧である。14は完形品で、基部側は自然面のままである。15と16は基部側の破片である。17はあまり調整が行われていない基部の破片である。18～20は遺構検出時のものである。18は緑泥片岩製の打製石斧で、基部は欠損するが良質の石材を用いている。19はサヌカイト製の打製石斧で、全体を調整している。20は緑泥片岩製の打製石斧で刃部側の破片である。21は9号溝状遺構から出土した蛇紋岩製の片刃石斧で、縦半分を欠損する。22は1号土坑に混入していた赤紫色凝灰質砂岩の石庖丁片である。23は10号溝状遺構出土で、暗茶褐色泥岩製の石庖丁である。24は30号溝状遺構の底面から出土した暗茶褐色泥岩製の石庖丁である。25は遺構面検出時に出土した石庖丁で、全体にローリングを受ける。26～29は磨石・凹石で、どれも砂岩製である。26は2号竪穴住居跡出土で、ちょうど手の平サイズである。27～30は9号竪穴住居跡出土で、27の上面は楕円形に窪み、その側面に3回の打痕が残る。28はやや大振り、上面は径6cm程度がよく使用されている。29も大振りであるが、非常に持ちやすい。上面は窪み、下面は良く擦る。製品の突部は敲きを使用したものであろう。30は小振りな台石で、上面は平滑になる。31～34は砥石である。31は9号竪穴住居跡P3出土で細粒砂岩製である。上・横面で良く使用されている。32は1号土坑から出土した置砥である。このサイズ程度の原石を成形して全体を磨き、使用している。33は1号流路に混入したもののか。表面は波状痕が全体に残る。34も1号流路内の出土で小型の持砥である。

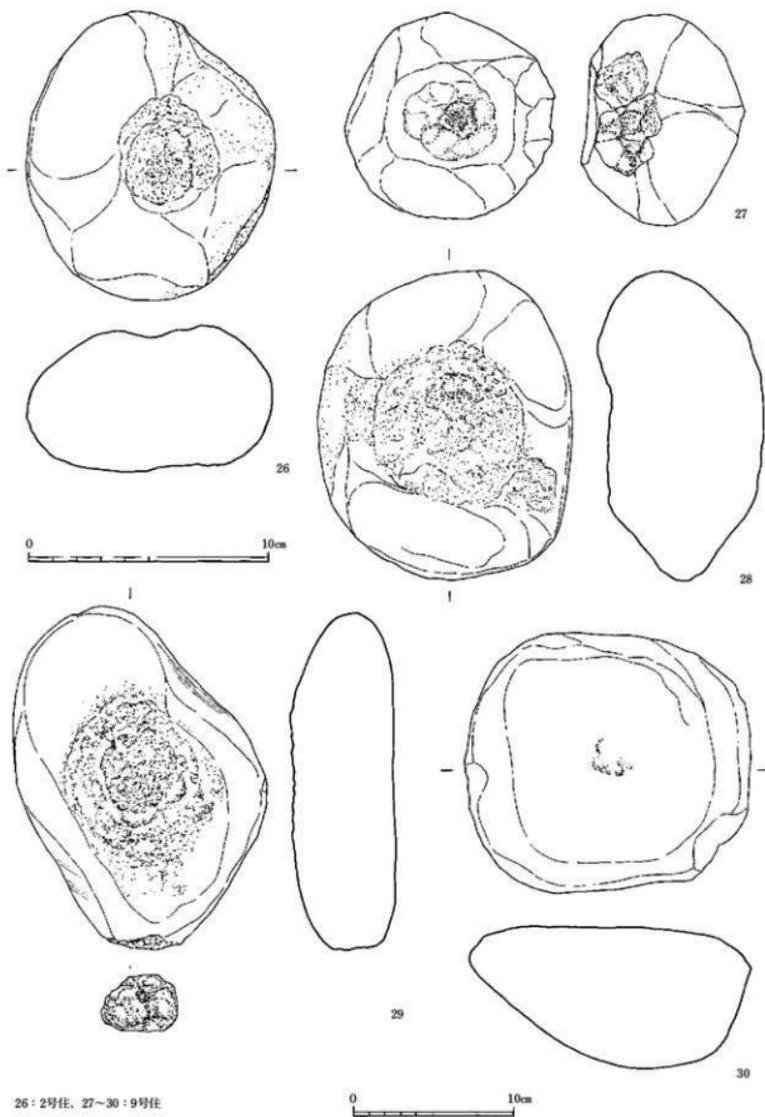
35～37は9号竪穴住居跡の南側壁面から出土した土製品である。どれも鍛冶に関連するものか。35は羽口の破片で生焼けで脆いが、外面はカーブしている。残存長3.2cm。36は炉壁面にしては薄く、被熱はしていない板状の破片。横面に棒状の痕が残る。残存長4.6cm、厚さ1.5cm。37は被熱した土壁片で、被熱面は赤灰色となる。残存幅4.1cm。38～51は土錘で、ど



第47図 石器1実測図(1・2は2/3、その他は1/2)



第48図 石器2・石製品1実測図(1/2)



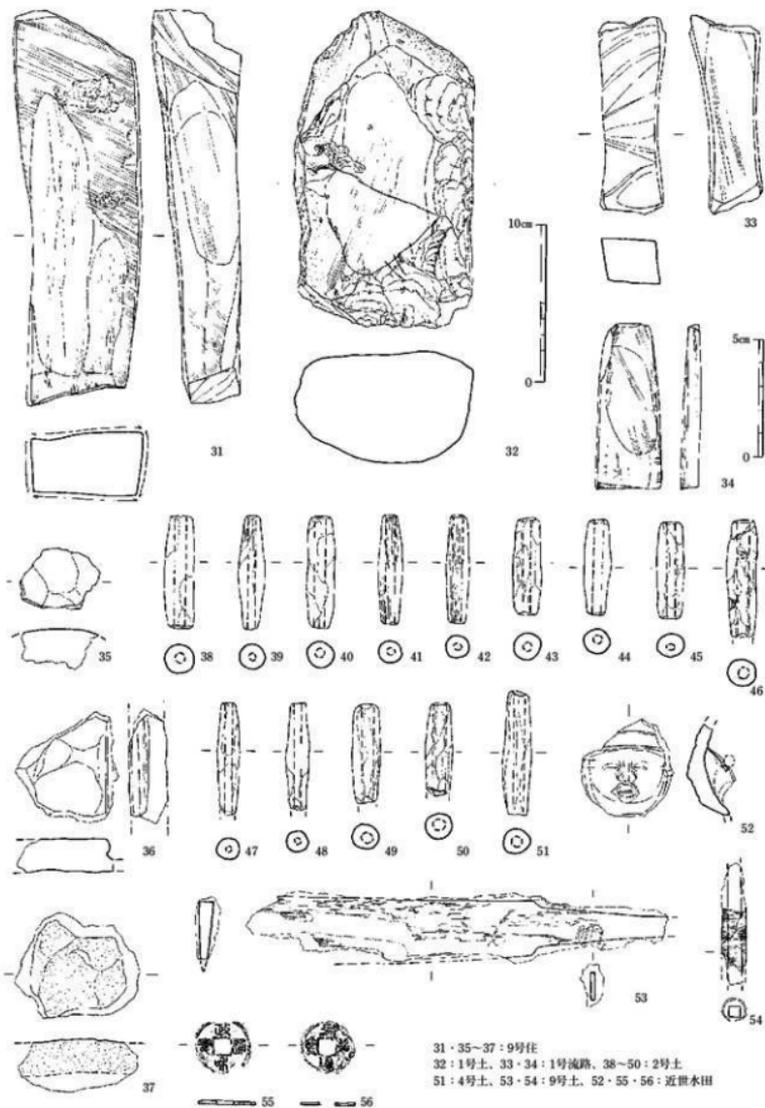
第49図 石製品2実測図（30は1/3、その他は1/2）

れもやや生焼けて黒斑や赤褐色・白肌色を呈する。51のみ4号土坑出土で、それ以外は全て2号土坑出土である。38は下部がやや太る。長さ4.8cm。39は両端部が細るもので、長さ4.8cm。40はやや寸胴なもので、長さ4.7cm。41はシャープな形状のもの。長さ4.6cm。42も同様の形状で、長さ4.5cm。43は短く寸胴な形状。長さ4.1cm。44も短く長さ4.0cm。45も同様。長さ4.1cm。46は外面の一部に初めの痕が残る。残存長4.9cm。47は細身で下部が欠損する。残存長4.7cm。48も細身でシャープなもの。残存長4.5cm。49は寸胴で43に似る。残存長3.9cm。50は下部を欠損する。残存長3.9cm。51は長めの個体で5.2cmである。52は近世水田土から出土の土製人形の顔面片である。両耳のあたりに円形径3mmの穿孔が2箇所ある。

53・54は9号土坑の副葬品で、53は刀子である。錆化が著しく脆いが木質も残る。身体はやや開き気味で背は約0.6cmで、残存長は17.5cmを測る。54は鉄鍔の身から基にかけて。残存長は5.2cmで木質が良く残る。55・56は近世水田土から出土した銅銭で、55は宋銭の「政和通寶（1111年初鑄）」である。直径は2.4cmで文字は明瞭である。56は文字が潰れる銅銭で「・通寶」は判読できる。直径2.3cmを測る。

表2 京ヶ辻遺跡1区出土石器一覧

棟号	図版番号	出土遺構	器種	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	備考	
47	1	30	19号溝状遺構	石鍔	3.2	1.8	0.4	1.7	サヌカイト
47	2	30	遺構面検出	石鍔	2.1	1.6	0.3	0.6	姫島産黒曜石
47	3	30	3号竪穴住居跡	打製石斧	(7.9)	7.3	1.4	102.4	緑泥片岩
47	4	30	8号竪穴住居跡	打製石斧	(3.6)	6.7	0.7	25.0	緑泥片岩
47	5	30	26号溝状遺構	打製石斧	(4.1)	7.5	0.8	29.3	緑泥片岩
47	6	31	P117	打製石斧	7.9	4.6	1.1	72.0	緑泥片岩
47	7	31	A-1・B-1Gr	打製石斧	(11.5)	7.2	1.3	112.0	緑泥片岩
47	8	31	A-1・B-1Gr	打製石斧	(11.5)	6.5	1.1	105.2	緑泥片岩
47	9	31	A-1・B-2Gr	打製石斧	(9.3)	6.1	1.3	84.9	緑泥片岩
47	10	31	A-2・B-2Gr	打製石斧	(9.6)	8.6	2.2	280.0	緑泥片岩
47	11	31	C-3Gr	打製石斧	10.8	5.8	1.3	101.4	緑泥片岩
47	12	31	D-5Gr	打製石斧	(6.3)	6.5	0.9	51.2	緑泥片岩
47	13	31	D-5Gr	打製石斧	(4.0)	7.0	0.9	43.5	緑泥片岩
48	14	31	近世水田	打製石斧	11.3	7.5	1.8	167.2	緑泥片岩
48	15	32	近世水田	打製石斧	(6.1)	5.2	0.7	36.0	緑泥片岩
48	16	32	近世水田	打製石斧	(3.9)	5.8	0.8	29.3	緑泥片岩
48	17	32	近世水田	打製石斧	8.0	5.9	0.8	61.2	緑泥片岩
48	18	32	遺構面検出	打製石斧	10.0	6.2	1.3	139.5	緑泥片岩
48	19	32	遺構面検出	打製石斧	(7.9)	6.0	1.6	77.3	サヌカイト
48	20	32	遺構面検出	打製石斧	(7.3)	5.7	1.5	61.5	緑泥片岩
48	21	32	9号溝状遺構	片刃石斧	(11.2)	(6.0)	(3.6)	114.4	蛇紋岩
48	22	32	1号土坑	石廬丁	(4.5)	(3.9)	0.6	12.8	凝灰質砂岩
48	23	32	10号溝状遺構	石廬丁	(3.5)	(4.1)	0.6	13.6	泥岩
48	24	32	30号溝状遺構	石廬丁	(7.9)	(4.2)	0.8	33.1	泥岩
48	25	32	遺構面検出	石廬丁	(6.3)	4.2	0.7	24.5	粘板岩
49	26	33	2号竪穴住居跡	凹石	12.2	10.3	6.0	916.3	砂岩
49	27	33	9号竪穴住居跡	凹石	8.7	8.7	6.8	508.6	砂岩
49	28	33	9号竪穴住居跡	凹石	13.1	10.5	6.9	1235.3	砂岩
49	29	33	9号竪穴住居跡	磨石	14.5	10.5	4.3	915.7	砂岩
49	30	33	9号竪穴住居跡	台石	17.7	16.5	9.0	3583.4	砂岩
50	31	33	9号竪穴住居跡	砥石	16.7	3.6	2.7	408.3	砂岩
50	32	33	1号土坑	砥石	20.1	11.1	7.0	2206.0	天草石
50	33	33	1号流路	砥石	8.4	2.8	1.9	81.5	砂岩
50	34	33	1号流路	砥石	6.9	2.8	0.9	28.0	砂岩



第50図 石製品3・土製品・金属製品実測図（32は1/3、その他は1/2）

## 7 まとめ

今回報告した京ヶ辻遺跡1区の調査では、竪穴住居跡11軒、掘立柱建物跡19棟、土坑18基、溝状遺構32条、円形周溝状遺構1基、不明遺構1基、水田遺構、縄文時代の包含層など多様な遺構を検出した。主な時期は縄文時代後期後半頃～晩期前半、弥生時代後期、古墳時代中期、平安時代後期（12世紀前半頃）である。以下、時期ごとに沿って報告する。

### ○縄文時代後期

当遺跡で最も古い時期が、縄文時代後期後半頃の遺物である。遺構は10・13号土坑が該当する。その他、包含層での出土であるが、1区の北西側の3区で若干の遺構を確認している。遺物もおおよそ鐘崎期の終わりから北久根山並行期・黒川期である。京ヶ辻遺跡の周囲では祓川上流約3.5kmにやや時期が遡るが後期中頃のみやこ町筋丸西遺跡が知られる。下流域の北北東2.5kmの行橋市辻垣ヲサマル遺跡、北西2.5km下流の同市柳井田早崎遺跡で後期中頃～晩期の遺物が僅かながら知られている。さらに祓川上流では伊良原ダム建設事業による発掘調査で、早期と後期の遺跡が発見されており、祓川流域では、集落が点在していたと見ることができよう。

### ○弥生時代後期～末

弥生時代後期～末は1区北側に集落域が広がると考えられる。1区北側の集落は竪穴住居跡を9軒確認しているが、地盤は縄文時代後期の包含層上に広がり、その他の砂質の部分を選んで選地しているかのようにも感じられた。検出できた9軒の内、特筆すべきは中央炉以外の付設炉を6基もつ9号竪穴住居跡である。この付設炉はよく焼けており、性質上から鍛冶炉とも考えていたが、鍛造剥片などそれを示す遺物は検出されなかった。そのため性格は不明であるが、鉄器などを修復する程度のものではないかと考えられる。

その他に同時期と考えられる遺構は30号溝状遺構である。埋土の堆積状況は9号竪穴住居跡と同じである。この30号溝状遺構は削平が著しいものの断面V字状を呈しており、北西側の谷に向かって直線的に微高地を断ち切るように伸びている。「環濠」とは即断できないが、現段階では尾根切りの「濠」として機能していたと考えたい。

1号円形周溝状遺構も同時期で、この時期と末頃の包含層に覆われていた。表面は削られているとしても、溝の内部は平坦で施設らしいものは確実に無く、用途の判断に苦しむ。今後、状態のよい類例が増えることを期待する。

これに続く後期後半～終末期の住居跡の切り合いは無く、3号竪穴住居跡付近を中心として検出している。1号竪穴住居跡に近接して検出した15号掘立柱建物跡もこの時期であり、まとまりをもって検出することができた。農道を挟んで調査区北側では削平が著しく、この時期の遺構は検出されなかった。本来どれだけ集落が広がっていたのかは不明であるが、北西に隣接する国作八反田遺跡（みやこ町教育委員会調査）で弥生時代後期後半頃の小規模集落が検出されており、同様に小規模な集落がこの地域では微高地上に展開していたのであろう。

### ○古墳時代中期・後期

古墳時代中期初頭の2号竪穴住居跡は弥生時代の住居跡を切って単独で立地している。調査区北側が削平されているためどの程度の広がりを見せるのかは不明であるが、2区では同様の時期と思われる住居跡を検出している（平成26年度に報告予定）。

後期前半の11号竪穴住居跡も南側調査区に平安時代の掘立柱建物に切られて単独で検出している。住居跡内の埋土は淡白灰色砂土で時期を確定できる遺物はほとんど出土していないが、2区検出の大谷の上層で同様の埋土が分厚く堆積している。この砂土からは古墳時代中期末頃の須恵器が出土しており、11号竪穴住居跡はこの頃に埋没したと思われる。本来は多くの竪穴住居跡が存在していたと考えられるが、11号竪穴住居跡の遺構の残り具合を考えると、その他は削平され消滅してしまったと思われる。

### ○平安時代後期～末（12世紀前半～中頃）

#### －遺構について－

1区の特徴として、この時期の掘立柱建物跡群・土坑がある。遺物や検出状況から察するに、非常に短期間の遺構群であると思われる。2・3区ではこの時期の遺構は検出されず、1区の1町区割りにのみ存在し、軸をそれにあわせて建築している。掘立柱建物跡自体は通例に見られるような規模であるが、明らかに少数グループの寄り集まりをなしているとみられる。

建物跡は中型（約19～31㎡）の主屋と小型（約14～18.7㎡）の副屋が存在し、大型は検出されていない。主屋3棟と副屋1棟が1セット、主屋2棟のみのセットとなる傾向が強い。

【北西のグループ】 4・11・12・14号掘立柱建物跡の床面積は22～31㎡で主屋で、離れて存在する13号掘立柱建物跡のみが床面積が17㎡と小さく、副屋と考えられる。なお11・12号掘立柱建物跡の前後は不明だが重複しており、建替えの可能性があるため1棟とする。

【北東のグループ】 6～8号掘立柱建物跡の床面積は19.7～27.7㎡で主屋で、やはり離れて存在する3号掘立柱建物跡のみが18.7㎡と小さく、副屋と考えられる。

【南東のグループ】 17・18・20号掘立柱建物跡の床面積は19～23㎡で主屋で、離れて存在する16号掘立柱建物跡のみが14㎡と著しく小さく、副屋と考えられる。

【北西と北東との間のグループ】 2・5・9・10号掘立柱建物跡の床面積は23～27.8㎡でどれも中型の主屋に属し、副屋は持たない。しかし、2・5号と9・10号はお互いに隣接して建てられており、主屋2棟が1セットのグループか。その他に1号掘立柱建物跡だけは1棟で単独に存在し、例に外れる。この1号掘立柱建物跡の約6m西には単独で土坑墓を検出しており、この建物の屋敷墓の可能性もある。

1号土坑以外の土坑は、比較的大きな2・5・8・18号土坑は区画に沿って間隔をあけて並び、これらの土坑は掘立柱建物跡から離れているようにもみられる。また5・8号土坑の出土土器には浮いた状態もあるが、土師器碗の完形品1点だけが出土する状況が窺えた。これらについて類例を求めると、大阪府池島・万福寺遺跡（江浦1996）の検討により「土器埋納土坑」と示されている。このような土坑は坪境近辺に設置される傾向があるとされ、当遺跡も坪境に土坑が設置されて、土器を埋納していた可能性が高い。

当遺跡は国府の近くに位置し、この地に集落を営む際、露出する坪境の畦畔などを集落内の区画

として利用・機能させたのかもしれない。5・18号土坑の出土遺物には、掘立柱建物から出土遺物よりもやや古相のものが含まれることから、建築する前に坪境で地鎮行為をしたのではないだろうか。

#### - 遺物について -

1号土坑からは白磁碗や土師器に混ざって、経塚や火葬墓などで使用されることのない須恵質灰口長頸壺が出土した。調査当時はその出土により平地の経塚の可能性も視野にいれていたが、特にそのような気配も無く、壺の内面に緑錆の付着も見られなかった。

また、この壺は1号土坑の三分の二程度が埋め戻された際に割られて一緒に遺棄されたと考えられる。白磁碗や土師器鍋などと一緒に、人為的に破碎されている。その行為にどのような意味があるのか推論の域をでないが、井戸の封じのために破碎行為を行ったのであろう。

なお、築上郡築上町（旧築城町）下香楽・丸山経塚でこれと酷似した外容器が出土している。土器肩部には、墨書で、「天治二」（1125年）とある。当然、経筒に施された年号であろうが、これが正確であれば、京ヶ辻遺跡の1号土坑の時期は、12世紀前半以降と考えられる。

今回検出した強い企画性や規制が窺える掘立柱建物跡や土坑、それに伴って出土した遺物から、京ヶ辻遺跡1区は上～下層農民クラスの集落であった可能性がある。

なお、この集落を支配・管理している在地領主層と考えられる同時期頃の遺構は、約400m離れた豊前国府跡（国府V期）で大規模な方形区画溝が2基検出されている。時期は平安時代後半～鎌倉時代前半（12世紀前半～13世紀前半）頃とされ、内容は不明な点が多いが、最盛期の豊前国府のその後を窺わせる遺構である。また方形区画は一辺85m規模、一辺40m規模のものが国府区割りを無視して存在し、その他に井戸が数多く掘削されている。国府の機能は衰えていたとはいえ、その地に新たに構築する財・権力をもつことから、周辺農民を支配する勢力が存在していたことは明白であろう。

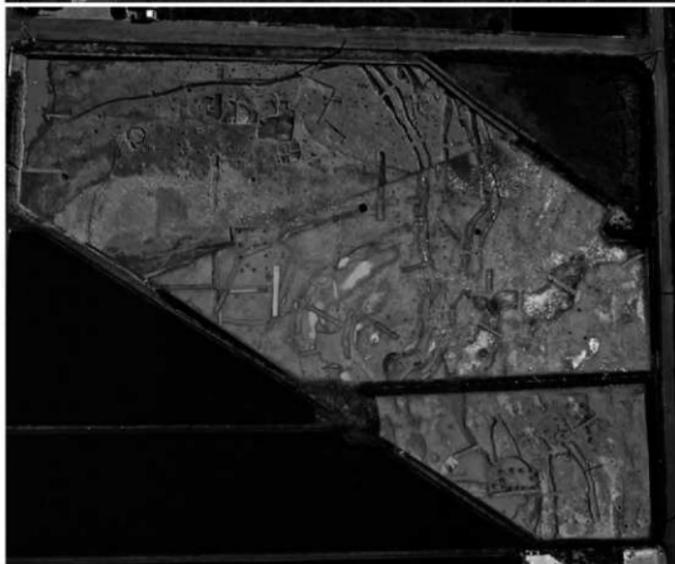
この頃の史料を参考にとすると、12世紀の初めに、大蔵一族の板井種遠は城井兵衛尉種遠と称し、豊前国府の田所・税所両職を兼任し、武士団を率いて近隣地域にも勢力を振るっていたようである。記述は少なく積極的な根拠は得られないが、京ヶ辻遺跡の遺構群は、そのような権力層の低位集団の存在を窺わせ、また平安時代後期の集落形態の研究において良好な一例であると評価できよう。

#### 【参考文献】

- 伊藤 昌広 2001 『柳井田早崎遺跡・柳井田藤ヶ塚畑遺跡』行橋市文化財調査報告書 第29集  
江浦 洋 1996 『古代の土地開発と地鎮め遺構』『帝京大学 山梨文化財研究所研究報告』第7集  
奈良国立博物館 2000 『九州地方に埋納されたやきもの』経塚出土陶磁展6



1. 調査区遠景 (南東から)



2. 調査1区全景 (上空から)



1. 1号竪穴住居跡 (南西から)



2. 2号竪穴住居跡 (北西から)



3. 3号竪穴住居跡 (北西から)



1. 4号竪穴住居跡 (南西から)



2. 5号竪穴住居跡 (南西から)



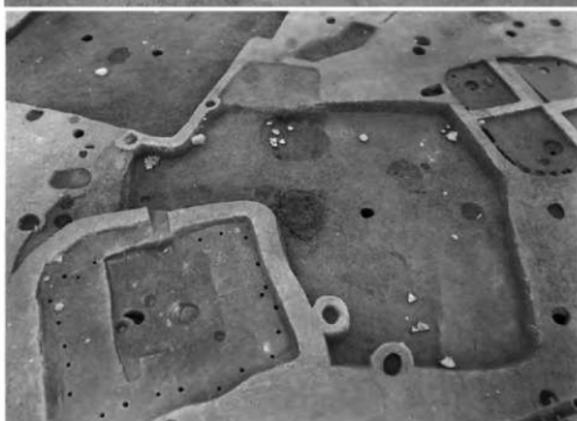
3. 6号竪穴住居跡 (西から)



1. 7号竪穴住居跡 (南東から)



2. 8号竪穴住居跡 (南西から)



3. 9号竪穴住居跡 (北西から)

1. 9号竪穴住居跡完掘状況（北西から）

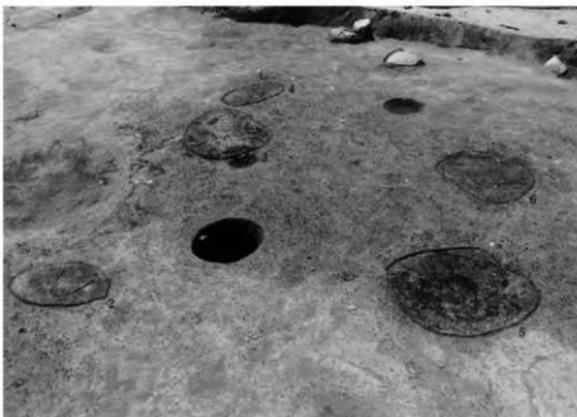


2. 9号竪穴住居跡遺物出土状況（北西から）



3. 9号竪穴住居跡1号小型埴（東から）





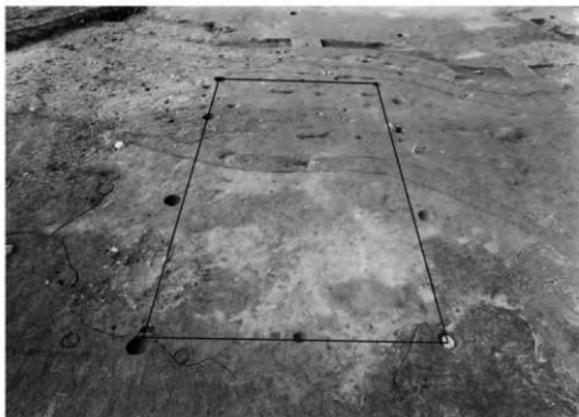
1. 9号竪穴住居跡2～6号小型炉（東から）



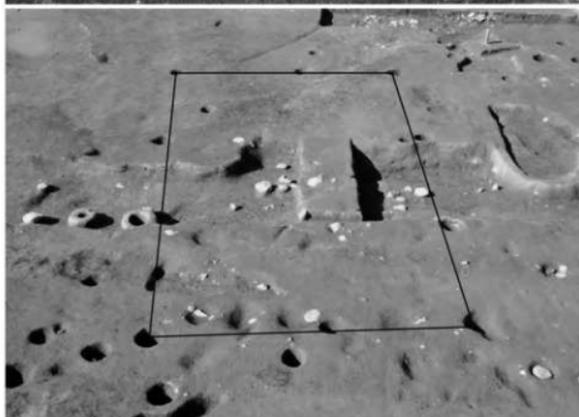
2. 10号竪穴住居跡（西から）



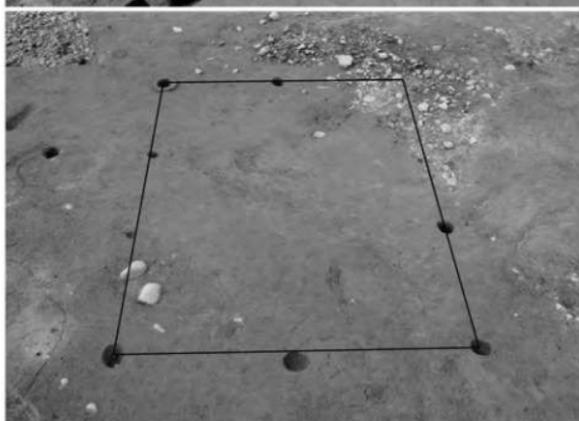
3. 11号竪穴住居跡（北から）



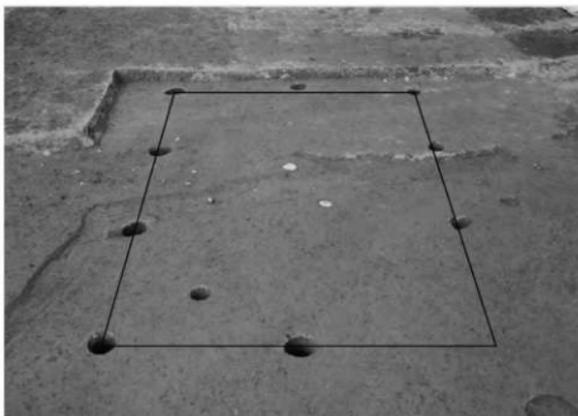
1. 1号掘立柱建物跡 (南東から)



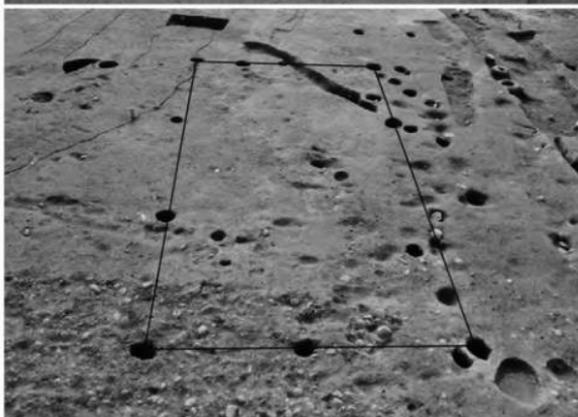
2. 2号掘立柱建物跡 (南東から)



3. 3号掘立柱建物跡 (南東から)



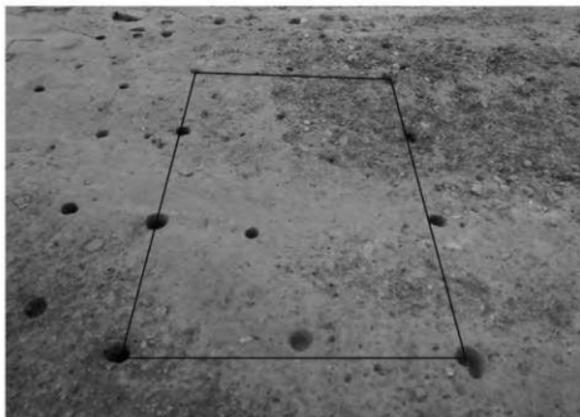
1. 4号掘立柱建物跡 (南東から)



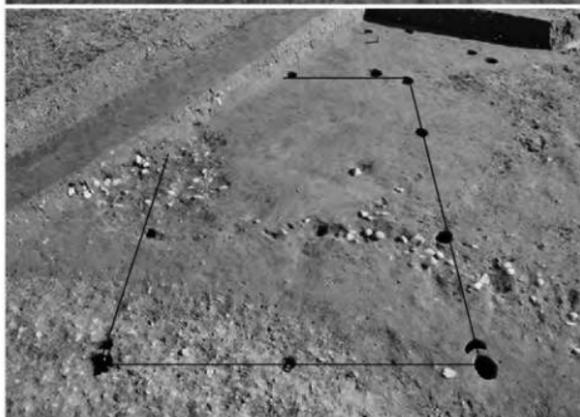
2. 5号掘立柱建物跡 (北東から)



3. 6号掘立柱建物跡 (南東から)



1. 7号掘立柱建物跡 (南東から)



2. 8号掘立柱建物跡 (北西から)



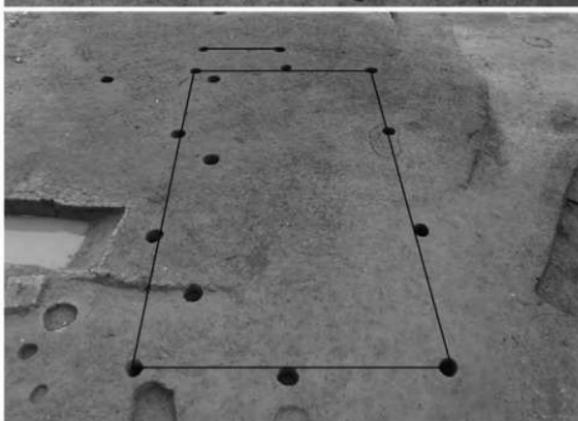
3. 9号掘立柱建物跡 (南東から)



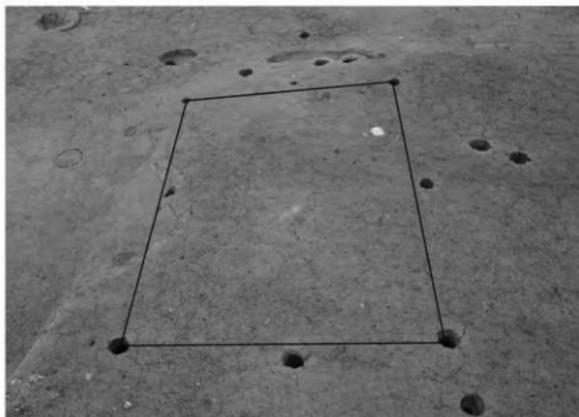
1. 10号掘立柱建物跡 (南東から)



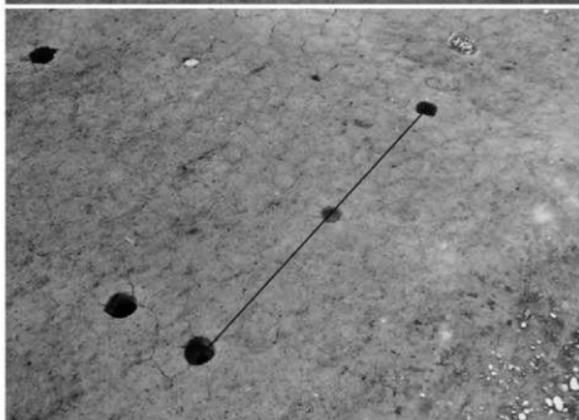
2. 11号掘立柱建物跡 (南東から)



3. 12号掘立柱建物跡 (南東から)



1. 13号掘立柱建物跡 (南西から)



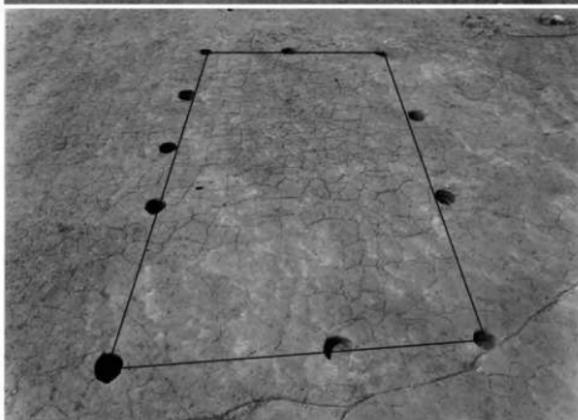
2. 13号掘立柱建物跡目隠し堀 (西から)



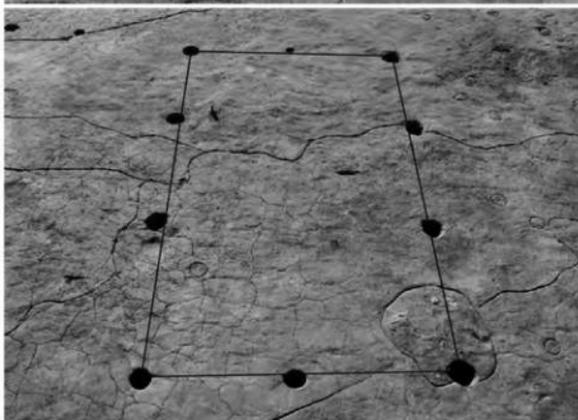
3. 14号掘立柱建物跡 (南東から)



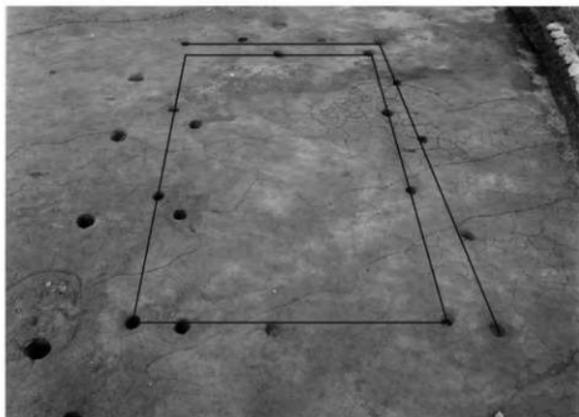
1. 15号掘立柱建物跡 (南東から)



2. 16号掘立柱建物跡 (南東から)



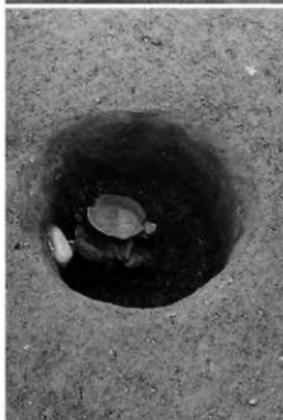
3. 17号掘立柱建物跡 (南東から)



1. 18号掘立柱建物跡 (南東から)



2. 20号掘立柱建物跡 (南西から)



3. 2号掘立P-11 (左: 西から)  
5号掘立P-1 (右: 西から)





1. 1号土坑 (西から)



2. 2号土坑 (南東から)



3. 3号土坑 (東から)



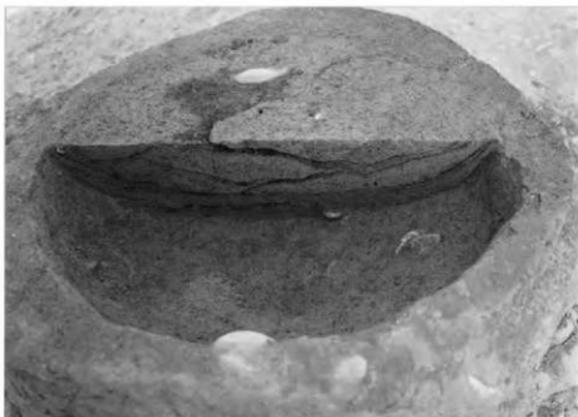
1. 4号土坑 (南東から)



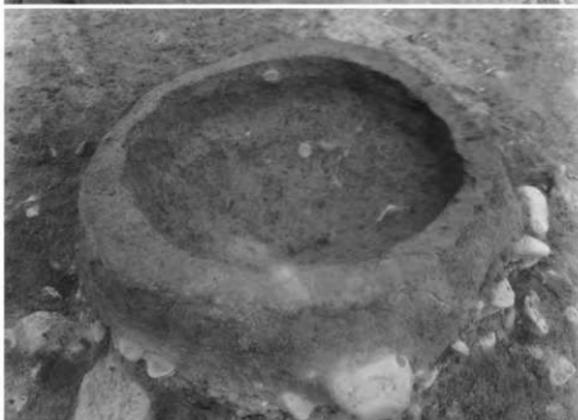
2. 5号土坑 (南東から)



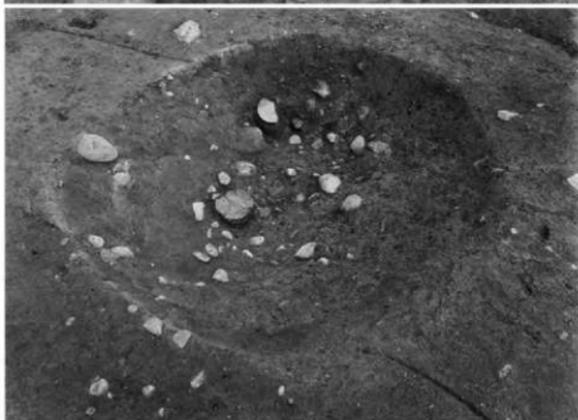
3. 6号土坑 (南から)



1. 7号土坑土層断面 (南東から)



2. 7号土坑 (南東から)



3. 8号土坑 (西から)

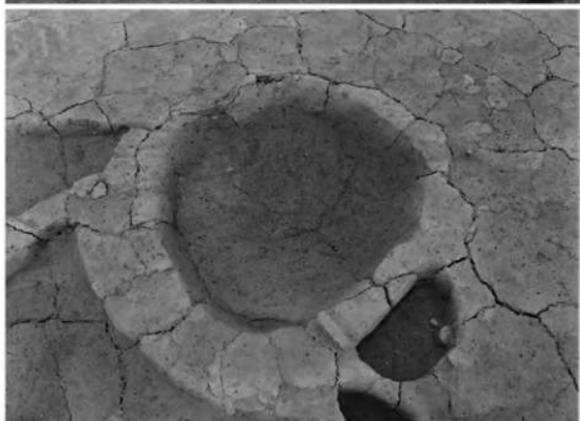
1. 9号土坑（東から）

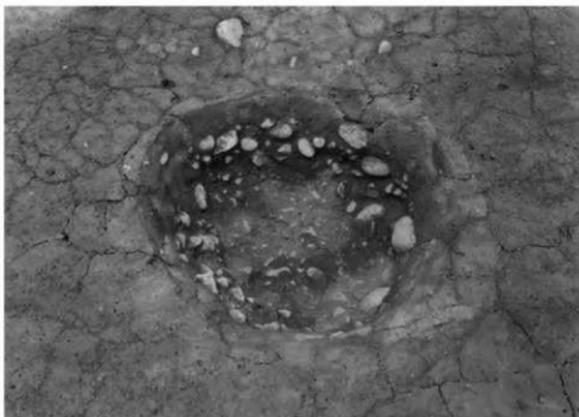


2. 10号土坑（西から）



3. 11号土坑（南東から）





1. 12号土坑 (南東から)



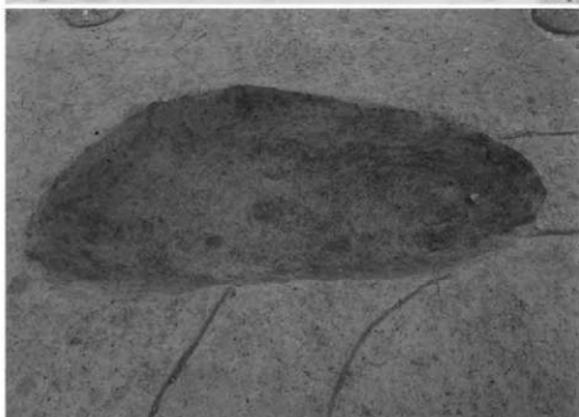
2. 13号土坑 (南東から)



3. 14号土坑 (南西から)



1. 15号土坑基本土層 (南東から)



2. 16号土坑 (東から)



3. 17号土坑 (南から)



1. 18号土坑 (南東から)



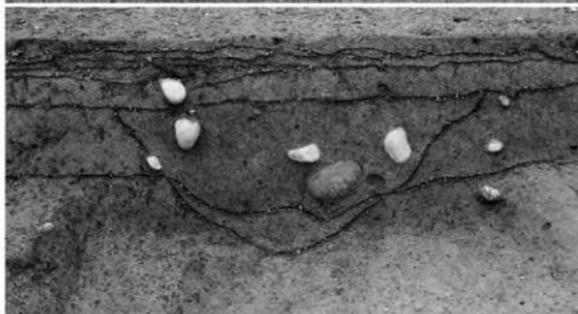
2. 18号土坑遺物出土状況 (西から)



3. 1号円形周溝状遺構 (南から)



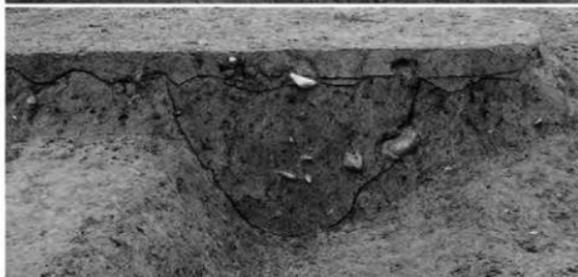
1. 6号溝状遺構遺物出土状況（北から）



2. 10号溝状遺構土層断面（南西から）



3. 14号溝状遺構遺物出土状況（東から）



4. 14号溝状遺構土層断面（南西から）



1. 19号溝状遺構土層断面（南西から）



2. 30号溝状遺構A-A'土層断面（東から）



3. 30号溝状遺構B-B'土層断面（東から）

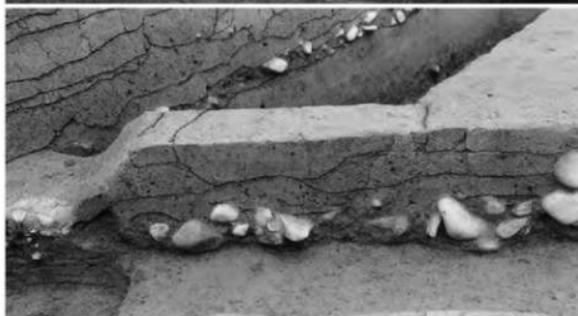


4. 1号不明遺構遺物出土状況（北東から）

1. 1号畦畔全景（南東から）



2. 1号畦畔土層断面（南東から）



3. 2号畦畔全景（南東から）



4. 2号畦畔土層断面（南から）





1. 縄文グリッド全景1 (西から)



2. 縄文グリッド全景2 (南から)



3. 調査1区北側全景 (北から)

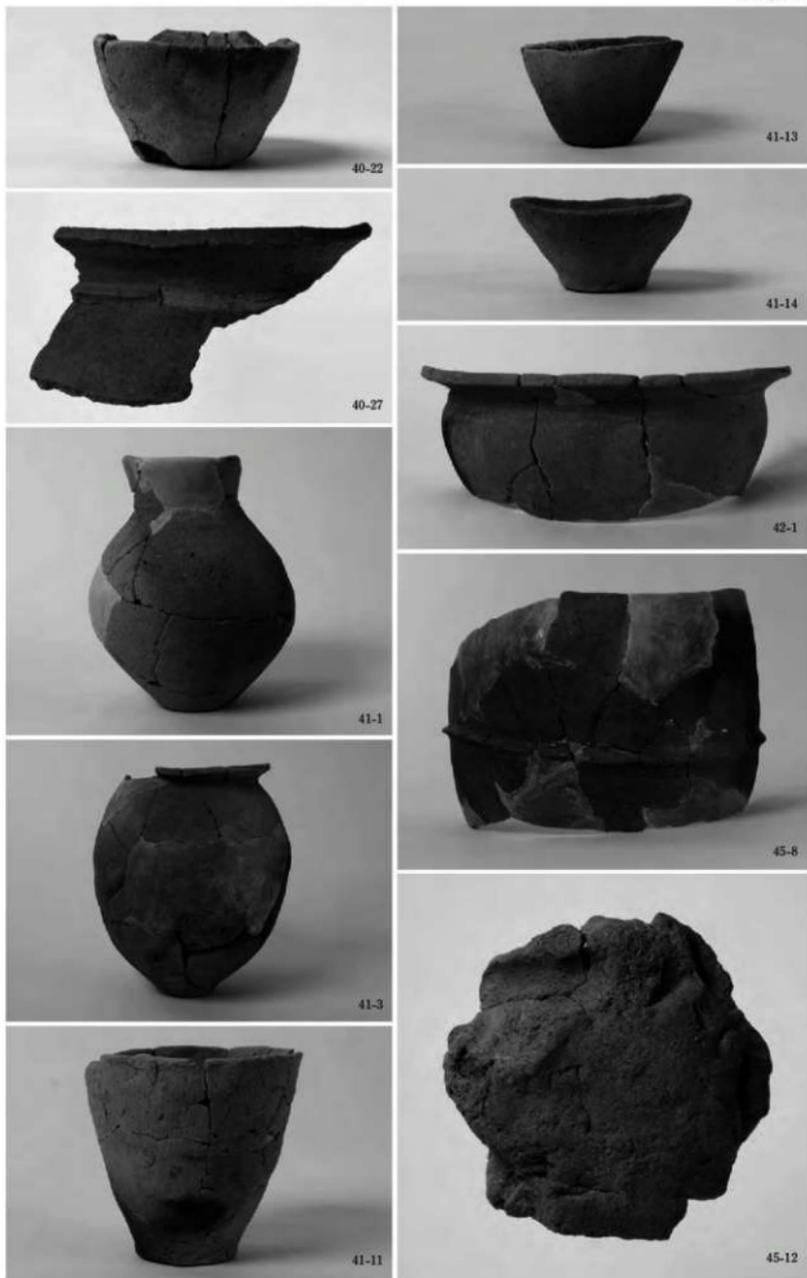




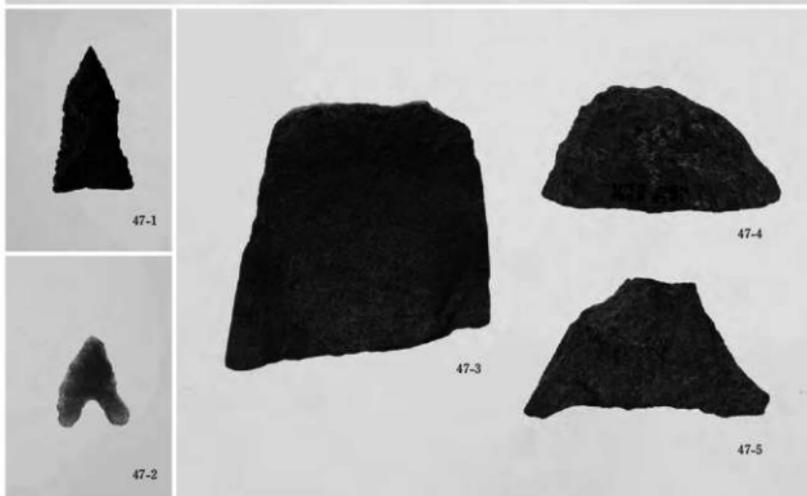
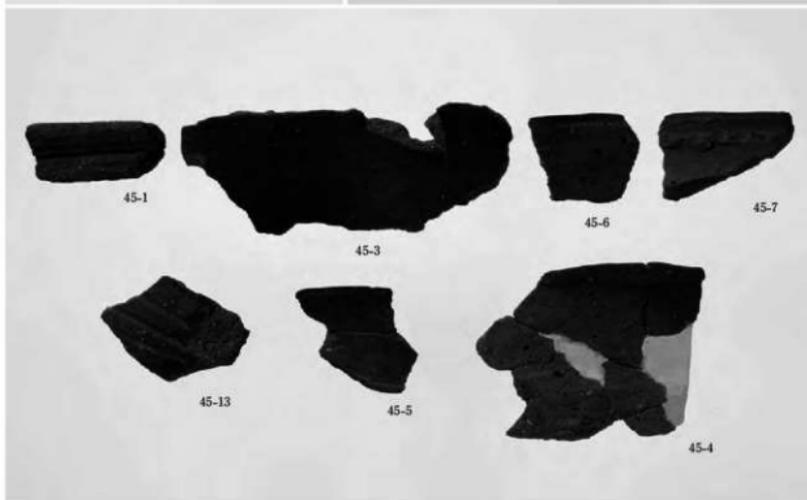
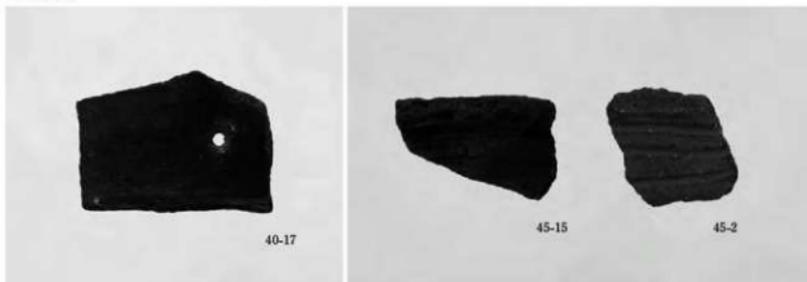


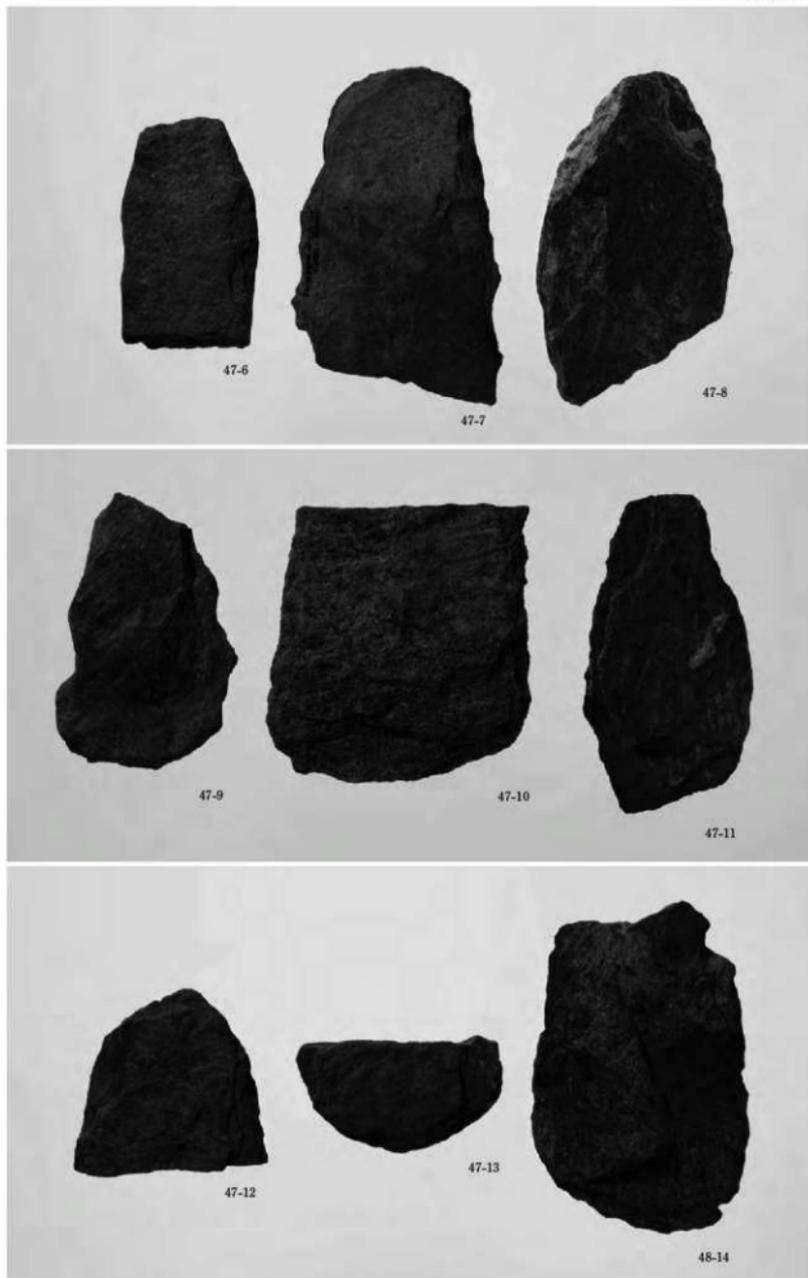
出土土器3

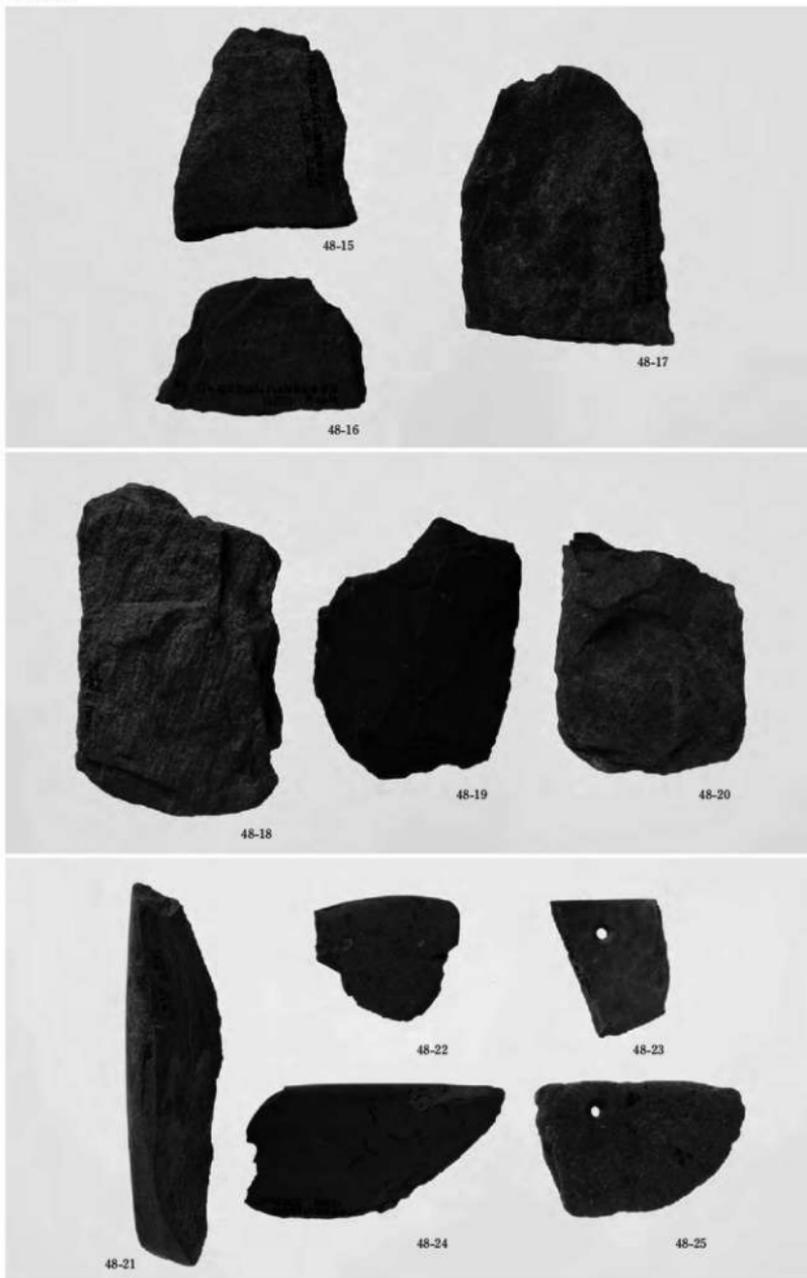


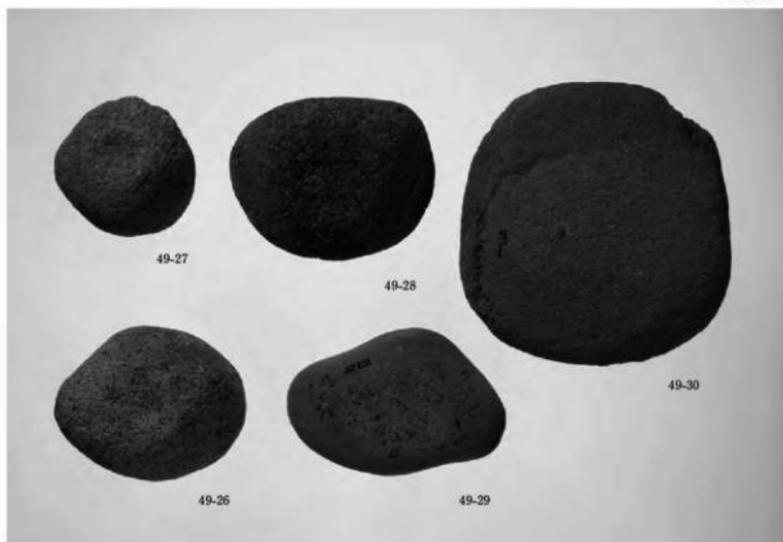


出土土器 5

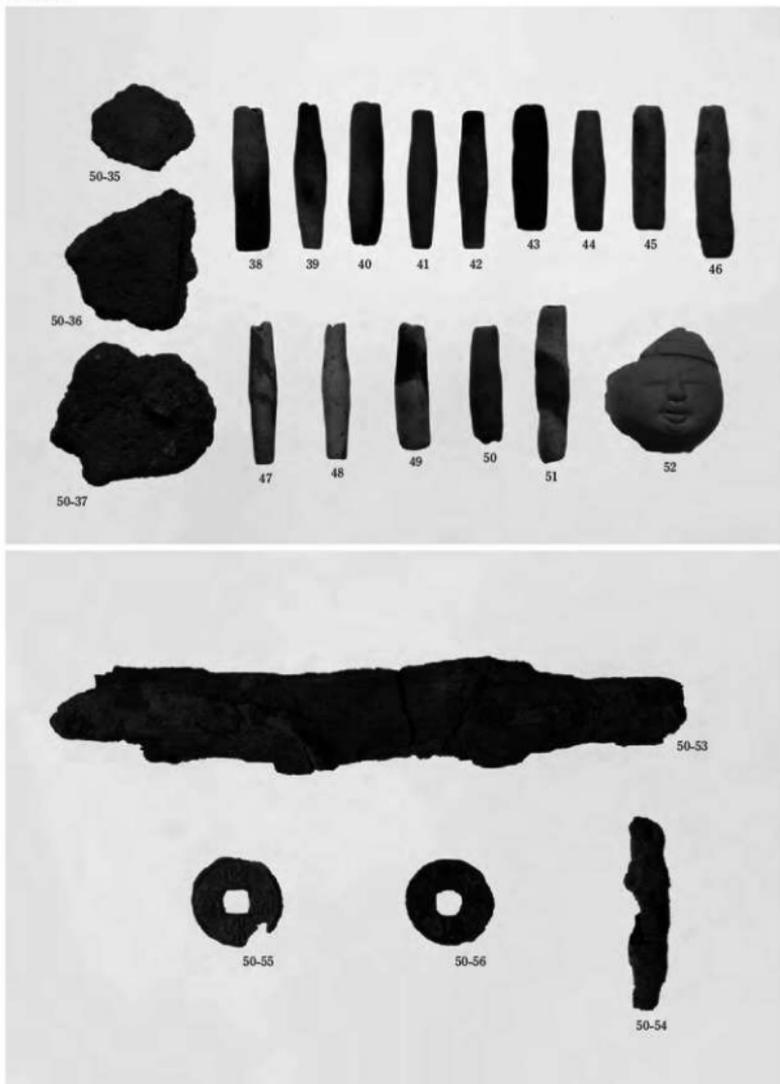








石製品



土製品・鉄製品

## 京ヶ辻遺跡3区

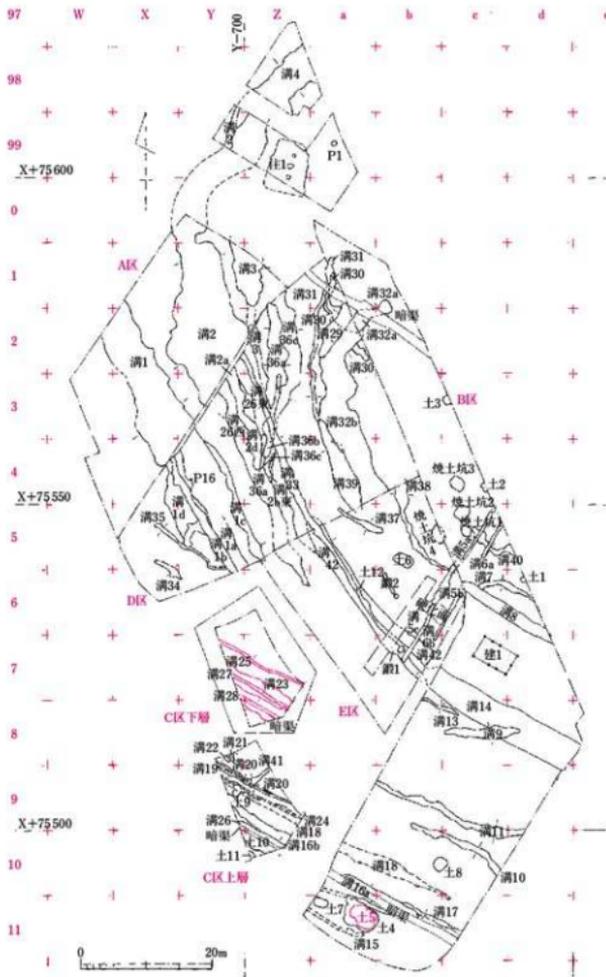


## IV 京ヶ辻遺跡3区

### 1 遺跡の概要

3区は京ヶ辻遺跡の中で最も北側に位置し、さらに北側には谷部を隔てて国作八反田遺跡が存在する。調査区は東西約80m、南北約145mにわたり、調査面積は約5,600㎡である。

3区の地形は比較的平坦で、沖積低地内の自然流路とその脇のやや高い部分に相当する。表土剥ぎの結果、地山に砂礫堆が露出した部分が調査区内（B区北側の1aから2bグリッドにかけての



第51図 京ヶ辻遺跡3区主要遺構配置図(1/750)

部分、B区屈曲部の少し北側で40号溝付近、B区中央付近14号溝の北側と1号掘立柱建物跡の東側、B区南側の4・5号土坑の西側、D区中央南側からE区北西にかけての部分、D区西端など)に分布する。砂礫堆の部分は、B区南側を除くと、周囲より標高がやや高く、遺構の分布が疎らな傾向がある。B区北側の部分は特に、30号溝や32号溝などの自然流路と考えられる溝が、この標高が高い砂礫堆の縁に沿って分布している。沖積平野中の自然流路屈曲部内側にできたポイントバーに相当する可能性がある。また検出面での標高には調査区内で差があるが、全体的には立地する平野自身と同じで、南東側が高く北西側が低い。

調査の結果、弥生時代後期の竪穴住居跡は、標高が比較的高いA区北側で1軒のみが検出される。その他の遺構は弥生時代中期から古墳時代前期の遺物を含む自然流路やピットと幾つかの土坑が散的に分布するのみである。特にA区の住居跡の周辺およびC区の10号土坑の周辺に遺物が多く出土する。また中世ではB区の屈曲部付近からE区東側にかけて遺構が展開し、5・6・8・14号溝に囲まれた中に掘立柱建物跡が検出され、その周囲に土坑・焼土坑・鍛冶炉が散在する。

検出した主要な遺構は、縄文時代の土坑1基、弥生時代後期の竪穴住居跡1軒と中世の掘立柱建物跡1棟、焼土坑4基、鍛冶炉2基のほか、土坑11基、炉跡1基、溝42条である。

#### 基本土層（図版37～39、第52図）

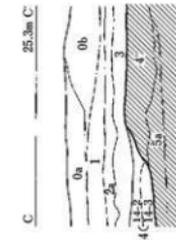
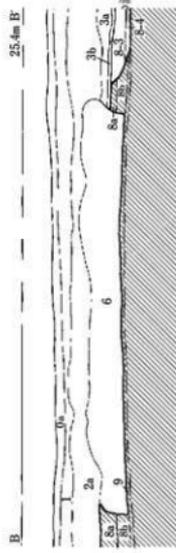
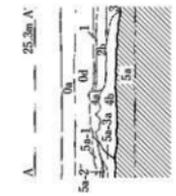
B区とC区で基本土層を測量したが、若干の違いがある。0層は表土、1層は近・現代の耕作土、2層は近世以降の旧耕作土と考えられる。2層はさらに上下に細分された。3層も旧耕作土で、中世末～近世前半頃かと考えられる遺物がわずかに出土した。B区では、この3層の下位までをバックホーによる表土剥ぎを行った。3層も旧耕作土の3aと水田基盤層の3bに分層できた。4層は5号溝と6号溝の間にだけ存在し、平面では検出できていない。2b層の耕作土に対応する畦畔またはその基底部と考えられる層で、a bに細分された。

6層は8号溝の北側で7号溝との間にだけ見られる層位で、土層断面でだけ確認した。一度掘削した後に盛土したようにも見える。比較的短期間に堆積したような礫混じり、ブロック土混じりの土であるが、いわゆる版築状を呈さず土塁にはならないであろう。

5層以下は地山である。5層は砂質土で、礫を多く含む砂礫堆部分があり、周辺よりわずかに高い部分と、自然流路の弧状に流れる内側の部分が重なる所があり、旧河道に伴うポイントバー部分に相当する可能性がある。8層はシルト混じりの少し粘質がある上部と砂質が強く粘質があまりない下部に分かれる。さらに下位の9層はほとんど砂質で締まりもない。

地山は、沖積地内の堆積物で、基本的には水性堆積物であると考えられる。遺跡内でも粒径が細かく、粘質が強いシルト混じりの粘土から、シルトや粘土の土壌が少ない砂質の部分、砂礫堆が露出する部分まで様々で、自然流路とその蛇行に伴う流速の違いなどによって堆積に差があるものと考えられる。色調も灰褐色を基本とするが、上位の水田耕作の影響や、土層の堅さに差があり、地下水位や土中の酸化鉄の影響を受け、やや黄色み（赤み）が強い部分もある。

遺構の埋土が地山に類似するものが多く、検出作業・掘削作業は困難であった。本来は3層とその同時期の近世の旧耕作土の下面で遺構検出を行うべきだが、ほとんどの場所で前述の理由でさらに削り込んで検出を行った。その下位の包含層も遺物が稀薄であったために検出作業で包含層をすべて除去した部分も多い。



C区では東壁土層を基本土層として提示する。0層は表土で現耕作土が中心で、圃場整備時の埋土を含む。a bに細分したが、さらに少しかだけ様相が異なる'付きの土層がそれぞれある。また00層は暗渠埋設に関わる土層である。1・3層は灰褐～褐色のシルト混じり粘土で人為的な攪拌が見られる近世以降の旧耕作土である。ここでは3層を切って、18号溝が形成されている。この土層では近世の旧耕作土が1枚で、その下位にある11・12層は、畦畔状遺構の可能性はあるが、伴う水田層は明確でない。8層は、灰黄褐～にぶい黄褐色のシルト混じり粘質土でシルトと細砂層の互層を示す。部分的にクロスラミナがみられる自然流路内の堆積土で、弥生時代から古墳時代の遺物をやや多く含む包含層である。16・24・26号溝などはこの8層に掘り込まれている。その下位に24層の黒褐色のシルト混じり粘土の弥生時代後期の土器を多く含む包含層が形成されている。南側では3層がないかすでに削平されており、13層の褐灰色シルト混じり粘質土の包含層の下位に畦畔状遺構の可能性のある18層や、水田の可能性のある17層などがあるが、水田遺構としては十分に調査できなかつた。

## 2 竪穴住居跡

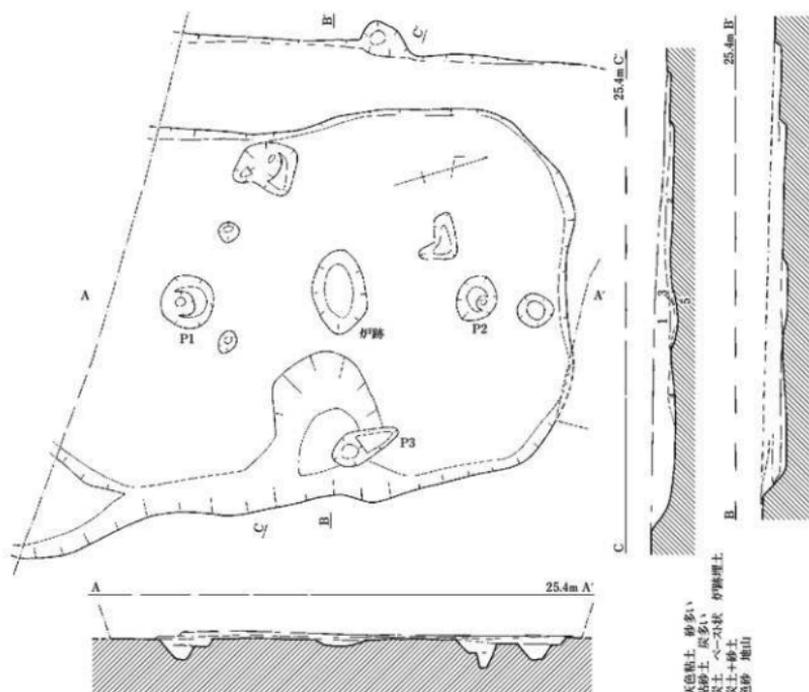
3区ではA区の北側で弥生時代後期の1軒のみ確認された。

### 1号竪穴住居跡 (図版39、第53図)

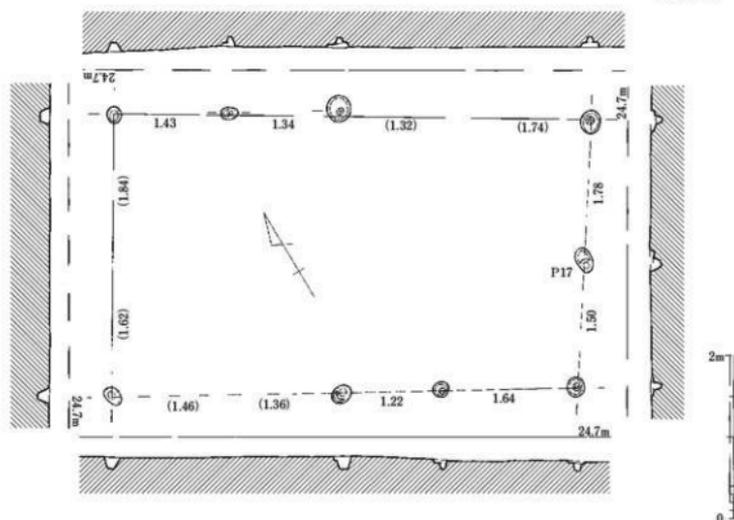
A区の北側、99z～0zグリッドに位置する。現状で南北4.62m以上、東西3.7m以上、深さ0.2mである。北側は削平により判然とせず、南側は調査区外となる。西壁が北に延びる南北に長い長方形を呈すものと考えられる。また南東側に一段高い部分が確認されているので、東側を除く3方向にコの字状に廻るベッド状遺構が付属するのであろう。ベッド状遺構の高さは西側で0.06m、南側で約0.08mである。主柱穴はP1とP2の2本で、径0.46～0.66m、深さ0.25～0.26m、柱間は3.68mである。北側主柱穴(P2)は柱痕がはっきりとしなかつた。掘削中に石庵丁3点(130・132・133)が柱を抜いた跡から出土した。中央に浅い炉があり、黒色炭土が溜まった状況であった。炉は長径1.62m、短径0.67m、深さ0.05mである。炉跡の南西から床面直上で打製石鏝(129)が出土した。東壁中央付近に屋内土坑があり、ピット状の部分(P3)より砥石(127)が出土した。出土した甕の底部形態から弥生時代後期前半から中頃と考えられる。

### 出土土器 (図版55、第54図)

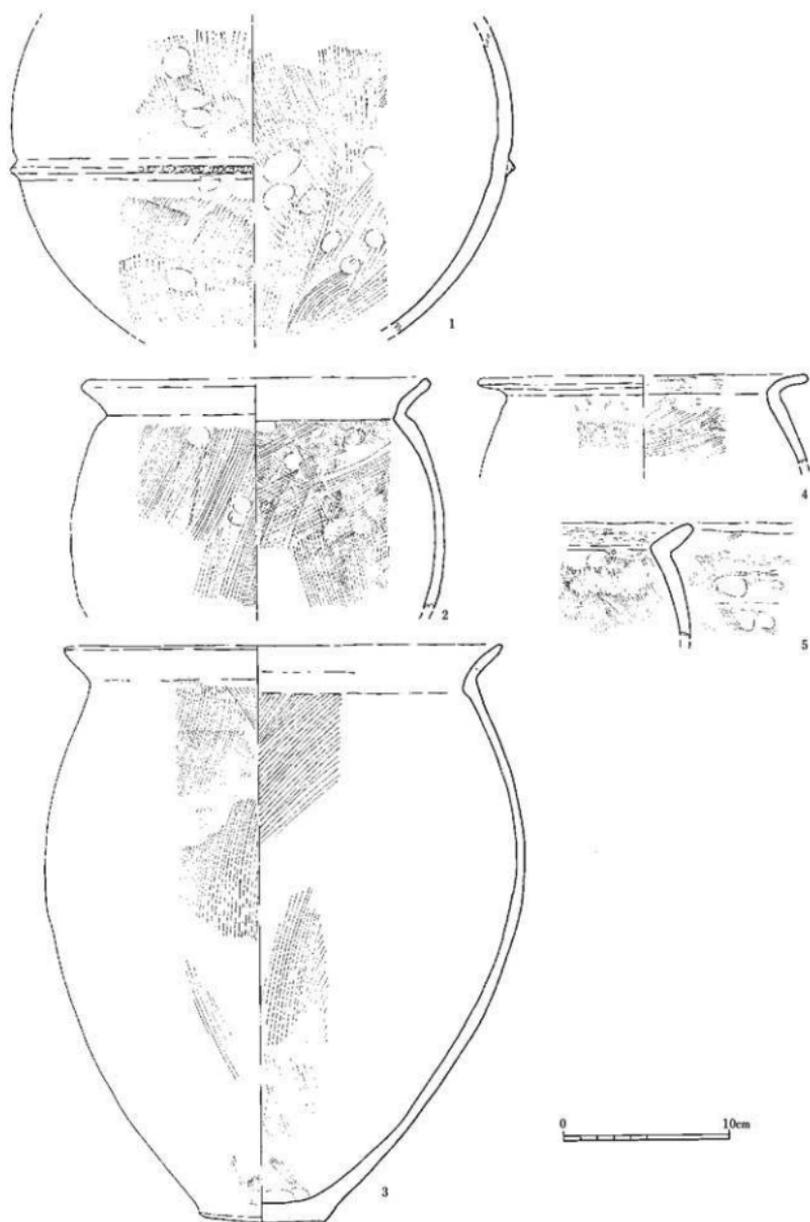
1は壺で、2～5は甕である。1の胴部はやや球形に張り、胴部最大径のやや下位に突帯を廻らし、二枚貝貝殻腹縁刺突により刻目を施している。復元胴部最大径29.4cm。2は復元口径21.2cm。3の底部は平底からやや丸底になりかけのものである。全体に器形が歪んでいる。口径25.6cm、胴部最大径29.1cm、器高35.2cm。器表面は二次被熱により荒れ、剥落や橙色化がみられる。4は復元口径19.05cm。



- 1 黄褐色白粘土、砂多し
- 2 黄褐色粘土、砂多し
- 3 黄褐色粘土、砂多し
- 4 黄褐色粘土+砂土
- 5 黄褐色砂、地山



第53図 1号竪穴住居跡および1号掘立柱建物跡実測図(1/60)



第54图 1号竖穴住居跡出土土器実測図(1/3)

### 3 掘立柱建物跡

B区で2間×4間の掘立柱建物跡1棟が検出された。

#### 1号掘立柱建物跡（図版40、第53図）

B区中央付近で屈曲する部分の東側、7c～7dグリッドの北側で、北側に8号溝、南側に14号溝、西側に6b号溝に囲まれた中に方位をほぼ同じくして位置する。梁行2間、桁行4間の建物跡であるが、北側桁行の東から2個目、西側梁行中柱、南側桁行の西から2個目の柱穴は確認できなかった。また柱穴列が90°で交差せず、北辺5.83m、南辺5.68m、西辺3.46m、東辺3.28mで柱穴間の距離にはバラツキがある。建物方位はN-60°-Wである。検出された9つの柱穴の内7つからは柱痕または抜き跡が確認された。全体に削平され、柱穴の深さは0.16mであり残りは良くない。柱穴は円形から楕円形で径0.12～0.33mである。土層は、柱痕埋土が褐灰～灰褐色のシルト混じり粘土で、炭化物粒φ2～4mmをわずかに含む。掘方埋土は灰褐色のシルト混じり粘土で、鉄分の糸状斑文がみられる。この部分の地山は灰褐色のシルト混じり粘質土である。柱穴間の距離は桁行1.22～1.74m、梁行1.62～1.84m（復元値含む）である。東側梁行中柱のP17柱穴掘方埋土から瓦器碗片が出土したが、整理中に行方不明である。伴うと考えられる周囲の溝から考えると、14世紀に埋まったものと考えられる。

### 4 土坑・焼土坑

#### (1) 土坑

土坑は12基検出された。平面形が円形を呈すものが3号、楕円形が1・5・9・10・12号、不整楕円形が2・4・7号、長方形に近いものが6・8号である。調査時には不明遺構扱いのSX番号から報告時に土坑に改めた（7号土坑はSX10から、8号土坑はSX11から、9号土坑はSX19から、10号土坑はSX14から、11号土坑はSX21からそれぞれ変更した）。

#### 1号土坑（第55図）

3B区の中央やや北側の東壁、3cグリッド北西にある。半分ほどが調査区東壁にかかっていて、完掘していないためにはっきりしないが、平面楕円形状を呈すと想定される。断面は浅い皿状で、長軸0.94m、短軸0.65m以上、深さ0.07mである。図化できない中世の土師器片が出土したことから、中世以降であろう。

#### 2号土坑（第55図）

3B区の中央やや北側の東壁、4cグリッド南東にある。半分ほどが調査区東壁にかかっていて、完掘していないためにはっきりしないが、平面不整楕円形状を呈すと想定される。断面は浅い皿状を呈す。長軸1.59m、短軸0.64m以上、深さ0.11mである。低い台形の高台が付く瓦器碗片が出土したことから、13～14世紀頃であろう。

#### 出土土器（第57図）

6は3層から出土した瓦器碗底部である。ミガキの単位は明瞭でない。復元底径5.5cm。

#### 3号土坑（図版40、第55図）

3B区の中央屈曲部付近東壁、6dグリッド北西にある。半分ほどで調査区東壁にかかっていて、完掘していないためにはっきりしないが、平面円形状を呈すと想定される。断面は逆台形状を呈す。現状で長軸1.85m、短軸0.96m、深さ0.55mである。図化できない瓦器碗小片が出土し、13～14世紀頃であろう。

#### 4号土坑（図版41、第55図）

3B区の南側、11aグリッドの北側で検出された。北側の一部を12号溝に切られ、ほぼ同じ位置の5号土坑を掘り込んで作られている。断面が浅い掘り鉢状を呈す。長軸6.16m、短軸4.00mで、深さは0.60mである。東側に延びる自然流路を切っていて、掘削時には湧水が多かった。そのため床面の検出が難しかったが、柱穴などは確認できなかった。3層の灰褐色～褐色のシルト混じり粘土には上位水田層から人為的攪拌の影響が及んでいて、鉄分の糸状斑紋が顕著にみられる。4層は灰褐色のシルト混じり粘土で下部に小礫を少量含む。5層は灰褐色のシルト質粘質土で粘質がやや強い。炭化物粒 $\phi$ 2～4mmを微量と礫を含む。上層ほど上位にある水田の影響が強く、下層ほど粘質が強い。出土遺物は縄文時代後期の土器片が多いが、下位にある5号土坑を壊しているので本来はそちらに帰属する遺物であろう。打製石鎌と考えられる遺物も出土した。上層から土師器皿や土師質鉢口縁部が出土していることから、中世と考えられる。

#### 出土土器（図版57、第57図）

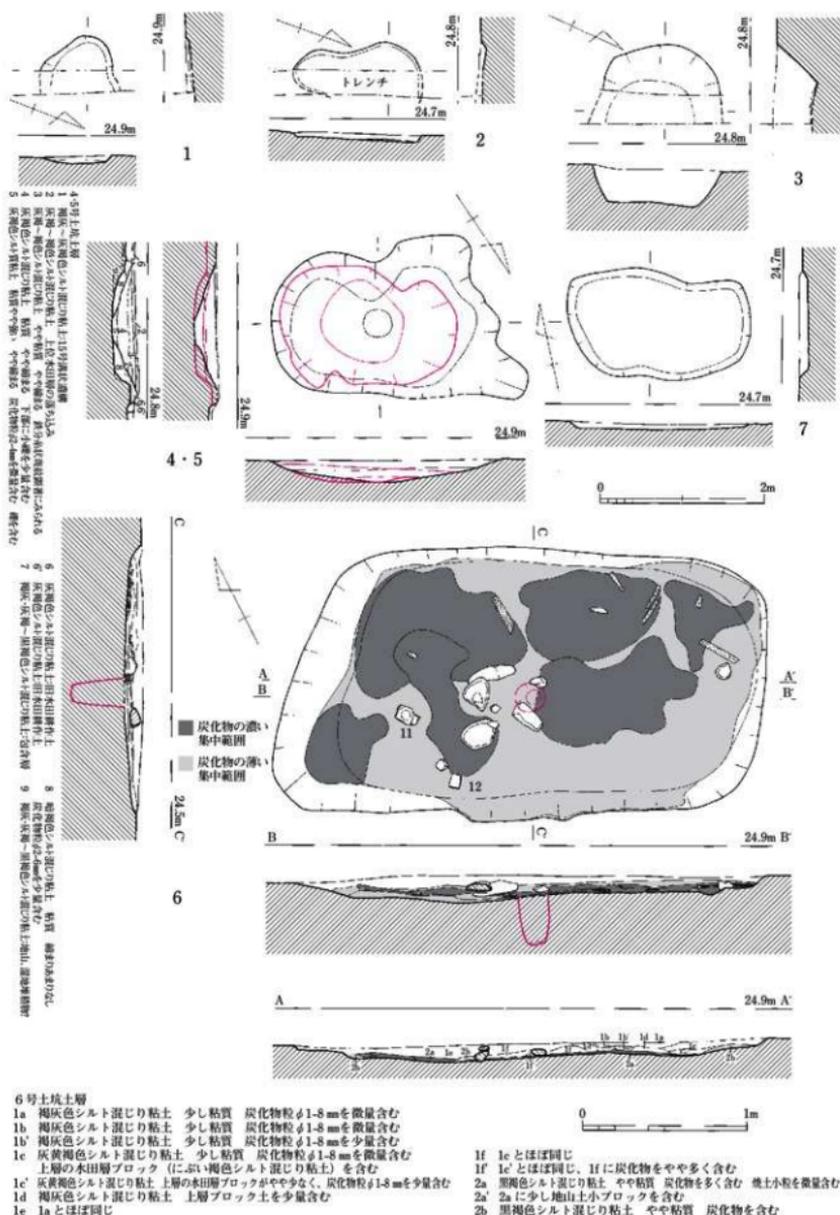
7は土師器皿底部片で、8・9は縄文時代後期の土器である。7はヘラミガキがなされている。8は細めの凹線の上に縄文が施され、下位は二枚貝貝殻条痕調整がされた磨消縄文系の鉢または深鉢片である。9はキャリパー形の器形の深鉢片で、口縁端部近くに一条の沈線を施し、沈線の下側はナデ、最大径近くは板状工具によるナデ、その下位は貝殻条痕後に条痕が残る程度にナデる。

#### 5号土坑（図版57、第55図）

4号土坑の下位から検出された。4号土坑を掘っている段階ですでに湧水が多く、床面の検出が難しかったのは同様だが、柱穴など付属施設は確認されなかった。断面は皿状で床は比較的平坦である。長軸2.20m以上、短軸1.48m以上、深さ0.18mである。湧水状況にあったが有機質遺物は特に出土せず、湿地性貯蔵穴の可能性もあるが断定できない。埋土は暗褐色のシルト混じり粘土で粘質が強く、炭化物粒 $\phi$ 2～6mmを少量含む。なお下位の土層は褐灰・灰褐色～黒褐色のシルト混じり粘土で粘質がかなり強く、調査区内の他の部分の砂礫・砂質やシルト質とは異なり、湿地の堆積物に似る。湧水が多いことから旧河道堆積物であろうか。敲石・磨石・台石類が3点出土した。上位の4号土坑出土土器と併せて考えると縄文時代後期中頃であろう。

#### 出土土器（図版57、第57図）

10は縄文後期の深鉢または鉢の底部である。外面の調整は条痕後の指押さえとナデで、指によって斜めにナデ上げている。内面は指押さえとナデである。



第55図 土坑実測図1 (1/30、1/60)

#### 6号土坑（図版41、第55図）

E区の東側、5bグリッド南側にある。平面は平行四辺形状を呈し、断面は浅い皿状を呈す。長軸3.01m、短軸1.69m、深さ0.17mである。内部の床面近くから炭混じり土（最も集中する部分は、土混じり炭とも言うべき土層）が検出されたが、形状が比較的整い、規模が大きかったために焼土坑とは区別し、ここでは土坑として報告する。

内部には3分の2ほどに炭化物の集中する部分があり、そのほか薄い炭混じり土はほぼ全面に亘る。後述するが、焼土坑としたものは、形状が不整形で、内部に入っていた炭混じり土は床面からやや浮く傾向にある。それに対して6号土坑の炭混じり土は、上層の埋土に炭化物が含まれるものの集中することは無く、掘り下げると下層、床面上に炭混じり土層が現れた。

中央付近から礫が4点出土した。北側の1点には被熱痕跡が認められたが、他の3点には見られなかった。西側と南側の2点は比較的扁平な礫で台石状であったが、敲打痕や磨り痕跡などは見られず、4点とも使用された痕跡はなかった。礫の分布する範囲の床面が特に被熱しているというわけでもなく、炉跡状にはならなかった。遺物は礫の周囲と西側から出土している。炭化材が北東側から出土したが、遺存状態が悪く、取り上げはできなかった。多くは厚さ1cm程度の板状の材であった。炭混じり土を掘り下げると、中央からピットが1基確認された。丁度中央に位置し、埋土も似ていることから、伴う可能性が高い。床面には明瞭な赤化や硬化を伴う被熱痕跡は確認されなかった。この6号土坑の周囲のみ小ピット群と杭跡群が集中する。規則的に並ばず、上層などは復元できなかった。出土した土師器碗は12世紀頃と考えられるが、図化できない小片の瓦器碗片も出土し、小さな三角形高台を持つものでやや退化した様相を持つので13世紀まで下る可能性が高い。また小片で図化しなかったが、長さ3cm、幅2.5cm程度で不純物の多い鉄滓が2点出土した。

#### 出土土器（図版55、第57図）

11は土師器碗で、12は土師質の鉢または鍋の口縁部である。11は灰黄色を呈し、器壁が薄くて焼成も良い。内外面共にミガキがされているようであるが単位がみえない。高台上部の外面に沈線状の工具痕がみられ、付近にイネかと考えられる種子圧痕がみられる。高台部が部分的に二次被熱を受け橙色化し、体部下半に煤が付着する。高台径7.8～8.0cm。12の外部器表面も二次被熱を受け剥落するなど荒れている。

#### 7号土坑（第55図）

B区の南側西壁付近、11aグリッド北西にある。断面は浅い皿状を呈す。長軸2.22m、短軸1.40m、深さ0.11mである。埋土から縄文土器の可能性のある土器小片が出土したが、小片過ぎて不明である。規模的に5号土坑と似ていて、立地を抜きにすると同様の機能をもつ土坑である可能性がある。他の遺物は出土していない。

#### 8号土坑（第56図）

B区の南側、10bと10cグリッドにまたがっている。断面は浅い皿状を呈す。長軸2.14m、短軸1.72m、深さ0.19mである。粗製の縄文土器片が出土し、縄文時代後期中頃～後半であろう。

出土土器 (図版57、第57図)

13は内外共に二枚貝条痕地の黒褐色を呈す縄文土器胴部片で、粗製の深鉢であろう。

9号土坑 (第56図)

C区の北側、9zグリッド北西にある。断面は浅い皿状を呈す。長軸1.94m、短軸1.26m、深さ0.24mである。弥生時代後期の高杯などが出土したが、近世以降の18号溝に切れ、古代以降の土器片が出土した24号溝を切っている。

出土土器 (第57図)

14は高杯の脚部である。

10号土坑 (図版42、第56図)

C区の南西、10zグリッド北西にある。西側と東側両端が調査区外に伸びるが、平面は長楕円形を呈すと考えられ、断面は浅い皿状を呈す。長軸5.92m以上、短軸1.90m以上、深さ0.11mである。個体識別はしていないが、1100点以上の土器片などが出土した。完形に復元できるものはいずれも細片化し、土器溜まり状を呈す。遺物は、弥生時代中期後半の土器を少量含み、後期中頃～後半を主体に古墳時代前期の土器が少量、中期の土器がごくわずか出土した。小片のため図化できなかったが、須恵器片が出土したことから古墳時代中期ごろに最終的に埋まったものと考えられる。甕・壺・高杯・台付鉢・器台を含み、石廬丁や姫烏産黒耀岩製の剥片も出土した。

出土土器 (図版55、第57図)

15は壺で、16・18は器台、17は脚台付製塩土器で、19は高杯である。15は二重口縁壺の口縁端部である。16は瀬戸内系の装飾ある器台の脚部片で、外反する端部を上下に摘まんで拡張させ一条の沈線を廻らしている。その上位に細い線刻で連続三角文を描く。胎土は良く器壁が薄い。17は脚台付製塩土器の脚部と考えられる手捏ねの土器であるが、被熱痕は明瞭でない。18は器台脚部で外面にはタタキ痕が残る。19は高杯脚部で小さい円孔が二段に開けられる。脚部と杯部の接合部から剥離しているが、接合をよくするための刻み目が施されている。

11号土坑 (第56図)

C区の南西隅、10zグリッド北西にある。遺構のほとんどは調査区外で、遺構の北東側約4分の1のみを調査した。本来は平面が円形から楕円形を呈すと考えられ、断面は浅い皿状を呈す。現状で長軸1.21m以上、短軸0.68m以上、深さ0.16mである。埋土は褐灰色のシルト混じり粘質土で、炭化物粒 $\phi$ 2~4mmを微量含む。土器小片が出土したが図化できなかった。出土土器は10号土坑と同じく弥生時代後期が主体であるが、古墳時代前期頃に埋まった可能性が高い。

12号土坑 (図版42、第56図)

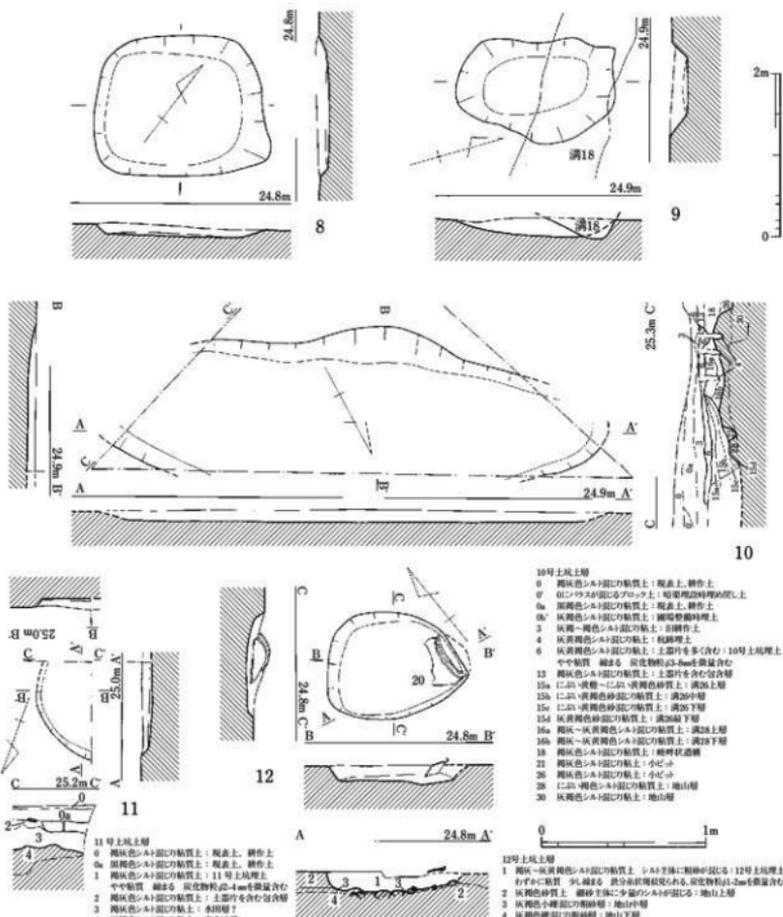
E区の西側、6aグリッド北東にある。33・42号溝の下位から検出された。断面は浅い皿状を呈す。現状で長軸0.85m (復元値0.86m)、短軸0.70m、深さ0.13mである。埋土は褐灰~灰黄褐色のシルト混じり粘質土で、炭化物粒 $\phi$ 1.2mmを微量含む。弥生時代後期の甕の上側約4分の1が片側だけ浮いた状態で出土した。

## 出土土器 (第57図)

20は甕である。くの字に折れた口縁下に断面三角形突帯を貼り付ける。外面は二次被熱を受け一部器表面が剥落する。復元口径30.8cm。

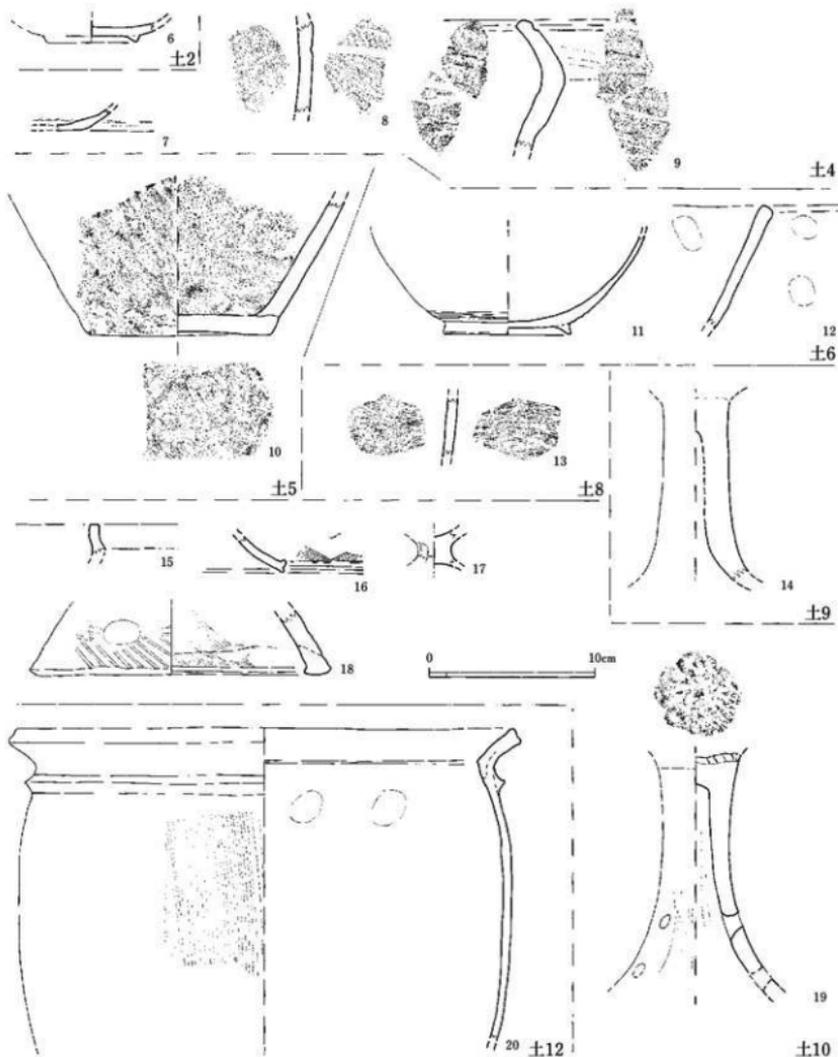
## (2) 焼土坑

B区の中央付近に4基が比較的集中する。いずれも平面は不整形な楕円形状で断面は浅い皿状を呈す。この4基は焼土坑として調査したが、いずれの土坑からも炭混じり土が検出された。その中には焼土小粒を含むが、土坑壁や土坑底が明瞭に面的に赤化や硬化をしたような被熱痕跡は検出できていない。そのために、現地で被熱痕跡が残らない程度に火が使用されたのか、それとも炭混じ



第56図 土坑実測図2 (1/30、1/60)

り土が遺物とともに廃棄されたのかは不明である。ただし1号焼土坑は炭混じり土と共に鍛冶炉で使用されたと考えられる籾羽口片や鉄分の少ない軸状の滓がややまとまりを持って出土しており、廃棄土坑である可能性が高い。いずれも残りが悪く、すでにかんりの部分を削平されていると考えられる。土坑が浅く検出時からほぼ上面で炭混じり土が分かり、残りが悪いなかでも床面からは浮く傾向にあった。



第57図 土坑出土土器実測図(1/3)

### 1号焼土坑（図版43、第58図）

5cグリッド北西で検出した。現状で長軸1.63m、短軸1.61m、深さ0.11m。炭化物の濃い炭混じり土の集中範囲は、中央部分の他4ヶ所に散在し、遺物も散在的である。炭混じり土は検出面付近にあり、薄層である。土師器皿、瓦器椀、瓦質足鍋・鍋、東播系鉢、土師質彌羽口、鉄滓などが出土した。羽口片と鉄分が少なく不純物が多い釉状の滓は北側と中央部と南側の炭混じり土の集中範囲から出土した。出土した瓦器椀からは13～14世紀ごろと考えられる。

#### 出土土器（図版55、第59図）

21・22は土師器皿で、23は瓦器椀、24・25は瓦質足鍋の脚部で同一個体である。21・22の底部には回転糸切り離し後に、板状圧痕がみられる。21は口径14.0cm、底径8.7～8.9cm、器高2.9cm。22は復元口径12.8cm、底径8.0cm、器高2.8cm。23の外面上部にはミガキがされているようであるが、単位が不明である。下半には指頭圧痕が顕著である。内面上部には平行する回転ヘラミガキが、下部には手持ちミガキがなされている。高台は断面三角形に近いものを貼り付けるがきれいな円形でなくやや歪で、体部も歪みが大きい。二次被熱を受け内面に煤が付着する。復元口径16.4cm、底径6.5cm、器高5.1～5.7cm。

### 2号焼土坑（図版43、第58図）

5cグリッド北西で検出した。やや不整な隅丸長方形に近い平面形で、現状で長軸2.27m、短軸2.05、深さ0.18mである。炭混じり土の分布は北西側隅付近、南西側隅付近、北東側隅付近に分かれ、1・3号の炭混じり土の薄い方と同じくらいである。遺物は西側に偏って、土師器皿・小皿、瓦器椀などが出土した。

#### 出土土器（第59図）

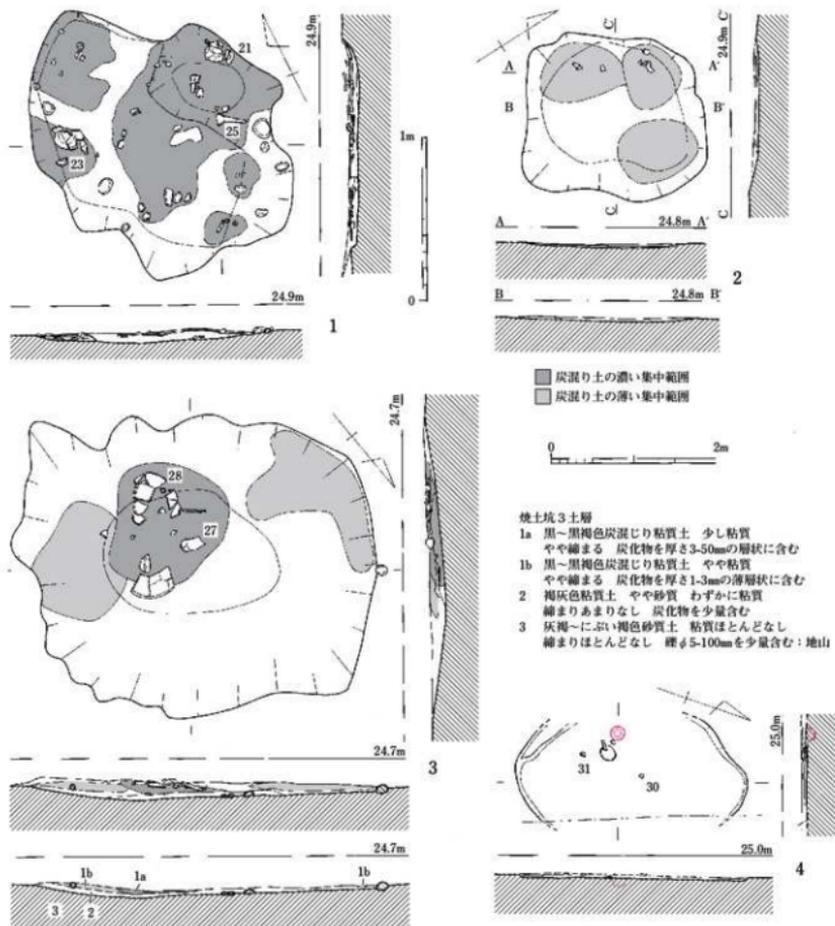
26は白磁椀底部である。胎土は白色で滑らかでなく、微小な黒色粒子をやや多く含む。釉は少し褐色を帯び白濁し気泡がみられる。復元高台径7.8cm。

### 3号焼土坑（図版43・44、第58図）

4cグリッドの南西で検出した。大部分は削平されているがそれでも今回調査した4基の内では残りが良い方で、現状で長軸2.24m、短軸1.87m、深さ0.14mである。炭化物の濃い炭混じり土（1a層）の集中範囲は中央部付近で、遺物の出土もその範囲内からがほとんどである。その西北側と東南側にやや炭化物の薄い集中部分（1b層）が薄層状に広がる。瓦質足鍋、瓦器椀、土師器小皿、混入で弥生土器が出土した。出土した瓦器椀や足鍋の口縁部形態などからは14世紀後半～15世紀前半頃と考えられる。

#### 出土土器（図版55、第59図）

27は瓦器椀で、28は瓦質足鍋である。27の底部はやや丸く、小さな断面三角形高台を貼り付ける。口縁近くは回転ヘラミガキを施し、それ以外の部分は手持ちヘラミガキを行っている。器形はやや歪む。復元口径16.2cm、高台径6.5～6.8cm、器高5.9～6.2cm。28は底部と脚1つを除いて完形に近く復元できた。口縁部はやや短く「く」の字に折れる。底部はよく被熱し、碎片化している。また底部には敲き痕が明瞭に残らない。口径29.8～30.7cm、器高22.2cm。



第58図 焼土坑実測図(1/30、1/60)

#### 4号焼土坑(図版44、第58図)

E区東壁付近で検出した。B区の該当部分を調査したが、その際には気づかず検出できていない。E区調査時には壁際を壁から0.6m程の範囲を土層のために土手状にやや高く残して表土剥ぎをしていたが、表土剥ぎをした時に西側は気づかずに削平してしまった。残っていた部分は高く残した部分を作業員の手作業で掘り下げ検出した部分である。平面形は不整楕円形を呈していたと推測する。現状で長軸2.80m、短軸1.28m、深さ0.07mである。残りが悪く、埋土に炭が混じってはいたが全体に薄く分布し、他の3基のように炭化物の濃い集中範囲は見られなかった。土坑底から小ピットが検出されたが、伴うものかどうかは分からないが、小ピットの埋土は焼土坑の埋土と基本的に同じであった。小片だが、出土土器などからは14世紀後半頃と考えられる。

## 出土土器（59図）

29は土師器皿、30は青磁碗、31は瓦質土器鉢である。29は回転糸切り離し後に板状圧痕がみられる。30の胎土は灰白色で精良で、内面に草葉文が描かれる。釉調は灰黄緑色で、外面が一部白濁する。

## 5 炉跡

炉跡は1基がD区で検出され、鍛冶炉がE区で2基検出された。

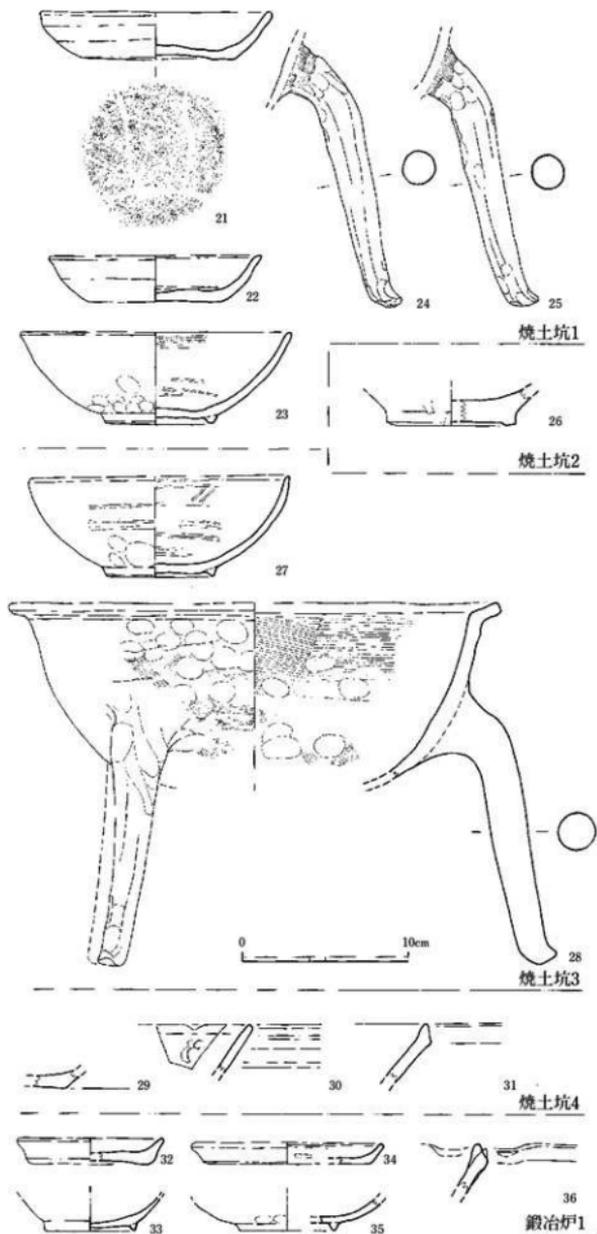
### 1号炉跡（図版44・45、第60図）

1号炉跡はD区の中央やや北側、3cグリッド北西にある。弥生時代後期以降中世以前と考えられる32b号溝を切っている。平面不整形で、断面は浅い皿状を呈す。長軸0.58m、短軸0.56m、深さ0.09mである。埋土は3層に分かれ、1層は褐灰色のシルト混じり粘質土で炭化物を多く含む。2層は灰黄褐色のシルト混じり粘質土で炭化物をわずかに含む。3層は灰黄褐色のシルト混じり土で焼土粒を微量含む。地山は褐灰～灰黄褐色のシルト混じり土で、 $\phi$ 5～15mmの焼土粒を少量含む、東側壁の一部が赤化・被熱する。周囲からは堅穴住居跡の壁や主柱穴になるような柱穴は確認されなかった。しかし、1号住居跡も比較的近く、周囲の溝などから弥生時代後期の土器片が出土しているため、この周囲に住居跡があったが、壁などが削平され炉だけが残された可能性は残る。遺物は弥生中期から後期と考えられる土器片が出土し当該期の可能性が高いが、小片で流れ込みの可能性もあり、弥生時代後期から中世までの範囲で帰属時期を絞れない。

### 1号鍛冶炉（図版45・46、第60図）

1号鍛冶炉はE区の南西側、7bグリッド北西にあり、33・42号溝を切っている。平面不整な楕円形状で、断面は皿状を呈す。長軸1.06m、短軸0.74m、深さ0.15mである。埋土は7層に分かれ、1層は褐灰色の粘質土で、炭化物粒 $\phi$ 3～10mmを少量含む。2層は黒褐～暗赤褐色の炭化物を多く含むシルト混じり粘土のブロックで、北側の一部に分布する。3層は褐灰色のシルト混じり粘質土で、炭化物粒をわずかに含む、焼土の小ブロック・2層土ブロックを少量含む。遺物を多く含む。4層は、黒褐～褐灰色の炭化物を多く含むシルト混じり粘土で、焼土ブロックを少量含む。中心からやや北側に偏って、南側の3つの大きめの隙の間を埋めるように層状に分布する。5層は橙灰～灰褐色のシルト混じり粘質土で、炭化物をごくわずかに含む。6a層は灰白～灰黄色の粘土で、上面には被熱・赤化しやや硬化した部分が見られる。炭化物粒 $\phi$ 2～20mmを多く含む、中央付近に見られる。羽口そのものは原位置を保っていないと考えられるが、輪の羽口固定用の粘土と考えられる。6b層は、6a層粘土に5層土のブロックが混じる。羽口固定用粘土の崩壊土であろう。7層は灰褐色のシルト混じり粘土で、部分的に被熱しやや赤化し、 $\phi$ 2～4mmの焼土粒を含む。炭化物を多く含む。炉下部の埋め戻し土であろうか。内部からは炉壁は出土していない。

本遺構の位置する地山はにぶい黄褐色の砂混じり土で、西側壁が弱い被熱により赤化する。周囲からは覆屋を構成するような柱穴は確認されなかった。また、2号鍛冶炉で検出されたような溝も



第59图 烧土坑·1号鍛冶炉出土土器实测图(1/3)

伴っていない。粘土の張り替え等は不明で、土層からは複数回の作業の明らかな痕跡は認められないが、内部から出土した土師質の中口径の羽口片は少なくとも4個体以上が使用されている。

遺物の分布は、1～4層では、1.5～2.0cmほどのやや大きめの礫が中央の空間を空けて西北側・東北側・やや南側と三角形に近く分布する。その北側に2層と4層の炭混じり土のほとんどが分布する。土器片の多くは礫に囲まれた三角形の内部で出土する。羽口は中軸から少し東側に偏って出土し、1点は三角形の内部で(116)、もう1点は北東側礫のすぐ北側で出土した。また、その東隣で大きめの鉄滓が出土している。中央付近から出土した1～4層の羽口と5～6a層羽口が同一個体で一部接合した。5～6a層では、土器片はやはり南側から出土し、羽口片は中央付近の6a層粘土の東側(117)、上層の北東側の礫の下部からややまとまって4点が破片で出土した(118)。羽口片の1点は北西側で出土した。東側出土の3点の羽口は同一個体で一部接合した。北側の個体は、前2者とは別個体である。やや大きめの鉄滓は北側で羽口片の東側で2点出土した。6b～7層では遺物は小さいものが多いが、土器片は中央付近と北側に、やや大きめの羽口片は南側1点と北東側で出土し、鉄滓は北側に分布する。中央付近から西側にかけての4点の羽口片が接合し(119-120)、前3者とは別個体である。下層から出土した礫には、敲き痕がある礫が3点(147-149)ある。また、遺構埋土の4層を中心に、5層、7層から土壌サンプリングを行い、水洗選別を行った。5mm、1mmメッシュの篩を使用し、鉄製遺物の回収にはネオジウム磁石を用いたところ、小さな鉄滓片は出土したが、粒状滓や鍛造鉄片は出土していない。

出土土器は細片が多く、13世紀前半から14世紀前半頃に帰属すると考えられる。滓には大型の碗形滓はなく、不純物や錆の塊状のもの、発泡する褐色釉状のものも多く、細片が多い。

#### 出土土器(第59図)

32は土師器小皿、33は土師器碗、34は瓦器小皿、35は瓦器碗、36は土師質土器鉢である。32は1～4層の東南側から出土し、胎土は白黄茶色で、復元口径8.8cm、底径6.9cm、器高1.6cm。33は6b～7層の中央やや南側から出土し、胎土は灰黄色で器壁が薄く作りは丁寧である。内面上部はミガキが施されていると考えられるが、単位は不明である。小さな断面三角形高台を貼り付け、二次被熱により橙色化する。復元底径6.6cm。34は36の付近から出土し、復元口径11.6cm、復元底径9.8cm、器高1.25cm。35は1～4層の東側から出土し、やや大きめの高台を貼り付ける。内面には部分的にミガキが施されているが単位は不明である。復元高台径5.8cm。36は1～4層の南側から出土した鉢または掃り鉢の片口部で、器表面に煤が付着する。

#### 2号鍛冶炉(図版47、第60図)

2号鍛冶炉はE区の南西側、6bグリッド北西にある。全体に残りが悪く、炉本体は平面やや崩れたハート形で、断面は浅い皿状を呈す。長軸0.62m、短軸0.58m、深さ0.06mである。西南側床面が被熱しており、その部分の地山は橙色を呈し、やや締まり、鉄・マンガンの沈着が多い。その西側壁付近に粘質がやや強い褐色のシルト質粘質土が残っており、羽口の固定用粘土の痕跡と考えられる。下部から円形の小ピットが検出され、径0.11m、深さ0.12mである。北東方向に伸びる溝があり、付属すると考えられ、長さ3.72m、最大幅0.52m、深さ0.07mである。周囲からは覆土を構成するようなピットは検出されなかった。炉本体からは図化できないほど小片だが土師器片と鉄滓が出土した。出土した土師器小片から、中世の所産であろう。



調査時には不明遺構扱いのSX番号を付し、別の番号から報告時に溝に改めたものがある。32号溝はSX6とSX7から変更した部分を含み、38号溝はSD8bから、39号溝はSD31bから、40号溝はSX1、41号溝はSX18、42号溝はSD14bからそれぞれ変更した。

#### 1号溝 (第61図)

A区の西側からD区に直線的に続くが、北側は調査区外に伸びる。南側はB区南側では延長が確認されなかったため、C区とE区の間未調査部分から始まっているか、南側は削平されてしまっている可能性がある。方位はN-29°-Wであり、条里状地割りの方角N-31.5°-Wと近い。調査者が異なることもあるが、検出面標高がA区では高く、D区では表土剥ぎの時に削り気味で低い。そのためかA区では1本に見えた溝が、D区では分かれることになり、D区西側で細く分かれた方を1b、東側を1aとした。西北側では1bからさらに西側に溢れる様に1dが分かれ、東南側では1aからさらに東側に溢れる様に1cが分かれた。ただし1bと1d、1aと1cは埋土差である可能性もある。基本的には同じ溝と考え、A区とD区を合わせた長さ44.90m以上、最大幅8.20m、深さ0.60mである。断面はA区では底が比較的平らな幅の広い逆台形である。D区では1cがそれに近く、1aは西側が深い逆台形状、1bは幅がやや狭い逆台形である。1aの埋土は、ふい褐色のシルト主体に細砂を含む粘質土で、炭化物粒φ2~4mmを微量に含む。以下色調は同じで、1bはシルト主体で細砂を含むがやや粘質が強い、1cはシルトと細砂が主体で粗砂を含む。1dは細砂とシルトが主体で粗砂を含む。下位の地山は粗砂が主体で礫を含む。遺物の出土は北側が多く、南側では少ない。出土土器から、一部に流れ込みの縄文土器片と弥生時代中期のものをわずかに含むが、弥生時代後期前半から中頃が主体で、わずかに弥生時代後期後半、終末期から古墳時代初頭頃のものを含む。

#### 出土土器 (図版55、第62図)

37は壺、38・39は甕、40は支脚である。37は広口壺で、口縁端部を上下に括む。底部は平底から丸底になりかけである。内面には粘土紐積み上げの痕跡がかなり残り、また歪みが大きい。外面二次被熱により器表面剥落する。復元口径14.8cm、器高16.2~17.95cm、底径6.5~6.6cm。38は甕と考えられる資料で、くの字に曲がった口縁端部を上部に跳ね上げる。口縁外面にはヘラ状工具による文様がある。器壁が薄い。39は甕の底部で焼成後穿孔されているが、孔の上下に溝状に石器に見られる敲打のような感じで器表面を凹ませていて、その部分が良く磨れている。縄などの固定用であろう。40は支脚で全体に二次被熱を受けている。

#### 2号溝 (図版47・48、第61図)

E区の北側からD区の中央やや西側を通りA区まで西北西に向かったあと、使用されていた水路と暗渠排水があって掘れなかった未掘部分付近で東北に向きを変えて調査区外に伸びる。この屈曲部の内側のA区には1号竪穴住居跡があり、B区北側には砂礫堆があって、微高地状にやや高い部分となっている。2号溝はこのやや高い部分の周囲を廻るように蛇行して流れていることが推測される。C区北側からA区の未掘部分の手前、屈曲部付近までで長さ約61m、屈曲し4号溝の北西側まではさらに21m以上伸びている。最大幅は12.4m、深さ0.28m。A区の北側で2号溝と4号溝の関係は一部2号溝が4号溝を切るが、A区南側では一緒になっていて、2号溝と4号



溝は同一の可能性がある。調査区が不連続なので2号と4号に分け、遺物も分けて取り上げた。D区では中央部分の2aとその東西両脇の2bに分かれた。2bは33号溝と36号溝に切れられ、それらを2aが切っている。断面は西側（蛇行の外側）に最深部が偏る形である。

a区での土層は、1層は橙斑灰褐色粘質土で、炭粒・土器を含む。2層は砂混黒褐色粘質土で、炭粒・土器を多く含む。3層が（砂混）灰色粘砂土で、炭粒を含む。4層は暗灰色砂で、砂質だが若干粘土を含む。5層は灰色砂土でやや粗砂・石を含む。D区では、2aの埋土は灰黄褐色の細砂主体で粗砂を含む土混じり砂で、A区での3層に相当するのであろう。この部分の地山は橙色の礫混じり粗砂である。2bの埋土は、灰黄褐色の細砂主体でシルトを含む土混じり砂である。

遺物の出土は北側A区の1号竪穴住居跡周辺が多く、南側では少ない。出土土器から、abに時期差は特にみられず、一部に流れ込みの縄文時代後期の土器片と弥生時代中期のものをわずかに含むが、弥生時代後期前半から中頃が主体である。

#### 出土土器（第62図）

41・42は壺、43・44は甕、45は蓋、46・47は器台である。41は長頸壺の胴部で、頸部と胴部に低めの突帯を貼り付ける。胴部はやや扁球形である。胴部最大径15.8cm。42は広口壺の口縁部である。復元口径18.8cm。43は復元口径19.8cm。44は復元口径18.0cm。45は蓋で緩やかに外反した端部を少しつまみ上げる。端部近くに穿孔されている。復元口径11.8cm。器高3.3cm。46は復元口径11.4cm。47は復元底径14.0cm。

#### 3号溝（第61図）

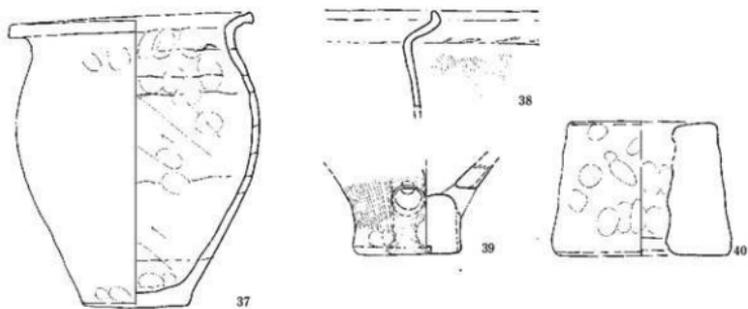
A区の中央やや東側で検出され、北側は暗渠排水などによる未調査区域外に伸びる。A区とD区の境界付近で一度底のレベルが上がって無くなるが、D区の北側でその延長が現れる。南側は36号溝に切られてその下位にあるが、33号溝と39号溝との間にある砂礫堆の部分に当たって無くなっている。A区で長さ10.2m以上、幅4.80m、深さ0.33mである。D区で長さ12.6m、幅1.75m、深さ0.20mである。断面は幅広の逆三角形に近い。埋土は灰黄褐色のシルト主体に粗砂を含む粘質土で、炭化物粒φ2～3mmを微量含む。下位の地山は粗砂と小礫である。遺物の出土は北側A区が多く、南側D区では少ない。出土土器から、弥生時代後期である。

#### 出土土器（第62図）

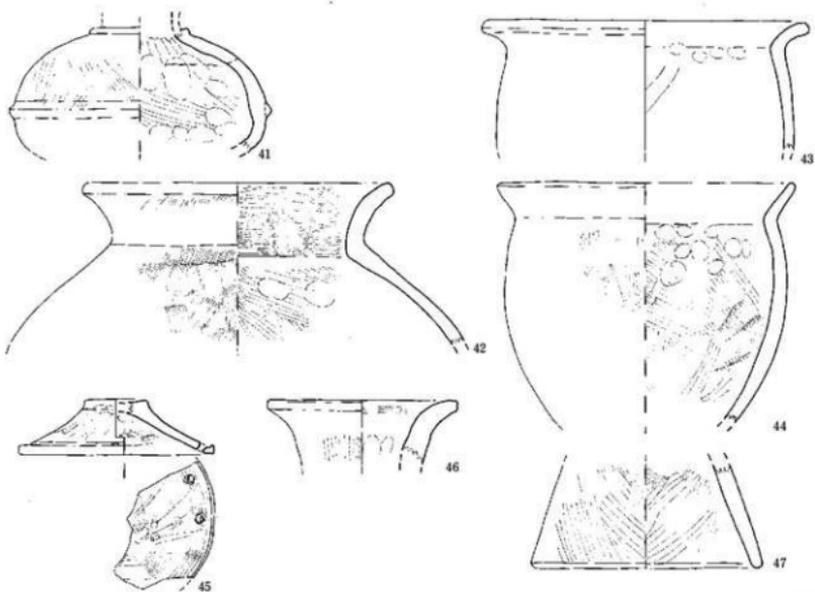
48は壺で、49は甕である。48は鋤先状の痕跡が残る壺の口縁である。内外面に一部ミガキがみられるが単位は明瞭でない。復元口径21.5cm。49は「く」の字口縁の甕で器壁が薄い。復元口径29.4cm。

#### 4号溝（図版48、第61図）

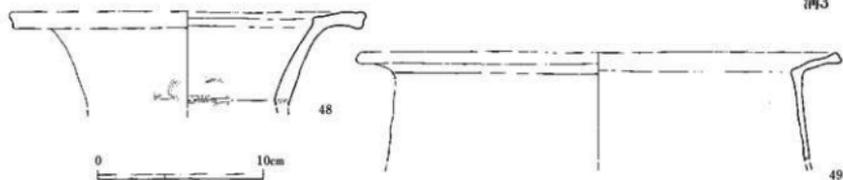
A区の北側で検出され、1号竪穴住居跡付近の高地部分を廻るように蛇行する。北側は調査区外に伸びる。南側は一部で2号溝に切られるが、未調査区を挟んだA区南側では合流しているようにも見え、前述のように同一の可能性があるが、分けている。長さ19.70m以上、最大幅6.00m、深さ0.41mである。断面は1本ではない影響か、やや不整形形で、深部が2ヶ所ある。埋土は1層が橙斑灰褐色粘砂土で、2層が橙斑灰褐色粘質土、3層が橙白色柔砂で、この部分の地山は、小石を含む砂である。出土土器から、弥生時代後期前半から中頃である。



清1



清2  
清3



第62图 1~3号溝出土土器実測図(1/3)

#### 出土土器（第65図）

50は壺、51・52は甕である。50は胴部最大径位置のやや下側に刻目突帯を貼り付ける。復元最大径21.2cm。51は「く」の字口縁の甕で、復元口径26.6cm。52は「く」の字口縁の端部を下側に少し摘まみ、器壁が薄い。復元口径28cm。

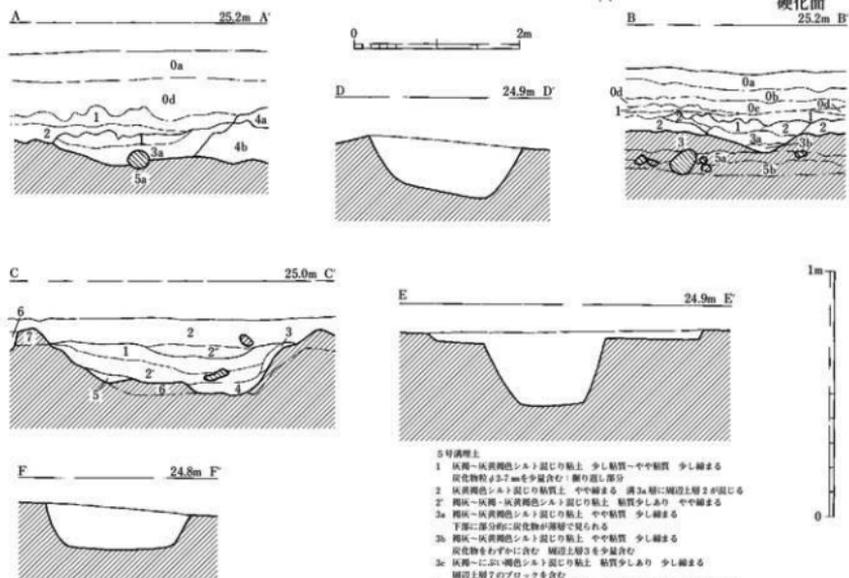
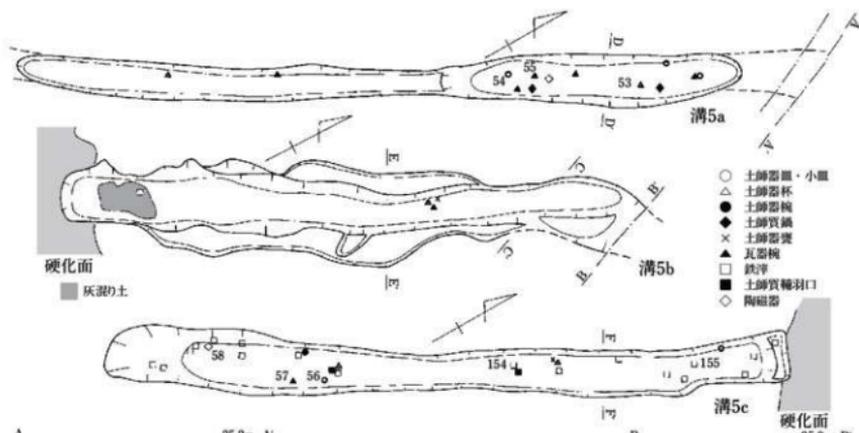
#### 5号溝（図版48～50、第63図）

B区中央の屈曲部の北側からE区の南側まで緩やかに蛇行して、ほぼ直線的に延びる。北東側は平面では途切れるように見えるが、底のレベルが上がりがながら、B区調査区北東壁では調査区外に延びることを確認した。南西側は36号溝を切った辺りで終わっている。検出時に少し削りすぎており、B区とE区の境付近で溝底のレベルが上がりが一端途切れるが、B区南壁では底のレベルが上がりがながらも、途切れることなく続くことを確認した。

B区の1号掘立柱建物跡の西側延長方向の部分では溝が途切れ、空間が空いていた（後に硬化面部分として述べる）。見かけで途切れている部分をもって、北から5a・5b・5c号溝と呼称する。5aと5cとはほぼ一直線だが、5bは少し西にずれていて、東西両側にテラスが付く。E区北東壁付近でとった土層断面図では5bは掘り返しが2回行われている。5号溝の東側には1.8m程の間隔をもって6号溝が平行している。5号溝と6号溝の間には後述する硬化面部分を除いては、硬化面などは見られなかった。硬化面はないが、平行することと規模も似ていることから、間の空間が通路状で2つの溝が側溝である可能性がある。なお、5a号溝から出土した取り上げNo.7と6a号溝のNo.1の瓦器碗61は同一個体で接合したことから、2つの溝が同時併存し、同じ頃に埋まったことの傍証となろう。途中の空間部も含めた長さ26.80m以上で、それぞれは5aが長さ8.68m以上、幅6.00m、深さ0.41m、5bが長さ6.76m以上、幅6.00m、深さ0.41mである。5cが長さ8.16m、幅6.00m、深さ0.41mである。5aは40号溝を切り、5bは38号溝を切り、5cは33・42号溝を切る。断面は逆台形状を呈す部分が多い。

2b層はシルト混じり粘質土でそのほかはシルト混じり粘土である。B区の北壁と南壁の土層では、1層は灰黄褐色で、やや粘質で少し締まり、炭化物粒 $\phi$ 3～7mmを少量含む。2b層は灰黄褐色で、ややシルト質で少し締まる。基本土層の2a層と下位の溝3層とが混じった土層。3層は褐灰～灰黄褐色で、やや粘質で少し締まる。3a層は下部に部分的に炭化物が薄い層状にみられる。3b層は炭化物がほとんど無く、基本3層土を少し含む。E区の北側では、1層は灰褐色で、粘質が少しあり締まり、炭化物粒 $\phi$ 2～7mmを微量含む。2b層は褐灰～灰褐色土で、粘質が少しあり締まる。3層は褐灰～いびい褐色で、粘質が少しあり少し締まる。6層土ブロックを含む。4層は褐灰～いびい褐色で、粘質がわずかにありわずかに締まり、炭化物粒 $\phi$ 2～6mmをわずかに含む。

遺物は、土師器皿・小皿と瓦器碗などの土器は5aの北側にやや集中する傾向がある。5bは散発的にしか遺物が出土せず、小片が多い。1・2号鍛冶炉と比較的近く、製鉄関連遺物である土師質輪羽口片と鉄滓片が南側の5cで多く出土し、中でも北側と南側に片寄る傾向がある。5a・5cと5bとでは、掘り返しがあるbが幾分新しい時期の可能性が示唆されるが、5bからは時期を示すはっきりした遺物が出土していない。5aと5cとでは出土した遺物からは若干5aが古く5cが新しい傾向がうかがえるが、瓦器碗や土師器皿などからはともに13世紀前半～後半頃に収まる年代が考えられる。また、流れ込みだが、弥生時代後期の土器片や9世紀代の須恵器片が出土



- 5号溝埋土層
- 0a 埋戻し-褐色シルト混じり粘質土 覆埋されている(埋木田跡)上
  - 0b 埋戻し-灰褐色シルト混じり粘質土 覆埋されている(埋木田跡)上
  - 0c 埋戻し-灰褐色シルト混じり粘質土 覆埋されている(埋木田跡)上
  - 0d 埋戻し-褐色シルト混じり粘土 やや硬質 埋木田跡上土層埋戻し
  - 1 灰褐色-にじみ灰褐色シルト混じり粘土 灰化物較を少量含む 覆埋されている(埋木田跡)上
  - 2 にじみ灰褐色シルト混じり粘質土 やや硬質 覆埋されている(埋木田跡)上
  - 2' 埋戻し-灰褐色シルト混じり粘土 覆埋されている(埋木田跡)上の溝上部への落ち込み
  - 3 にじみ灰褐色シルト混じり粘質土 少し硬質(地味)
  - 4a にじみ褐色シルト質粘質土 やや硬質(ブロック)上混じり(1本目の埋木田跡?)
  - 4b にじみ褐色粘質土 やや硬質(ブロック)上混じり(2本目の埋木田跡または埋木田跡)上
  - 5a にじみ灰褐色粘質土 3を少量含む(埋木田跡)上
  - 5b にじみ灰褐色粘質土 粘砂が少なく硬質含む(地味)
  - 7 にじみ灰褐色粘質土 粘砂を多く含む(地味)
- 5号溝埋土
- 1 灰褐色-灰褐色シルト混じり粘土 少し粘質-やや粘質 少し締まる 灰化物約 $\phi$ 2-7mmを少量含む(埋り通し部分)
  - 2 灰褐色シルト混じり粘質土 やや締まる 溝3a層に埋戻し層2が混じり
  - 2' 埋戻し-灰褐色-灰褐色シルト混じり粘土 粘質少しあり やや締まる
  - 3a 埋戻し-灰褐色シルト混じり粘土 やや粘質 少し締まる 下部に部分的に灰化物が露出で見られる
  - 3b 埋戻し-灰褐色シルト混じり粘土 やや粘質 少し締まる 灰化物をわずかに含む 埋戻し層3を少量含む
  - 3c 灰褐色-にじみ褐色シルト混じり粘土 粘質少しあり 少し締まる 埋戻し層7のブロックを含む
  - 4 灰褐色-にじみ褐色シルト混じり粘土 粘質わずかにあり わずかに締まる 灰化物約 $\phi$ 2-5mmをわずかに含む
  - 5 にじみ-灰褐色粘砂主赤砂質土 わずかに粘質 小硬を少量含む(5号溝埋土層)
  - 6 褐色シルト混じり粘土 やや粘質 やや締まる(埋木田跡)

第63図 5号溝実測図(1/20、1/60)

し、溝構築以前の周辺にその頃の遺構が展開していた可能性がある。

#### 出土土器（図版55、第65図）

53・56は土師器皿、54・55・57は瓦器椀、58は白磁合子である。53は灰黄褐色の色調の胎土で、底部からわずかに内彎しながら立ち上がる器形である。底部は回転糸切り離しの後板状圧痕が付いている。復元口径14.2cm、復元底径9.4cm、器高3.05cm。56は白茶褐色の胎土で底部が回転糸切り離しの後板状圧痕が見られ、上げ底状からやや内彎して胴部が立ち上がる。口径14～14.2cm、底径8.8～9.0cm。器高2.5～2.8cm。54は焼成がやや甘く、内面にわずかにミガキが観察されるが、そのほかの部分では単位が明瞭でない。復元口径16.8cm。55は比較的丁寧なミガキが施されている。復元口径17.0cm、底径10.0cm、器高5.65cm。57はミガキ単位が明瞭でなく、器形の歪みがある。小さめの高台を丁寧に貼り付ける。口径16.4～16.6cm、底径6.2～6.4cm、器高5.9～6.6cm。58は白磁合子の身である。胎土は白色精良で不純物も見られない。

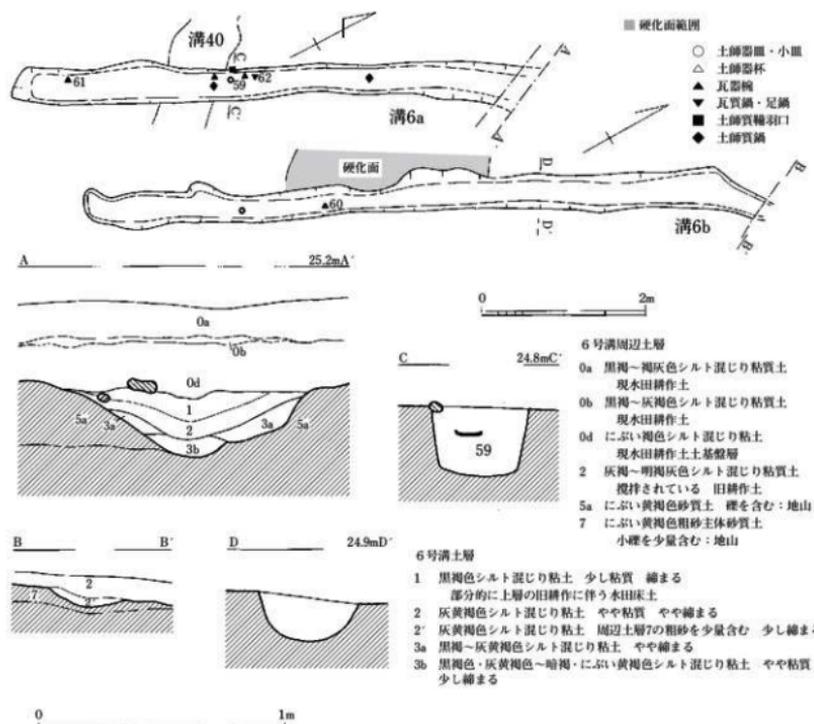
#### 6号溝（図版50・51、第64図）

B区の中央の屈曲部の北側からE区の東南側まで直線的になる。北東側は調査区外に延び、南西側は1号掘立柱建物の西方延長付近で終わっていて、それより南側へは延びない。途中8号溝の延長付近で6号溝は途切れ、5.8mの空間があり、北から6a・6bと呼称する。6号溝の西側には平行して5号溝があり、途中の空間部も含めた長さ20.6m以上で、それぞれは6aが長さ6.4m以上、幅6.00m、深さ0.41mで、6bが長さ8.4m、幅6.00m、深さ0.41mである。6aは40号溝を切る。断面形は6aのB区北壁では2・3b層段階が三角形に近く、3a層段階は逆台形に近い。また6aの中段ではやや方形に近く、6bでは半円形に近い。

6aのB区北壁での埋土はシルト混じり粘土で、1層は黒褐色で、部分的に上層の旧耕作に伴う水田床土層ブロック（褐色のシルト混じり粘土）を少量含む。2層は灰黄褐色、3a層は黒褐～灰黄褐色、3b層は黒褐・灰黄褐色～暗褐・にぶい黄褐色である。この部分の地山はにぶい黄褐色の砂混じり粘質土である。土層からは2回の掘り返しが観察される。遺物は6aの40号溝と切り合う付近と6bの硬化面近くにややまとまって出土し、土師器皿・小皿、瓦器椀、瓦質足鍋のほか、土師質の輪羽片などが出土した。土師器や瓦器椀からは13世紀代が考えられるが、小片のため図示できなかった足鍋の口縁部形態からはやや新しい時期が示され、14世紀前半頃まで下る可能性がある。

#### 出土土器（図版56、第65図）

59は土師器小皿、60は土師器皿、61は瓦器椀、62は瓦質足鍋の脚部である。59は、白黄茶色の胎土で、砂粒を少量含む。底部は回転糸切り離し後に板状圧痕が見られ、全体に歪みが大きい。器壁に穴が開いており、胎土中に小豆よりやや小さい程度の炭化種子が含まれているが、種子同定などの分析は行っていない。胎土中に種子を含んだまま焼成されたものと考えられる。内面に部分的に薄く煤が付着し、二次被熱による橙色化も見られ灯明皿として使用された可能性が高い。口径8.15～8.5cm、底径6.7～7.1cm、器高0.75～1.15cm。60は、灰黄から白黄茶色の色調で、胎土には砂粒を含む。底部は回転糸切り離した後板状圧痕が見られ、体部は内彎しながら立ち上がる。復元口径13.0cm、底径8.8cm、器高3.5cm。61はほとんどが6a号溝南側



第64図 6号溝実測図 (1/20、1/60)

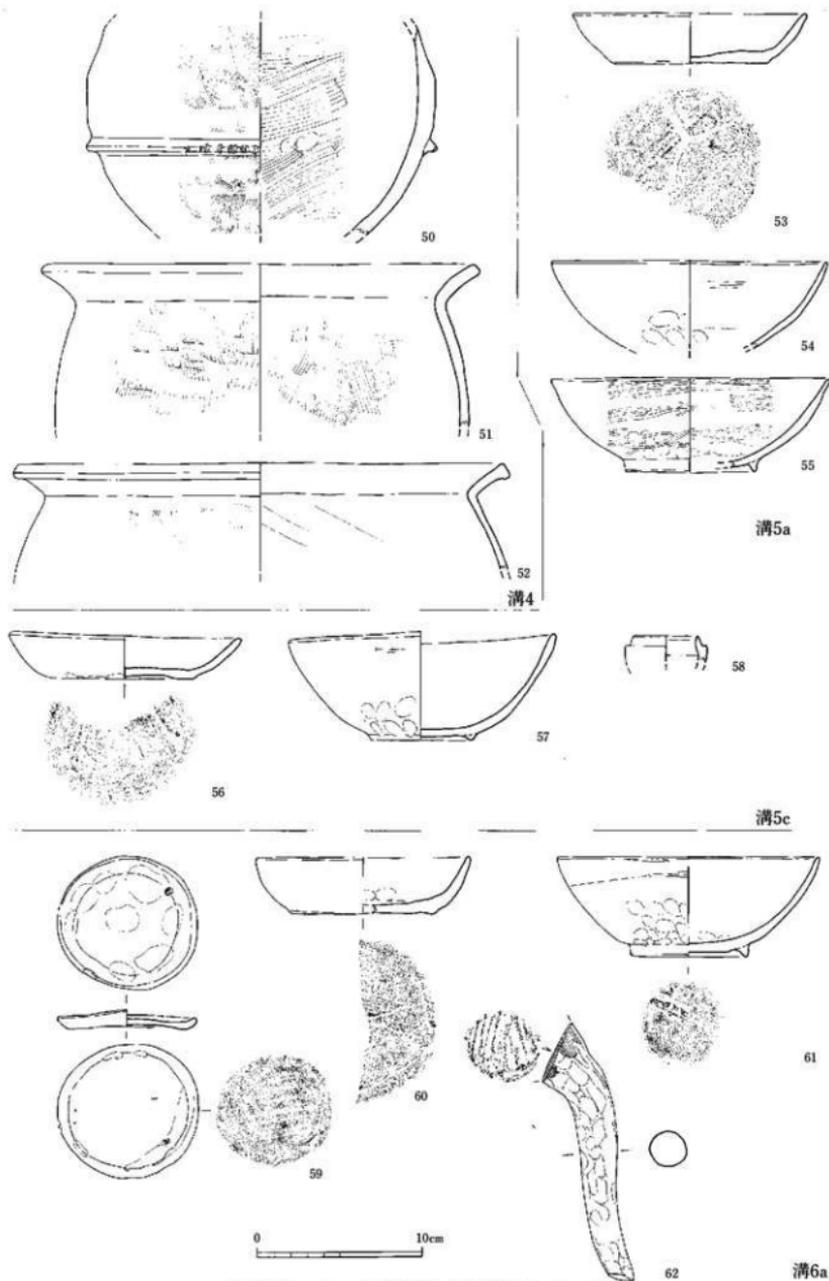
で出土したが、1点5a号溝で出土した破片が接合している。胎土がやや砂っぽく、底部に回転条切り離しの痕跡が明瞭で、屈曲部に断面三角形高台を貼り付ける。ミガキ単位は明瞭でない。復元口径16.0cm、底径7.1cm、器高6.1cm。62は足鍋の脚部だが、鍋本体との接合をよくするため溝状の影り込みが施されている。

#### 7号溝 (図版52、第61図)

B区の中央の屈曲部で検出した。東側は8号溝と平行するように調査区外に延び、途中南側に向かって曲がった後、8号溝に切られていて、それより南側へは延びない。長さ8.1m以上で、幅1m、深さ0.09mである。断面はやや浅い皿状である。土錐が出土した他、図化できないほどの小片で流れ込みと考えられるが、弥生土器片と縄文時代後期頃の条痕調整の土器小片が出土した。

#### 8号溝 (図版52、第66図)

B区の屈曲部付近で検出され、直線的に延びる。西側は6号溝が途切れた空間部の南側辺りで立ち上がり、東側は調査区外へ延びる。南側にはテラスが付く。長さ16.7m以上、幅1.94m、



第65图 4~6号溝出土土器实测图(1/3)

深さ0.49mである。軸はN-58°-W。南側には約11.5mの空間を空けて14号溝が平行し、その間の空間に軸をほぼ同じくして1号掘立柱建物跡がある。また、B区東壁では、溝の北側の立ち上がりの外側に幅で3.35mの高まりの土層6がある。平面の検出では認識できなかったが、丁度7号溝と8号溝に囲われた部分にあたる。断面はやや幅広い逆台形状に近い。溝の埋土は2回の掘り返しが観察され、1層と2層である。1～3層はシルト混じり粘質土で、1層は黒褐～灰褐色でやや砂質でやや粘質で少し締まる。φ2～4mmの炭化物粒をごく少量含む。東壁近くの土層では1層は無く、西北側の半分くらいの部分では存在していた。2層は褐色で粘質が少しあり、締まる。3層は褐色でやや砂質でわずかに粘質があり、締まる。小礫φ5～20mmを微量含む。4層は褐色～灰褐色の砂質土でややシルト質でわずかに粘質があり、やや締まり、礫φ5～120mmを含む。

流れ込みの遺物には弥生時代後期土器や石砲丁、古墳時代～古代の須恵器大甍片等もあるが、主体は中世で土師器小皿・皿、瓦器碗があり、下層の資料は12世紀中頃から13世紀前半頃、上位の遺物は13世紀前半から後半頃の年代を示す。管状土錘も出土している。

#### 出土土器（図版56、第67図）

63・68・69は土師器小皿で、64・70～72は皿、65・66・73～75は瓦器碗、67は白磁碗、76は青磁碗、77は瓦質足鍋の脚部である。64・65・68・70～72は底部に回転糸切り離し板状圧痕がみられる。63は内面見込み中央付近に煤が付着し灯明皿として使用された可能性がある。やや歪みがあり、口径8.1～8.4cm、底径6.85～7.3cm、器高0.9～1.0cm。68は淡褐色を呈し、外面の一部に煤が付着しその付近の内面は二次被熱により灰色化し、灯明皿として使用されている。口径8.5～8.65cm、底径6.6～6.8cm、器高0.9～1.1cm。69は内面の一部に煤が付着しその付近の外面は二次被熱により橙色化し、灯明皿として使用されている。口径9.0～9.4cm、底径7.4～7.7cm、器高1.35cm。64は橙褐色の色調を呈す。復元口径15.8cm、底径8.7～8.9cm、器高3.2cm。70は底部に板状圧痕の後にヘラ記号様の沈線がみられる。淡橙褐色を呈す。口径13.6cm、底径8.8cm、器高3.2～3.6cm。71は、胎土がやや砂っぽい。復元口径14.9cm、底径9.0～9.4cm、器高3.0～3.1cm。72は胎土に砂粒がやや多い。底径9.8～10.2cm。65のミガキは密でほぼ全面に亘っている。内面見込みに径6.2cmの焼成やや不良の部分があり、淡橙灰色の胎土の色とはほぼ同様の色調を示し、重ね焼きによるものと考えられる。なお外面下部から高台にかけても同様の色調を示す。他は燻し焼きの淡灰色を呈す。復元口径15.8cm、底径6.6cm。器高6.2cm。66の上半はミガキ単位がまだ判り、外面は内面よりも幅が広く、下半は単位が不明である。外面体部下半は指オサエが顕著である。断面三角形高台を貼り付ける。復元口径16.0cm、底径6.5cm、器高6.0cm。73はやや密にミガキがされている。やや歪んでおり、口径16.3～16.5cm、底径6.4cm、器高5.9cmで、口径の中心と高台の中心とがずれる。74は体部外面の底部近くに部分的にケズリ痕もしくは強い板ナゲ痕を残す。小さめの高台を貼り付け、本来断面三角形と考えられるが、場所によっては潰れた低い逆台形状を呈す。復元口径15.9cm、底径6.55cm、器高5.4cm。75は底部にヘラ記号様の沈線が2本みられる。ミガキは比較的密に施される。復元口径16.0cm、復元底径6.2cm、器高5.9cm。67は白磁碗底部で、胎土は白灰色で黒色微粒子を含み、やや肌理が粗く小孔が見られる。高台径5.95cm。76の胎土は精良で薄い灰褐色を呈し、ごくわずか

に黒色微粒子を含む。内面見込みにスタンプ文で「金」の字が見え、「金玉満堂」の吉祥句と考えられる。復元口径16.8cm、底径6.4cm、器高7.65cm。

#### 9号溝 (図版53、第61図)

B区の屈曲部よりやや南側にあり、14号溝を切っている。長さ11.7m、幅2.2m、深さ2.2mである。少なくとも1回の掘り返しがある。断面は三角形に近い。埋土の1a層は灰褐色のシルト混じり粘質土で、少し粘質でかなり締まる。1b層は炭化物粒 $\phi$ 1~2mmをわずかに含む。1c層はやや締まり、炭化物粒 $\phi$ 1~2mmをわずかに含む。1d層は1b層と比べて少し砂質。2層は黒褐色のシルト混じり粘質土で、炭化物を多く含む。3層は灰褐色のシルト混じり粘質土で、やや砂質で少し粘質でやや締まる。

弥生土器小片や打製石砲丁、管状土錘などが出土したが、中世の14号溝を切っていたことから、中世以降に帰属する。

#### 10号溝 (第61図)

B区の南側、9bグリッド南東~10cグリッド南東で検出された。緩く彎曲しながら、東西方向に近く流れる。長さ15.4m以上、幅1.70m、深さ0.21mである。断面は浅い皿状に近い。小片で弥生時代後期の土器が流れ込みで出土した。古代以降かと考えられる。

#### 11号溝 (第61図)

B区の南側、9aグリッド北東から10dグリッド北西で検出された。緩く彎曲しながら、東西方向に近く流れる。長さ19.6m以上、幅1.25m、深さ0.12mである。断面は皿状に近い。埋土は単層で、褐灰色の砂混じり粘質土で、炭化物粒 $\phi$ 2~6mmをわずかに含む、底に一部斜交葉理が見られ、水性堆積物と考えられる。小片で弥生時代後期の土器が出土したが流れ込みであろう。古代の10世紀頃の包含層12を切っていることから、それ以降である。

#### 12号溝 (第61図)

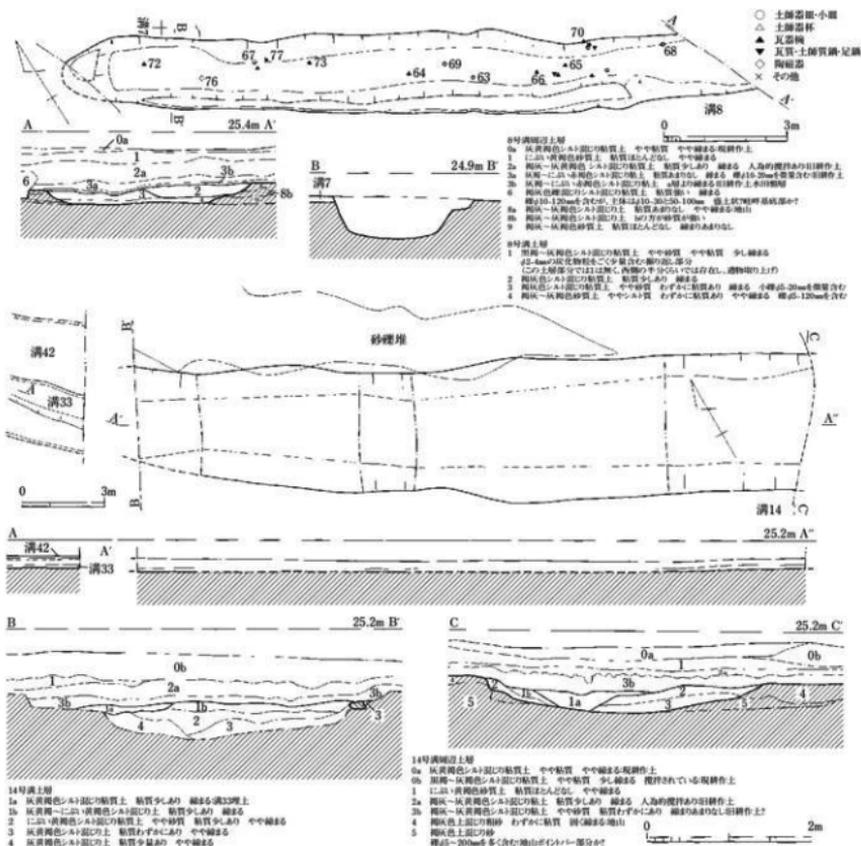
B区の南側で検出し、5号土坑と現代の暗渠排水に切られている。長さ5.75m以上、幅1.25m、深さ0.85mである。断面は逆台形に近い。埋土は単層で、灰褐色のシルト混じり粘土である。縄文時代後期の条痕調整の土器が少量出土したほか、量が多いのは弥生時代後期で、古代の土器器片も出土したことから古代以降に帰属するであろう。また棒状土錘が出土した。

#### 出土土器 (第69図)

78は脚付鉢の脚部である。79は土師器碗の底部で、復元底径9.6cm。

#### 13号溝 (第61図)

B区の中央やや南側、14号溝の南側で検出した。西側はこの部分でE区との間に幅1m程の未調査部分があるが、E区までは続いていかない。長さ6.15m以上、幅0.61m、深さ0.11mである。断面は逆台形状である。弥生時代後期の土器小片が出土した。

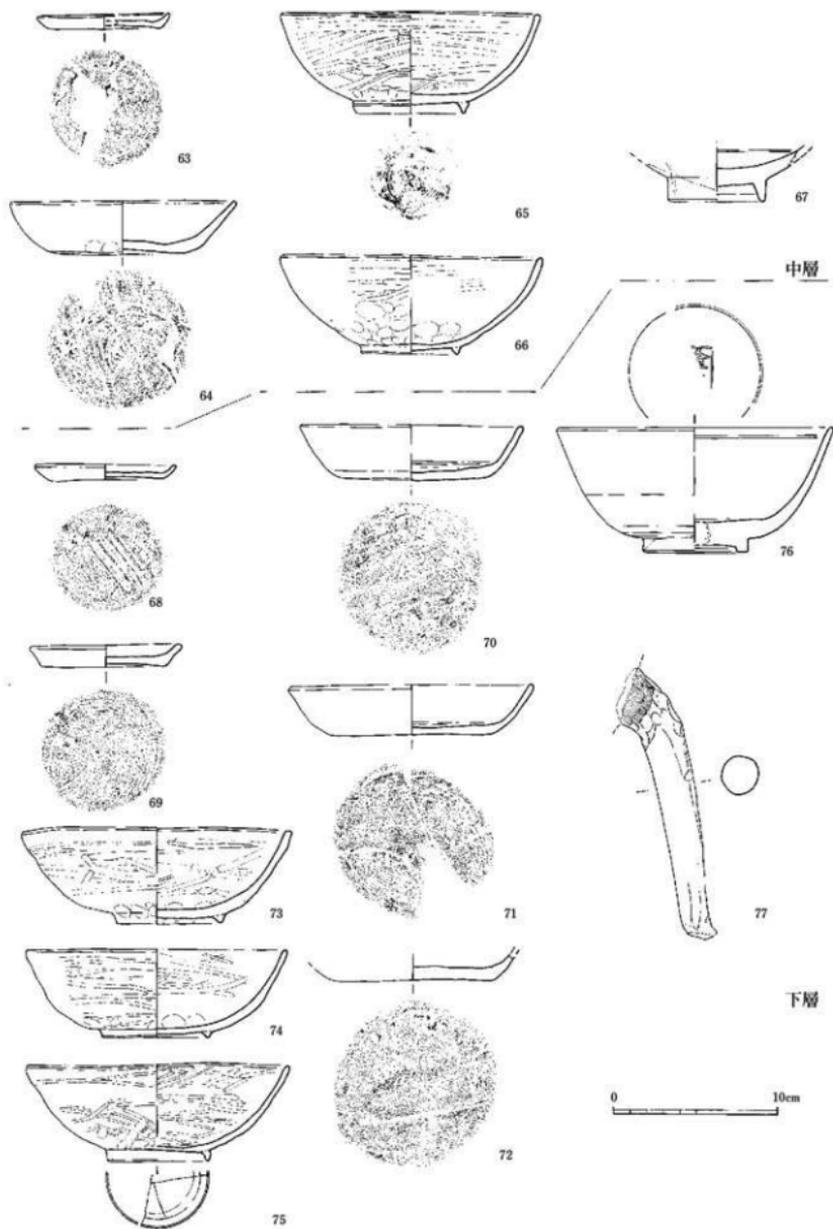


第66図 8・14号溝実測図 (1/60、1/120、1/180)

### 14号溝 (図版36・53、第61図)

B区の屈曲部の少し南側で検出し、8号溝とはほぼ平行する。また北側に帯状の砂塚堆があり、これに沿ってもある。9号溝から切られ、東側を攪乱されている。平面では確認できなかったが、E区の33号溝からの延長と14号溝西・東壁土層とを合わせると、14号溝の土層1a層は33号溝に相当し、33号溝に切られていることが分かる。最初にB区の西壁近くと東壁近くをトレンチ状に先行して掘り下げたが、土量が多かったことと湧水があったことから、追加して中程にトレンチ状に開けた3箇所を調査したのみで、完掘していない。また調査時にはB区の14号溝とE区以西が続いて見えたために、B区を14a、E区以西(42号溝)を14bとしていた。

14号の軸はほぼ直線でN-61°-Wであるが、14bとしていた42号溝は南側ではN-50°-Wである。西側は未掘部分を残してしまったのが悔やまれるが、南側は合うが北側は14号溝と42号溝の延長は合わない。また、14号溝底のレベルは西側では23.99~97mとほ



第67图 8号沟出土土器实测图(1/3)

ば一定しており、E区東側における33号溝底のレベルが24.16~18m(14号溝西壁では24.15m)、42号溝底が24.50m前後である。14号がほぼ直線であることに対し、42号は緩やかに弧を描き軸が異なること、接続しないこと、底のレベルが異なることで異なる溝であると判断し、報告時に14bを42号と改めた。未調査で掘り残した部分の6号溝の延長付近で8号溝のように立ち上がっていくものと想定される。D区からE区まで緩やかに蛇行する自然流路または浅い42号溝のあったところに、やや角度を変えて1号掘立柱建物跡や8号溝に角度を合わせ掘り直したものと考えられる。長さ24.5m以上、幅5.4m、深さ0.45mである。断面は逆台形に近く底はやや弧状をなす。

埋土は、1a層は、灰黄褐色のシルト混じり粘質土で、粘質が少しあり締まる。B区では平面で検出できていないが、E区で検出された33号溝の延長に相当する。1b層は灰黄褐色にぶい黄褐色のシルト混じり土で、粘質が少しあり締まる。2層はぶい黄褐色のシルト混じり粘質土で、やや砂質で粘質が少しありやや締まる。3層は灰黄褐色のシルト混じり土で、粘質がわずかにありやや締まる。4層は灰黄褐色のシルト混じり土で、粘質が少量ありやや締まる。

14号溝が5・6・8号溝とセットであると考えると中世に帰属されようが、完掘していないことを考慮しても中世期の遺物はごくわずかしか出土していず、打製石斧や弥生土器、古墳~古代の須恵器片などの方が多く出土している。土師器小皿からは13世紀中頃と考えられる。8号溝と比べて中世期の遺物の出土が少ないことを考えると、溝そのものの規模は14号溝の方が大きい、生活空間としては北側の方が主である可能性がある。

#### 出土土器(第69図)

80は土師器小皿である。底部に回転糸切りと板状圧痕がみられる。口径8.2cm、底径6.7~6.8cm、器高0.8~1.0cm。

#### 16号溝(第61図)

B区の南側で、10aグリッド南西から11bグリッド北東で検出し、B区南西側では一端途切れるが、C区に続きが及び、9yグリッド北東~10zグリッド北東までで、北西側は調査区外へ延びる。B区に分を16a号、C区に分を16b号とする。

aはほぼ南半分を現代の暗渠に切られていて、17号溝を一部切る。ほぼ直線的に延び、軸はN-59°-Wである。長さ13.6m以上、幅2m以上、深さ0.29mである。断面は逆台形であろう。C区ではやや北に彎曲するが、軸はN-61°-Wである。長さ11.45m以上、幅1.95m、深さ0.17mである。途切れた部分も含めてa・bを合わせた長さは、34.8m以上である。

bは23・27号溝を切る。断面形は幅広の逆台形に近い。埋土は上下2層に分かれ、上層は灰黄褐色にぶい黄橙・黄褐色の砂混じり粘質土で、シルト~細砂が主体で、わずかに粘質で少し締まる。下層は灰黄褐色の砂混じり粘質土で、細砂・粗砂・シルトの互層で薄い平行状葉理が見られる。

B区では出土遺物は少なく、C区ではやや多いが、弥生時代後期の土器の流れ込みが多く、出土した布目痕のある平瓦片からは古代に帰属する。

#### 出土土器(第69図)

81は弥生時代後期の壺又は甕と考えられる資料である。頸部境界に突帯を貼り付ける。82は片面に布目痕、片面に叩き痕をもつ平瓦片である。

#### 17号溝 (第61図)

B区の南側で検出され、11bグリッド北西から11cグリッド南西まであり、東は調査区外へ直線的に延びる。一部16号溝に切られる。湧水が多かったために完掘していない。長さ10m以上、幅0.8m、深さ0.29mで、軸はN-64°-Wである。断面は逆台形である。弥生土器かと考えられる土器小片が出土したが、16号溝から切られることから古代以前と考えられる。

#### 19号溝 (第61図)

C区やや北側で検出され、東西ともに調査区外へ延びる。20・25・41号溝を切る。直線的に延び、軸はN-64°-Wである。長さ12.5m以上、幅0.44m、深さ0.15mである。断面は三角形である。遺物はわずかに出土したが、いずれも図化できないほど小片で、中世と考えられる土師器片などがある。

#### 20号溝 (第61図)

C区やや北側で検出され、西側は調査区外へ延びる。19号溝に切れ、25・41号溝を切る。直線的に延び、軸はN-62°-Wである。長さ11.9m以上、幅0.42m、深さ0.11mである。断面は逆台形に近い。遺物はわずかに出土したが、いずれも図化できないほど小片で、古墳時代かと考えられる土師器片などがある。

#### 21号溝 (第61図)

C区北側で検出され、調査区外へ延びる。長さ1.4m以上、幅0.75m以上、深さ0.17mである。断面は逆台形に近い。小片だが、格子目叩きのある須恵器甕片や土師器皿片が出土し、古代以降と考えられる。

#### 出土土器 (第69図)

84は須恵器の甕胴部と考えられる資料である。

#### 22号溝 (第61図)

C区北側で検出され、調査区外へ延びる。長さ1.5m以上、幅0.5m、深さ0.12mである。断面は東側が深い皿状に近い。小片だが、古墳時代と考えられる土師器片が出土し、古墳時代以降と考えられる。

#### 23号溝 (第61図)

C区中央付近で検出され、東西が調査区外へ延びる。調査区域の設定上、壁際で一部掘り残した部分がある。16b号溝に切られる。直線的に延び、軸はN-60°-Wである。長さ11.8m以上、幅1.7m、深さ0.35mである。断面は弧状をなすと考えられる。埋土は2層に分かれ、上層は灰黄褐色のシルトが多い砂混じり粘質土で、下層は細砂が多い。遺物は、弥生時代後期のものも出土したが、須恵器壺と土師器皿片などが出土し、古墳時代末以降の時期と考えられる。

#### 出土土器 (第69図)

85は須恵器の脚付長頸壺の胴部片と考えられる資料である。

#### 24号溝 (第61図)

C区中央やや北側で検出され、東西が調査区外へ延びる。25号溝を切り、18号溝の下位にある。直線的に延び、軸はN-62°-Wである。長さ14m以上、幅0.55m、深さ0.17mである。断面は南側壁際では三角形に近いが、北側では逆台形に近い。埋土は灰黄褐色の砂質土とシルト混じり土の互層で部分的に斜交葉理がみられる。遺物は弥生時代後期～古墳時代前期の土器が多くを占めるが、土師器から見ると古代末以降と考えられる。

#### 出土土器 (第69図)

86は橙褐色の色調の土師器皿で、底部は回転糸切りである。

#### 25号溝 (第61図)

C区中央やや北側で検出され、東西が調査区外へ延びる。24号溝に切られる。少し蛇行するがほぼ直線的に延び、軸はN-63°-Wである。長さ14.3m以上、幅0.35m、深さ0.09mである。断面は三角形である。遺物は少量で細片化しており、縄文土器と打製石斧が流れ込みで出土したほか、主に中層と下層から出土し、古代と考えられる土師器の皿または椀が出土している。

#### 出土土器 (第69図)

88は縄文時代早期の押型文土器である。ローリングが激しく文様が判りづらいが、やや大きめの楕円文を斜め方向に施文しているようである。

#### 26号溝 (第68図)

C区南側で検出され、東西が調査区外へ延びる。8号土坑の下位にあり、現代の暗渠や24号溝に切れ、28号溝を切る。直線的に延び、軸はN-62°-Wである。長さ15.4m以上、幅2.8m、深さ0.34mである。中央付近を暗渠のために掘ることができなかったが、断面は南側では幅広の弧状、北側では逆台形をなすと考えられる。遺物は細片化しており、わずかに縄文時代後・晩期の浅鉢片が出土したほかは弥生時代後期の土器が多いが、須恵器片が出土したことから古墳時代末以降と考えられる。

#### 出土土器 (第69図)

87は外面にカキ目が明瞭な須恵器壺の胴部と考えられる資料である。

#### 27号溝 (第68図)

C区中央やや南側で検出され、東西が調査区外へ延びる。16b号溝に切られる。直線的に延び、軸はN-63°-Wである。長さ19.65m以上、幅1.1m、深さ0.18mである。断面は南側では逆台形で、北側ではやや幅広の弧状である。埋土は灰黄褐色のシルト混じり粘質土である。出土遺物はない。16号溝に切られることから古代以前であろう。

#### 28号溝 (第68図)

C区南側で検出され、東西が調査区外へ延びる。8号土坑の下位にあり、26号溝と現代暗渠に切られる。直線的に延び、軸はN-60°-Wである。長さ11.1m以上、幅2.4m以上、深さ0.40mである。暗渠のために未掘部分があるが、断面は南側ではやや幅広の弧状、北側では台形状

を呈すと考えられる。埋土は2層に分かれ、上層は褐灰～灰黄褐色のシルト混じり粘質土で、炭化物粒 $\phi$ 3～5mmを微量含む。下層は上層より砂質が少ない。

小片だが、丹塗りの広口壺と考えられる小片が出土したことから弥生時代の中期から後期前半以降と考えられる。

### 29号溝（第68図）

主にD区北東側で検出され、30・32号溝を切り、現代暗渠に切られる。ほぼ直線的に伸び、軸はN-31°-Eである。長さ9.15m以上、幅2.35m、深さ0.23mである。断面は浅い皿状である。埋土は褐灰色のシルト混じり粘質土で炭化物粒 $\phi$ 2～4mmを微量含む。また礫 $\phi$ 10～80mmを微量含む。

遺物は土器細片がごくわずかに出土したのみで、中世の32号溝を切ることから、中世以降に帰属すると考えられる。

### 30号溝（第68図）

D区北側で検出され、31号溝を切り、29・32号溝に切られる。南から北に緩やかに蛇行する。長さ7.6m以上、幅0.5m、深さ0.19mである。断面は逆台形である。埋土は黒褐～褐灰色の砂混じり粘質土で、小礫を少量含む。

縄文時代後期の条痕調整の深鉢片が流れ込みで出土したほかは弥生土器が多いが、いずれも細片で弥生時代後期頃と考えられる。

### 31号溝（第68図）

B区の北西からD区の北西を通り中央付近にかけて検出され、北側の砂礫堆の縁に沿って蛇行する。30・32・39号溝に切られる。長さ24.1m以上、幅1.25m、深さ0.22mである。断面は弧状に近い。埋土は褐灰色の砂混じり粘質土で下面に鉄分が沈着する。小片だが出土した器台からは弥生時代後期と考えられる。

### 32号溝（第68図）

B区の北側からD区の北東側で検出された32a号と、南側に延びる32b号に本来ならば分かれるが、境界が明瞭でなく分けきれなかった。またB区では暗渠に挟まれた狭い場所だったため、はじめ支柱穴も確認されなかったが堅穴状の遺構と考え住居跡のSH02としていたが、遺物の出土もなく、後にSX06に変更した。D区を調査したところ、暗渠を挟んだSX07も含めて蛇行する32号溝（自然流路）の一部と判明したために、SX06・07を含めて32a号溝とした。aは30号溝を切り、29号溝に切られる。長さ12.5m、幅2.2m、深さ0.16mである。断面は逆台形に近い。埋土は2層観察され、上層は黒褐・褐灰色～灰褐・赤褐色の粘土で、下層は地山土ブロックが混じる。遺物はいずれも小片だが、流れ込みで弥生時代後期と古代の土器器を含み、土器器皿と瓦器碗片が出土したことから、中世に帰属する。bは30号溝を切り、29・39号溝に切られる。長さ26.8m以上、幅3.9m、深さ0.20mである。断面は浅い三角形である。埋土は褐灰色のシルト混じり粘土で下底面に鉄分が沈着する。炭化物粒 $\phi$ 2～6mmを微量含む、小

礫φ2～20mmを少量含む。

遺物はいずれも小片で、流れ込みで弥生時代中～後期の土器を含むが、遺構の切り合いと瓦器碗からは中世に帰属すると考えられる。

#### 出土土器（第69図）

89は瓦器碗、90は須恵器、91は弥生土器の壺、92は甕である。89は瓦器碗の底部で比較的細いミガキが割と密になされる。復元底径6.8cm。90は鉢または皿の底部片である。91は壺の口縁部で、復元口径3.2cm。92は「く」の字の口縁で断面三角形突帯を貼り付ける。

#### 33号溝（第68図）

D区の北側からE区南側まで緩やかに蛇行して検出された。B区では平面では検出できなかったが、14号溝を切っていることが土層で確認された。D～E区では長さ56.4m以上、幅1.7m、深さ0.23mだが、B区までの延長を考えると長さ83.3m以上あることになる。北側での軸はN-21°-Wで、南側ではN-39°-Wである。14・36a・42号溝を切り、5c号溝と1号鍛冶炉に切られる。断面は南側では逆台形で、北側では弧状に近い。埋土は褐灰～灰褐色の細砂主体にシルトを含む土混じり砂で、炭化物粒φ2～4mmを微量含む。

遺物は弥生土器が少量流れ込みで出土しているが、切り合い関係からは中世に帰属するか。

#### 34号溝（第68図）

D区の南西側で検出された。長さ5m、幅1.5m、深さ0.28m。軸はN-55°-Wである。断面は弧状に近い。弥生中期の壺底部の他、後期と考えられる土器小片が出土した。

#### 出土土器（第69図）

93は弥生時代中期と考えられる丹塗りの壺の底部である。外面にはミガキがされているようであるが、単位は不明である。底径7.3～7.5cm。

#### 35号溝（第68図）

D区の南西で砂礫堆の縁に沿って検出された。1c号溝に切られる。長さ14.1m以上、幅0.7m、深さ0.15m。断面は逆台形に近い。弥生後期と考えられる甕や器台片が出土した。

#### 36号溝（第68図）

D区の中央やや北側で検出され、埋土差からa・b・cに分かれる。緩やかに蛇行し南側では、D区中央付近の砂礫堆の縁に沿っている。2b・3号溝を切り、2a・3号溝に切られる。北側での軸はN-3°-Wで、南側ではN-11°-Wである。中での切り合いは、bがcに切れ、cがaに切られている。abc合わせると、長さ25.3m以上、幅5.1m、深さ0.29mである。

aはにぶい黄褐色のシルトが多い砂混じり粘質土で、粘質が少しあり少し締まる。炭化物粒φ2～4mmを微量含む。長さ23.3m以上、幅3.1m、深さ0.25mである。断面は幅広の逆台形に近い。bは褐色の砂混じり粘質土で、粘質がわずかに締まる。炭化物粒φ2～4mmを微量含む。長さ13.2m以上、幅0.95m、深さ0.29mである。断面は逆台形である。cは灰黄褐～にぶい黄褐色の砂混じり粘質土で、粘質がわずかにあり少し締まる。炭化物粒φ2～4mmを微量含む。

長さ27.2m以上、幅2.75m、深さ0.24mである。断面は幅広の逆台形に近い。僅かに弥生時代中期と考えられる甕の底部片と、後期と考えられる甕小片も出土した。

#### 出土土器（第69図）

94は弥生時代中期と考えられる甕の底部である。底部が厚く指で凹ませ上げ底になっている。

#### 37号溝（図版53、第68図）

D区の南からE区の北側にかけて検出された。8号溝の北側延長方向に近く、緩やかに蛇行し、軸はN-59°-Wである。南東側がやや広く左右にテラスを持つ。中央やや南側を中心に埋土途中に炭混じり土が、長さ1.05m、幅0.65mの範囲で薄く検出された。長さ7.8m、幅1.2m、深さ0.32mである。断面は両側に小さなテラスを持つ逆台形状である。

土師器皿・瓦器椀・青磁椀・鉄滓などが出土したが、瓦器椀の形態からは13世紀代と考えられる。

#### 出土土器（図版56、第69図）

95・96は瓦器椀で、97は弥生土器の甕である。95は胴部外面下部に指押しさが顕著である。復元口径16.4cm、底径7.0~7.2cm、器高6.1cm。96は底部に高台を貼り付けるが丁寧で無く、基底部幅1.1cmで断面三角形から、基底部幅1.4cm、下側幅1.0cmの台形まで場所によって変化する。高台の断面台形部に一部板状圧痕が見られる。復元口径17.8cm、底径8.2cm、器高5.8cm。97は口縁端部を上につき上げる。胴部の器壁は薄い。復元口径29.2cm。

#### 38号溝（図版53、第68図）

E区の北西で弧を描いて検出された。北側が広く西側にテラスを持つ。5b号溝に切られている。長さ16m以上、幅1.9m、深さ0.28mである。断面は幅広の弧状に近い。5b号溝近くから鉄滓や輪羽口片がややまとまって出土したが、そのほかの部分からはわずかに弥生土器小片が出土したのみである。13世紀代以前に帰属すると考えられる。

#### 39号溝（第68図）

D区の中央付近南側で検出された。当初は31号溝の延長と考え31b号号としていたが、切り合いを検討して別な溝と判断し39号溝とした。32b号溝を切っている。軸はN-25°-Wである。長さ14.7m以上、幅3.25m、深さ0.30mである。断面は幅広の弧状に近い。

#### 40号溝（第68図）

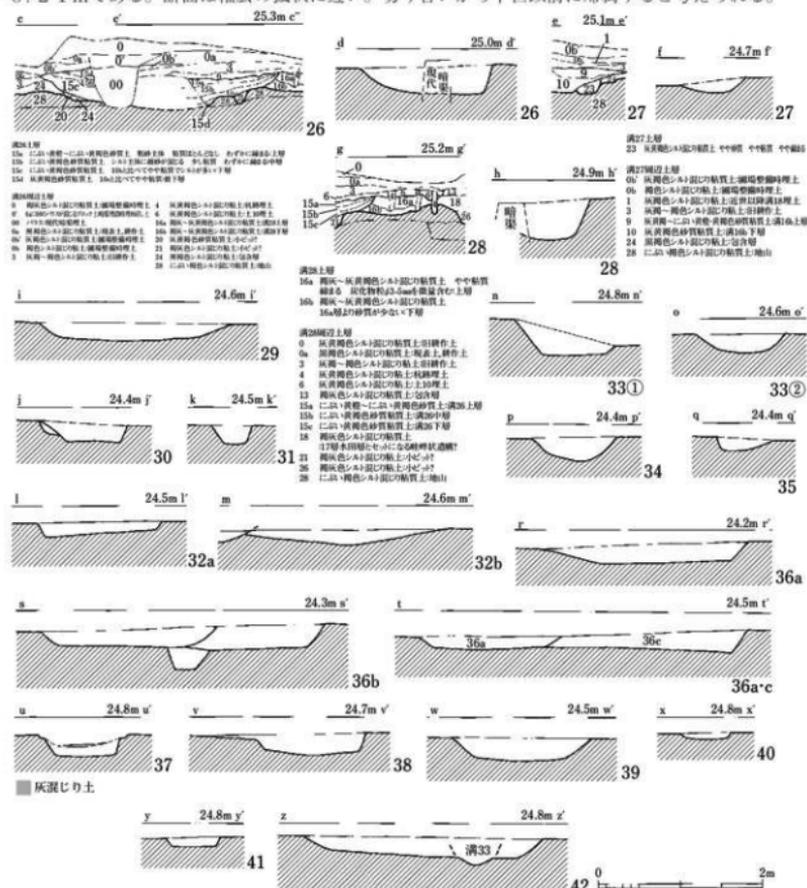
B区の屈曲部の少し北側で検出され、東は調査区外へ延びる。5a・6a号溝に切られる。長さ3.9m以上、幅1.83m、深さ0.08mである。断面は浅い皿状である。埋土は褐灰~灰褐色のシルト質堆積土で、やや砂質で粘質が少しありわずかに締まる。炭化物粒径2~4mmを微量含む。出土遺物はなく、切り合いからは中世以前と考えられる。

4 1号溝 (第68図)

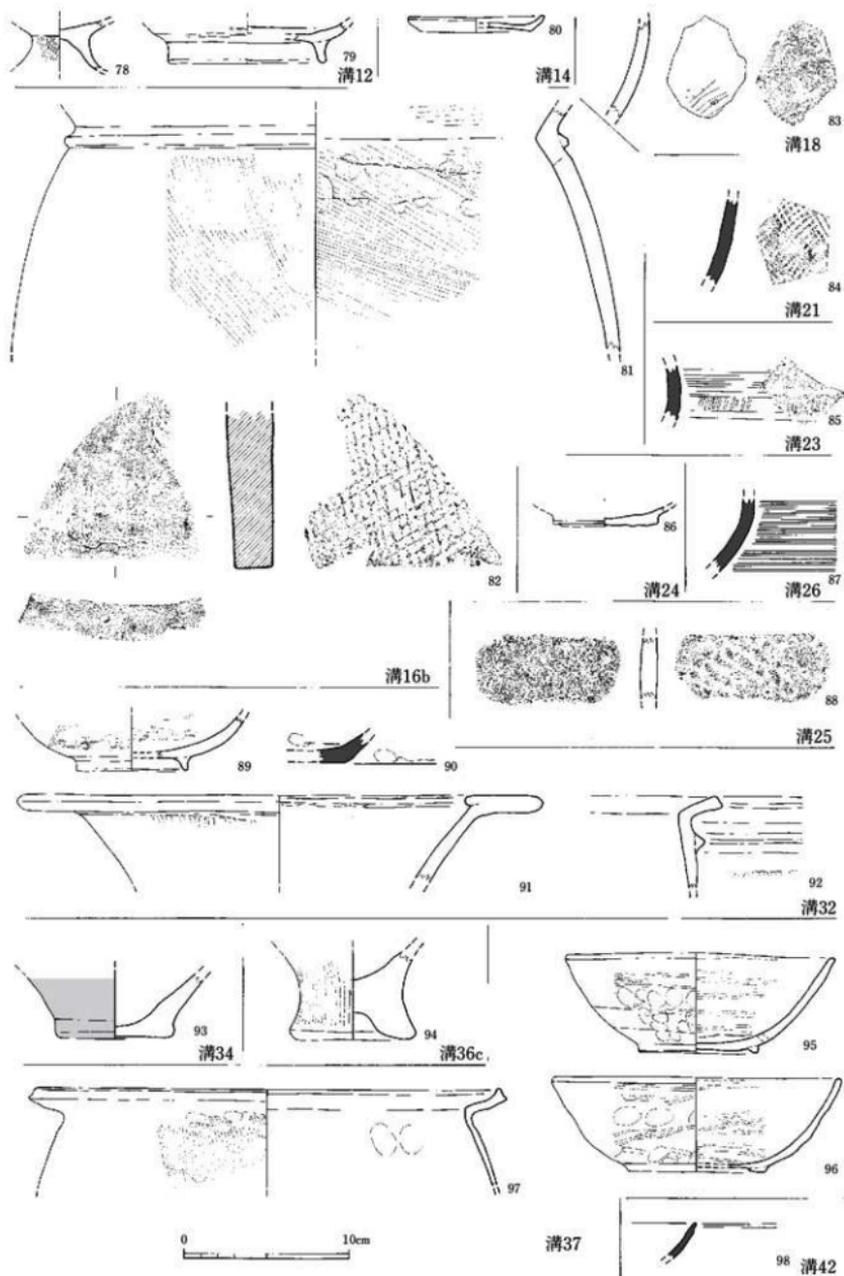
C区中央付近で検出された。19号溝に切れられ、20号溝に伴う可能性があり、24号溝を切っている。杭そのものは出土しなかったが杭跡を伴っている。軸はN-25°-Eである。長さ4m、幅1.2m、深さ0.1mである。断面は浅い逆台形である。出土遺物はなく、切り合いからは古代以降中世以前と考えられる。

4 2号溝 (第68図)

はじめ14号溝の延長と考え14bとしていたが、軸が異なることから42号に改めた。12号土坑を切り、5c・32号溝と1号鍛冶炉に切られる。E区の中央付近を緩やかに弧を描き、北側での軸はN-34°-Wで、南側ではN-50°-Wである。長さ29.7m以上、幅4.8m、深さ0.21mである。断面は幅広の弧状に近い。切り合いから中世以前に帰属すると考えられる。

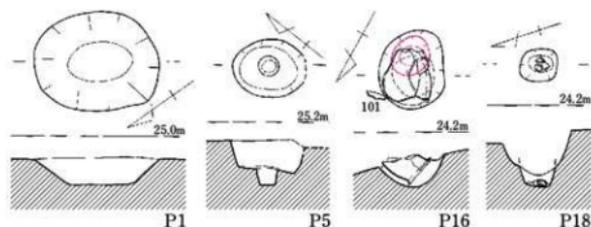


第68図 溝土層断面図2 (1/60)



第69图 12~42号溝出土土器実測図(1/3)

出土土器（第69図）  
98は須恵器碗である。



## 7 ビット

ビットは調査区の各所から検出され、比較的散漫な状況で柵列や建物が建つものは無かった。ここでは主として遺物が出土したものについて述べる。

第70図 P1・P5・P16・P18実測図（1/30）

### ビット1（第70図）

ビット1はA区の北東側、99aグリッド中央付近にあり、平面は楕円形、断面は逆台形である。長径0.76m、短径0.60m、深さ0.15mである。弥生時代後期前葉～中頃の壺が出土した。

### 出土土器（第72図）

99は壺の底部で少し凸レンズ状である。底径10.3cm。

### ビット5（第70図）

ビット5はA区とD区の境、1zグリッド南西にある。南側を小ビットに切られる。平面は楕円形で、中央に柱痕がある。断面は逆台形である。長径0.43m以上（復元値0.45m）、短径0.35m、深さ0.27mである。12世紀末から13世紀前半頃の青磁片が出土した。

### 出土土器（第72図）

100は胎土が灰色で精良である。青磁碗であろう。

### ビット16（図版54、第70図）

ビット16はD区の北西側、4yグリッド南西にある。1号溝を切り、ビット18を切って検出された。平面は楕円形で、断面は半円形に近い。長軸0.48m、短軸0.32m、深さ0.21mである。弥生時代後期前葉の甕形土器の上脛約2分の1ほどが出土した。底部はない。

### 出土土器（第72図）

101は甕で、くの字に折れた口縁の端部を上下に拡張し細めの凹線を巡らす。口縁の下部には斜線が均等で無い間隔で付けられている。口径27.6cm。

### ビット18（図版54、第70図）

ビット18はビット16から切られている。平面隅丸方形で、長軸0.23m、短軸0.20m、深さ0.24mである。底部に礎盤にしたと考えられるやや扁平な礫3点が出土した。

## 8 その他の遺構と遺物

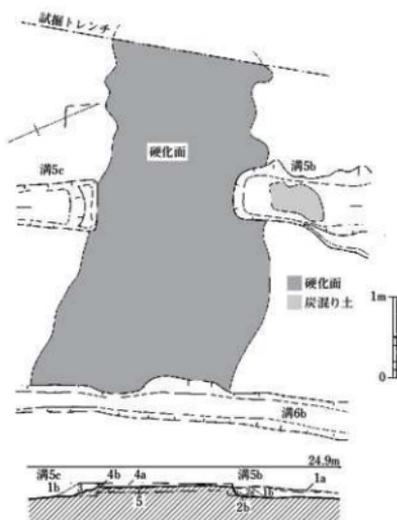
5 b号溝・5 c号溝・6 b号溝間硬化面 (図版54、第71図)

E区の西側で北側のB区から続き、5号溝と6号溝が平行して掘られていたが、B区の1号掘立柱建物跡の西側延長方向の部分で5号溝が途切れ、空間が空いていた。そのためにE区での5号溝の北側を5 b号、南側を5 c号とした。平行する6号溝に挟まれたこの空間が通路状または橋状だと考えられたため精査すると、周辺部分より地山がわずかに硬化しており、通常地山では含まれていない $\phi 0.5 \sim 1\text{mm}$ の炭化物微粒をわずかに含み土壌化していた。その範囲は、北西側がやや狭く幅1.90m、南東側でやや広く2.45m、北西側は試掘トレンチのために削平されており延長が不明で、南東側は6 b号溝までの、長さ4.45m以上であった。

断面を断ち割ったが、道路状遺構で見られるような明瞭な盛土整地による硬化面ではなかった。

4 a～5層は砂質土で、4 a層は褐灰～灰白色の細砂主体にシルトが混じり、粘質がわずかにあり締まる。4 b層は細砂主体に粗砂が少量混じり、粘質がなくやや締まる。5層は粗砂主体に細砂とシルトが少量混じり、粘質がなく締まる。4 a層から4 b層、5層への変化は遷移的で、この部分の地山であるが、上層の4 a層部分のみに炭化物を含み土壌化が認められた。2 a層と3層は通路状硬化面側からの両側の溝への流れ込みを示す土層で、北側の5 b号溝への2 a層と5 c号溝への3層とは様相が異なる。2層は褐灰～灰褐色のシルト混じり粘土で、粘質が少量ありやや締まる。上層の2 a層は炭化物粒 $\phi 1 \sim 3\text{mm}$ を含み、下層の2 b層は地山のシルトブロックを少量含む。3層は褐灰色の粗砂主体でシルトと細砂を含む礫混じり砂質土で、粘質がわずかにあり締まる。礫 $\phi 5 \sim 50\text{mm}$ を多く含む。この周辺ではすぐ下位には砂礫堆などの礫層はないために、下部からの浮き上がりではない。

5 c号溝の3層部分のみに礫が多く混じり、上部から流れ込んだ状況からは、上位の硬化面の南側には礫混じりの砂壤土を主体とした路面または路床を構築していた可能性がある。またある種の道路状遺構で見られるような硬化面下位に見られる波板状痕跡などはみられない。5号溝と6号溝に挟まれた空間が通路状でこれを溝を渡る橋ならば、地山削り出しの土橋とも呼ぶべきであろう。ただし硬化面が見られたのはこの部分のみで、5号溝と6号溝に挟まれた空間の全てに及んではない。なお同様の理由から、B区の6号



- 1a 黒～褐色土混じり炭化物微粒 やや粘質 やや締まる；炭5%以上層
- 1b 灰褐色シルト質粘土 粘質少しあり やや締まる 炭化物粒 $\phi 1.7\text{mm}$ をやや多く含む
- 溝5c埋土
- 2a 褐色～灰褐色シルト質粘土 粘質少しあり やや締まる 炭化物粒 $\phi 1.3\text{mm}$ を含む
- 溝5bの埋設埋土層
- 2b 褐色～灰褐色シルト質粘土 粘質少しあり やや締まる 地山のシルトブロックを少量含む；炭5%の埋設埋土層
- 3 褐色粘礫混じり粗砂主体でシルトと細砂を含む砂礫土 粘質わずかにあり 締まる礫 $\phi 5 \sim 50\text{mm}$ を多く含む；炭5%の埋設埋土層
- 4a 褐色～灰白色細砂主体にシルトが混じる砂礫土 粘質わずかにあり 締まる $\phi 0.5 \sim 1\text{mm}$ の炭化物を数箇所含み土壌化している；硬化部分
- 4b 褐色～灰白色細砂主体に粗砂が少量混じる砂礫土 粘質なし やや締まる；地山
- 5 褐色～灰白色粗砂主体に細砂とシルトが少量混じる砂礫土 粘質なし 締まる

第71図 硬化面実測図 (1/60)

溝が途切れている部分についても精査したが硬化や土壌化などは特に観察されなかった。削平の程度が北側の方が大きいためかもしれない。土層断面を溝にかけて取った位置の東西にトレンチを開け土層の確認を行ったが、図化したものと同一だったので追加の記録は取らなかった。土層観察からは、通路であるとしても明らかに当時の生活面である路面上部そのものは削平されて残されておらずに、通路として使用されたために他の地山部分よりわずかに硬化し土壌化した部分の下部だけが痕跡として残っていたようである。この部分から遺物は出土しなかった。

#### 包含層

包含層は調査時にはS Xとして番号を付けている。遺物の包含状況は概して少ない。特徴的な遺物が出土したものについて述べる。

包含層3は、B区の東南側にあり、近世の15号溝に切られ、ほぼ並行して幅約2～3mで分布する包含層または旧水田耕作層である。南側は近世の包含層（水田層）13に伴うと考えられる小畦畔状遺構に切られる。東側に小畦畔状包含層8があり、伴う可能性が高い。B区の基本土層の3層と5層の間に位置づけられる。C区での13層に相当する可能性がある。青磁碗片が出土したことから、中世と考えられる。

包含層9は近世の18号溝の北側で検出され、この溝に切られているがほぼ同時期の可能性がある。包含層または旧水田耕作層である。C区での3層に相当する可能性がある。

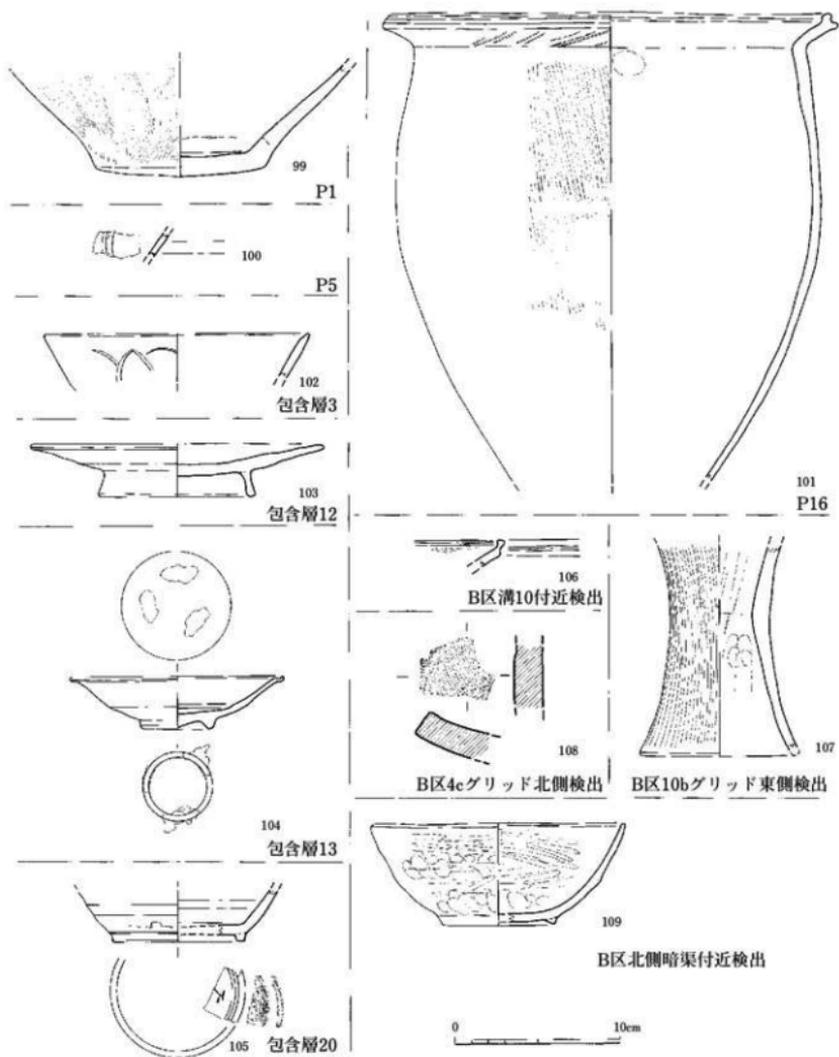
包含層12は、B区の東南側、11号溝の北側で砂礫堆との間に検出された包含層である。11号溝に切られている。B区基本土層の3層と5層の間に位置づけられ、C区での8層に相当すると考えられる。古代の土師器皿が出土したことから、10世紀頃と考えられる。

包含層13は、B区の南端で検出された近世水田層である。北側に小畦畔状遺構を伴う。近世肥前陶器皿が出土したことから、17世紀前半頃と考えられる。火打ち石や磨製石斧も出土した。

包含層20は、C区基本土層の24層で、畦畔状遺構15（旧S X 15）の下位にある包含層である。古代の須恵器杯の他、打製石庖丁が出土した。

#### 包含層・遺構検出面出土土器（図版57、第72図）

102は鎬のない広めの蓮弁文をもつ龍泉窯系青磁碗で、胎土は白色で精良だが微小な黒色粒子を少量含む。復元口径16cm。103は橙褐色の色調を呈す土師器の皿である。復元口径17.8cm、底径9.5cm、器高3.2cm。104は近世初期の肥前系の陶器皿である。内面見込み及び高台に砂目が明瞭に残る。口径13.0cm、底径4.2cm、器高3.2cm。105は須恵器高台付の杯で、底部にカタカナの「ス」の字に似た細い線刻があり、記号であろうか。復元高台径7.6cm。106は黒川系の黒色磨研の浅鉢口縁部片である。107は弥生時代後期の器台である。復元底径9.7cm。108は布目痕のある瓦片。109は瓦器碗で胴部中ほどに粘土接合痕が残り、その周囲にユビオサエが残る。ミガキは比較的に密に施される。器形はかなり歪み、復元口径15.6～16.2cm、底径6.7～7.0cm、器高5.7～6.9cm。



第72図 ビットおよびその他出土土器測図(1/3)

## 9 特殊遺物

土製品 (図版57・60、第73図)

110～115は土錘で、110と111は管状で他は紡錘状である。110は端面と外側面に細かいミガキが丁寧に施されていて、燻し焼きされている。孔径0.35cm。111は、上下両端を欠損する。最大径0.95cm、孔径0.25cm。112は端部に使用によると思われる擦れが見られる。長さ3.2cm、最大径1.0cm、孔径0.25cm、重さ2.92g。113は両端部に磨れが顕著、下端部をわずかに欠損する。復元長3.8cm、最大径1.2cm、孔径0.3～0.4cm、重さ4.6g。114は下部を欠損する。最大径1.1cm。孔径0.3cm。115は上端部を一部欠損する。長さ4.45cm、最大径1.4cm、孔径0.4cm、重さ7.08g。

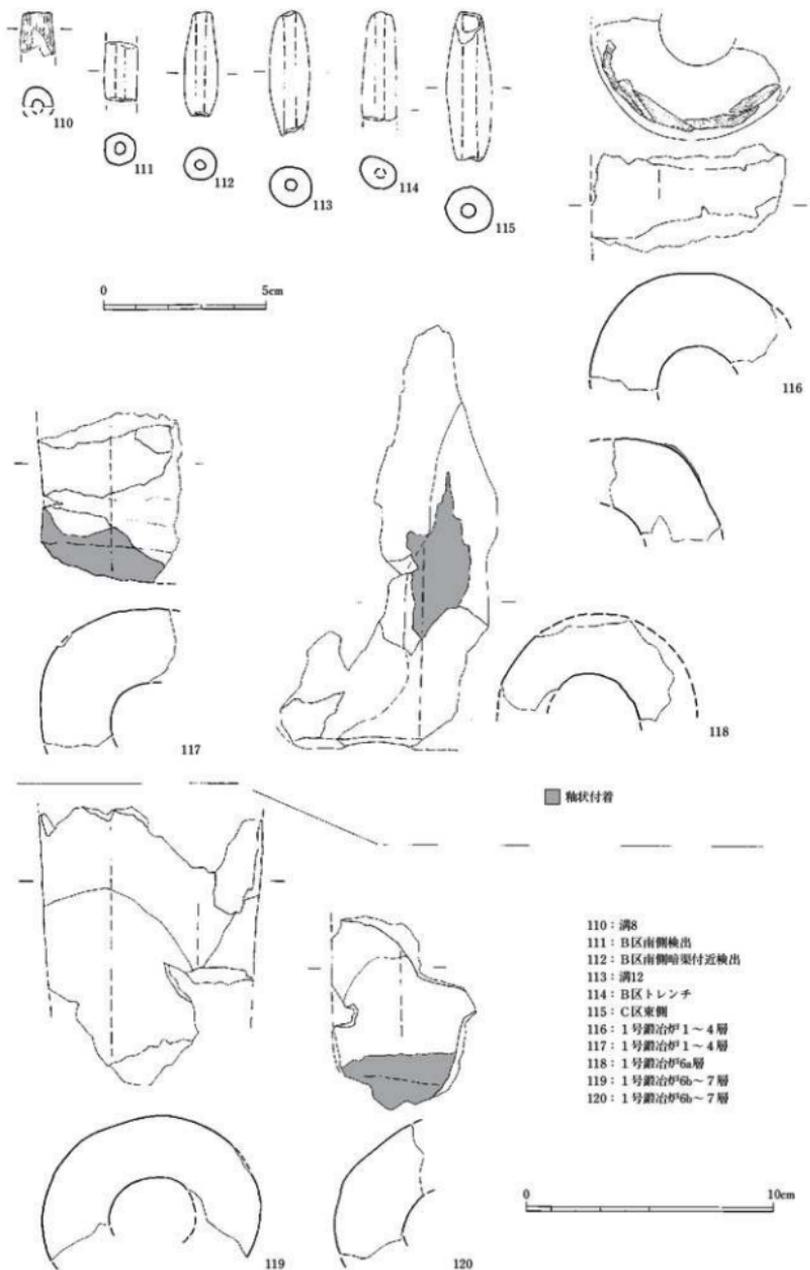
116～120は土師質輪羽口である。116は胎土中に撚り縄を入れて焼成した痕跡が残るもので、向こう側折れ面では明瞭に確認でき、図示しなかったが手前側折れ面にも一部痕跡が残ることから3cmほどの間隔をおいて2本入れていたことが分かる。部分的に滲が付きせず青灰色に還元された痕跡も無いことから輪より外側に出ていた部分である。羽口ごと炉を壊して中の生成物を取り出す時に壊しやすくする工夫であろうか。復元径8.4cm、復元孔径3.2cm。

117は先端部で、褐色の釉状物が付着する。その付け根側に116と似たような縄状のものが取れて溝状になっている。復元径8.2cm、復元孔径3.2cm。118も先端部の資料で右半分ほどが青灰色に還元された跡を示し、左側は淡橙色に被熱し、部分的に釉状物が付着する、復元径は端部側ではやや細く9cm、元側では10cm、復元孔径3.8～4.0cm。119は先端に近い部分で、やや先細りである。先側が青灰色に還元されている。先側の内面孔付近は赤橙褐色に変化している。径8.2～9.0cm、孔径3.2～3.4cm。120は先端部で、先端にはガラス状の釉状物が付着し、その元側は灰色に被熱している。復元径8.9、復元孔径3.3cm。

石器 (図版57～59、第74～78図)

121は錐状石器、122は火打ち石、123・124は使用痕ある剥片、125・126は打製石庖丁、127・128は砥石である。

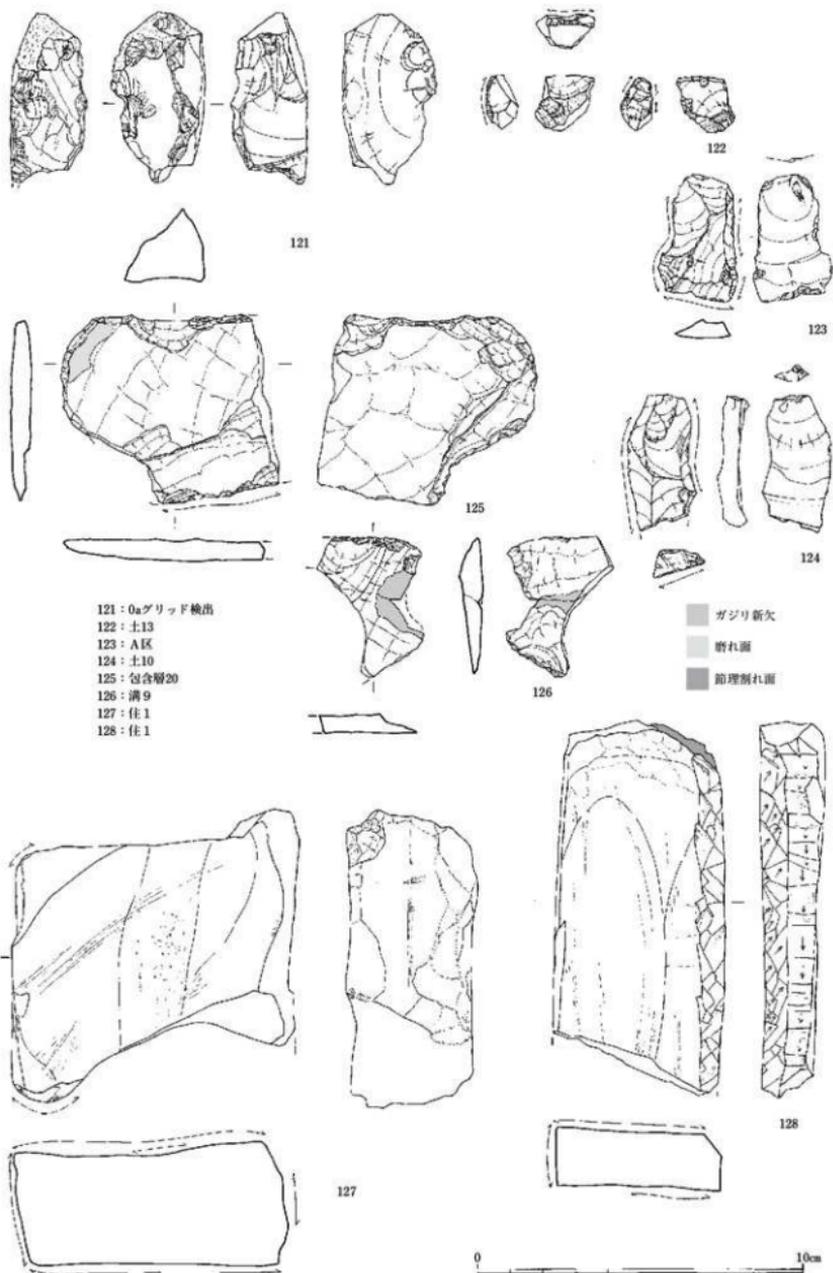
121は黄褐色の玉髓または珪質頁岩の分割された厚手の剥片を用いる。錐先端は使用により欠損する。長さ5.25cm以上、幅2.8cm、厚さ2.3cm、重さ33.91g。0aグリッド出土。122は赤褐色の鉄石英または珪質頁岩製である。上側は潰れ、折れている。下側は表面及び右側縁に使用による小剥離痕がみられる。長さ1.7cm以上(復元値1.85)、幅1.75cm、厚さ0.9cm、重さ2.68g。13号土坑出土。123は姫島産黒耀岩製の縦長剥片を利用し、打点は小さい。縦長ではあるが、連続的に剥離されたものではない。両側縁及び端部に連続する微小剥離痕が見られる。長さ3.9cm、幅2.4cm、厚さ0.65cm、重さ5.79g。A区出土。124は姫島産黒耀岩製の縦長剥片を利用し、左右側縁に連続する微小剥離痕がみられる。末端辺は折れているが、折れ面下縁にも微小な剥離痕があり稜が潰れている。長さ4.2cm、幅2.1cm、厚さ0.9cm、重さ5.52g。10号土坑出土。125は緑色片岩製で、整形加工は周辺から行われ、背部は比較的急角度の剥離を行っている。刃部は剥片の薄い刃部に表面からのみ角度の浅い加工を施す。表面左側縁



第73図 土製品実測図 (1/2、2/3)

上部の一部のみ磨れが見られるが、意図的な加工の研磨か使用による擦れかは分からない。本来は長方形状になると考えられるが、左側縁下部は折損した後に裏面側から一部再加工が施されている。長さ7.8cm以上、幅6.7cm、厚さ0.65cm、重さ35.48g。包含層20出土。126は黒色緻密質安山岩製で、1号竪穴住居から出土した打製石廬丁と同じ香川県産の可能性がある。9号溝の東側1層出土。板状に近い素材の周囲から整形加工を行う。小片のために全形が不明だが、弱弧背の半月形かと考えられる。発掘作業時のガジリにより2片に分割している。刃部は片面加工のようである。長さ4.3cm以上、幅3.25cm以上、厚さ0.9cm、重さ6.97g。127は1号住居ピット3から出土した灰褐色珪質凝灰岩または細粒砂岩ホルンフェルス製である。図下側のほとんどは折れ面で、本来はもっと長い資料であるが、折れ後の再利用時に左下側の突出部に剥離を行った後、敲打で角を潰している。上側の面は分割面で、左上角に敲打による潰れ痕がある。右上側は分割時の突出部に対し剥離調整を行っている。右側面も分割面で、角を剥離調整した後敲打によって角を潰している。上面の砥石作業面の中央、凹んだ部分には敲打痕の痕跡がある。全体に緩やかに凹むよう使用されており、5方向の線状痕がみられる。下面は比較的平らで、横方向の線状痕が広くみられるが、砥石作業の安定のためもしくは砥面の再生修復の粗磨き成形時の痕跡と考えられ、使用痕跡は明瞭でない。長さ9.0cm、幅8.75cm、厚さ4.05cm、重さ447.5g。128は淡灰褐色凝灰質細粒砂岩製で、右側縁は金属利器（整状工具）による砥石の整形加工痕と角を取る整形加工痕（ハツリ）がみられる。前者は側縁に平行になされ、後者は斜めに施されている。裏面は3分の1ほどに砥面の使用痕があり、10分の1ほどは器表面の剥落で、残りは器表面荒れのために分かりづらいが、敲打による粗整形の後粗磨き仕上げかと考えられる。左側縁、上下面とも使用された砥面に残る使用痕は直線的な線状痕である。長さ11.35cm以上、幅5.25cm、厚さ2.05cm、重さ205.5g。1号竪穴住居跡出土。

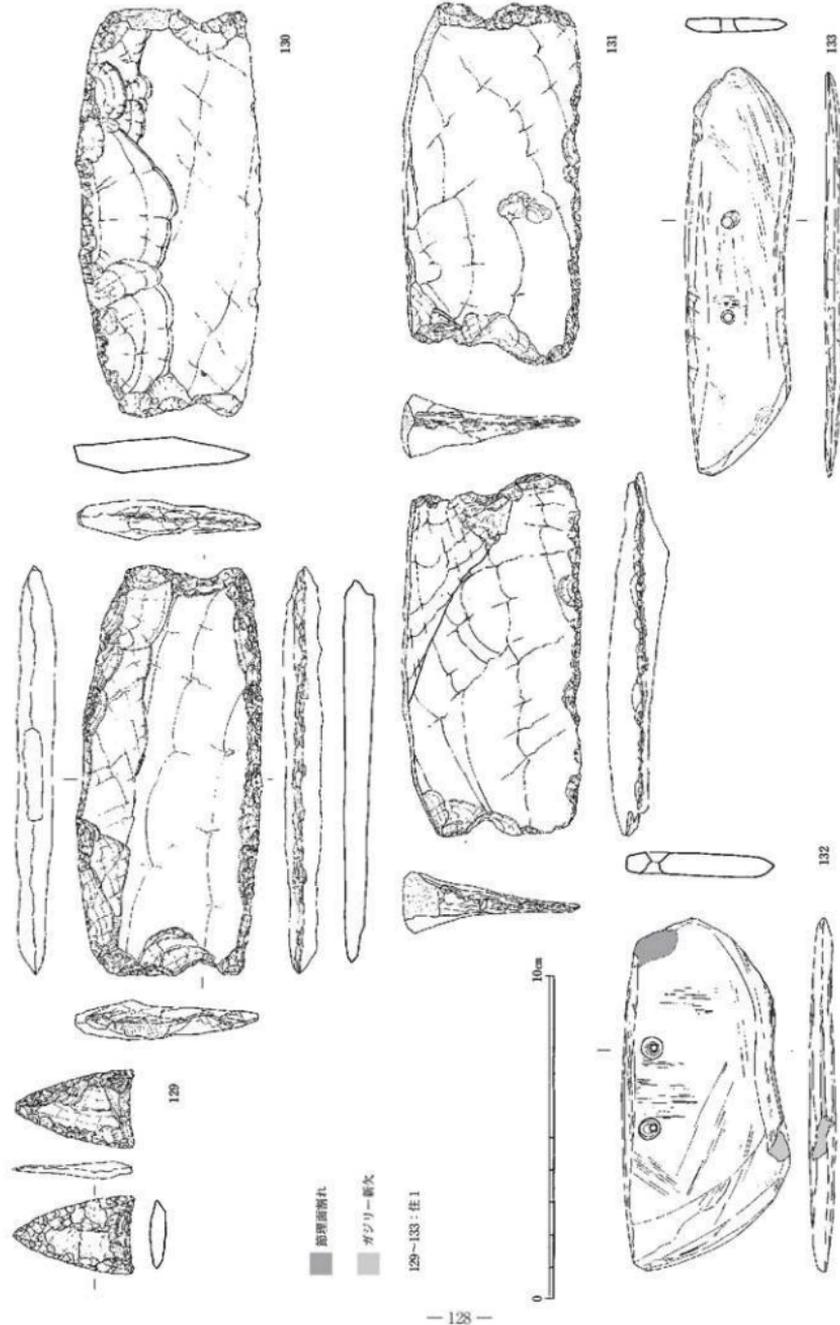
129～133は1号竪穴住居跡から出土した石器で、129は打製石鏃、130・131は打製石廬丁、132・133は磨製石廬丁である。129～131は肉眼観察では香川県坂出市の金山産と考えられる黒色緻密質安山岩（香川産ならサヌカイト）製で、129は挟りの浅い凹基三角形である。表裏両面に比較的広く素材面を残す。長さ3.6cm、幅2.35cm、厚さ0.55cm、重さ4.1g。130はピット2から出土した瀬戸内中部地方で前期末頃以降に見られる打製石廬丁で、裏面右側に白く風化し粉が吹いたような礫面が特徴的である。表面の広い素材面はネガティブな剥離面で、裏面は分割面と考えられ、表と裏の剥離方向は同じではない。背部側は幅3～4cmほどの整形剥離の後刃潰し状加工を行っている。刃部は裏面側から表面のみにやや角度の浅い剥離で片刃を作る。両側縁に浅い挟り入り状の加工で紐掛け部を作り出す。紐掛け部、刃部、裏面の稜線には使用による磨滅光沢が見られる。長さ12.5cm、幅5.6cm、厚さ1.2cm、重さ109.9g。131は背面（上面）には素材の剥離面または分割面が広く残されるが、腹面の剥離方向とは約180°異なる。板状素材（石核）から素材剥片を剥離する際に上下両方向からの打撃が行われていることが分かる。背面には灰白色の礫面が残る。厚みを減じる周辺加工は背面右上の1枚以外は行われていない。左右両側縁に浅い挟り入り状加工を施す。刃部は素材剥片の端部に小さめの加工で両刃に作る。刃部には弱い損耗が認められるが、明瞭な使用痕光沢はみられない。長さ11.15cm、幅6.15cm、厚さ1.8cm、重さ93.23g。132はピット2から出土した黒灰色泥岩製である。左右側縁と裏面刃部近くに整形段階の剥離痕（節理割れを含む）が残り、板状素



第74図 石器実測図1 (2/3)

材の周囲から剥離を行って粗整形したことが分かる。また器表面に残る弱い線状痕は粗磨き整形段階のものであろう。元はほぼ直背又は弱弧背の半月形かと考えられるが、刃部の研ぎ直しにより台形に近くなっている。長さ10.8cm、幅5.1cm、厚さ0.84cm、重さ68.48g。133はピット2から出土した淡緑灰色凝灰質粘板岩製である。元は直背または弱弧背半月形と考えられるが、数度の研ぎ直しを経て長い台形状の直線的刃部に近づいている。背部及び側縁部に一部整形剥離の痕跡が残る。長さ12.5cm、幅3.3cm、厚さ0.53cm、重さ27.84g。

134は打製石鎌または大型の打製石庖丁で、135～142は磨製石庖丁である。134は4号土坑上層から出土したが、4号土坑から出土した縄文土器と同じく本来は5号土坑に帰属する可能性が高い。灰緑色結晶片岩製で、板状素材の周囲から整形が施されているが、身部の厚みのある部分には敲打が行われている。刃部加工はやや角度が浅い交互剥離状で、背部加工は急角度で刃潰し状または階段状剥離が多い。基部側が折損するために全形が不明だが、わずかに内彎する直線に近い刃部を持つ。先端側は尖らずに浅く抉られている。抉り部は良く摩耗している。長さ13.4cm以上、幅6.6cm、厚さ1.7cm、重さ172.0g。135は赤紫色泥岩製で、有側直背弱凸刃形である。全体に転磨が激しいが、素材への整形剥離の痕跡も残る。左側縁は裏面側からの調整剥離のみ行われている。背部や刃部に残る剥離痕は両面から行われている。穿孔部の周囲には敲打の痕跡が残る。長さ4.65cm以上、幅5.15cm以上、厚さ0.65cm、重さ24.16g。136は頁岩質節理が少し発達する赤紫色泥岩製で、金雲母を少量含むことから弱い変成を受けている可能性がある。直背または弱弧背で弧刃形をなすと考えられる。素材に小さな包含物が抜けた穴があり、φ5mm程度の穴は折損の契機になったようである。左側縁に剥離調整痕を、表面の一部に敲打調整痕を残す。長さ2.45cm以上、幅4.8cm以上、厚さ0.65cm以上、重さ12.25g。137は暗紫色珪質細粒砂岩製で、直背形である。刃部、左右側縁を欠損し、それ以上の形態は不明である。器体中央のかなり広い範囲に背部側からの分割面または整形剥離痕が残る。孔の周囲には敲打痕が残る。長さ6.4cm以上、幅4.25cm以上、厚さ0.8cm、重さ24.58g。138は赤紫色泥岩製で、直背二辺刃（三角）形である。左側の凸部にわずかに整形剥離の痕跡を残すが、胴部・背部も滑らかに磨かれている。刃部はより滑らかに丁寧に仕上げられている。刃部にはごく微小な使用痕跡を残すが研ぎ直されている。孔付近で折損する。長さ3.5cm以上、幅5.0cm以上、厚さ0.65cm以上、重さ14.72g。139は淡緑灰色凝灰質砂岩製で直背（弱弧背）弧刃形である。素材石材の砂岩中に小礫2～10mmを特徴的に少量含み、「目」のように見える部分がある。左側縁と背部側に整形剥離の痕跡が残される。体部は粗研ぎのまま線状痕がよく残り、器表面も滑らかでない。一方背部と刃部は丁寧に仕上げ研磨がなされている。使用による刃部の小さな欠けも幾分研ぎ直されているが、完全に消えるほどではない。左側縁端部と右孔部で折損する。長さ6.3cm以上、幅3.7cm、厚さ0.58cm、重さ18.75g。140はやや頁岩質で節理が少し発達する赤紫色泥岩製で、弱弧背弧刃形である。素材には表面背部側に包含物の抜け跡（φ5mm）がある。背部には剥離調整痕を残す。左側孔はほぼ垂直に開けられているが、右側孔は少し傾く。表面には3条の溝状擦痕があり、粗磨き時の磨き痕が残る。刃部左側には使用による微小剥離痕、左側孔の表面背部側には紐磨れ痕が認められる。長さ3.55cm以上、幅6.6cm以上、厚さ0.65cm、重さ20.24g。141は黄褐色の粘板岩または泥岩製で、直背弧刃形である。器体の半分弱が折損するほか、表面で器表面の約半分、裏面で約9分の8を剥落する（二次被熱の影響の可能性あり）。



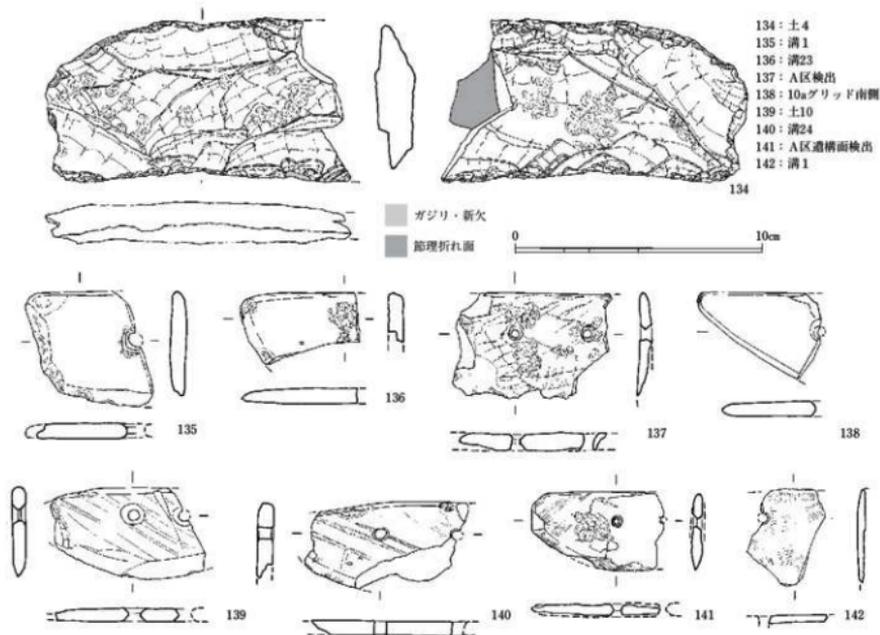
第75図 石器実測図2 (2/3)

表面左側縁上部および背縁近くの一部に整形剥離痕が残る。また左孔の近くには敲打調整痕の残りがみられる。長さ5.3cm以上、幅3.25cm、厚さ0.5cm以上、重さ11.63g。142は暗灰色凝灰質粘板岩製で、小片のために全形が不明だが、緩やかな弧背をなすものと考えられる。表面には粗磨ぎ整形時の痕跡が残る。長さ3.15cm以上、幅3.9cm以上、厚さ0.35cm以上、重さ5.08g。

143～145は打製石斧、146は磨製石斧である。143は淡い緑を帯びる灰白色緑泥片岩製で、周囲から調整を行い短冊状に整形している。左側縁の刃部側は節理により折損しているが、部分的に再加工を行っていることが他の稜よりも摩耗が少ないことから分かる。刃部や折れ部分以外の側縁は使用により良く摩耗している。長さ13.75cm、幅4.75cm、厚さ1.65cm以上、重さ167g。144はわずかに緑を帯びる灰褐色結晶片岩製で、素材面をほとんど残さずに周辺からの調整で整形加工を行っている。刃部や左右側縁が良く摩耗する。長さ11.2cm、幅6.05cm、厚さ1.4cm、重さ129.7g。145は打製石鏃と呼んだ方がいいかもしれない大型品で、わずかに緑を帯びる黒灰色結晶片岩製である。裏面は比較的平坦で、周囲からの調整剥離により整形されている。表面は周囲からの調整剥離の後、所々に敲打調整を行いやや突出した部分を中心に叩き潰している。剥離稜線も敲打痕も比較的稜線が摩滅し、良く使用されたものと考えられるが、刃部の左側には稜の摩耗が比較的少なく刃部を更新した跡が見られる。長さ14.4cm、幅7.8cm、厚さ2.05cm、重さ260.2g。146は深青緑を帯びる暗灰色蛇紋岩製で、右側縁上部に部分的に剥離調整痕が残り、上面に部分的に敲打残りがみられるが、全面磨製である。器体中ほどで折損する。長さ7.1cm以上、幅5.3cm以上、厚さ2.9cm以上、重さ167.6g。

147・148は敲石、149は台石・敲石で、いずれも1号鍛冶炉の6b～7層の中央やや北側から出土した。147は灰褐色の安山岩のやや扁平で長楕円に近い礫の長軸両端を主として敲石として使用する。比較的平坦な右側面にも部分的に敲打痕が見られる。右側縁中央付近上側の器表面の剥落は、敲打痕より剥離が新しい。長さ11.85cm、幅7.1cm、厚さ5.45cm、重さ515.7g。148は灰褐色の安山岩のやや扁平な円礫の比較的平坦な面の中央付近に敲打痕が集中する。裏面にはなく、側縁には一部あるが、集中することはなく散発的である。部分的に鉄分が付着する。また、敲打痕のある面が被熱により暗灰色化する。長さ8.55cm、幅7.45cm、厚さ4.35cm、重さ399.5g。149は灰色の安山岩の扁平な板状の亜角礫を利用し、平坦な一面の中央付近及び先端付近に敲打痕が見られる。裏面右側の折損は敲打がきっかけになった可能性がある。また手前側面にも敲打痕が見られる。表面に鉄分塊が付着する。長さ11.7cm以上、幅7.8cm、厚さ2.4cm、重さ366.9g。

150・151は敲石・磨石、152・153は台石である。150は灰白色の凝灰質安山岩の楕円形の礫の長軸の一端を中心に敲打が見られる。また下面と左側縁の一部に磨り痕が見られ、下面は比較的平坦で滑らかである。長さ8.4cm、幅5.8cm、厚さ5.0cm、重さ280.8g。151は角閃石を多く含むわずかに青を帯びる淡灰褐色の安山岩または花崗斑岩で、拳大の円礫の一端を敲石として主に使用し、他端は磨り面の後に部分的に敲打痕が見られ、底面にも磨り面が見られる。長さ11.4cm、幅11.6cm、厚さ7.6cm、重さ1285.7g。152は灰褐色の安山岩の人頭大の比較的扁平な安山岩の礫の一面を台石作業面とし、平らな磨り面上に程度の弱い敲打痕が散在する。およそ半分ほどで折損し、作業面との稜線近くの側縁に4箇所の礫表皮が剥落した

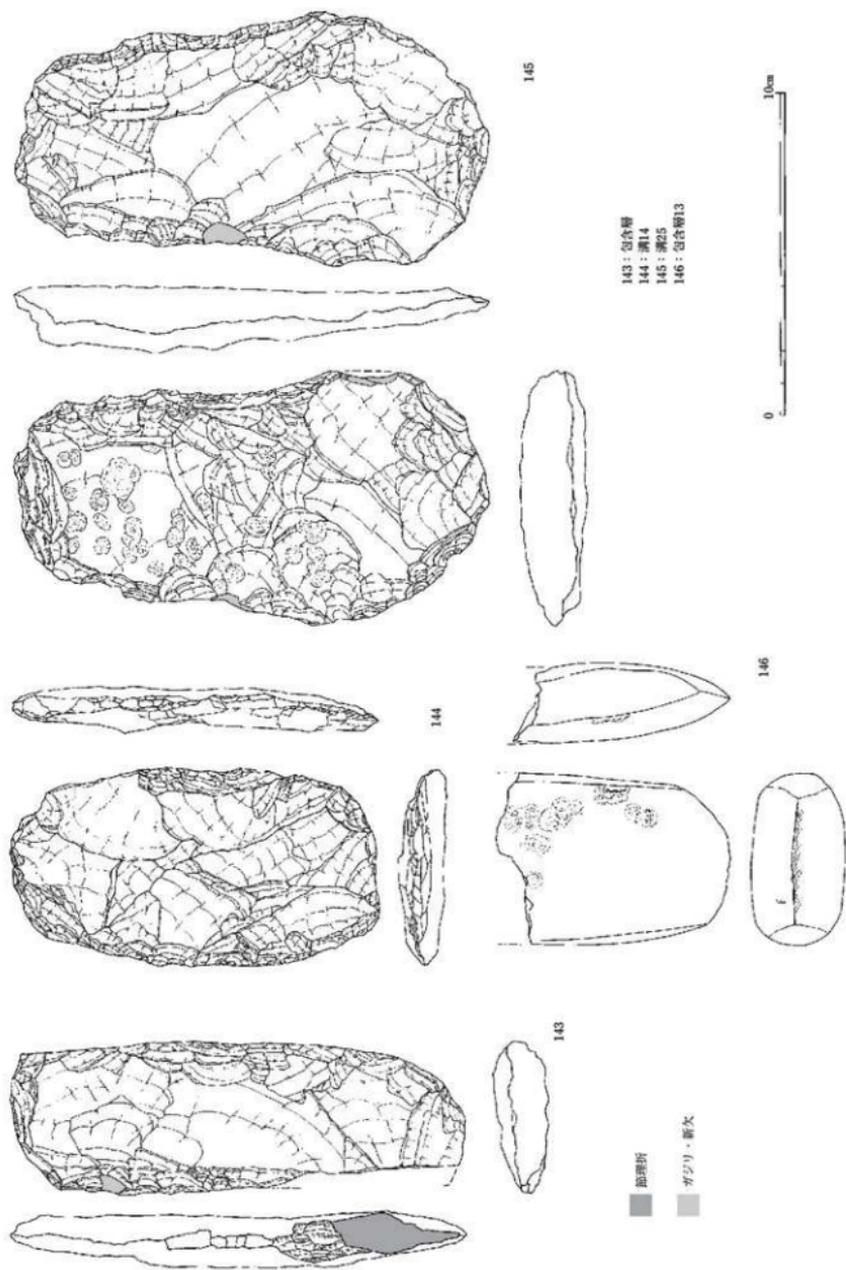


第76図 石器実測図3 (1/2)

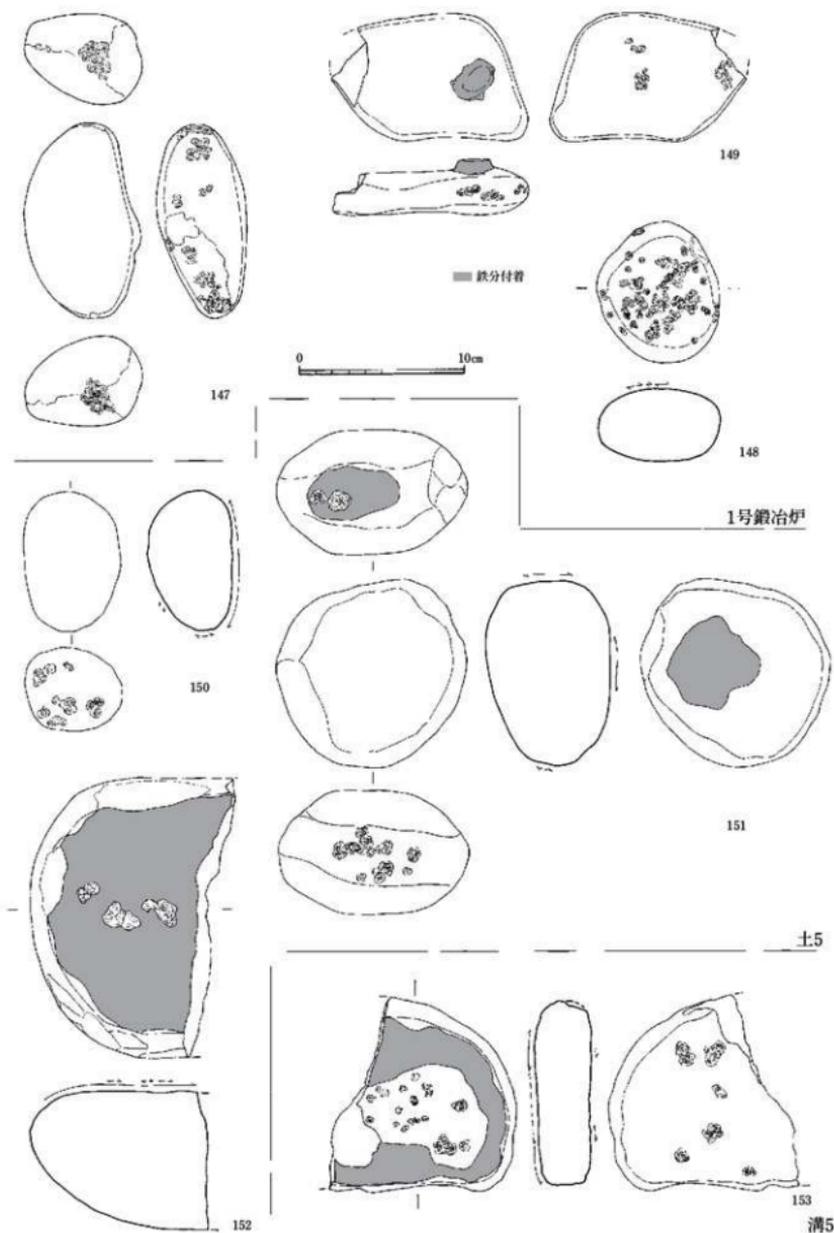
痕があり、その風化は比較的早く、折れ面と同程度である。長さ17.0cm、幅12.45cm以上、厚さ8.45cm、重さ2665.3g。153は礫表面に造岩鉱物が風化し抜けた穴 $\phi$ 0.5~1.0mmが特徴的にみられる暗灰褐色安山岩の扁平な板状の礫を使用する。表面中央部には敲打痕が残されているが、全体に敲打痕が小さくて浅く、面として凹み石状にはなっていない。その周囲にリング状に磨り面が観察される。敲打痕が磨り面を切っていることから、上面の台石の作業面整形または表面の敲打痕に対する底部の安定のための整形であろう。裏面は磨り面は無く、比較的平らな礫面のままであるが、表面よりも大きくて深い敲打痕が数は少ないが見られる。左側は折損するが割れ口付近に一部被熱する。長さ11.9cm以上、幅11.4cm以上、厚さ3.45cm、重さ669g。

#### 鉄滓 (図版60、第79図)

1・2号鍛冶炉からは鉄滓が出土したが、椀形滓など大型のものはなく、小片ばかりであった。また埋土を採取し水洗選別をおこなったが粒状滓や鍛造剥片などは出土しなかった。周囲の溝などからは椀形を含むやや大きめの滓が出土したので、それらについて報告する。154・155は5号溝から出土し、156~158は38号溝から出土した。154は表面の2/3程は赤茶褐色の鉄錆状の塊りであるが、残りは暗赤褐色で所々に小さな発泡がみられる金属質が残る部分である。重さ363.0g。155は上面に所々発泡する軸状の部分もあるが、比較的金属質が残る暗赤褐色の錆状の部分が多い。重さ427g。156は比較的金属質が残っている部分が多く、その中に発



第7図 石器実測図4 (2/3)



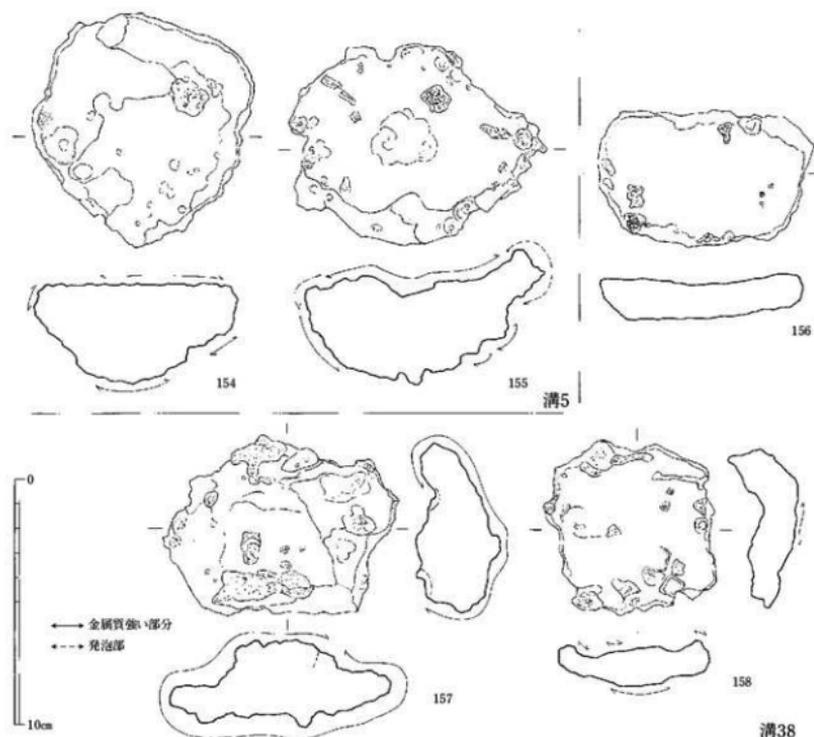
第78图 石器实测图5 (1/3)

泡する軸状の小部分が点在する。重さ98.9g。157は表面中央やや下側に炉壁の一部かと考えられる土壌をかんだ小さな部分が附着する。その外側に軸状物がみられる。部分的に錆状の部分はあるが、大部分は金属質が残る部分である。重さ196.8g。158は錆状の部分が多く、その中に発泡する軸状の小部分が点在する。重さ101.4g。なお図示はしなかったが、38号溝からも小型の滓がまとまって出土している。

## 10 まとめ

調査地点は祇川の左岸沿いの微高地からやや内陸側に入った低平地にあり、溝が多く流れていた。古い時代には生活するには決して安定していない中でも、わずかな高所に遺構が集中する傾向がうかがえる。検出した主要な遺構は、弥生時代後期の竪穴住居跡1軒と中世の掘立柱建物跡1棟のほか、土坑12基、焼土坑4基、鍛冶炉2基、炉跡1基、溝（自然流路を含むが）42条である。

以下時代ごとに遺跡の変遷を考察する。縄文時代早期の押型土器が1点のみ出土で、しかもロー



第79図 鉄滓実測図(1/2)

リングが激しい。上流から流れてきた可能性もある。縄文時代後期の遺物は比較的広い範囲で散発的に出土し、その頃までにはこの辺も離水し比較的安定した平野になっていた可能性がある。住居は発見されなかったが、後期中頃にはB区の南側に4号土坑が掘られている。湧水点中だが有機質遺物は出土せず、土坑の性格ははっきりしない。7・8号土坑もこの時期の可能性がある。1区北側の谷への斜面でも縄文時代後期の包含層から土器が出土している。また浅鉢片が1点出土していて、晩期前半にもわずかに活動痕跡がある。

弥生時代中期中頃の遺構はないが、流路中に後期の遺物に混じって遺物が散見される。後期前半～中頃には、北側の微高地に堅穴住居跡が1軒検出された。また周囲の1・2・4号溝などからまとまって土器類が出土している。この弥生時代後期の遺物中には、1号住居跡から出土した香川産と考えられる黒色微密質安山岩製の中部瀬戸内の打製石庖丁があり、土器類にも瀬戸内の影響が散見される。12号土坑とピット1・16はこの時期である。弥生時代後期中頃～古墳時代初頭にかけてC区には10号土坑が形成され、土器溜まり状を呈し、最終的に古墳時代中期に埋まっている。11号土坑も時期が近い。30・31・35・36号溝は弥生後期頃の可能性が高く、周囲よりやや標高が高い砂礫堆の部分などの周囲を蛇行し、自然流路の可能性が高い。直線的な28・34号溝は後期後半以降である。弥生時代後期～古墳時代初頭の遺物は北側からの出土が多く、調査区外の北側の谷を隔てた国作八反田遺跡（みやこ町教育委員会調査）では住居跡があり、流路中から銅戈片が出土している。

古墳時代中期から後期、古代の遺物も僅かに出土するが、溝以外に明確な遺構はない。20・22・23・26・27号溝は古墳時代以降で、10～12・16・21・25号溝は古代以降と考えられ、そのうち16・23・26・27号溝は比較的直線的で、調査前に残っていた条里状地割りの方向と近い。近隣の豊前国府跡や官道跡を含む条里状地割りとほぼ同じ方角を示す直線的な溝から、少なくとも古代から中世のある時期に条里状地割りに沿った水田経営がなされた可能性が高い。

次に遺構が展開するのは古代末から中世で、やや西側にある6号土坑と8号溝は12世紀代に遡るが、主体を占めるのは13世紀代を中心とし、一部14世紀代の掘立柱建物跡1棟とそれを取り囲む5・6・14号溝である。2・3号土坑と2基の鍛冶炉もこの時期で、1・4号土坑も中世であろう。1号掘立柱建物跡を中心とし溝で囲まれた中世集落の一端を示すが、調査区内には建物1棟しかなく、集落の本体は調査区外の東側に拡がる可能性がある。なお焼土坑4基は15世紀前半代まで下る可能性がある。9・14・19・32・33・37号溝なども概ねこの時期であろう。

1区で検出された12世紀前半～中頃の古代末の集落は3区と比べると時期的にやや先行しているが、建物方位などは基本的に同じで、3区の集落は1区の集落が拡大した結果とも考えられる。

その後16世紀末ごろには一帯が水田化しているものと考えられ、15・18号溝は近世水田に伴うものであろう。その他に古代～中世と考えられる溝に伴う小畦畔状遺構を部分的に検出したが、水田遺構としては十分に調査できなかった。



1. 京ヶ辻遺跡3区調査地遠景（東から）



2. 京ヶ辻遺跡3区調査地遠景（西から）



3. 京ヶ辻遺跡3区B～D区空撮合成  
（真上から：上が北）



1. B区全景 (真上から：上が北)



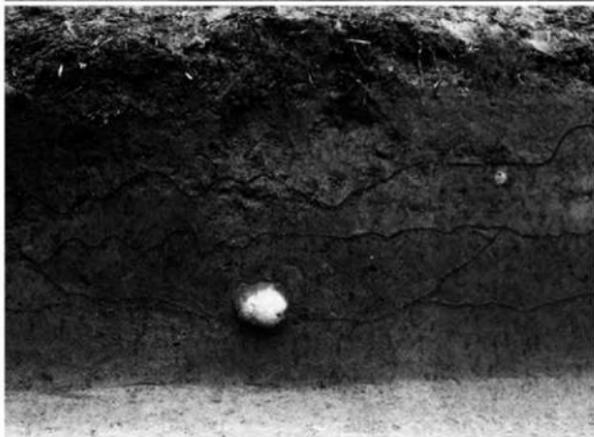
2. C区全景 (真上から：上が北)



3. D区全景 (ほぼ真上から：上が西)



1. E区全景(真上から:上が北)



2. B区5a号溝北側土層(南から)



3. B区14号溝西側土層(東から)



1. C区東壁土層北側1



2. C区東壁土層北側2



3. C区東壁土層中央付近

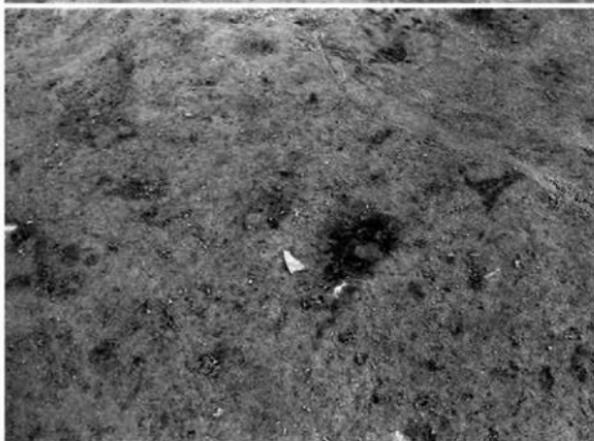
1. C区東壁土層南側

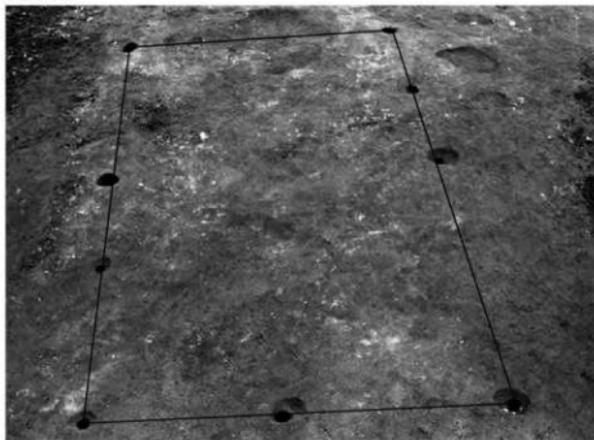


2. A区1号竪穴住居跡完掘（東から）



3. A区1号竪穴住居跡石罫129出土状況  
（南から）





1. B区1号掘立柱建物跡（東から）



2. B区3号土坑土層（南西から）



3. B区3号土坑完掘（南西から）



1. B区4号土坑土層（東から）



2. E区6号土坑検出（北から）



3. E区6号土坑ほぼ完掘（北から）



1. C区10号土坑遺物出土上層  
(北東から)

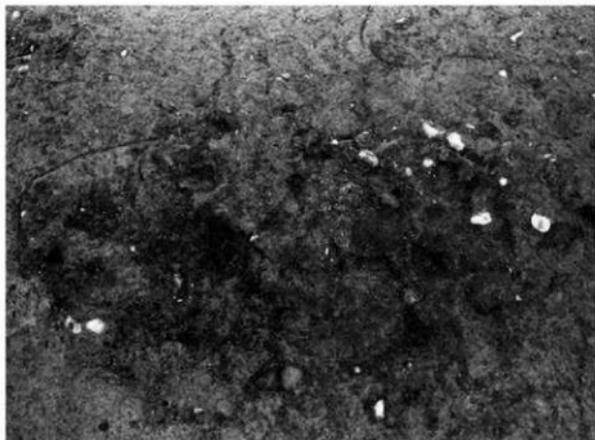


2. C区10号土坑遺物出土下層  
(北東から)

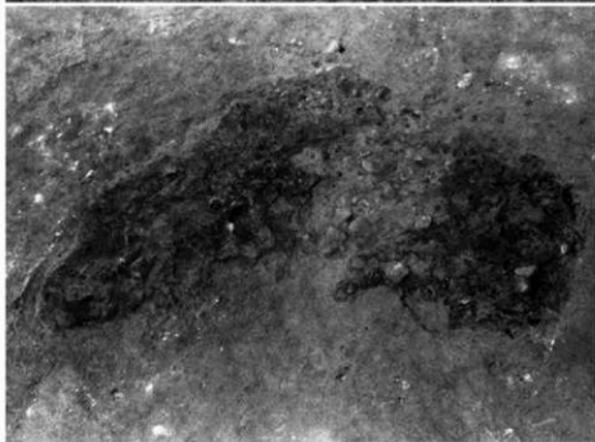


3. E区12号土坑上層 (南から)

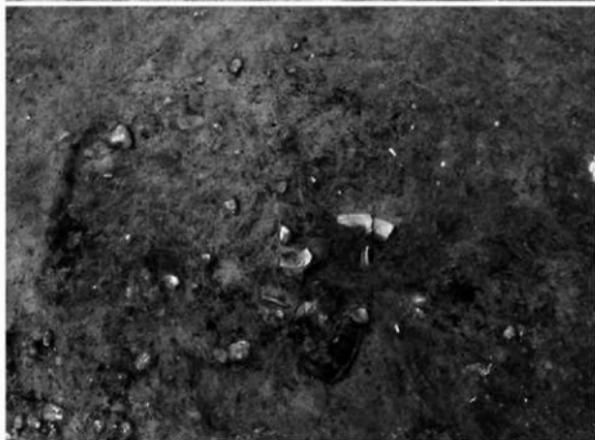
1. B区1号焼土坑検出 (南西から)



2. B区2号焼土坑検出 (南から)

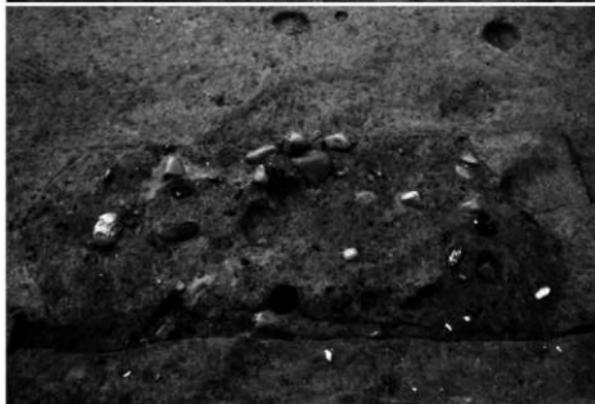


3. B区3号焼土坑検出 (南西から)

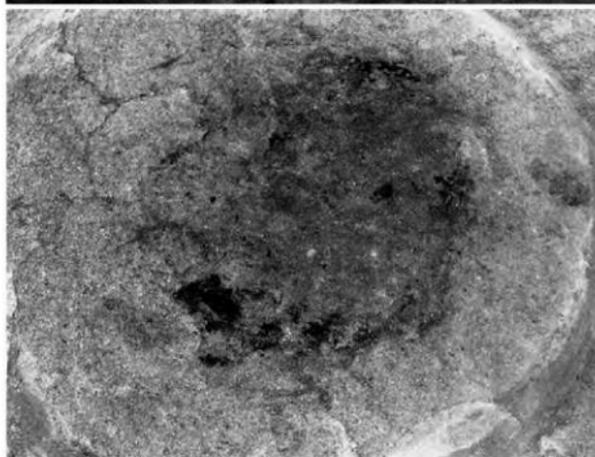




1. B区3号焼土坑遺物出土（南から）



2. E区4号焼土坑検出（東から）



3. D区1号が跡検出（南から）

1. D区1号炉跡土層 (南から)



2. E区1号鍛冶炉4層 (南から)



3. E区1号鍛冶炉5層 (南から)





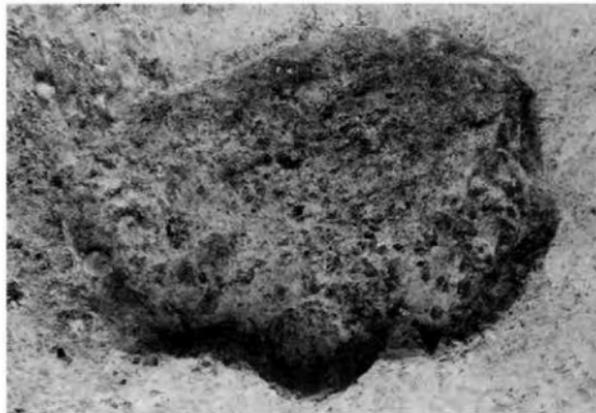
1. E区1号鍛冶炉土層1（南から）



2. E区1号鍛冶炉6層（南から）

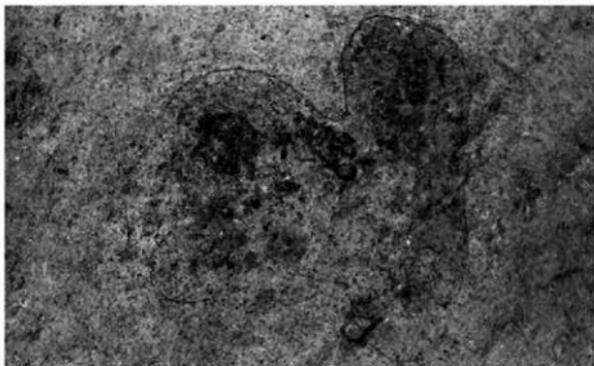


3. E区1号鍛冶炉土層2（南から）



4. E区1号鍛冶炉7層（南から）

1. E区2号鍛冶炉検出（東から）



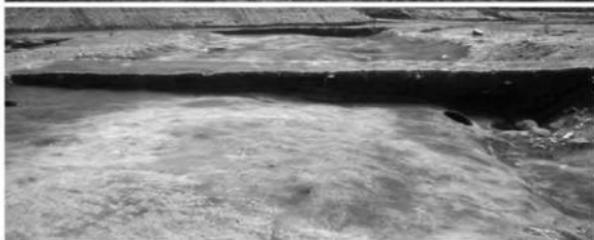
2. E区2号鍛冶炉完掘（東から）



3. A区2号溝（南東から）



4. A区2号溝土層1（北から）

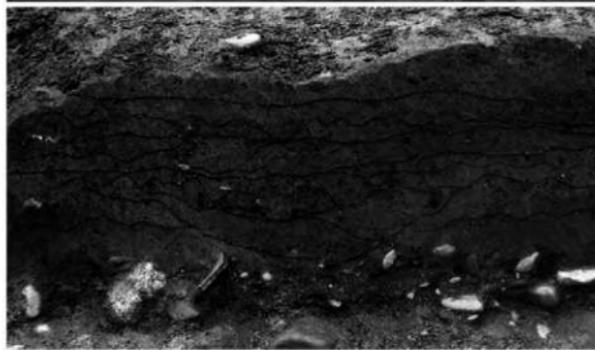




1. A区2号溝土層2（北から）



2. A区4号溝土層（北東から）



3. B区5 a号溝南壁土層（北から）



4. B区5 a号溝北側遺物出土（西から）

1. B区5 a号溝北側遺物出土（西から）



2. B区5 a号溝南側（西から）



3. E区5 c号溝70他遺物出土（北から）





1. B区6b・5bc号溝 (北から)



2. B区6a号溝遺物出土 (南から)

1. B区6a号溝北壁土層（南から）



2. B区6a号溝中央付近遺物出土（東から）



3. E区6b号溝土層（南から）

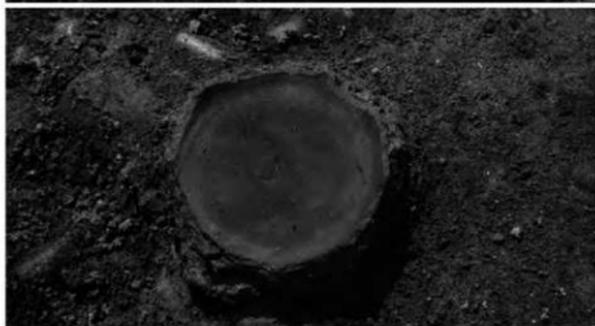




1. B区7・8号溝 (西から)



2. B区8号溝 68 出土状況



3. B区8号溝 72 出土状況

1. B区9号溝土層 (西から)



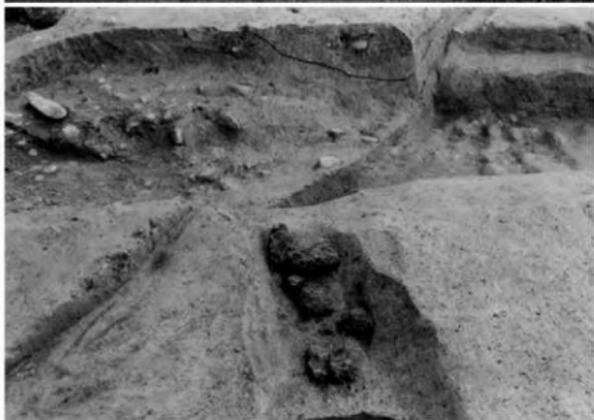
2. B区14号溝東壁土層 (西から)

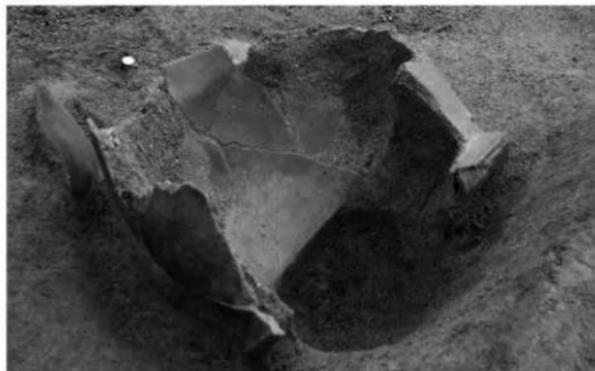


3. E区37号溝 (北から)



4. E区38号溝東側鉄滓出土 (北西から)





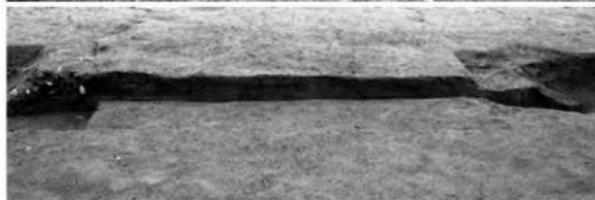
1. D区ピット16土器出土 (南東から)



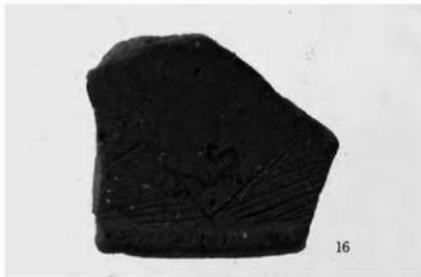
2. D区ピット18 (西から)

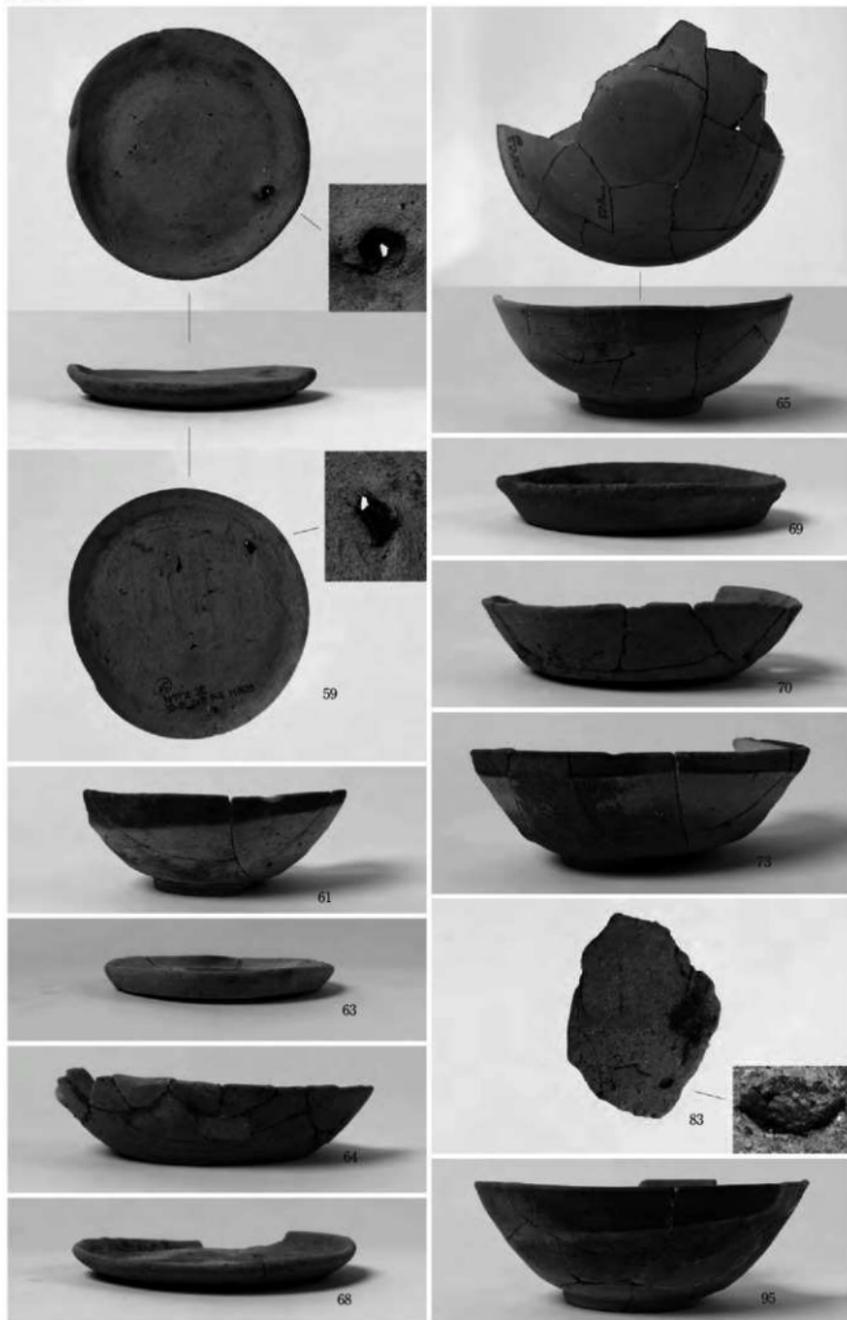


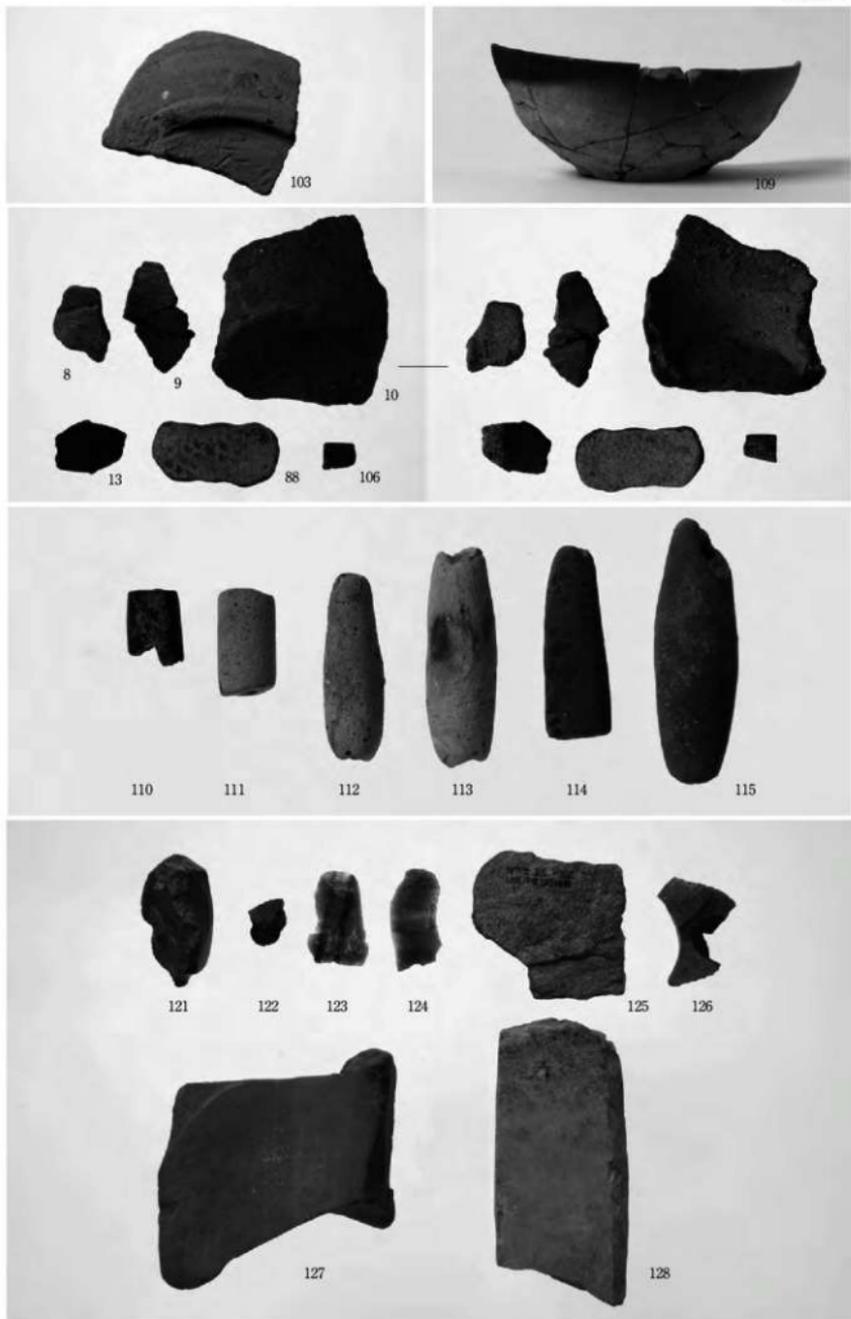
3. E区5bc・6b号溝間硬化面  
(南東から)

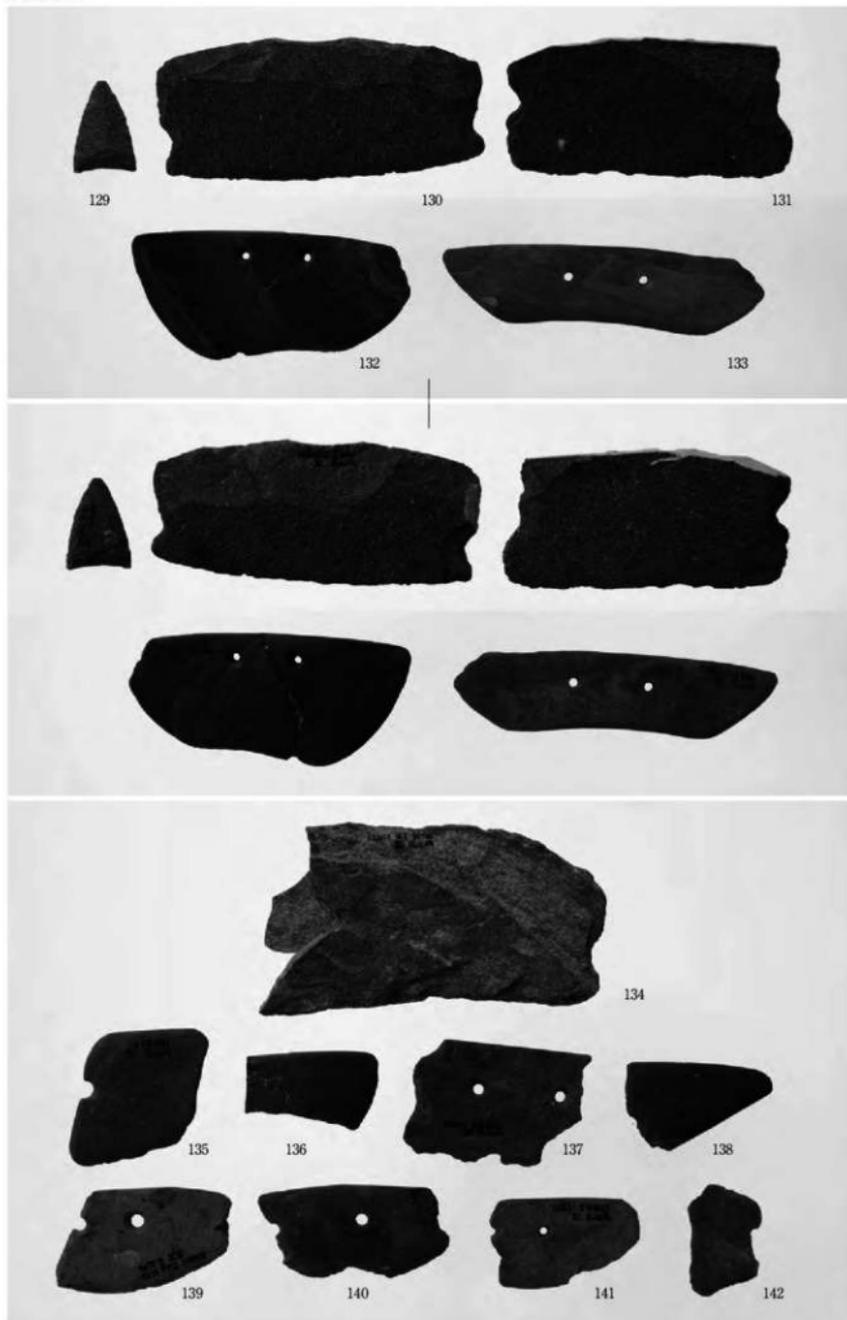


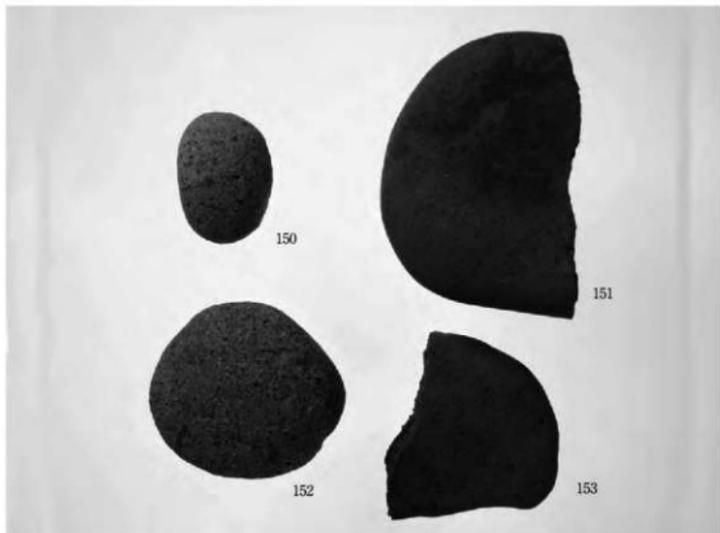
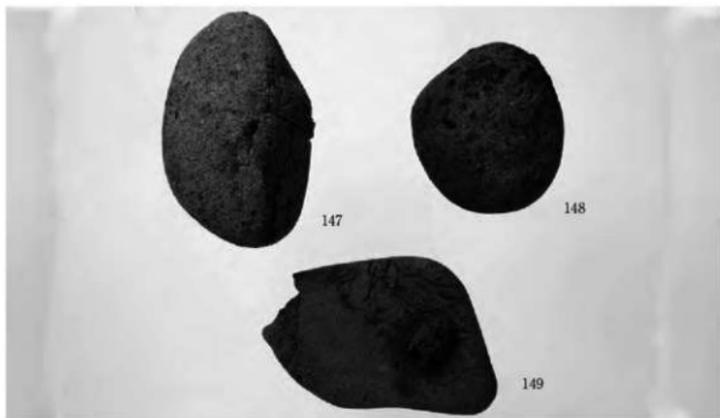
4. E区5bc・6b号溝間硬化面土層  
(南東から)

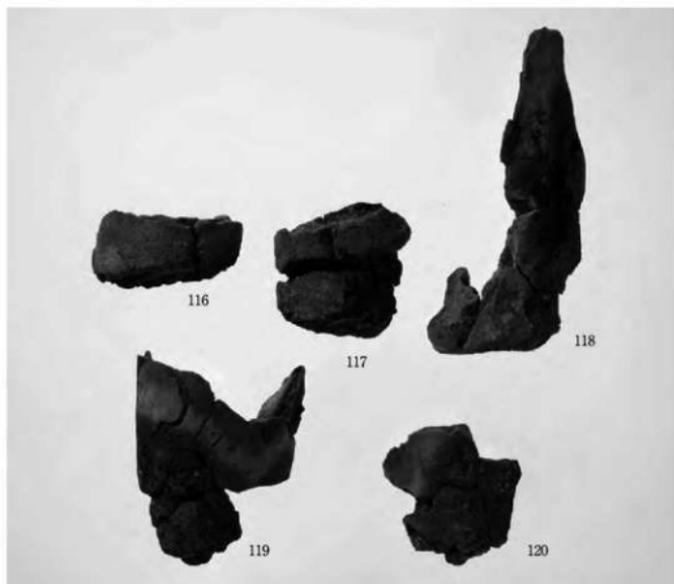
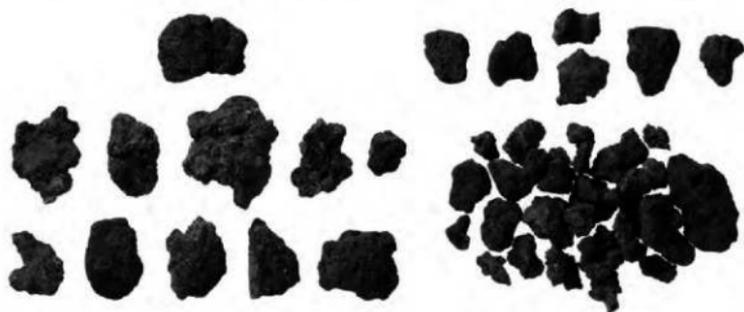
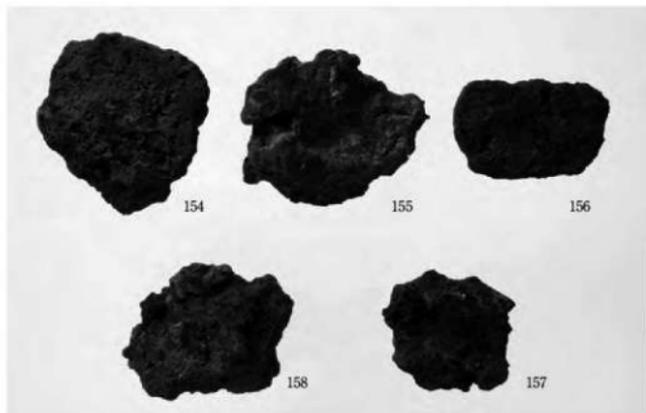












# 国作三角遺跡



## V 国作三角遺跡

### 1 遺跡の概要

国作三角遺跡は、みやこ町国作179-1・2番地の約600mを調査対象とした。

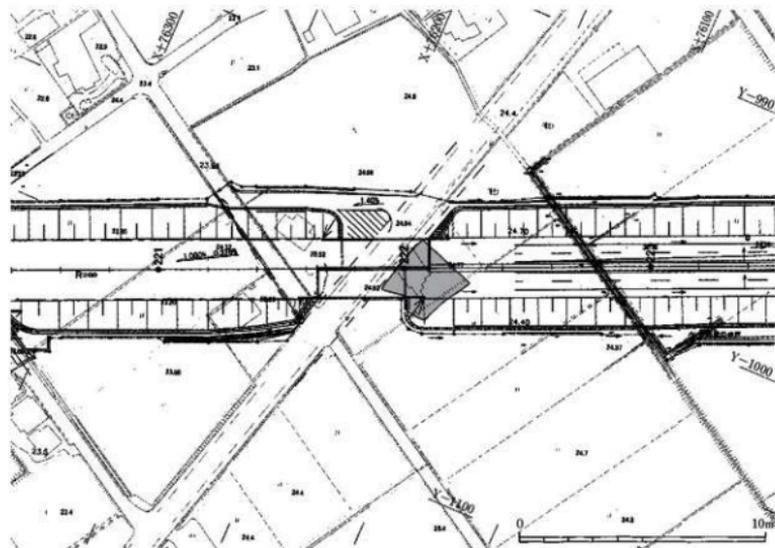
調査対象地は調査前宅地であり、かなり攪乱されているものと思われたが、GLから1.8m下の灰白色砂質土の遺構面(標高23.5m前後)から土坑2基と溝2条を検出した。



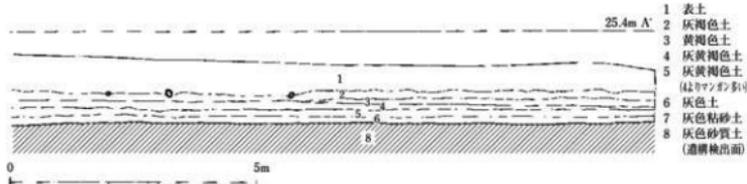
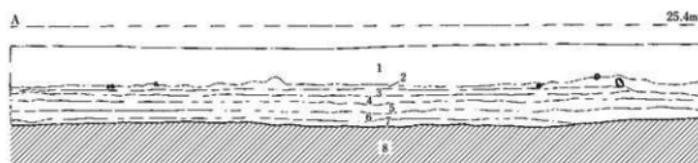
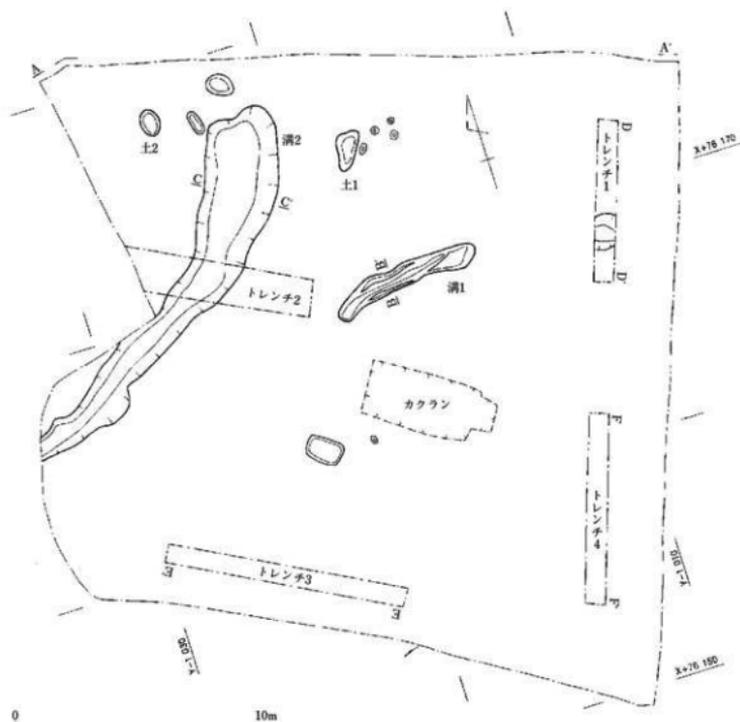
国作三角遺跡全景(南から)

検出した土坑・溝は遺物がなく時期不明だが、遺構検出時には弥生土器片、土師器片、須恵器片、白磁片が出土しており、少なくとも弥生時代～中世までの遺構の可能性がある。

調査はカワラケ田遺跡2次調査と並行しつつ、平成22年5月10日から6月9日の約1ヶ月の間、発掘調査を行った。



第80図 国作三角遺跡(みやこ町)の詳細位置図(1/2,000)



第81図 国作三角遺跡全体図・土層図 (1/200・1/100)

## 2 土坑

### 1号土坑 (図版62、第82図)

調査区北西隅で検出した遺構で、形状は不整形で長さ0.85m、幅0.4m、深さ約0.3mを測る。断面は逆台形状で、埋土は灰色粘砂土が堆積していた。出土遺物がなく時期は不明である。

### 2号土坑 (図版62、第82図)

調査区北側中央で検出した遺構である。長円形で、長軸約1m、短軸約0.4m、深さ0.15mを測る。断面は逆台形状で、埋土は灰色粘砂土が堆積していた。出土遺物がなく時期不明である。

## 3 溝

### 1号溝 (図版62、第82図)

調査区中央で検出した溝で、長さ6.2m、幅0.6~1m、深さ約0.2mを測る。断面は逆台形状で、段がついている。これも埋土は灰色粘砂土だが、出土遺物がなく時期不明である。



2号溝 (南から)

### 2号溝 (図版63、第82図)

調査区西側で検出した溝で、長さ17m、幅0.9~3m、深さ約0.2mを測る。溝は北側に向かうほど幅広くなり、断面は逆台形~浅いすり鉢状である。埋土は1号溝と同様である。

### 出土遺物 (図版64、第83図)

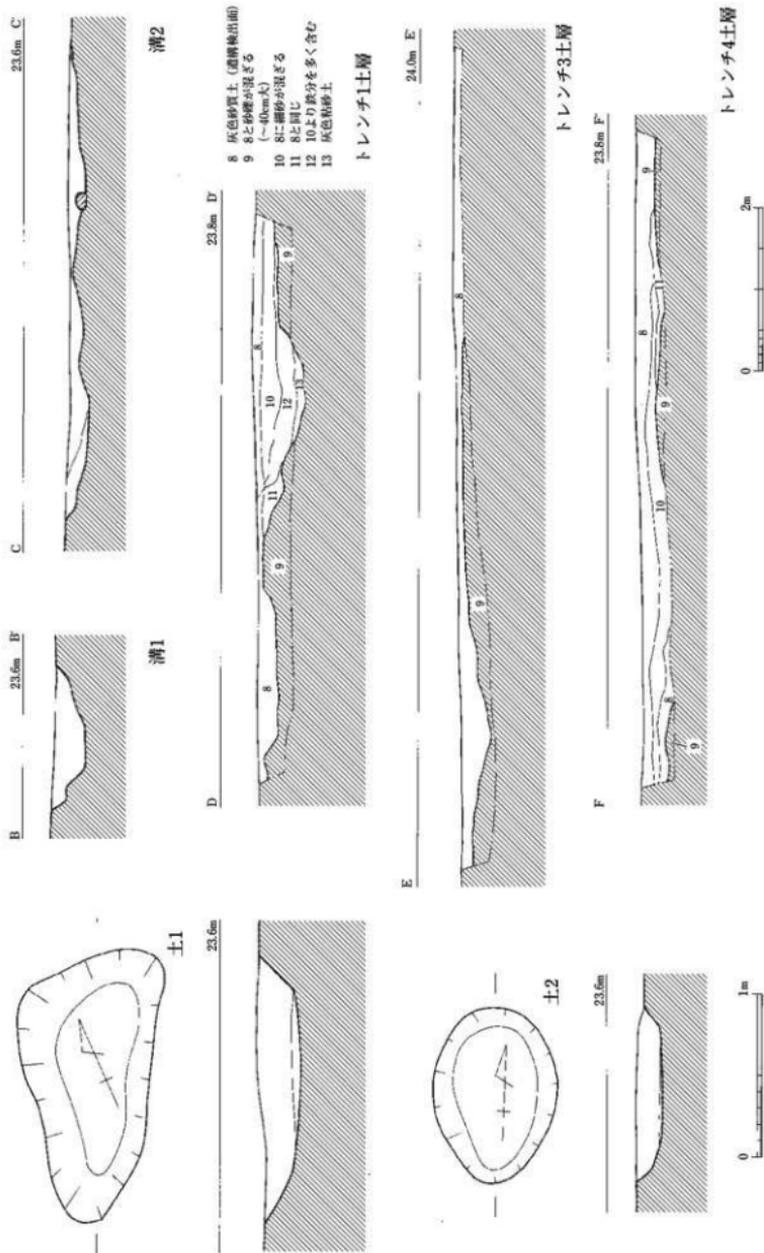
1は須恵器杯身片である。口縁端部に向かって比較的真っ直ぐに立つ。2は土師器甕の口縁部片か。口縁から頸部は逆L字状になる。

## 4 トレンチ

遺構面より下層に遺構がないかを確認するために、トレンチを4本設定した。

### トレンチ1 (図版63、第82図)

調査区東隅に設定したトレンチで、長さ7m、幅1mを測る。約0.4m掘り下げたが遺構は検



第82図 土坑・溝・トレンチ土層実測図 (1/60、1/30)

出されなかった。灰白色砂質土を約0.3m掘り下げて、幅約3.6m、深さ約0.5mの自然流路の痕跡を確認した。埋土は、灰白色砂質土に鉄分を多く含み、黄褐色砂質土になる。

出土土器（図版64、第83図）

3は弥生土器甕の底部片である。底部は平底で、内面には指押さえの痕跡が残る。

トレンチ3・4（第82図）

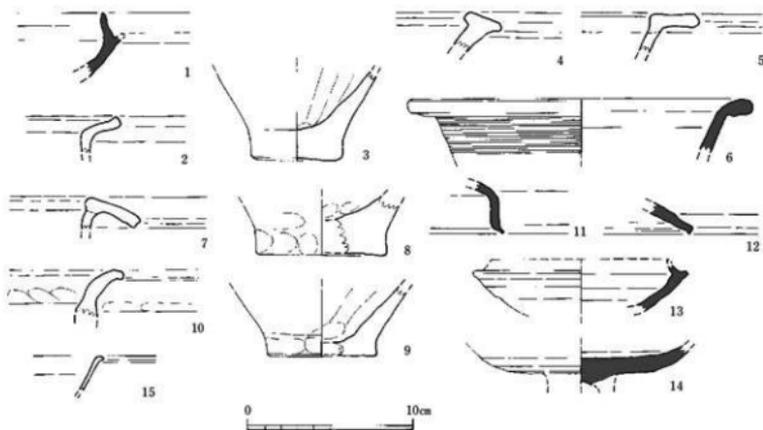
南側に設定したトレンチ3は長さ10m、幅1mを測る。トレンチ1の南側に設定したトレンチ4は長さ8m、幅1mを測る。2つのトレンチは、どちらも遺構面から約0.4m掘り下げたが、灰白色砂質土と礫石が混ざる層を確認したが、明確な遺構は検出されなかった。

出土土器（図版64、第83図）

4・5はトレンチ3出土の弥生土器壺の口縁部片である。焼成は良好で橙色を呈す。6はトレンチ4出土の須恵器甕片である。口縁端部に向かって外側に開く。外面の調整にはカキ目を施す。

## 5 遺構検出出土土器（図版64、第83図）

7～15は遺構検出時の出土である。7は弥生土器壺の口縁部片である。8・9は弥生土器甕の底部片である。共に平底で、指による圧痕が残る。10は土師器甕の口縁部片である。11と12は須恵器杯蓋の口縁部片である。11は口縁端部内面に段を有する。12は嚙状を呈するタイプで8世紀代のものか。13は杯身片で、口縁端部と底部を欠損する。14は高杯片で、杯部と脚部との接合部分である。15は白磁碗の口縁部片で、端部はやや丸みのある嚙状になる。



第83図 出土土器実測図（1/3）

## 6 まとめ

調査区のすぐ南側では、みやこ町教育委員会による国作八反田遺跡の調査が行われている。国作八反田遺跡（※現地説明会資料から）では弥生時代～古墳時代の住居跡と流路跡を検出し、流路跡からは銅戈片が出土した。またさらに東側の京ヶ辻遺跡でも弥生時代～中世の集落跡を確認し、特に古墳時代中期の集落跡からは初期須恵器が出土した。その他にも周辺では調査地の南西に豊前国府跡もあるが、それらの遺跡に関わるような遺構・遺物は検出されなかった。

目立った遺構・遺物は検出されなかったが、当遺跡は国作八反田遺跡や京ヶ辻遺跡と同じ沖積地に立地した遺跡の一部であり、調査地から北側にかけて遺構は希薄になっていくと思われる。



京ヶ辻遺跡・国作三角遺跡周辺の風景（H24.12.26）



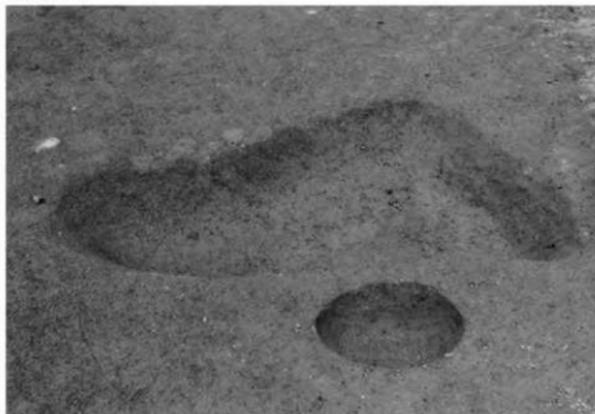
1. 国作三角遺跡全景（東から）



2. 国作三角遺跡北半分（東から）



3. 国作三角遺跡南半分（東から）



1. 1号土坑 (東から)



2. 2号土坑 (東から)



3. 1号溝 (西から)

1. 2号溝 (東から)



2. 北側土層 (東から)



3. トレンチ1 (南西から)





1. トレンチ3 (北東から)



2. トレンチ4 (北西から)



3. 出土土器

## 報告書抄録

ふりがな	きょうがつじいせきいち・さんく こくさくみすみいせき							
書名	京ヶ辻遺跡(1・3区)・国作三角遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第14集							
編著者名	坂本真一(編) 大庭考夫 海出淳平 宮田剛							
編集機関	九州歴史資料館							
所在地	〒838-0106 福岡県小郡市三沢5208-3							
発行年月日	平成26(2014)年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査 期間	調査 面積	調査 原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	°' "	°' "			
きょうがつじいせき 京ヶ辻遺跡 1区	ふくおかけんみやこぐん 福岡県京都市 みやこまちおおあざありひさ みやこ町大字有久	40625	920071 (町番号) 920135 (県番号)	33° 41' 00"	130° 59' 27"	2009.09.28 ) 2011.03.01	6,300㎡	東九州 自動車道 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
京ヶ辻遺跡 1区	集落	縄文時代 弥生時代 古墳時代 平安時代	竪穴住居跡 11 掘立柱建物跡 21 土坑 18 溝状遺構 25 水田	縄文土器 弥生土器 土師器 須恵器 陶磁器		土製品 石製品 金属製品		
遺跡の概要 縄文時代の包含層、弥生・古墳時代の竪穴住居跡、平安時代の掘立柱建物跡と土坑および水田を確認した。								
きょうがつじいせき 京ヶ辻遺跡 3区	ふくおかけんみやこぐん 福岡県京都市 みやこまちおおあざありひさ みやこ町大字有久	40625	920071 (町番号) 920135 (県番号)	33° 41' 03"	130° 59' 24"	2011.05.06 ) 2011.11.30	5,600㎡	東九州 自動車道 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
京ヶ辻遺跡 3区	集落	弥生時代 鎌倉時代 室町時代	掘立柱建物跡 1 竪穴住居跡 1 土坑 12 溝 42 鍛冶炉 1	弥生土器 土師器 瓦器 瓦質土器		鉄滓 輪羽口 石器		瀬戸内型 打製石庖丁 鍛冶炉
遺跡の概要 弥生時代後期の竪穴住居跡と中世の掘立柱建物跡および土坑・溝・鍛冶炉跡を検出した。								
こくさくみすみいせき 国作三角遺跡	ふくおかけんみやこぐん 福岡県京都市 みやこまちおおあざこくさく みやこ町大字国作	40625	920050	33° 41' 12"	130° 59' 20"	2010.05.10 ) 2010.06.09	600㎡	東九州 自動車道 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
国作三角遺跡	集落	弥生時代 ) 中世	土坑 溝	弥生土器 土師器 須恵器		陶磁器		
遺跡の概要 弥生時代以降の土坑と溝を検出した。								

福岡県行政資料	
分類番号	所属コード
JH	2117104
登録年度	登録番号
25	7

東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告-14-

京ヶ辻遺跡（1・3区）・国作三角遺跡

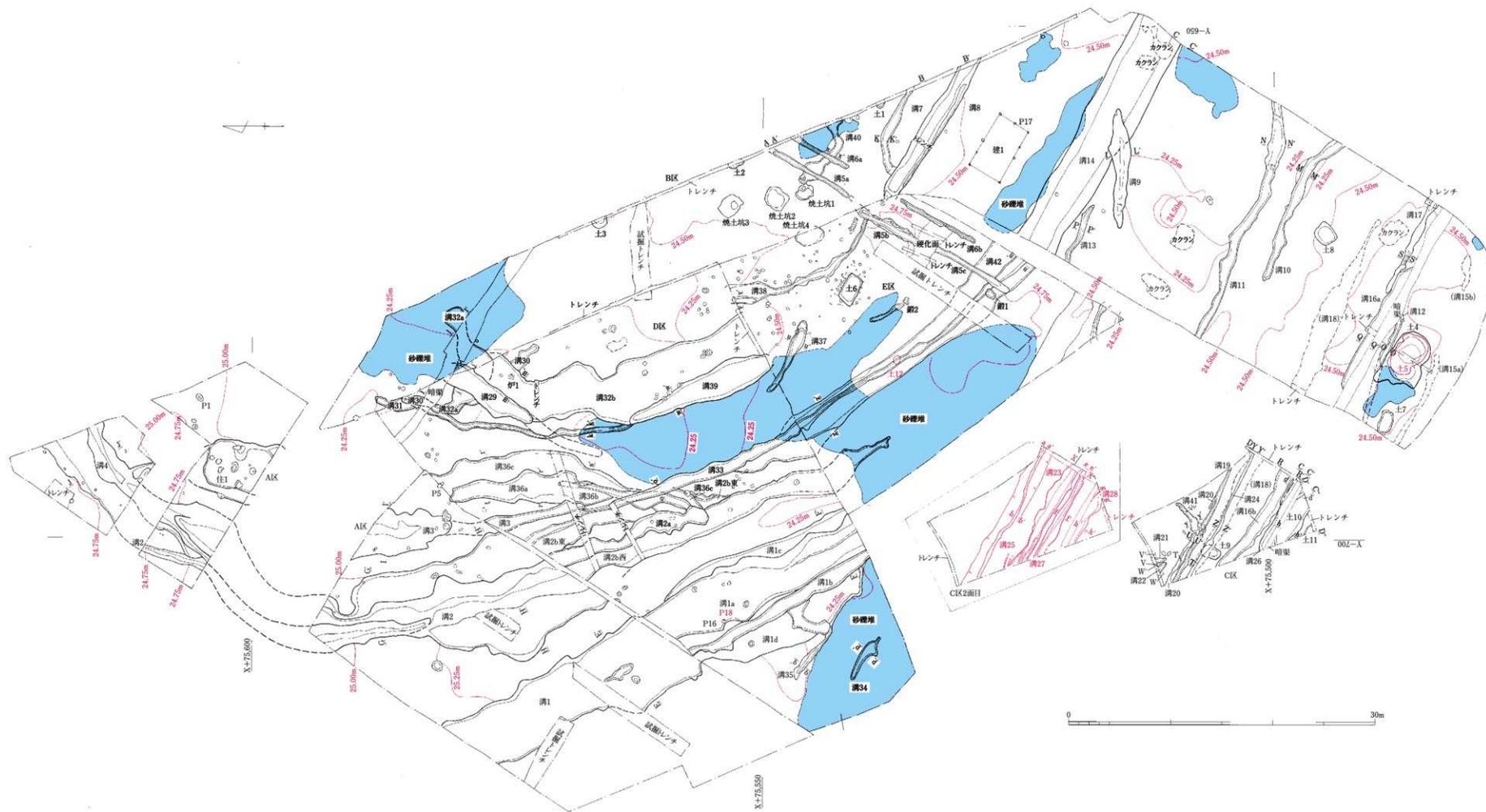
平成26年(2014年)3月31日

発行：九州歴史資料館  
福岡県小郡市三沢5208-3

印刷：久野印刷株式会社  
福岡県福岡市博多区奈良屋町3-1



付図1 京ヶ辻遺跡 1区 全体図 (1/300)



付図2 京ヶ辻遺跡 3区 全体図 (1/300)

# 東九州自動車道関係埋蔵文化財調査報告書 14

福岡県京都郡みやこ町有久・国作所在遺跡

## 京ヶ辻遺跡 1・3区 国作三角遺跡

付図1 京ヶ辻遺跡1区全体図 (1/300)

付図2 京ヶ辻遺跡3区全体図 (1/300)

